

の
野 首 第 2 遺 跡

Nokubi No.2 Site

第二分冊：縄文時代後期・晚期、弥生時代
古墳時代、古代以降編

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 59

2008

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であります。

本書に掲載した野首第2遺跡は、平成13～16年度に発掘調査を行ない、旧石器時代、縄文時代の先史に始まり、弥生時代、古墳時代、古代、中世へと連綿と続く人々の生活痕跡を確認することができました。旧石器時代および縄文時代早期の考古記録については、昨年の第一分冊において既に報告しましたが、続く第二分冊の本書では縄文時代後期以降の多量の遺構・遺物についての記録を掲載しております。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、郷土を誇りに思う心情を育むとともに、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待しております。

最後になりましたが、調査にあたって御協力をいただいた関係各機関や地元の人々、御指導や御助言を賜りました先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 清野 勉

例　言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した高鍋町大字上江字青木に所在する野首第2遺跡の発掘調査報告書である。本書は第二分冊として、縄文時代後期・晚期、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世以降の考古資料を主な報告対象とする。加えて、すでに刊行した第一分冊（文献1）を補うデータも本書に収録している。
- 2 発掘調査は日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となつたが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 発掘調査は平成13年5月7日～平成17年3月29日までおこなった。
- 4 現地における実測図・写真等の記録は、A区は尾園賢二・松本 茂が中心となり、落合賢一・川畠真二・黒木 治・重留康宏・辻 弥生・柳田裕三らがこれを補助した。B・C区は尾園・重留・嶋田史子・松本が担当した。E区は、小宇都あすさが中心となり、重留・嶋田・松本らがこれを補助した。また、空中写真撮影は、A・B・C区を九州航空株式会社・有限公司スカイサーべイ九州、宮崎県埋蔵文化財サポート共同組合、E区を株式会社フジタに業務の委託をした。また、各種自然科学分析については株式会社古環境研究所に業務を委託したほか、宮崎大学農学部宇田津徹朗氏による植物珪酸体分析、熊本大学埋蔵文化財調査室大坪志子・福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎氏による石材の蛍光X線分析も実施された。
- 5 整理作業は発掘調査と並行して現地事務所において進めた後、発掘調査終了後は宮崎県埋蔵文化財センターにおいて平成19年11月1日までこれを継続した。
- 6 遺物実測・写真撮影作業は、埋蔵文化財センター本館において整理作業員の補助を得て、主に重留・松本が行なつた。なお、石器実測・ト

レース作業の一部を、株式会社九州文化財研究所、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

- 7 本書に使用した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/50,000の図をもとに作成した。
- 8 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北（G. N.）を基本とし、位置図等の一部に磁北（M. N.）を使用した。本地域における真北と磁北との偏差は5°5'である。
- 9 国土座標は、平成13年度に設置された野首第2遺跡発掘調査基準点KBM.1の国土座標を基に設定している。本文中では設置当時の旧平面直角座標系II（日本測地系）ではなく、世界測地系（WGS84）に変換した数値を用いている。
- 10 土層の色調については農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
- 11 石材の同定は、松田清孝・赤崎広志両氏（県総合博物館）の協力を得て、松本が行なつた。
- 12 本書の執筆・編集は、第I章を松本、第II・III章・第IV章4節を重留・松本、第IV章第1・2・5節を重留、同章第3・6節を松本が担当した。
- 13 現地での発掘調査、遺物整理、報告書執筆に際し、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査指導委員として、下記の諸先生方の御指導・御協力を頂いた。
泉 拓良（奈良大学・京都大学）、小畑弘己（熊本大学埋蔵文化財調査室）、田崎博之（愛媛大学）、廣瀬和雄（奈良女子大学・国立歴史民俗博物館）、本田道輝（鹿児島大学）、柳沢一男（宮崎大学）、岡田康博（文化庁記念物課）
また、下記の方々、諸機関にも御指導・御協力を頂いた。記して感謝したい。
秋成雅博（清武町教育委員会）、阿部 敬（東京大学）、石井 寛（神奈川県横浜市）、
今田秀樹（大分県天瀬町教育委員会）、
今田しのぶ（大分県玖珠町在住）、大坪志子（熊本大学埋蔵文化財調査室）、大野寅男（西都市在住）、小川勝和（千葉県流山市教育委員会）、
遠部 慎（長崎県南串山町教育委員会・国立歴史民俗博物館）、金丸武司（田野町教育委員会・

宮崎市教育委員会)、白岩 修(木城町教育委員会)、鈴木忠司(京都文化博物館)、高橋信武(大分県教育委員会)、時津裕子(九州大学)、中園 聰(鹿児島国際大学)、西田泰民(新潟県立歴史博物館)、ピーター・マシウス(国立民族学博物館)、東 和幸(鹿児島県立埋蔵文化財センター・黎明館)、マイケル・フラガー(シドニー大学)、宮田栄二(鹿児島県立埋蔵文化財センター)、八木澤一郎(鹿児島県立埋蔵文化財センター)

14 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1 遺物・遺構実測図の挿図の基本的な縮尺は次のとおりであり、例外も含め各図のキャプションに示してある。

石器：2／1、原寸、2／3、1／2、1／3、

1／4

土器：1／3

遺構：1／20、1／40、1／60

2 石器実測図の中の記号・表示は以下のものをして示す。

・石器のレイアウト番号の右に続く表記は器種番号および器種名、石材種、出土調査区の順に記してある。器種番号は無い場合もある。

・石器の節理面は一点鎖線または斜線+ドットで表現している。

・微細剥離痕・敲打痕が確認された部分は

|—|の記号を用いてその範囲を示す。

・「折れ」の状態が確認された石器には、欠損部分に|—|の記号を示す。

3 東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う発掘調査の地層については、次頁の表に示す統一略称を用いる。

※頭に冠するM：宮崎平野を意味する識別記号(M L : ローム層 M B : 黒色土層)

4 本書の第一・二分冊を通じ本文、図表、図版あるいは整理終了後の保管・収蔵において遺物

の種類(土器・石器・陶器・磁器・木器・鉄器・銅器などの材質による分類)および器種名(壺・甕・深鉢・皿・ナイフ形石器・削器・石鎌・磨石など)には、次のような略号を用いる場合がある。

土器：P、石器：L、須恵器：Su、陶器：Ce、磁器：Chi、礫(石器素材)：G1、

礫(その他)：G2、木器：W、金属器：M

ナイフ形石器：Kn、角錐状石器：Tp、

台形・台形様石器：Tr、尖頭器：Po、

掻器：Es、削器：Ss、彫器：Gr、

錐揉器：Aw、楔形石器：Pe、

斧状石器：Ax、礫器：Pt、敲石：Hs、

磨石：Gs、二次加工剥片：Rf、

微細剥離剥片：Mf、剥片：F、碎片：Ch、

石刃：Bl、細石刃：Mb、石核：Co、

細石刃石核：Mc、原石：Ma、石鎌：Ah、

石匙：Sn、石錐：Sd、異形石器：Ex

5 本書の本文、図表、図版中において遺構名は、次のような略号を用いる場合がある。

礫群：PSI、集石遺構：SI、

近世以降の集石遺構：MSI、炉穴：SP、

土坑：SC、豎穴住居跡：SA、

掘立柱建物跡：SB、溝状遺構：SE

6 本書の本文、図表、図版中において石材名は、次のような略号を用いる場合がある。

黒曜石：Ob、安山岩：An、流紋岩：Ry、

凝灰岩：Tu、

阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩：Aso-Tu、

水晶：Cr、石英：Qu 鉄石英、

ヒスイ輝石：Jad、

含クロム白雲母(結晶片岩様緑色岩)：Fu、

蛇紋岩：Se、滑石(Ta)、緑色岩：Gr、

チャート：Ch、玉髓：Ca、瑪瑙：Ag、

結晶片岩：Sc、頁岩：Sh、珪質頁岩：SSH、

赤色頁岩：R-Sh、砂岩：Sa、

ホルンフェルス：Ho、

尾鈴山産溶結凝灰岩：Os

表 東九州自動車道（西都～都農間）関連の発掘調査における宮崎平野の基本層序

No.	略 称	層 名	年 代	特 徴
1		表土		
2	クロボク	黒色土		
3	Kr-Th	高原スコリア	AD1235	本地域では分布北限に近く、低湿地のクロボク中に認められる。
4	クロボク	黒色土		
5	K-Ah	鬼界アカホヤ	6.5ka	二次堆積の場合は、暗褐色の場合がある。低湿地では白い。
6	M B 0	黒褐色ローム		
7	M L 1	暗褐色ローム		
8	Sz-S	桜島薩摩	11ka	バミスは細かく、シャーベット状のブロックとなる。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。
9	M L 1	褐色ローム		
10	Kr-Kb	小林軽石	15ka	小丸川以北では識別が難しくなる。
				深年Ⅱ段丘堆積物
11	M B 1	暗褐色ローム		
12	M L 2	黄褐色ローム		径2～3cmの球形の暗褐色のしみを多く含む。ATの二次堆積や、土壤化、腐植などの影響でAT本体より色が暗いと思われる。
13	A T	姶良Tn	24.5ka	一次堆積層では最下部に大隅降下軽石（姶良大隅：A-Os）が見られる。
14	M B 2	暗褐色ローム		AT下位の黒色帯と呼ばれる部分で、固くクラックを生じやすい。MB 3では白色鉱物が少ない。中部にバミス（A-Fm,A-Ot）の密集が見られることがある。
15	A-Fm	姶良深港	26.5ka	
16	A-Ot	姶良大塚	30ka	
17	M B 3	暗褐色ローム		
18	M L 3	褐色ローム		
19		赤褐色ローム		
20	Kr-Aw	アワオコシ	41ka	赤褐色。スコリア、ラビリ。固結。アワオコシより細粒。降下スコリアが主体。高鍋は分布域の北限に近いので、確認できないところもある。
21	M L 4	明褐色ローム		
22	Kr-Iw	イワオコシ	50ka	赤褐色。アワオコシに比べ粗粒。黄褐色バミスを含む。降下軽石を主体とする。
				雷野段丘堆積物
23		明黄褐色ローム		
24		キンキラローム		黄～淡黄色の粘り気のあるローム。高温石英を含みきらきら光る。姶良岩戸（A-Iw）の風化層。
25	A-Iw	姶良岩戸	60ka	粗粒砂大～径3mmの黄色軽石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。ATより粗粒。
				阿蘇段丘堆積物
26	Aso-4	阿蘇4	86-90ka	阿蘇4火碎流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火碎流堆積物。風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。

※表中の年代は、文献2による未較正年代



1. 遺跡遠景 牛牧台地から小丸川方向に野首第2遺跡と近隣の諸遺跡を望む（手前は老瀬坂上第3遺跡）



2. 遺跡近景（1） 野首第2遺跡から日向灘方向に山王古墳群を見下ろす

巻頭図版 2



3. 遺跡近景（2）野首第2遺跡から北東方向に南中原第1・老瀬坂上第3遺跡を望む



4. C区における縄文時代後期後葉を中心とした集落



5. A区における古墳時代中期の集落



6. 古代の所産と推定される掘立柱建物跡（SB02・03）および縄文時代後期後葉の竪穴住居跡（SA20～22）

卷頭図版 4



7. 縄文時代後・晚期の玉類



8. 縄文時代後期中葉の第1号凹地状遺構 (SX01: 穫穴住居跡) から出土した土器と石器

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 調査の概要	
第1節 遺跡の歴史環境（補遺）	2
第2節 基本層序（補遺）	6
第Ⅲ章 調査の記録	
第1節 縄文時代後・晚期の遺物の器種分類および類型化	10
第2節 縄文時代後期・晚期	12
第3節 弓生時代	189
第4節 古墳時代以降の土器の器種分類および類型化	193
第5節 古墳時代	195
第6節 古代	285
第7節 中・近世以降	289
第Ⅳ章 成果と課題	
第1節 縄文時代後・晚期土器の時間的評価	293
第2節 土器製作の動作連鎖と土器の使用実態	296
第3節 縄文時代後・晚期の石器・石製品について	300
第4節 縄文時代後期から晚期における集落の形成過程	304
第5節 古墳時代の集落構成	308
第Ⅴ章 おわりに	310
補遺資料	311
引用・参考文献	341
付章（自然科学分析の成果）	346
挿図目次	
第1図 野首第2遺跡と周辺における縄文時代後・晚期他の遺跡	3
第2図 野首第2遺跡と周辺における古墳時代の遺跡と古墳群	5
第3図 土層断面図提示位置	6
第4図 野首第2遺跡における土層断面図（1）	7
第5図 野首第2遺跡における土層断面図（2）	8
第6図 野首第2遺跡における土層断面図（3）	9
第7図 縄文時代後・晚期の竪穴住居の分布模式図	13
第8図 A～C区における第1号層除去後の平面土層分層図	14
第9図 第1号凹地状遺構（SX01）	16
第10図 第1号凹地状遺構出土の土器（1）	18
第11図 第1号凹地状遺構出土の土器（2）	19
第12図 第1号凹地状遺構出土の土器（3）	20
第13図 第1号凹地状遺構出土の土器（4）	21
第14図 第1号凹地状遺構出土の土器（5）	22
第15図 第1号凹地状遺構出土の石器	23
第16図 第20号竪穴住居跡	24
第17図 第20号竪穴住居跡出土の土器	24
第18図 第21号竪穴住居跡	25
第19図 第21号竪穴住居跡出土の土器・石器	25
第20図 第22号竪穴住居跡	26
第21図 第25号竪穴住居跡	27
第22図 第25号竪穴住居跡出土の土器	28
第23図 第20号竪穴住居跡出土の石器	29
第24図 第26号竪穴住居跡	30
第25図 第26号竪穴住居跡出土の土器・石器	31
第26図 第27・28号竪穴住居跡	32
第27図 第27号竪穴住居跡出土の土器（1）	33
第28図 第27号竪穴住居跡出土の土器（2）・石器	34
第29図 第28号竪穴住居跡出土の土器・石器	35
第30図 第29号竪穴住居跡	35
第31図 第30号竪穴住居跡	35
第32図 第31・32号竪穴住居跡	36
第33図 第31号竪穴住居跡出土の土器・石器	37
第34図 第32号竪穴住居跡出土の土器・石器	38
第35図 第33号竪穴住居跡	39
第36図 第33号竪穴住居跡出土の土器（1）	39
第37図 第33号竪穴住居跡出土の土器（2）	40
第38図 第33号竪穴住居跡出土の土器（3）・土製品	41
第39図 第33号竪穴住居跡出土の石器	42
第40図 第34号竪穴住居跡	43
第42図 第35号竪穴住居跡	44
第43図 第35号竪穴住居跡出土の土器	45
第44図 第35号竪穴住居跡の石器	46
第45図 第39号竪穴住居跡	47
第46図 第39号竪穴住居跡出土の土器（1）	48
第47図 第39号竪穴住居跡出土の土器（2）・石器（1）	49
第48図 第39号竪穴住居跡出土の石器（2）	50
第49図 第40号竪穴住居跡	51
第50図 第41号竪穴住居跡	52
第51図 第41号竪穴住居跡出土の土器・石器	52
第52図 第42号竪穴住居跡	53
第53図 第42号竪穴住居跡出土の土器・石器	53
第54図 第43号竪穴住居跡	54
第55図 第43号竪穴住居跡の土器	54
第56図 第47号竪穴住居跡	55
第57図 第47号竪穴住居跡出土の土器・石器	56
第58図 第48～50・59号竪穴住居跡	57

第 59 図	第 49 号竪穴住居跡出土の土器 (1) ······	58
第 60 図	第 49 号竪穴住居跡出土の土器・石器 ······	59
第 61 図	第 51 号竪穴住居跡 ······	60
第 62 図	第 52 号竪穴住居跡出土の土器 ······	61
第 63 図	第 53 号竪穴住居跡出土の土器 ······	61
第 64 図	第 54 号竪穴住居跡出土の土器 ······	61
第 65 図	第 58 号竪穴住居跡出土の土器 ······	61
第 66 図	第 80 号竪穴住居跡 ······	63
第 67 図	第 80 号竪穴住居跡出土の石器 ······	63
第 68 図	第 90・91 号竪穴住居跡 ······	64
第 69 図	第 92 号竪穴住居跡 ······	64
第 70 図	棒状礫の入った土坑 ······	66
第 71 図	土坑 (1) ······	66
第 72 図	土坑 (2) ······	67
第 73 図	土坑 (3) ······	68
第 74 図	土坑 (4) ······	69
第 75 図	縄文時代後期以降の集石遺構 ······	70
第 76 図	土坑出土の縄文土器 (1)・土師器 ······	71
第 77 図	土坑出土の縄文土器 (2) ······	72
第 78 図	包含層出土の縄文土器 (1) ······	75
第 79 図	包含層出土の縄文土器 (2) ······	76
第 80 図	包含層出土の縄文土器 (3) ······	77
第 81 図	包含層出土の縄文土器 (4) ······	78
第 82 図	包含層出土の縄文土器 (5) ······	79
第 83 図	包含層出土の縄文土器 (6) ······	80
第 84 図	包含層出土の縄文土器 (7) ······	81
第 85 図	包含層出土の縄文土器 (8) ······	82
第 86 図	包含層出土の縄文土器 (9) ······	83
第 87 図	包含層出土の縄文土器 (10) ······	84
第 88 図	包含層出土の縄文土器 (11) ······	85
第 89 図	包含層出土の縄文土器 (12) ······	86
第 90 図	包含層出土の縄文土器 (13) ······	87
第 91 図	包含層出土の縄文土器 (14) ······	88
第 92 図	包含層出土の縄文土器 (15) ······	90
第 93 図	包含層出土の縄文土器 (16) ······	91
第 94 図	包含層出土の縄文土器 (17) ······	92
第 95 図	包含層出土の縄文土器 (18) ······	93
第 96 図	包含層出土の縄文土器 (19) ······	94
第 97 図	包含層出土の縄文土器 (20) ······	95
第 98 図	包含層出土の縄文土器 (21) ······	96
第 99 図	包含層出土の縄文土器 (22) ······	97
第 100 図	包含層出土の縄文土器 (23) ······	98
第 101 図	包含層出土の縄文土器 (24) ······	99
第 102 図	包含層出土の縄文土器 (25) ······	100
第 103 図	包含層出土の縄文土器 (26) ······	101
第 104 図	包含層出土の縄文土器 (27) ······	102
第 105 図	包含層出土の縄文土器 (28) ······	103
第 106 図	包含層出土の縄文土器 (29) ······	104
第 107 図	包含層出土の縄文土器 (30) ······	105
第 108 図	包含層出土の縄文土器 (31) ······	106
第 109 図	包含層出土の縄文土器 (32) ······	107
第 110 図	包含層出土の縄文土器 (33) ······	108
第 111 図	縄文時代後・晚期の玉類 (1) ······	131
第 112 図	縄文時代後・晚期の玉類 (2) ······	132
第 113 図	有孔石・輕石製品 ······	134
第 114 図	縄文時代後・晚期の打製石器 (1) ······	135
第 115 図	縄文時代後・晚期の打製石器 (2) ······	136
第 116 図	縄文時代後・晚期の打製石器 (3) ······	137
第 117 図	縄文時代後・晚期の打製石器 (4) ······	138
第 118 図	縄文時代後・晚期の打製石器 (5) ······	139
第 119 図	縄文時代後・晚期の打製石器 (6) ······	140
第 120 図	縄文時代後・晚期の打製石器 (7) ······	141
第 121 図	異形石器 ······	141
第 122 図	石錐 (1) ······	142
第 123 図	石錐 (2) ······	143
第 124 図	石匙 ······	143
第 125 図	楔形石器 ······	144
第 126 図	桑ノ木津留・上青木系黒曜石製石核・原石 ······	144
第 127 図	西北九州産黒曜石製二次加工剥片・剥片等 ······	145
第 128 図	嬉島産黒曜石製剥片・石核類等 ······	146
第 129 図	水晶原石、E 区第 5 号土坑出土石核 ······	146
第 130 図	尾鈴山産溶結凝灰岩製剥片・石核類 (1) 他 ······	147
第 131 図	尾鈴山産溶結凝灰岩製剥片・石核類 (2) ······	148
第 132 図	尾鈴山産溶結凝灰岩製剥片・石核類 (3) ······	149
第 133 図	打製石斧 (1) ······	150
第 134 図	打製石斧 (2) ······	151
第 135 図	打製石斧 (3) ······	152
第 136 図	打製石斧 (4) ······	153
第 137 図	打製石斧 (5) ······	154
第 138 図	打製石斧 (6) ······	155
第 139 図	打製石斧 (7) ······	156
第 140 図	打製石斧 (8) ······	157
第 141 図	打製石斧 (9) ······	158
第 142 図	打製石斧 (10) ······	159

第143図	打製石斧(11) ······	160
第144図	打製石斧(12) ······	161
第145図	打製石斧(13) ······	162
第146図	横刃形石器 ······	163
第147図	削器・石鎌 ······	163
第148図	磨製石製品(1) ······	164
第149図	磨製石製品(2) ······	165
第150図	磨製石製品(3) ······	166
第151図	円盤形石器(1) ······	167
第152図	円盤形石器(2) ······	168
第153図	礫器 ······	168
第154図	磨製石斧(1) ······	169
第155図	磨製石斧(2) ······	170
第156図	磨製石斧(3) ······	171
第158図	打欠石鍬(1) ······	172
第159図	打欠石鍬(2) ······	173
第160図	打欠石鍬(3) ······	174
第161図	打欠石鍬(4)・切目石鍬・有溝石鍬等 ······	175
第162図	磨石(1) ······	176
第163図	磨石(2)・砥石 ······	177
第164図	筋砥石(1) ······	178
第165図	筋砥石(2) ······	179
第166図	包含層出土の凹石(1) ······	180
第167図	包含層出土の凹石(2) ······	181
第168図	包含層出土の凹石(3)・叢石(1) ······	182
第169図	叢石(2) ······	183
第170図	叢石(3) ······	184
第171図	叢石(4) ······	185
第172図	叢石(5) ······	186
第173図	台石・石皿(1) ······	187
第174図	台石・石皿(2) ······	188
第175図	弥生時代の土器・石器(1) ······	190
第176図	弥生時代の石器(2) ······	191
第177図	弥生時代の石器(3) ······	192
第178図	甕口縁部の類型分類 ······	193
第179図	甕底部の類型分類 ······	193
第180図	甕口縁部の類型分類 ······	193
第181図	甕底部の類型分類 ······	193
第182図	高环器形の類型分類 ······	194
第183図	小型丸底盆器形の類型分類 ······	194
第184図	鉢器形の類型分類 ······	194
第185図	古墳時代の堅穴住居跡分布模式図 ······	196
第186図	第1号堅穴住居跡(SA01) ······	197
第187図	第1号堅穴住居跡出土の石器 ······	197
第188図	第2号堅穴住居跡(SA02) ······	199
第189図	第2号堅穴住居跡出土の土器・石器 ······	200
第190図	第3号堅穴住居跡(SA03) ······	201
第191図	第3号堅穴住居跡出土の土器 ······	202
第192図	第4号堅穴住居跡(SA04) ······	203
第193図	第4号堅穴住居跡出土の土器 ······	204
第194図	第5号堅穴住居跡(SA05) ······	205
第195図	第5号堅穴住居跡出土の土器(1) ······	206
第196図	第5号堅穴住居跡出土の土器(2) ······	207
第197図	第5号堅穴住居跡出土の土器(3) ······	208
第198図	第5号堅穴住居跡出土の土器(4) ······	209
第199図	第5号堅穴住居跡出土の土器(5) ······	210
第200図	第6号堅穴住居跡(SA06) ······	212
第201図	第6号堅穴住居跡出土の土器 ······	214
第202図	第7号堅穴住居跡(SA07) ······	215
第203図	第7号堅穴住居跡出土の土器 ······	216
第204図	第8号堅穴住居跡出土の土器 ······	217
第205図	第9号堅穴住居跡(SA09) ······	219
第206図	第9号堅穴住居跡出土の土器 ······	220
第207図	第13号堅穴住居跡(SA13) ······	221
第208図	第14号堅穴住居跡(SA14) ······	221
第209図	第15・17号堅穴住居跡 ······	222
第210図	第18号堅穴住居跡(SA18) ······	223
第211図	第18号堅穴住居跡出土の縄文土器・石器 ······	224
第212図	第19号堅穴住居跡 ······	225
第213図	第19号堅穴住居跡出土の石器 ······	226
第214図	第23・24号堅穴住居跡(SA23・24) ······	227
第215図	第23号堅穴住居跡出土の石器 ······	227
第216図	第36号堅穴住居跡 ······	228
第217図	第37号堅穴住居跡 ······	228
第218図	第38号堅穴住居跡 ······	229
第219図	第38号堅穴住居跡出土の土器(1) ······	230
第220図	第38号堅穴住居跡出土の土器(2) ······	231
第221図	第38号堅穴住居跡出土の土器(3) ······	232
第222図	第38号堅穴住居跡出土の土器(4) ······	233
第223図	第38号堅穴住居跡出土の土器(5) ······	234
第224図	第38号堅穴住居跡出土の土器(6) ······	235
第225図	第45号堅穴住居跡 ······	237
第226図	第16・46号堅穴住居跡 ······	238
第227図	第46号堅穴住居跡出土の土器 ······	238

写真図版目次

第 228 図 第 47 号竪穴住居跡 ······	239
第 229 図 第 47 号竪穴住居跡出土の土器 ······	239
第 230 図 第 70 号竪穴住居跡 ······	240
第 231 図 第 70 号竪穴住居跡出土の土器・石器 ······	241
第 232 図 第 71 号竪穴住居跡出土 ······	242
第 233 図 第 71 号竪穴住居跡出土の土器 (1) ······	243
第 234 図 第 71 号竪穴住居跡出土の土器 (2) ······	244
第 235 図 第 72 号竪穴住居跡における須恵器大量とその出土状況 ······	245
第 236 図 第 72 号竪穴住居跡出土の土器 (1) ······	246
第 237 図 第 72 号竪穴住居跡出土の土器 (2) ······	247
第 238 図 第 72 号竪穴住居跡出土の土器 (3) ······	248
第 239 図 第 72 号竪穴住居跡出土の石器 (1) ······	249
第 240 図 第 72 号竪穴住居跡出土の石器 (2) ······	250 ~ 252
第 241 図 第 72 号竪穴住居跡出土の石器 (3) ······	253 ~ 254
第 242 図 第 76 号竪穴住居跡 ······	256
第 243 図 第 76 号竪穴住居跡出土の土器 (1) ······	257
第 244 図 第 76 号竪穴住居跡出土の土器 (2) ······	258
第 245 図 第 76 号竪穴住居跡出土の土器 (3) ······	259
第 247 図 第 77 号竪穴住居跡出土の土器 ······	261
第 249 図 B (D) 区における古墳時代以降の構造遺構 ······	262
第 250 図 第 13 号溝状遺構と縄文時代早期の第 151 号集石遺構の切り合い関係 ······	263
第 251 図 溝状遺構断面図 (1) ······	264
第 252 図 溝状遺構断面図 (2) ······	265
第 253 図 溝状遺構断面図 (3) ······	266
第 254 図 包含層出土の土器器 (1) ······	267
第 255 図 包含層出土の土器器 (2) ······	268
第 256 図 弥生時代以降の玉類 ······	283
第 257 図 古代の遺構 (1) 第 2・3 号孤立柱建物跡 ······	285
第 258 図 古代の遺構 (2) 第 4・5 号孤立柱建物跡 ······	286
第 259 図 道路状遺構 (波板状硬化面) 断面図 (1) ······	287
第 260 図 古代の遺物 ······	288
第 261 図 第 115 号土坑 ······	290
第 262 図 磁器・錢貨 ······	290
第 263 図 砥石・滑石製品 ······	290
第 264 図 火打石・煙管 ······	291
第 265 図 第 1 期：丸尾式段階の土器分布 ······	304
第 266 図 第 2 期：西平～太郎式段階の土器分布 ······	304
第 267 図 第 3 期：三万田～鳥居原式段階の土器分布 ······	305
第 268 図 第 4 期：天城式並行段階の土器分布 ······	305
第 269 図 第 5 期：黒川式並行段階の土器分布 ······	305
卷頭図版 1	
1. 遺跡遠景	
2. 遺跡近景 (1)	
卷頭図版 2	
3. 遺跡近景 (2)	
4. C 区における縄文時代後期後葉を主体とした集落	
卷頭図版 3	
5. A 区における古墳時代中期の集落	
6. 古代の所産と推定される孤立柱建物跡	
卷頭図版 4	
7. 縄文時代後・晩期の玉類	
8. 縄文時代後期中葉の第 1 号凹地状遺構から出土した土器と石器	
卷末図版 1 ······ 359	
1. 縄文後期中葉の竪穴住居跡 (1) SX01 床面 ······ 359	
2. 縄文後期中葉の竪穴住居跡 (2) SX01 遺物 ······ 359	
3. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (1) SA20 遺物 ······ 359	
4. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (2) SA20 完膚 ······ 359	
5. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (3) SA21 床面 ······ 359	
6. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (4) SA22 完膚 ······ 359	
7. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (5) SA26 床面 ······ 359	
8. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (6) SA26 遺物 ······ 359	
卷末図版 2 ······ 360	
9. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (7) SA26 繩 ······ 360	
10. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (8) SA30 床面 ······ 360	
11. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (9) SA33 床面 ······ 360	
12. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (10) SA33 遺物 ······ 360	
13. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (11) SA35 床面 ······ 360	
卷末図版 3 ······ 361	
14. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (12) SA35 完膚 ······ 361	
15. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (13) SA39 床面 ······ 361	
卷末図版 4 ······ 362	
16. 縄文後期後葉の竪穴住居跡 (14) SA19 遺物 ······ 362	
17. 縄文後・晩期の土坑 (1) SC80 遺物 ······ 362	
18. 縄文後・晩期の土坑 (2) SC80 半裁 ······ 362	
19. 縄文後・晩期の土坑 (3) SC80 完膚 ······ 362	
20. 縄文後・晩期の土坑 (4) SC41 ~ 45 ······ 362	
卷末図版 5 ······ 363	
21. 縄文後・晩期の土坑 (5) SC 半裁 ······ 363	
22. 縄文後・晩期 (6) SC82 検出 ······ 363	

23. 繩文後・晩期の土坑（7）SC82 半裁・・・363
24. 繩文後・晩期の土坑（8）SC89 完掘・・・363
25. 繩文後・晩期の土坑（9）SC 半裁・・・363
26. 繩文後・晩期の土坑（10）SC 半裁・・・363
27. 繩文後・晩期の土坑（11）SC 半裁・・・363
28. 繩文後・晩期の土坑（12）SC 完掘・・・363
巻末図版6・・・364
29. 繩文後・晩期の遺構（1）石棹・・・364
30. 繩文後・晩期の遺構（2）埋設土器・・・364
31. 繩文後・晩期の土坑（13）SC112 繩・・・364
32. 繩文後・晩期の遺構（3）石器・礫埋納①・・・364
33. 繩文後・晩期の遺構（4）石器・礫埋納②・・・364
34. 繩文後期の集石遺構（1）SI158 検出・・・364
35. 繩文後期の集石遺構（2）SI159・・・364
36. 繩文後期の集石遺構（3）SI160・・・364
巻末図版7・・・365
37. 繩文早期の集石遺構（1）SI76 半裁・・・365
38. 繩文早期の集石遺構（2）SI76 配石・・・365
39. 繩文早期の集石遺構（3）SI76 完掘・・・365
40. 繩文早期の集石遺構（4）SI82 半裁・・・365
41. 繩文早期の集石遺構（5）SI・・・365
42. 繩文早期の集石遺構（6）SI・・・365
43. 繩文早期の集石遺構（7）SI・・・365
44. 繩文早期の集石遺構（8）SI・・・365
巻末図版8・・・366
45. 繩文早期の集石遺構（9）SI・・・366
46. 繩文早期の集石遺構（10）SI・・・366
47. 繩文早期の集石遺構（11）SI・・・366
48. 繩文後期の土坑（14）SA81（SC）・・・366
49. 繩文後期の土坑（15）SA81（SC）・・・366
巻末図版9・・・367
50. 繩文後期の溝（道路）状遺構（1）SE02・・・367
51. 繩文後期の集石遺構（4）SI158 配石・・・367
巻末図版10・・・368
52. 第1層における繩文後・晩期の遺物出土状況（1）368
53. 第1層における繩文後・晩期の遺物出土状況（2）368
54. 第1層における繩文後・晩期の遺物出土状況（3）368
55. 繩文早期の集石遺構（12）SIE15・・・368
56.C 区作業風景・・・368
巻末図版11・・・369
57. 古墳時代の竪穴住居跡（1）SA01 遺物・繩・・・369
58. 古墳時代の竪穴住居跡（2）SA01 床面・・・369
59. 古墳時代の竪穴住居跡（3）SA02 遺物・・・369
60. 古墳時代の竪穴住居跡（4）SA02 床面・・・369
61. 古墳時代の竪穴住居跡（5）SA04 遺物・・・369
62. 古墳時代の竪穴住居跡（6）SA04 完掘・・・369
63. 古墳時代の竪穴住居跡（7）SA05 床面・・・369
64. 古墳時代の竪穴住居跡（8）SA05 – SC01・・・369
巻末図版12・・・370
65. 古墳時代の竪穴住居跡（9）SA05 遺物・・・370
66. 古墳時代の竪穴住居跡（10）SA06 床面・・・370
67. 古墳時代の竪穴住居跡（11）SA06 床面整地跡・・・370
68. 古墳時代の竪穴住居跡（12）SA07 床面・・・370
69. 古墳時代の竪穴住居跡（13）SA07 土層堆積・・・370
巻末図版13・・・371
70. 古墳時代の竪穴住居跡（14）SA08 壁溝・・・371
71. 古墳時代の竪穴住居跡（15）SA08 完掘・・・371
72. 古墳時代の竪穴住居跡（16）SA09 床面・・・371
73. 古墳時代の竪穴住居跡（17）SA09 完掘・・・371
74. 古墳時代の竪穴住居跡（18）SA14 検出・・・371
75. 古墳時代の竪穴住居跡（19）SA19 床面・・・371
76. 古墳時代の竪穴住居跡（20）SA38 遺物①・・・371
77. 古墳時代の竪穴住居跡（21）SA38 遺物②・・・371
巻末図版14・・・372
78. 古墳時代の竪穴住居跡（22）SA38 遺物③・・・372
79. 古墳時代の竪穴住居跡（23）SA 遺物・・・372
80. 古墳時代の竪穴住居跡（24）SA79 遺物・・・372
81. 古墳時代の竪穴住居跡（25）SA71 床面・・・372
82. 古墳時代の竪穴住居跡（26）SA72 土層堆積・・・372
83. 古墳時代の竪穴住居跡（27）SA72 粘土出土・・・372
84. 古墳時代の土坑（1）SC09・・・372
85. 古墳時代の竪穴住居跡（28）SA70 遺物・・・372
巻末図版15・・・373
86. 古墳時代の竪穴住居跡（29）SA70 遺物・・・373
87. 古墳時代の竪穴住居跡（30）SA70 完掘・・・373
88. 古墳時代の竪穴住居跡（31）SA76 壁溝・・・373
89. 古墳時代の竪穴住居跡（32）SA76 完掘・・・373
90. 古墳時代の竪穴住居跡（33）SA76 SC1・・・373
巻末図版16・・・374
91. 古墳時代の竪穴住居跡（34）SA77 完掘・・・374
92. 古墳時代の竪穴住居跡（35）SA79 完掘・・・374
93. 古墳時代の土坑（2）SC・・・374
94. 古墳時代の土坑（3）SC・・・374
95. 古墳時代以降の溝状遺構（1）・・・374

96. 古墳時代以降の溝状遺構(2) ··· 374
97. 古墳時代以降の溝状遺構(3) 碓 ··· 374
98. 古墳時代以降の溝状遺構(4) ··· 374
- 卷末図版 17 ··· 375
99. 古墳時代以降の溝状遺構(5) ··· 375
100. 包含層中の須恵器出土状況 ··· 375
101. 古代の波板状硬化面(1) ··· 375
102. 古代の道路状遺構(波板状硬化面)(2) ··· 375
103. 近世の土坑 SC115 ··· 375
104. 近・現代の階段付き土坑 ··· 375
105. 繩文後期の土器(1 a) SX01 出土土器①(外面) 375
106. 繩文後期の土器(1 b) SX01 出土土器①(内面) 375
- 卷末図版 18 ··· 376
107. 繩文後期の土器(2) SX01 出土土器②脚台付皿型土器I ··· 376
108. 繩文後期の土器(3) SX01 出土土器③ 脚台付皿型土器II ··· 376
- 卷末図版 19 ··· 377
109. 繩文後期の土器(4) SX01 出土土器④ 脚台付皿型土器III ··· 377
110. 繩文後期の土器(5 a) 上段: SA20、下段: SA21 出土土器(外面) ··· 377
111. 繩文後期の土器(5 b) 上段: SA20、下段: SA21 出土土器(内面) ··· 377
112. 繩文後期の土器(6 a) SA25 出土土器(外面) ··· 377
113. 繩文後期の土器(6 b) SA25 出土土器(内面) ··· 377
- 卷末図版 20 ··· 378
114. 繩文後期の土器(7 a) 上段: SA26、下段: SA28 出土土器(外面) ··· 378
115. 繩文後期の土器(7 b) 上段: SA26、下段: SA28 出土土器(内面) ··· 378
116. 繩文後期の土器(8 a) SA27 出土土器(外面) ··· 378
117. 繩文後期の土器(8 b) SA27 出土土器(内面) ··· 378
118. 繩文後期の土器(9 a) SA31 出土土器(外面) ··· 378
119. 繩文後期の土器(9 b) SA31 出土土器(内面) ··· 378
120. 繩文後期の土器(10 a) SA32 出土土器(外面) ··· 378
121. 繩文後期の土器(10 b) SA32 出土土器(内面) ··· 378
- 卷末図版 21 ··· 379
122. 繩文後期の土器(11 a) SA33 出土土器①(外面) ··· 379
123. 繩文後期の土器(11 b) SA33 出土土器①(内面) ··· 379
124. 繩文後期の土器(12 a) SA33 出土土器②(外面) ··· 379
125. 繩文後期の土器(12 b) SA33 出土土器②(内面) ··· 379
126. 繩文後期の土器(13 a) SA39 出土土器①(外面) 379
127. 繩文後期の土器(13 b) SA39 出土土器①(内面) ··· 379
128. 繩文後期の土器(14 a) SA39 出土土器②(外面) ··· 379
129. 繩文後期の土器(14 b) SA39 出土土器②(内面) ··· 379
- 卷末図版 22 ··· 380
130. 繩文後期の土器(15 a) SA 31(上)・42(中)・43(下) 出土土器(外面) ··· 380
131. 繩文後期の土器(15 b) SA 31(上)・42(中)・43(下) 出土土器(内面) ··· 380
132. 繩文後期の土器(16 a) SA 50(上)・52(中)・53(下) 出土土器(外面) ··· 380
133. 繩文後期の土器(16 b) SA 50(上)・52(中)・53(下) 出土土器(内面) 380
134. 繩文後期の土器(17 a) SA 54(上)・58(中)・59(下) 出土土器(外側) 380
135. 繩文後期の土器(17 b) SA 5(上)・54(中)・59(下) 出土土器(内面) ··· 380
136. 繩文後期の土器(18 a) 包含層出土第1群1類A-1 ··· 380
137. 繩文後期の土器(18 b) 包含層出土第1群1類A-1 ··· 380
- 卷末図版 23 ··· 381
138. 繩文後期の土器(19 a) 包含層出土第1群1類A-2 ··· 381
139. 繩文後期の土器(19 b) 包含層出土第1群1類A-2 ··· 381
140. 繩文後期の土器(20) 包含層出土第1群1類B-1 ··· 381
- 卷末図版 24 ··· 382
141. 繩文後期の土器(21) 包含層出土第1群1類B-2 ··· 382
142. 繩文後期の土器(22 a) 包含層出土第2群1類・2類(外面) ··· 382
143. 繩文後期の土器(22 b) 包含層出土第2群1類・2類(内面) ··· 382
144. 繩文後期の土器(23 a) 包含層出土第2群2類II(外面) ··· 382
145. 繩文後期の土器(23 b) 包含層出土第2群2類II(内面) ··· 382
- 卷末図版 25 ··· 383
146. 繩文後期の土器(24 a) 包含層出土第2群1・2類副部(外面) ··· 383
147. 繩文後期の土器(24 b) 包含層出土第2群1・2類副部(内面) ··· 383
148. 繩文後期の土器(25 a) 包含層出土第2群3類①(外面) ··· 383
149. 繩文後期の土器(25 b) 包含層出土第2群3類①(内面) ··· 383
150. 繩文後期の土器(26 a) 包含層出土第2群3類②(外面) ··· 383
151. 繩文後期の土器(26 b) 包含層出土第2群3類②(内面) ··· 383
152. 繩文後期の土器(27 a) 包含層出土第2群3類③(外面) ··· 383
153. 繩文後期の土器(27 a) 包含層出土第2群3類③(内面) ··· 383
- 卷末図版 26 ··· 384
154. 繩文後期の土器(28 a) 包含層出土第2群3類④(外面) ··· 384
155. 繩文後期の土器(28 b) 包含層出土第2群3類④(内面) ··· 384
156. 繩文後期の土器(29 a) 包含層出土第2群3類⑤(外面) ··· 384
157. 繩文後期の土器(29 b) 包含層出土第2群3類⑤(内面) ··· 384
158. 繩文後期の土器(30 a) 包含層出土第2群3類⑥(外面) ··· 384
159. 繩文後期の土器(30 b) 包含層出土第2群3類⑥(内面) ··· 384
160. 繩文後期の土器(31 a) 包含層出土第2群4類①(外面) ··· 384
161. 繩文後期の土器(31 b) 包含層出土第2群4類①(内面) ··· 384
- 卷末図版 27 ··· 385
162. 繩文後期の土器(32 a) 包含層出土第2群4類②(外面) ··· 385

163. 繩文後期の土器 (32 a) 包含層出土第2群4類② (内面) ··· 385
164. 繩文後期の土器 (33 a) 包含層出土第2群注口土器 (外側) ··· 385
165. 繩文後期の土器 (33 b) 包含層出土第2群注口土器 (内面) ··· 385
166. 繩文後期の土器 (34) 包含層出土 第2群高环 ··· 385
- 卷末図版 28 ··· 386
167. 繩文後期の土器 (35 a) 包含層出土第3群1類 (外側) ··· 386
168. 繩文後期の土器 (35 b) 包含層出土第3群1類 (内面) ··· 386
169. 繩文後期の土器 (36 a) 包含層出土第3群2類 (外側) ··· 386
170. 繩文後期の土器 (36 b) 包含層出土第3群2類 (内面) ··· 386
171. 繩文後期の土器 (37 a) 包含層出土第3群3類 (外側) ··· 386
172. 繩文後期の土器 (37 b) 包含層出土第3群3類 (内面) ··· 386
173. 繩文後期の土器 (38 a) 包含層出土第3群4類 (外側) ··· 386
174. 繩文後期の土器 (38 b) 包含層出土第3群4類 (内面) ··· 386
- 卷末図版 29 ··· 387
175. 繩文後期の土器 (39 a) 包含層出土第4群A (外側) ··· 387
176. 繩文後期の土器 (39 b) 包含層出土第4群A (内面) ··· 387
177. 繩文後期の土器 (40 a) 包含層出土第4群B-1 (外側) ··· 387
178. 繩文後期の土器 (40 b) 包含層出土第4群B-1 (内面) 387
179. 繩文後期の土器 (41 a) 包含層出土第4群B-2 (外側) 387
180. 繩文後期の土器 (41 b) 包含層出土第4群B-2 (内面) ··· 387
181. 繩文後期の土器 (42 a) 包含層出土第4群B-3 (外側) ··· 387
182. 繩文後期の土器 (42 a) 包含層出土第4群B-3 (内面) ··· 387
- 卷末図版 30 ··· 388
183. 繩文後期の土器 (43 a) 包含層出土第4群B-4-5 (外側) ··· 388
184. 繩文後期の土器 (43 b) 包含層出土第4群B-4-5 (内面) ··· 388
185. 繩文後期の土器 (44 a) 包含層出土第5群1類 (外側) ··· 388
186. 繩文後期の土器 (44 b) 包含層出土第5群1類 (内面) ··· 388
187. 繩文後期の土器 (45 a) 包含層出土第5群2類 (外側) ··· 388
188. 繩文後期の土器 (45 b) 包含層出土第5群2類 (内面) ··· 388
189. 繩文後期の土器 (46 a) 包含層出土第5群3類 (外側) ··· 388
190. 繩文後期の土器 (46 b) 包含層出土第5群3類 (内面) ··· 388
- 卷末図版 31 ··· 389
191. 繩文後期の土器 (47 a) 包含層出土第6群1類 (外側) ··· 389
192. 繩文後期の土器 (47 b) 包含層出土第6群1類 (内面) ··· 389
193. 繩文後期の土器 (48 a) 包含層出土第6群2類 (外側) ··· 389
194. 繩文後期の土器 (48 b) 包含層出土第6群2類 (内面) ··· 389
195. 繩文後期の土器 (49 a) 包含層出土第6群3類① (外側) ··· 389
196. 繩文後期の土器 (49 b) 包含層出土第6群3類① (内面) ··· 389
197. 繩文後期の土器 (49 a) 包含層出土第6群3類② (外側) ··· 389
198. 繩文後期の土器 (49 b) 包含層出土第6群3類② (内面) ··· 389
- 卷末図版 32 ··· 390
199. 繩文後期の土器 (50) 包含層出土第6群4類 ··· 390
200. 繩文後期の土器 (51) 包含層出土土器片鉢 ··· 390
- 卷末図版 33 ··· 391
201. 古墳時代の土師器 (1) SA02 出土391
202. 古墳時代の土師器 (2) SA03 出土391
- 卷末図版 34 ··· 392
203. 古墳時代の土師器 (3) SA04 出土 ··· 392
204. 古墳時代の土師器 (4) SA05 出土① 貴 (1) ··· 392
- 卷末図版 35 ··· 393
205. 古墳時代の土師器 (5) SA05 出土② 貴 (2) ··· 393
206. 古墳時代の土師器 (6) SA05 出土③ 貴 (3) ··· 393
- 卷末図版 36 ··· 394
207. 古墳時代の土師器 (7) SA05 出土④ 薙 ··· 394
208. 古墳時代の土師器 (8) SA05 出土⑤高环·小型丸底壺 ··· 394
- 卷末図版 37 ··· 395
209. 古墳時代の土師器 (9) SA06 出土 ··· 395
210. 古墳時代の土師器 (10) SA07 出土 ··· 395
- 卷末図版 38 ··· 396
211. 古墳時代の土師器 (11) SA08 出土 ··· 396
212. 古墳時代の土師器 (12) SA09 出土 ··· 396
- 卷末図版 39 ··· 397
213. 古墳時代の土師器 (13) SA17 出土① 貴 (1) ··· 397
214. 古墳時代の土師器 (14) SA17 出土② 貴 (2) ··· 397
- 卷末図版 40 ··· 398
215. 古墳時代の土師器 (15) SA38 出土① 貴 (1) ··· 398
216. 古墳時代の土師器 (16) SA38 出土② 貴 (2) ··· 398
- 卷末図版 41 ··· 399
217. 古墳時代の土師器 (17) SA38 出土③ 貴 (3) ··· 399
218. 古墳時代の土師器 (18) SA38 出土④ 薙 ··· 399
- 卷末図版 42 ··· 400
219. 古墳時代の土師器 (19) SA38 出土⑤高环 ··· 400
220. 古墳時代の土師器 (20) SA38 出土⑥ 小型丸底壺 ··· 400
- 卷末図版 43 ··· 401
221. 古墳時代の土師器 (21) SA47 出土 ··· 401
222. 古墳時代の土師器 (22) SA51 出土 ··· 401
- 卷末図版 44 ··· 402
223. 古墳時代の土師器 (23) SA70 出土① 貴 ··· 402
224. 古墳時代の土師器 (24) SA70 出土② 薙 ··· 402
- 卷末図版 45 ··· 403
225. 古墳時代の土師器 (25) SA71 出土① 貴 ··· 403
226. 古墳時代の土師器 (26) SA71 出土② 薙 ··· 403
- 卷末図版 46 ··· 404
227. 古墳時代の土師器 (27) SA71 出土③ 鉢 ··· 404

228. 古墳時代の土師器 (28) SA71 出土④高环・・・404
卷末図版 47・・・405
229. 古墳時代の土師器 (29) SA72 出土①甕・・・405
230. 古墳時代の土師器 (30) SA72 出土②甕・・・405
231. 古墳時代の土師器 (31) SA72 出土須恵器・・・405
卷末図版 48・・・406
232. 古墳時代の土師器 (32) SA76 出土①甕 (1)・・・406
233. 古墳時代の土師器 (33) SA76 出土②甕 (2)・・・406
卷末図版 49・・・407
234. 古墳時代の土師器 (34) SA76 出土③甕 (3)・・・407
235. 古墳時代の土師器 (35) SA76 出土④高环・・・407
卷末図版 50・・・408
236. 古代の須恵器包含層出土・・・408
237. 中世の土師器 (1) 包含層出土①・・・408
卷末図版 51・・・409
238. 中世の土師器 (2) 包含層出土②皿・・・409
239. 陶器包含層出土・・・409
卷末図版 52・・・410
240. 繩文時代後・晚期の石器 (1) SX01 出土・・・410
241. 繩文時代後・晚期の石器 (2) SA32・33 出土・・・410
卷末図版 53・・・411
242. 繩文時代後・晚期の石器 (3) SA35・39 出土・・・411
243. 繩文時代後・晚期の石器 (4) 包含層等出土の石器(1)・・・411
卷末図版 54・・・412
244. 繩文時代後・晚期の石器 (5) 包含層等出土の石器(2)
412
245. 繩文時代後・晚期の石器 (6) 包含層等出土の石器(3)・・・412
卷末図版 55・・・413
246. 繩文時代後・晚期の石器 (7) 包含層等出土の石器・石皿・異形石器・・・413
247. 繩文時代後・晚期の石器 (8) 包含層出土の打製石斧(1)・・・413
卷末図版 56・・・414
248. 繩文時代後・晚期の石器 (9) 包含層出土の打製石斧(2)・・・414
249. 繩文時代後・晚期の石器 (10) 包含層出土の打製石斧(3)・・・414
卷末図版 57・・・415
250. 繩文時代後・晚期の石器 (11) 包含層出土の打製石斧(4)・・・415
251. 繩文時代後・晚期の石器 (12) 包含層出土の横刃形石器・・・415
卷末図版 58・・・416
252. 繩文時代後・晚期の石器 (13) 包含層出土の磨製石斧(1)・・・416
253. 繩文時代後・晚期の石器 (14) 包含層出土も磨製石斧(2)・・・416
卷末図版 59・・・417
254. 繩文時代後・晚期の石器 (15) 包含層出土の磨製石斧(3)・・・417
255. 繩文時代後・晚期の石器 (16) 包含層出土の磨石・磨礎石・鉛石・・・417

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道の延岡～清武間は、平成元年2月に基本計画が決定し、これを受けて宮崎県教育委員会（以下県教委）では予想されるルート周辺の分布調査を実施し、多くの遺跡が確認された。その一区間である都農～西都間は、平成9年12月に施行命令が出され、これに伴い平成10年度に県教委が路線の分布調査を行った結果、計79箇所、約896,000m²に及ぶ遺跡の存在が推定された。そこで県教委では、平成11年度から日本道路公団の委託を受け東九州自動車道（都農～西都間）の建設工事で影響を受ける遺跡の発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることになった。

野首第2遺跡の確認調査は、平成12年9月28日から同年10月13日にかけておこなわれた。その結果、縄文時代早期から古墳時代にかけての土器・石器類が多数出土し、同時期の構造も高密度で検出された。これを受けて、日本道路公団と宮崎県埋蔵文化財センターとの間で協議が行われ、野首第2遺跡の発掘調査を実施することになった。調査期間は以下の通りである。

平成13年度

平成13年5月7日～平成14年3月31日

平成14年度

平成14年4月3日～平成15年3月31日

平成15年度

平成15年4月3日～平成16年3月31日

平成16年度

平成16年4月5日～平成17年3月29日

第2節 調査の組織

野首第2遺跡の調査の組織は、次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛（平成13年度）

米良弘康（平成14・15年度）

宮園淳一（平成16・17年度）

清野 勉（平成18・19年度）

副所長 加藤悟郎（平成18・19年度）

副所長兼調査第二課長

岩永哲夫（平成13～18年度）

副所長兼総務課長

菊地茂仁（平成13年度）

大蘭和博（平成14～16年度）

総務課長 宮越 尊（平成17～19年度）

調査第一課長 面高哲郎（平成13年度）

児玉章則（平成14・15年度）

高山富雄（平成16～18年度）

長津宗重（平成19年度）

主幹兼総務係長

石川恵史（平成15～17年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山正信（平成18・19年度）

総務係長 亀井維子（平成13年度）

野邊文博（平成14年度）

調査第一係長 谷口武範（平成13～16年度）

主幹兼調査第一係長

長津宗重（平成17年度）

主幹兼調査第一担当リーダー

長津宗重（平成18年度）

副主幹兼調査第一担当リーダー

南中道隆（平成19年度）

調査第二係長 長津宗重（平成13～16年度）

主幹兼調査第二係長

菅付和樹（平成17年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付和樹（平成18・19年度）

主事（調査・整理担当）

重留康宏（平成16～19年度）

松本 茂（平成13～19年度）

主查（調査担当）

尾園賢二（平成13～15年度）

主事（調査担当）

小宇都あずさ（平成16年度）

鶴田史子（平成16年度）

調査員（嘱託）辻 弥生（平成13年度）

川畑真二（平成14・15年度）

落合賢一（平成14年度）

鶴田史子（平成15年度）

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の歴史的環境（補遺）

本遺跡に関わる歴史的環境について、その大要はすでに第一分冊（文献1）に掲載した。本書では、第一分冊の記述を補うものとして、特に縄文時代後期・晩期の集落の様相に関わる周辺遺跡、古墳時代の集落および古墳群の様相に関わる周辺遺跡を取り挙げた解説を添えたい。

（1）縄文時代後・晩期

野首第2遺跡が位置する小丸川流域、牛牧台地には、縄文時代後・晩期の遺跡が多数立地している。本遺跡の生業活動をはじめとする、活動領域を考察する上で、これら遺跡群の存在を無視することはできない。

そこで小丸川流域における、縄文時代後・晩期に該当する主要遺跡について概観しておきたい。

a 主要遺跡概観（第1図）

■石河内本村遺跡（文献3）

石河内盆地内に位置する。岩崎上層式から市来式にかけての竪穴住居55軒を主体とする集落跡が検出された。

特筆すべき点として、石錐に代表される狩猟具の出土がほとんど見られないことが挙げられる。

■野首第1遺跡（文献4・5）

野首第2遺跡が立地する牛牧台地下の低位段丘縁辺部に位置する。縄文時代後・晩期に明確に該当すると考えられる遺構は検出されていない。土器型式としては、後期の丸尾式、鳥井原式土器、晩期の黒川式が出土している。石器として石錐、石斧、多頭石斧（十字型石斧）、石錘などが出土している。

ある意味においては当然の事ながら、野首第2遺跡出土の土器、石器と形態は酷似したものが多い。詳細は後述するが、野首第1遺跡と野首第2遺跡において、遺跡間接合した土器が存在する。

■老瀬坂上第3遺跡（文献6）

野首第2遺跡の背後丘陵上に立地する。縄文時代後期・晩期に明確に該当すると考えられる遺構は検出されていないが、後期の丸尾式、鳥井原式、晩期の黒川式土器が出土している。土器の出土量

的には晩期が主体となる遺跡である。他に後期から晩期にかけての無文土器が相当数出土しているが、これらは野首第2遺跡をはじめ、宮崎市平畠遺跡（文献7）において出土している資料とほぼ同じ型式内に収まるものと考えられる。他の遺物としては、石錐、石斧などの石器類をはじめとして、石錘、土器片錐などの漁労具も多数出土している。

■下耳切第3遺跡（文献8）

牛牧台地縁辺部に位置する。主体となるのは縄文中期の集落跡であるが、ごく少数だけ、後・晩期の遺構・遺物が出土している。遺構としては土坑が検出されているが、その性格は不明瞭である。土器としては後期の丸尾式、三万田式、晩期の黒川式が出土している。

b 遺跡の時期幅と性格

こうして概観してみると、小丸川流域において集落の存在が稀少である事がわかる。出土土器から推測される遺跡の存続幅としては、石河内本村遺跡が最も古い。また近隣に岩崎上層式が出土していない点からも異彩を放っている。

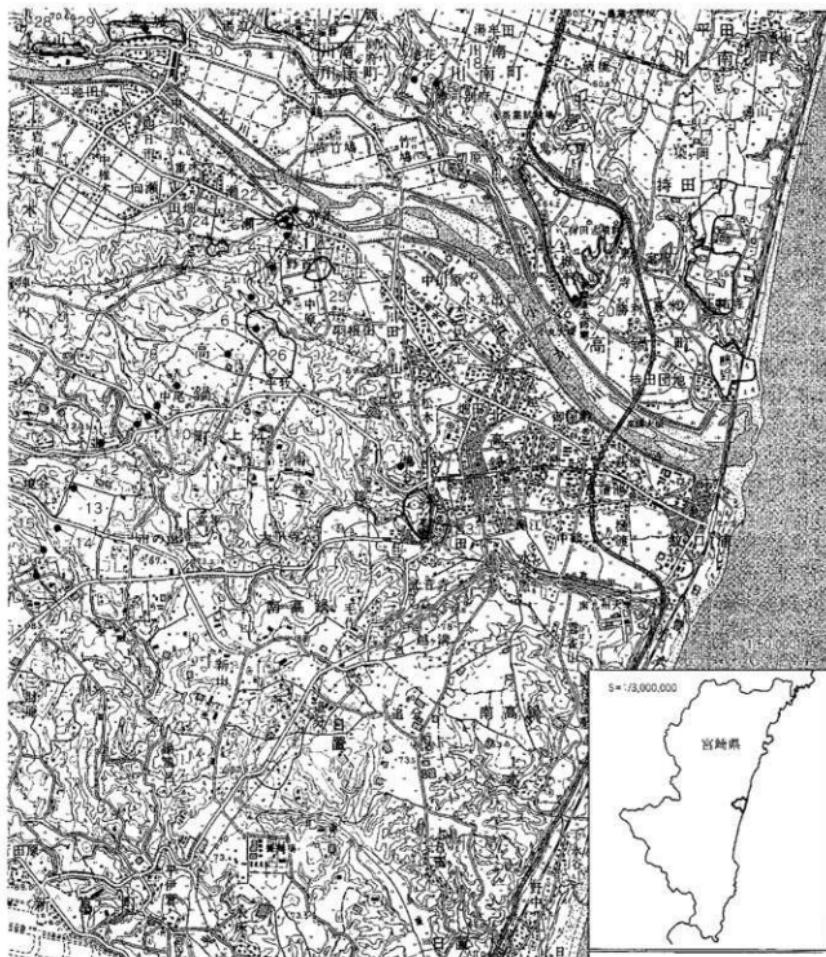
小丸川流域において、遺跡数が増加するのは丸尾式期である。南九州を主体的な分布域とする土器型式であり、この型式と並行関係にあるとされる北久根山式はあまり見る事ができない。

西平式並行期、三万田式、鳥井原式までは明確な出土状況を見せるものの（在地的な変化は認められるが）、御領式以降の後期後半～晩期初頭、特に滋賀里並行期の様相は判然としない部分が多い。晩期において遺跡数が増加するのは黒川式においてである。また、ここに挙げた土器型式が全て出土する遺跡は皆無である。

九州島内において大集落が営まれる時期であるが、小丸川流域に存在する遺跡の性格としては、拠点集落的な石河内本村遺跡や野首第2遺跡を中心として、その生活基盤を支える狩猟採集地と考えられる老瀬坂上第3遺跡や南中原遺跡南中原第1遺跡（文献9・10）が存在するという点に集約されよう。

（2）古墳時代

小丸川流域には多数の古墳群、および同時代の



1. 野首第2遺跡 2. 崩戸遺跡 3. 野首第1遺跡 4. 南中原第1遺跡 5. 老瀬坂上第3遺跡 6. 下耳切第3遺跡
 7. 牛北牧第1遺跡 8. 唐木戸第4遺跡 9. 唐木戸第3遺跡 10. 唐木戸第2遺跡 11. 唐木戸第1遺跡 12. 小並第1遺跡
 13. 牧内第2遺跡 14. 牧内第1遺跡 15. 音明寺第2遺跡 16. 音明寺第1遺跡 17. 尾花A遺跡 18. 尾花坂上遺跡
 19. 川南古墳群 20. 持田中尾遺跡 21. 持田古墳群 22. 野首第1遺跡(2004年報告地区) 23. 野首古墳群 24. 老瀬横穴群
 25. 山王古墳群 26. 牛牧古墳群 27. 大戸ノ口第2遺跡 28. 木城村古墳群 29. 永山古墳 30. 高城跡 31. 高鍋城跡

第1図 野首第2遺跡と周辺における縄文時代後・晩期他の遺跡 S=1/50,000

集落遺跡が展開している。このうち野首第2遺跡に近接する、牛牧台地周辺の古墳群および古墳時代集落に関して詳述したい。

a 古墳群・古墳時代の集落遺跡概観（第2図）

■牛牧古墳群（文献11・12）

牛牧台地北東部縁辺に位置し、下耳切第3遺跡に近接する。

円墳11基と前方後円墳1基により構成される。

■山王古墳群（文献13）

牛牧台地直下に展開し、野首第2遺跡より古墳群の展開を一望する事ができる。

円墳11基と前方後円墳1基により構成される。

■野首古墳群（文献4）

牛牧台地から派生する丘陵上に存在し、野首第1遺跡、野首第2遺跡に近接する。

2基の円墳から構成されており、その埋葬主体部は横穴式石室である。出土遺物より、7世紀初頭の時期が想定されている。

b 集落遺跡

■上ノ別府遺跡（文献14）

持田古墳群の中でも前方後円墳の展開する台地の谷を挟んだ東側台地上に位置する。

6世紀後半から7世紀前半にかけての集落跡であり、竪穴住居9軒と掘立柱建物2軒で構成されている。竪穴住居は方形プランが主体で大型住居の存在も確認されている。

■野首第1遺跡（文献4）

牛牧台地から小丸川に向かって派生する低位段丘と縁辺に位置する。野首第2遺跡からは直線距離にして50mほど北部に位置している。

古墳時代中期後半から後期初頭と後期後半から終末にかけての集落跡が検出されている。竪穴住居は方形プランであり、このうち後期後半から終末に位置づけられるものは野首1号墳との関連性が推測されている。

■大戸ノ口第2遺跡（文献15）

牛牧台地南東の舌状台地に位置し、大戸ノ口古墳群が近接する。調査区は東側丘陵部と西側丘陵基部に2分され、前者は6世紀初頭の竪穴状遺構1基が検出され、後者においては、竪穴住居16軒を中心とする6世紀後半の集落跡が確認されて

いる。竪穴住居は方形プランである。

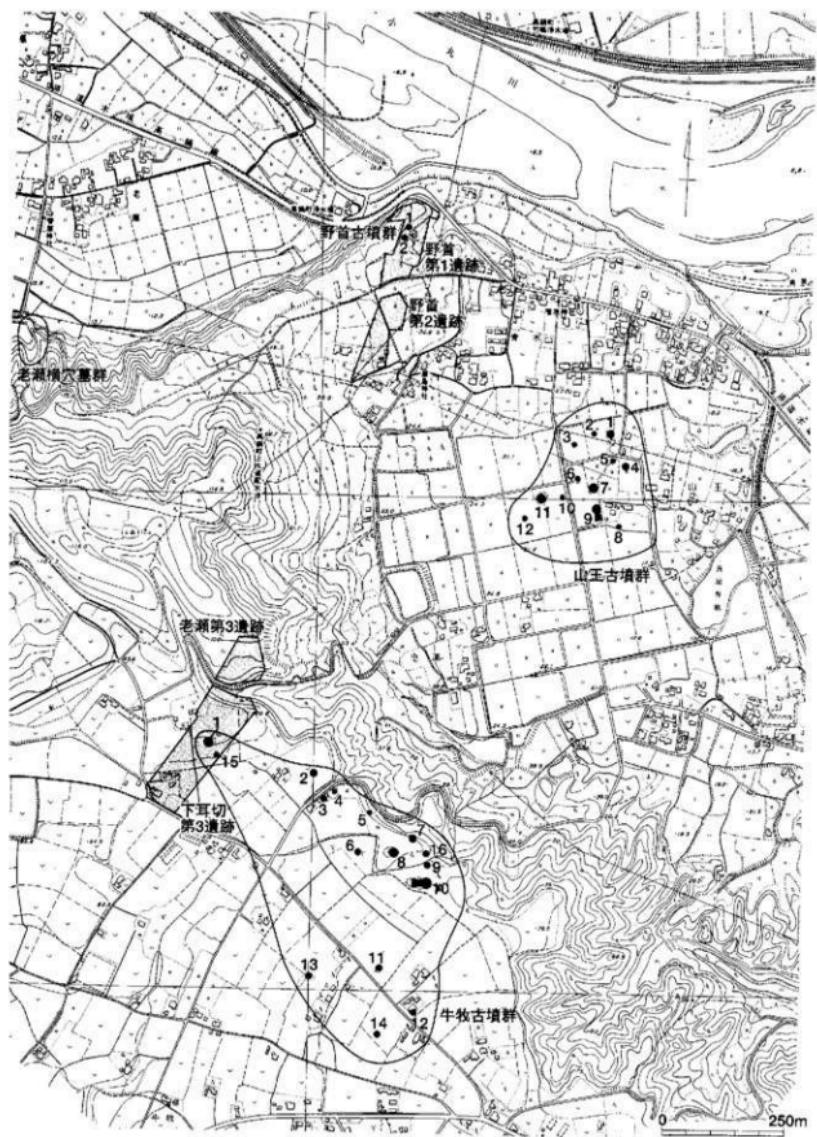
■毛作第4遺跡（文献16）

毛作古墳群より直線距離にして約0.5kmの台地縁辺部に位置する。古墳時代後期の竪穴住居が1軒検出された。方形プランであり、竈を有している。

b 特徴

以上、野首第2遺跡周辺の古墳時代遺跡を概観したが総体的な特徴として、以下の4点が挙げられる。

- ① 台地平坦面・縁辺に集落が展開する。
- ② 古墳付近に集落を形成する。
- ③ 一部の例外を除き、短期継続の集落が多い。
- ④ 中期の遺構構成は竪穴住居中心で、後期に入り掘立柱建物が少数伴う。



第2図 野首第2遺跡と周辺における古墳時代の遺跡と古墳群 S=1/10,000

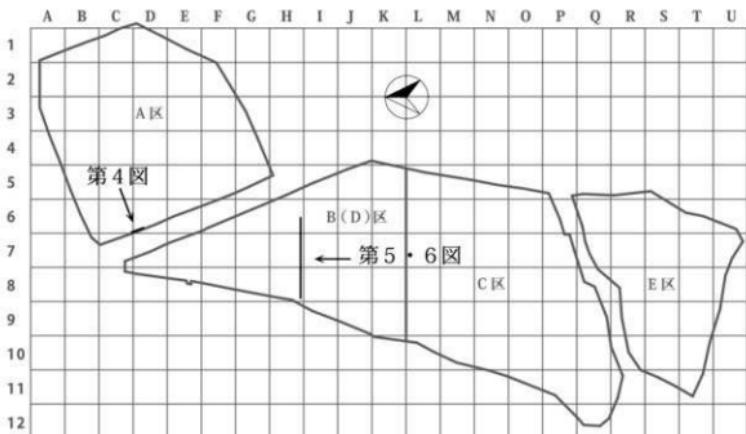
第2節 基本層序（補遺）

（1）概要

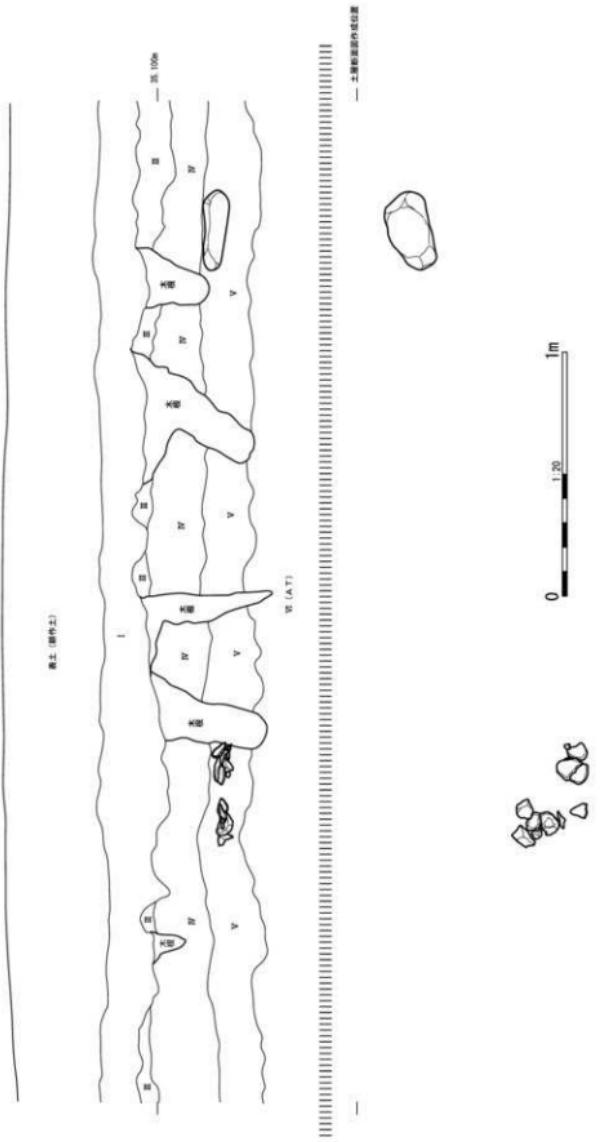
野首第2遺跡では、計六時代・細分時期では15以上の時間幅にわたる考古遺物の検出があつた。本遺跡独自の基本層序はローマ数字（I、II、III…）で表し、括弧内には東九州自動車道（都農～西都間）基本層序を併記した。地層対比のうえで鍵となる降下火山灰層が七つ確認されたが、これは肉眼観察および鏡下の観察に依った。各層の特徴については、すでに第一分冊において詳細を述べたので、以下に概略のみ記す。

- 表土：現耕作土。近・現代、近世、中世の遺物が包含される。
- 第Ⅰ層：暗灰褐色土層。層厚20～50cmを測る。上部は古墳時代・古代を中心とする遺物包含層、下部は縄文時代後・晩期を中心とする包含層である。
- アカホヤ(K-Ah)：二次堆積層。層厚0～15cmを測る。A区における調査開始当初は確認しておらず、後にC区の南西端およびE区の調査に至って認識された。
- 第Ⅱ層：黒色土層。層厚5～15cmを測る。MB0に相当する。縄文時代早期の遺物包含層。

- 第Ⅲ層：暗褐色土層。層厚10～15cmを測る。MB0～ML1の漸移層に相当する。縄文時代早期の遺物包含層
- 第Ⅳ層：黄褐色土層。層厚30～40cmを測る。ML1～Kr-Kb（小林軽石）に相当する。Kr-Kbが明瞭に視認できる下部のIVb層と含まない上部のIVa層に細分される。AT上位の後期旧石器時代石器群（第V～VII期）の遺物包含層。
- 第V層：暗褐色土層。層厚20～40cmを測る。MB1相当層。AT上位の後期旧石器時代石器群（第IV期～第VII期）の主要な包含層。
- 第VI層：明黄褐色土層。層厚20～30cmを測る。ATの一次堆積層と推定される。
- 第VII層：MB2～MB3の黒色帯と両層に挟まる始良深溝（A-Fm）・始良大塚（A-Ot）を含む。AT下位の後期旧石器時代石器群（第II・III期）の遺物包含層。
- 第VIII層：明黄褐色の粘質土層。ML3相当。層厚10～20cmを測る。Kr-Aw（霧島アワコシ）の可能性が指摘される赤色粒を含むことがある。上部から第VII層下部にかけてがAT下位後期旧石器時代初頭の石器群（第I期）の遺物包含層。
- 第IX層：Kr-Iw（霧島イワコシ）が主体となる硬質の明褐色土層。層厚約10cmを測る。無



第3図 土層断面図提示位置 S=1/2,000 (方眼の一辺が10m)



PS105 上層注記

- ・土質面の凹凸の値は見通しを反映している。
- ・第Ⅲ層と第Ⅰ下部のブロックには複数の凹部で、第Ⅲ層に付与されたものと推察される。
- ・第Ⅳ層とⅠ層の空隙が、やや狭いが空隙、細胞孔が多いため、堆積物は少なく、第Ⅳ層は少なくて、第Ⅴ層とⅥ層はAT層幅ではなく、第Ⅶ層とⅧ層が堆積する状態。
- ・第Ⅸ層上面はAT層幅ではなく、第Ⅹ層を母材に第Ⅺ層が堆積する状態。

第4図 野首第2遺跡における土層断面図（1）A区調査区南西壁（第5号蝶群を投影）

S = 1 / 20

遺物層。

- 第X層：黄白色の粘質土層。トレンチによる確認では、層厚40～50cm程度と推測される。水性堆積である可能性が高い。自然小礫を疎らに含む。

付近の露頭における観察によれば、以下は小礫主体の礫層が続き、さらに水性堆積の砂屑、粘土層などが続く無遺物層である。

(2) 調査区ごとの様相

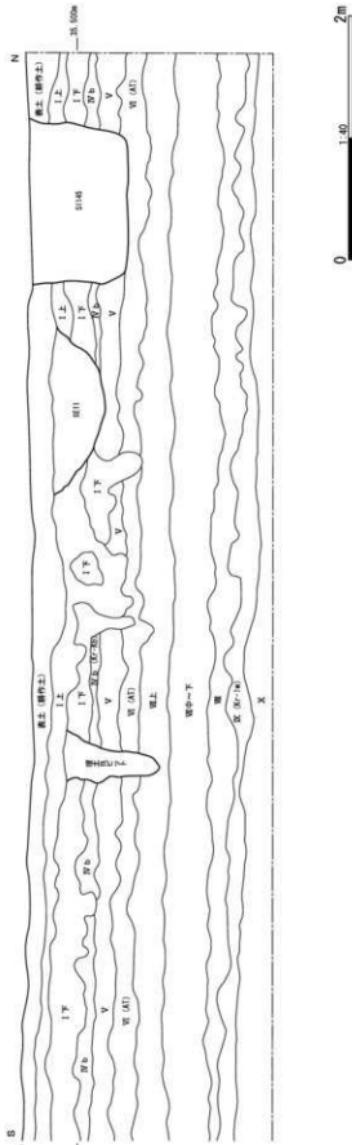
第一分冊では基本層序を示す実際の土層断面図を掲載していなかったので、参考のために一部を提示する。

- A区（第4図）：図示した調査区西辺付近では、表土が比較的厚く堆積し、第I層はこれに削平されたものか、隣接するB（D）区に比較して薄い傾向が認められた。図示した部分では、第II層の堆積は観察されず、第III層の堆積も第I層下部にブロック化してかろうじて認められ、安定した堆積ではない。ただし、II・III層の堆積が比較的安定してみられる。

図中に含まれる第5号礫群について解説を添える。合計16点の礫から構成され、うち1点は礫が集中する範囲からは約2m離れて分布する巨礫である。配石というべきか。他は直径50cmの円内に収まり、大きく二つまとまりが看取れる。礫は垂直方向にも重なっている。こうした特徴は第一分冊において礫群Ⅲ類としたグループに属し、縄文時代早期の所産である可能性もあるが、巨礫と検出レベルが揃う（第V層上部）ことから、ここでは旧石器時代第V期の礫群と推定しておく。

- B（D）・C区（第5・6図）：縄文早期に相当する第II・III層が安定して堆積する範囲は狭く、東側縁辺に限られる。図示した範囲では、第I層の堆積はA区よりも厚いが、その下面是第IVb層（Kr-Kb）に直接接している。V層以下の堆積はA区同様、安定的に整合的な堆積が観察される。

- E区：調査区東端付近では、薄く不安定な堆積ではあるが、一応K-Ahの堆積が観察された。



第5図 野首第2遺跡における土層断面図 (2) B区西側① S=1/4.0 ※次ページに続く



第6図 野首第2遺跡における土層断面図 (3) B区西側続 S=1/40

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 繩文時代後・晚期の遺物の器種分類および類型化

(1) 土器・土製品の器種分類および類型化

a 土器

当該期の土器は調査区全体でコンテナ數百箱分にのぼる。近接するグリッド間や、文様毎の接合を試みたが、時間的な制約上、満足な結果を得たとは言い難い。また、完形資料に恵まれず、器形の全体像を把握する事が困難なため、まず文様を中心とした大きな6つのグループを設定した。

■第1群：貝殻文系

■第2群：磨消繩文系

■第3群：沈線文系

■第4群：黒色磨研系

■第5群：突帯文系

■第6群：無文系

これは、あくまでも報告の便宜上用いられる項目であり、土器分類・系統・セット関係は考慮していない。第1群～第6群は、器形などの特徴により細分される。この細分された単位は、おおむね現在周知されている土器型式に合致したものである。以下、細分される類型について説明を加える。

■第1群：貝殻文系

貝殻を主体的な施文具として使用した文様群である。口縁部、頸部が主な文様帶となる。

□ 1類：丸尾式 器種により細分した。

A-1：深鉢 貝殻を施文具とした文様を施すもの。

A-2：深鉢 無文。

B：脚台付皿 皿部は文様構成により細分される。

i：半截竹管文

ii：突帯文・粘土貼付

iii：沈線文

iv：貝殻文

v：i + ii

■第2群：磨消繩文系

いわゆる充填繩文とは明確に区別している。主体となる器種は深鉢である。口縁部と胴部に文様帶を持ち、頸部に明瞭な稜を持つ。

□ 1類：西平式 従来、西平式と呼ばれていたものである。

□ 2類：太郎迫式 磨消繩文の有無で細分できる。

i：有文

ii：無文

□ 3類：三万田式並行期 口縁部形態により細分される。

①：断面3角形で口唇部をつまみあげる。内面に施文なし。

②：断面3角形だが、①より鈍角。内面に施文あり。

③：②より鈍角。内面施文あり。

□ 4類 型式分類が困難なものを集約した。

■第3群：沈線文系

沈線文のモチーフにより細分した。

□ 1類：直線

□ 2類：曲線

□ 3類：弧状

■第4群 黒色磨研系

黒色磨研処理を施した土器の他に、精製及び半精製とも呼ぶべき土器群を内包している。概ね、三万田式～天城式並行期に該当する土器群である。

A：鉢

B：浅鉢 器形により細分される。

B-1 胴部から口縁部が屈折して立ち上がる。口縁部が文様帶となる。

B-2 胴部の上に内湾する頸部がある。口縁部は頸部から直線的に立ち上がる。口縁部と胴部最大径が文様帶となる。頸部の長さにより、さらに細分可能である。

B-3 胴部の上に内湾する頸部がある。頸部からゆるやかに外反する口縁部が続く。

B-4 B-3よりも口縁部が長く、外反が強調される。

B-5 屈曲する胴部から、くの字形の口縁部へと続く。

C：注口土器

D：高坏 以下の文様が施されるものもある。

i：沈線文

ii：凹線文 凹線の本数により、①2本と②3本に分類できる。この凹線を貝殻殻頂押圧文や押圧文により集約したものもあるが、この点を基準に分類は行なっていない。

また凹線間の形状により、(一)凹線間丸い、(二)凹線間の稜上尖る、の二者に細分する事が可能である。

iii：無文

■第5群 突帯文系

主体となる器種は深鉢である。施文パターンにより細分される。

□ 1類：無刻目突帯文 断面形態により細分される。

①：断面二等辺三角形

②：断面正三角形

③：断面半月形

□ 2類：無刻目突帯文+孔列文

□ 3類：刻目突帯文

■第6群 無文系

型式分類の基準となる文様が施文されていない資料である。本遺跡の縄文土器の主体をなす。主体となる器種は深鉢であり、口縁部形状により分類した。

□ 1類 やや外反する口縁部+ゆるやかに屈曲する胴部

□ 2類 やや外反する口縁部+碰弾形の胴部

■その他

□底部 野首第2遺跡からは数百点を超える底部が出土している。しかしながら、完形品に恵まれたとは言い難いため、これらの底部がどの器種・器形と組み合わさるものか判然としないものが多い。そのため、底部は独立して報告している。底部形状は以下のように細分される。

1類：平底

① 大ぶりな底部から直線的な胴部へと至る。

② 張り出し部のある①

③ 小型の底部から、ゆるやかに張り出した胴部に至る。

2類：上底

① 接地部が鋭角

② 接地部が鈍角

③ 接地部が平坦

b 土製品

■土器片錐

平面形態と、紐掛部の位置を基準に分類を行なった。

□平面形態に基づく分類

1類：橢円形

2類：方形（隅円方形）

□紐掛部の位置による分類

A：長軸側

B：短軸側

(2) 石器・石製品の器種分類および類型化

微細剥離片、二次加工剥片、礫器、敲石、台石、石核、分割礫、原石、剥片、碎片など、通時代的に認められる石器については、第一分冊（文献1）の記載に準じる。

その他の器種については、本書の包含層等出土遺物を扱う各項において説明を付す。なお、石錐については第一分冊でも触れたが、本書に掲載する石錐の数量がより多いため、あらためて説明を添える。

第2節 繩文時代後・晚期

(1) 概要 (第7図)

当該期の遺構として特筆されるのは、C区から検出された竪穴住居跡 26軒以上からなる後期後葉の集落である。一方、A区では後期中葉の竪穴住居跡が1軒 (SX01) のみが確認された。

これらの遺構に伴う包含層中の遺物として、大量の土器・土製品、石器・石製品が出土した。とりわけB(D)区を中心とした空間からは夥しい量の出土遺物が確認された。当該期のほとんどの竪穴住居跡が、C区を中心とした一定の範囲に分布することを考えあわせると、B(D)区はいわゆる“土器捨て場”的な廃棄空間として機能していた可能性を指摘できる。また、形成時期の限定は困難であるものの、後期中葉～晚期に存続した可能性が高い第2号溝状遺構が、B(D)区を介してC区の集落と野首第1遺跡内にある谷を結ぶように通っている点も注目されよう。

その他、C区において複数検出された棒状礫挿入土坑やB(D)区から検出された円形の大形土坑も注目される。前者は30cm前後の棒状礫が入れられた土坑ないしピットで、共伴遺物に乏しく厳密な時期の特定はできないが、埋土や分布状況を勘案すると、後期後葉の集落に伴う可能性が高い。後者は集落の北側(B(D)区)から検出された。これも共伴遺物はわずかな土器片が中心で、性格は不明であるが、後期後葉の集落に関連する可能性も指摘できる。その他C区では埋設土器も複数確認された。

(2) 地層堆積の様相

野首第2遺跡の調査区内における層位的所見として、アカホヤ火山灰の堆積がほとんど確認されなかつたことは、第一分冊および本書第II章で既に述べた。本遺跡を含む児湯郡の台地上に立地する遺跡においては、通常、アカホヤ火山灰の堆積が明確な堆積層として認識できる。この点で、本遺跡の発掘調査時には若干の違和感をおぼえた経緯がある。そこでほぼ現地形に沿って堆積していく第I層を除去後、直下の地面について平面分層を行なった。その結果、B(D)・C区においてL9グリッド付近から南東方向に向かって同心円状

に分層線が引ける、つまり北西方向に向かうほど、第I層の直下にはA T下位など古い包含層が露出し、南東方向に向かうにつれA T上位・繩文早期相当層など新しい包含層が露出する関係が明らかとなつた。すなわち第I層の堆積が開始されたと考えられる繩文時代後期の時点で、現在第I層直下に観察される平面分層線が露出していたということになる。この現象を惹起した要因についての説明・解釈は第IV章第4節において試みたい。

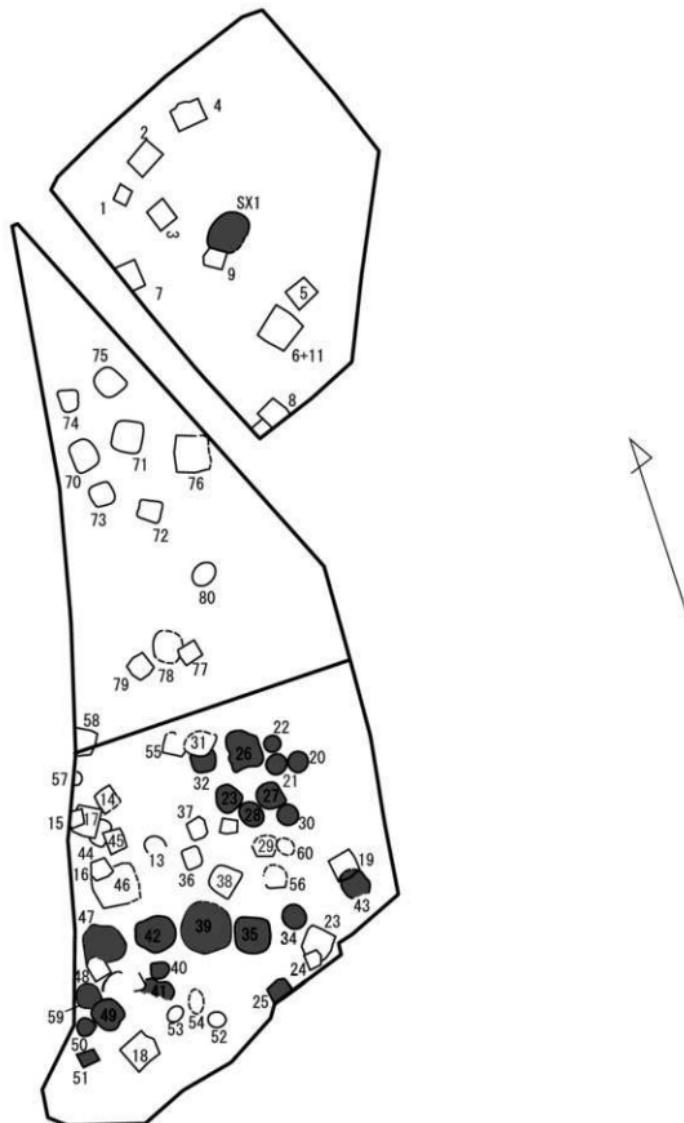
(3) 遺構および遺構出土の遺物

a 竪穴住居跡

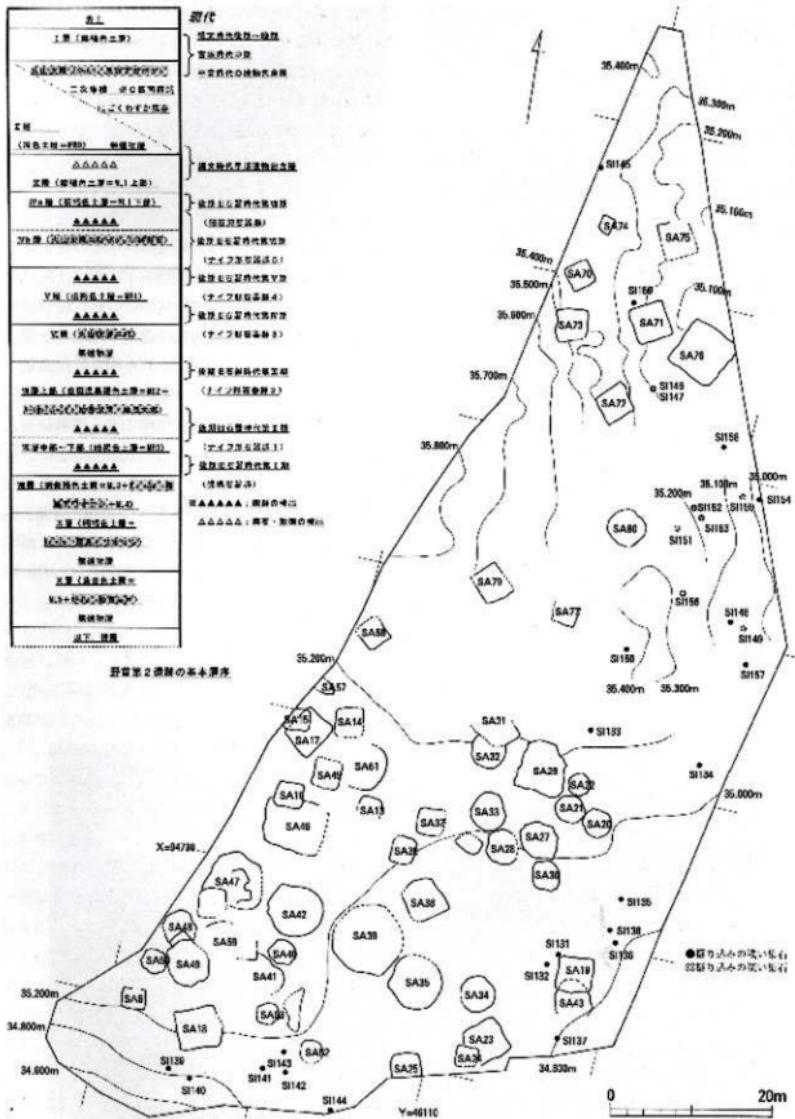
全調査区から確定なものは合計30軒検出された。調査区毎の内訳は、A区1軒 (SX01)、B(D)区3軒 (SA90～92)、C区26軒 (SA20～22・25～35・39～43・48～53・59) である。この他、出土遺物の少なさ、覆土の堆積状況が不安定であることなどから、遺構の全体像の把握、時期決定等に支障を来たしたもの、竪穴住居跡である可能性を持つものが4軒存在する (B(D)区: SA80、C区: SA29・47・61)。このうち、SA47は出土遺物の様相から繩文時代後・晚期の竪穴住居を含むことは疑いないが、古墳時代住居に切られることもあり、残念ながら詳細を解明できなかった。複数の竪穴住居跡が切り合う可能性も残される。

竪穴住居の多くは円形プランであり、わずかに方形プランが加わる。柱穴の配列が判然としないものが多いが、柱穴位置が推定できる事例では2本柱が目立つ傾向にある。C区の竪穴住居跡の分布において特筆されるのは、切り合い関係が少なく、10cm前後のわずかな距離を隔てて隣接する事例が多く見受けられる点である。もっとも、現在観察されるのはあくまでも検出面における平面形であるから、皿状の立ち上がりをみせる壁面が多いことを考慮すると、おそらくは切り合い関係を持っていたのであろう。

以下、各住居跡についての説明を行なう。なお掲載している遺物のうち、土器は床面から出土したものであり、石器も床面出土品を中心とし一部覆土中からの資料を加えた。



第7図 縄文時代後・晩期の竪穴住跡の分布模式図



第8図 B (D)・C区における等高線図

■第1号凹地状遺構 (SX01 ※竪穴住居跡 第9図)

概要 調査区内で唯一確認された後期中葉の丸尾式期の竪穴住居跡である。A区から検出され、第2号溝状遺構とわずかに接する。古墳時代の第9号竪穴住居跡 (SA09) に南西端を切られ、南東端は風倒木痕に切られる。

推定される平面形は径 7.5 m × 6 m の不整梢円形で、南西-北東に長軸を向ける。内部からは多数のピットが検出された。これらのピット群は強いて土色の変化を掘り上げたものもあり、自然為の現象によるものも含む可能性がある。明確な主柱穴は認められないが、小ピットが環状に並ぶ可能性は排除できない。壁の立ち上がりは緩やかで皿状であるため、当初は竪穴住居跡とは認定していなかったが、C区における後期後葉の竪穴住居跡群も同様に皿状の事例が多く、内部の遺物出土状況も勘案して、竪穴住居跡と再認識した。床面と想定される土壤にも際立った硬化面は認められなかった。焼土は観察されず明確な火廻はないが、中央付近と北東部に浅い土坑状の落込みがあり、覆土中には炭化物粒も認められた。

出土遺物

■土器 (第10～14図) 深鉢、脚台付皿でセットを構成する。

1 は第1群1類A-1に属する深鉢の口縁部である。3～8は第1群A-2に属する深鉢の口縁部、9・10が同じく底部である。11～22は第1群2類の口縁部、23～30・32・33が同じく底部である。

脚台付皿の文様バリエーションは多彩である。この器種がまとまって出土したのは当該遺構のみである。

■石器 (第15図) 特筆される石器として、ヒスイ輝石製の小珠と、煤・タール状付着物が観察された扁平棒状石器、円盤形石器類である。その他に、打製石鎌、磨製石斧、磨敲石、敲石、打欠石錐、有孔石などが認められた。以下、その一部について観察所見を記す。なお、ヒスイ輝石製の小珠については別項を設けて後述する。

□扁平棒状石器 44 は頁岩II群製の扁平棒状礫に着柄痕が観察される資料である。

図下端を欠損しており、そこに刃部があった可

能性が指摘される。現存する部分には剥離・研磨などの加工が観察されないため、ここでは扁平棒状石器としたものの、形態を考慮すると石斧的な用途が想定されよう。

煤・タール状付着物の残存により、着柄方法はおそらく柄へ挿し込むかたちで取り付けられた縦斧に似た状態と推定される。ただし、石材は打製石斧と共に、扁平であることからも伐採のような強い打撃には耐えられないであろう。このことから実用品ではない可能性も考慮する必要がある。

□円盤形石器 扁平円盤形を呈する石器は計5点確認された。うち3点を図示した。覆土中から出土した頁岩I群製の45は表面の1/3程の面積に煤・タール状付着物がみられ、周縁にわずかな剥離・敲打痕が観察される。着柄に関わる痕跡か。

他の4点 (42・43他) はいずれも変成・風化の進んだ頁岩II群を用いる点で共通する。サイズは5点ともに径7～9cmと概ねまとまる。

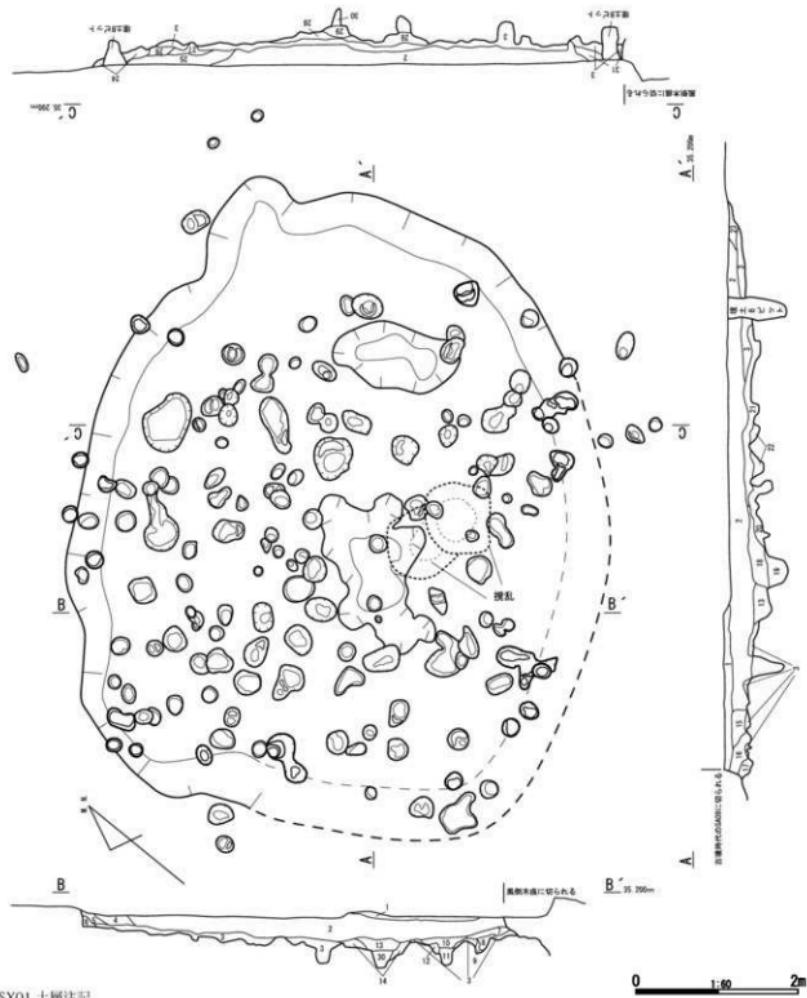
□打製石鎌 36 は珪質頁岩III群製の大形品である。床面付近から出土した。脚部を欠損する。37はチャート製の長い脚部を有する資料である。38は覆土中から出土したが、形態的にみて繩文時代早期の鎌形鐵の混入であろう。

□敲石 46 はピット中から出土した尾鈴山産溶結凝灰岩製の敲石である。梢円形の扁平礫を素材とする。表裏の広い平坦面を利用して磨石を兼ねた可能性もあるが、明確な磨滅は観察されない。長軸の両端には、敲打あるいはこすり付けによって形成された平坦面がそれぞれ3～4面観察される。

□磨製石斧 47 は床面付近から出土した基端が尖る平面彫形の資料である。刃部を欠損する。全面を敲打痕が覆う。基端付近を巡るタール状付着物が観察される。敲打整形中に破損した未成品か。

□打欠石錐 床面および覆土中から計49点が確認された。砂岩I群製13点、砂岩II群製13点、頁岩・ホルンフェルス製23点を数える。紐掛部の位置で分類すると、長軸打欠が圧倒的に多く、短軸打欠は1点のみである。双方打欠石錐は無い。

紐掛部付近の稜線に潰れが観察される資料が多



SX01 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10YR2/2.5) 粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。部分的に大小の炭化物を含む。
- 2 : 黒褐色 (10YR2/1.5) 粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第Ⅲ層起源のブロック (径 1 ~ 3m) をごくわずかに含む。
- 3 : 單褐色 (10YR2.5/3) 粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。部分的に第Ⅳ層起源のブロック (径 15 ~ 30m) をマーブル状に練らしに含む。
- 4 : 黒褐色 (10YR2.5/1.5) 粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第Ⅲ・Ⅳ層起源のブロック (径 1 ~ 3m) をごくわずかに含む。
- 5 : 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第Ⅲ・Ⅳ層起源のブロック (径 10m) をごくわずかに含む。
- 6 : 單褐色 (10YR3/3) 粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第Ⅲ・Ⅳ層起源のブロック (径 10 ~ 20m) をわずかに含む。

第9図 第1号凹地状遺構 (SX01) S=1/60

SX01 土層記述（続）

- 7：黒色（10YR1.8S/1）粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。第III・IV層起源のブロック（径1～3mm）と炭化物（径10mm）をわずかに含む。
- 8：黒色（10YR2.2/5）粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。部分的に第IV層起源のブロック（径10～20mm）をマーブル状に織らに含む。
- 9：黒色（10YR2/1）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第IV層起源のブロック（径10～30mm）を多く含む。
- 10：黒褐色（10YR2.5/2）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第IV層起源のブロック（径1～5mm）をごくわずかに含む。
- 11：黒褐色（10YR3/2.5）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第IV・V層起源のブロック（径1～5mm）をわずかに含む。
- 12：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘性強く、しまりはやや弱い。部分的に第IV・V層起源のブロック（径10～15mm）をマーブル状に織らに含む。
- 13：黒褐色（10YR2/2）粘質土。粘性やや強く、しまりはやや強く。第IV層起源のブロック（径10～30mm）をわずかに含む。
- 14：黒褐色（10YR2.5/3）粘質土。粘性やや強く、しまりはやや弱い。部分的に第IV層起源のブロック（径5～25mm）をマーブル状に織らに含む。
- 15：黒褐色（10YR2/1.5）粘質土。粘性やや強く、しまりはやや弱い。部分的に第IV層起源のブロック（径5～25mm）をマーブル状に織らに含む。
- 16：黒褐色（10YR2/2）粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。第IV層起源のブロック（径1～3mm）をごくわずかに含む。
- 17：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第IV層起源のブロック（径1～60mm）をごくわずかに含む。
- 18：黒色（10YR2/1）粘質土。しまり・粘性ともにやや強く。第IV層起源のブロック（径1～5mm）と炭化物をわずかに含む。
- 19：黒色（10YR1/1）粘質土。しまり・粘性ともにやや弱い。第IV層起源のブロック（径3～30mm）と炭化物（径1～3mm）をわずかに含む。
- 20：黒色（10YR1.8S/2）粘質土。粘性土を基盤とし、部分的に第III・IV層起源と被定される暗褐色（10YR5/3）シルト質土をマーブル状に織らに含む。
- 21：黒色（10YR1.8S/1）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。暗褐色の無色土ブロック（径1～25mm）と第III・IV層起源のブロック（径1～5mm）をわずかに含む。
- 22：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第III・IV層起源のブロック（径1～15mm）を織らに含む。
- 23：黒褐色（10YR2/3）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第III・IV層起源のブロック（径1～30mm）を織らに含む。
- 24：暗褐色（10YR2/3.5）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。部分的に第III・IV層起源のブロック（径1～25mm）をマーブル状に織らに含む。
- 25：黒褐色（10YR2/2）粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。
- 26：黒褐色（10YR2/2.5）粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。第IV層起源のブロックをマーブル状に織らに含む。
- 27：暗褐色（10YR2/2）粘質土。しまり・粘性ともにやや弱い(<26)。第IV層起源のブロックを織らに含む(<26)。
- 28：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘性強く、しまりはやや弱い。部分的に第IV層起源のブロック（径10～30mm）をマーブル状に含む。
- 29：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘性強く、しまりはやや弱い。部分的に第IV層起源のブロック（径10～30mm）をマーブル状に含む。
- 30：黒褐色（10YR2.5/2.5）粘質土。粘性やや強く、しまりはやや弱い。第IV層起源のブロック（径10～30mm）をマーブル状にごくわずかに含む。
- 31：黒褐色（10YR3/3.5）粘質土。粘性やや強く、しまりはやや弱い。第IV層起源のブロック（径1～30mm）をわずかに含む。
- 32：暗褐色（10YR3/3.5）粘質土。粘性やや強く、しまりはやや弱い。

く、40など厚みのある礫を素材とする場合には、剥離による打欠だけでなく、敲打、両極打法なども適用された可能性を示す。

□有孔石 図示はしていないが、北西部の床面から1点出土した。ホルンフェルス製で一部を欠損する。意図は明確でないが、自然に孔の開いた礫を運び込んだものであろう。

■第20号竪穴住居跡（SA20 第16図）

概要 C区北東部のSA21に隣接する位置から検出された。直徑約3.5mの円形プランを呈する。

壁面の残存高は検出面から約20cmで、皿状に立ち上がる。位置と大きさを考慮すると、主柱穴の可能性があるピットとしてNo3とNo7の二つがある（図中の網掛け部分）。焼土など火廻を示す証拠はない。

出土遺物

土器・石器・礫を合わせて44点と他の竪穴住居跡に比べて出土量が少ない。土器のみ図示した。

■土器（第17図） 遺構内から出土した土器は少ない。出土土器のほとんどは碎片であり、図示できたのは、第6群に分類できる2点のみである。

■第21号竪穴住居跡（SA21 第18図）

概要 C区北東部のSA20・SA21・SA26に挟ま

れる位置から検出された。直徑3mの円形プランである。検出面からの残存高は約20cmであり、皿状を呈する。明確な柱穴は検出できなかったが、周囲または壁面に重なるかたちでピットが数基検出された。焼土など火廻を示す証拠はない。

出土遺物

■土器（第19図） 遺構内から出土した土器は少ない。50が口縁部、51・52が胴部である。いずれも第6群に属する深鉢である。他の器種は見られなかった。

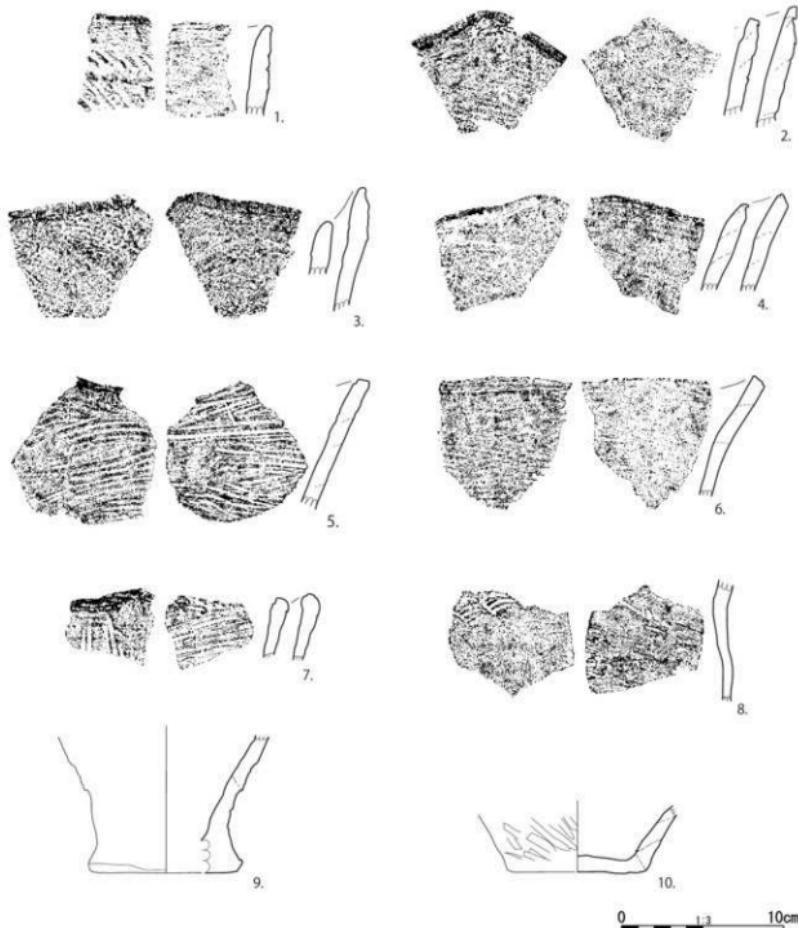
■石器（第19図） 53は台石である。表裏面に部分的な敲打痕が観察される。

■第22号竪穴住居跡（SA22 第20図）

概要 C区北東部のSA21・SA26に隣接する位置から検出された。直徑約2.3mの円形プランである。検出面からの残存高は約15cmであり、皿状に立ち上がる。明確な柱穴の認定は困難だが、2本柱の可能性を示すピットが複数認められる。

出土遺物

遺構内からの出土遺物はわずかで、土器も細片であり、遺物の図示は割愛した。



第10図 第1号凹地状遺構出土の土器（1） S=1/3



11.



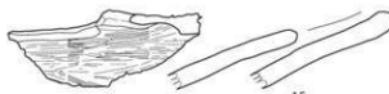
12.



13.



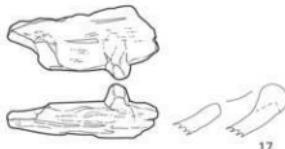
14.



15.



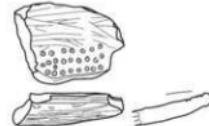
16.



17.



18.



19.



20.



21.



第 11 図 第 1 号凹地状遺構出土の土器 (2) S= 1 / 3

■第25号竪穴住居跡

(SA25 第21図)

概要 C区南部調査区において検出された。第一調査時には、面積のおよそ3分の1が調査区外に残されたためプランが判然としなかったが、第二次調査の結果、不整圓丸方形プランであることが判明した。直径約4m×3.4mを測る。検出面からの残存高は深いところで50cmを越え、ほぼ垂直に立ち上がる。北半および南西隅付近では、壁面に沿って、床面より1段高い傾斜面を持つ構造が認められた。同時に機能した何らかの施設、2軒の竪穴住居が切り合う、建替えなどの可能性を考えられるが、可能性を絞り込むことはできなかった。ここでは第二次調査の出土遺物も合わせて記載する。

出土遺物

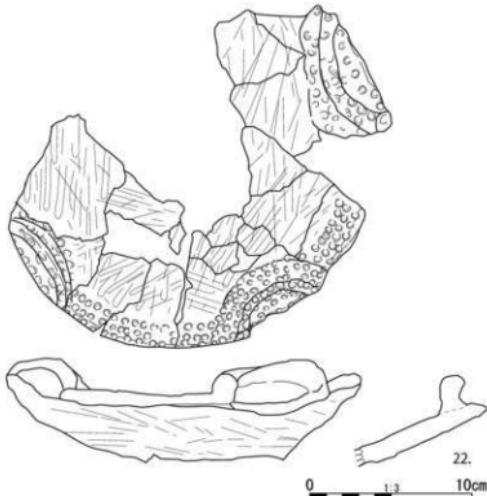
■土器（第22図） 後期後葉の土器が出土したが、より細かな型式単位でのまとまりに欠ける。深鉢、浅鉢、鉢でセットを構成する。

54が第2群1類に属する深鉢の口縁部、55が同じく6類の口縁部、58・59が第6群に属する深鉢の口縁部である。61は第4群B-1の口縁部、62・64は同群B-2、63は同群B-3の口縁部、65は第4群の鉢である。66は底部であるが、どの類型のものか判然としない。

■石器（第23図） 68～70・73は第二次調査の出土品である。床面からの遺物は少なく、ほとんどが覆土中からの出土である。67は尾鈴山産溶結凝灰岩製の剝片である。72も同石材を用いた重量感のある搔器または礫器である。図下部の縁辺には微細な剥離痕とともに、磨滅痕も観察される。71は砂岩製の敲石兼凹石である。

■第26号竪穴住居跡 (SA26 第24図)

概要 C区北東部のSA21・22に隣接して検出された。長軸（南北）に約6.5m、短軸（東西）に約5.7mの比較的大型な不整形プランである。検出面からの残存高は約10cmであり、壁面は緩やかな傾斜を持ち、皿状に立ち上がる。複数のビッ



第12図 第1号凹地状遺構出土の土器(3) S=1/3

トが検出されたが、主柱穴の配列は明らかではない。床面の北東部と南西部中央の2箇所に礫や礫石器類の集積が認められた。焼土等は確認されていない。

出土遺物（第25図）

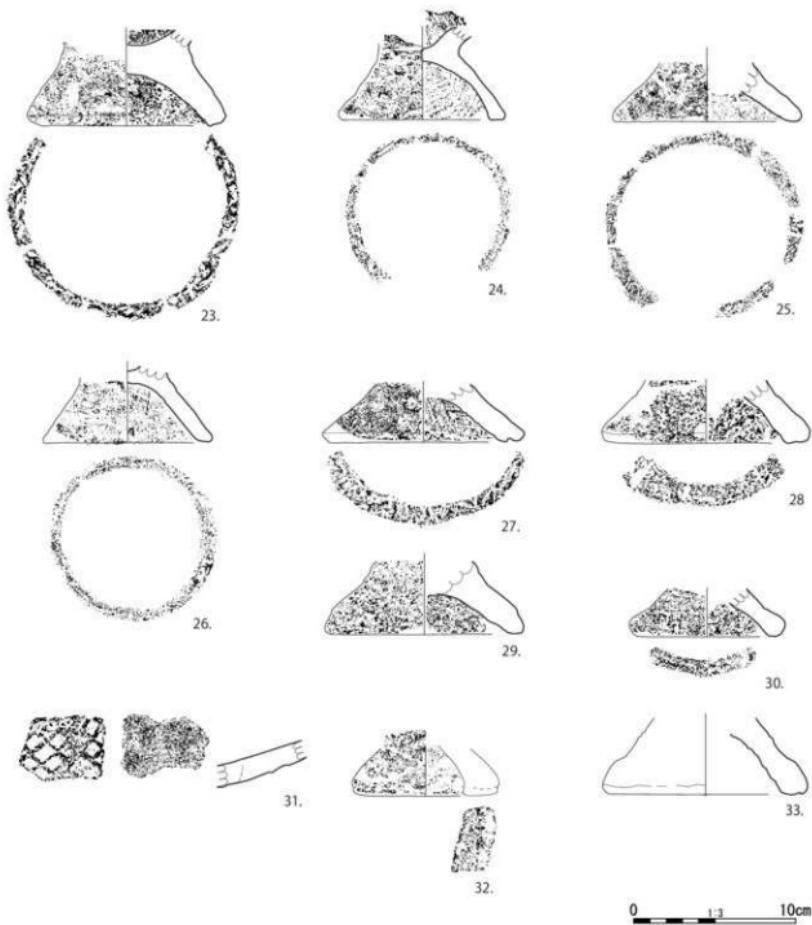
■土器 後期後葉の深鉢のみでセットを構成している。型式的なまとまりが非常に強い。

74～77は第2群3類の深鉢であり、74・75が口縁部、76・77が胴部である。78は第6群1類の口縁部、79は同じく胴部である。80は底部であるが、どの資料の同一個体になるのか判然としない。

■石器（第25図） 81はホルンフェルス製の礫器である。半割した礫の破断面に二次加工を施し、鈍角の刃部を作出する。82と83は同一ビットから出土した打製石斧と磨製石斧未成品のセットである。

■第27号竪穴住居跡 (SA27 第26図)

概要 C区北東部のSA28・SA30に隣接して検出された。後世の溝状遺構2条(SE7・8)に切られている。遺構の平面形は、直径約4mの不整形プランであり、検出面からの残存高は約25



第13図 第1号凹地状遺構出土の土器 (4) S= 1 / 3

cmである。候補となるピットはあるが明確な主柱穴

は検出されなかった。床面北部の壁際付近に磨石などの礫石器の集積が1箇所確認された。床面直上の2層に炭化物を疎らに含むが、焼土等は確認されていない。

出土遺物

■土器（第27・28図）後期後葉の深鉢のみでセットを構成している。型式的なまとまりが非常に強い。86～90は第6群1類の深鉢であり、87が口縁部、86・88・89が胴部である。84・85は第2群3類2に該当する。90は底部であるが、どの資料の同一個体になるのか判然としない。

■石器（第28図）91は砂岩製の横刃形石器である。92は頁岩製の打製石斧である。刃部を欠損する。95は砂岩製の台石である。表裏面に使用痕が認められ、凹面には敲打痕のみ、凸面には敲打痕と磨滅が観察される。自然礫利用で、整形加工は認められない。

■第28号竪穴住居跡（SA28 第26図）

概要 C区北東部に位置し、SA27・33に隣接する。中央付近を後世の溝状遺構（SE8）に切られる。直径約4.5mの円形プランである。検出面からの残存高は約10cmであり、皿状に立ち上がる。明確な主柱穴は検出されなかった。また火廻の痕跡も認められない。

出土遺物

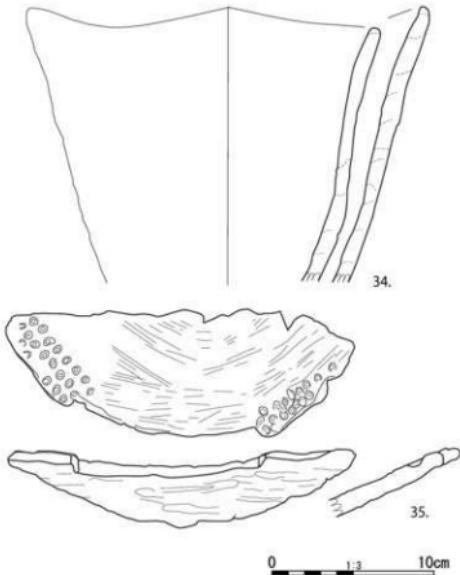
■土器（第29図）後期後半の深鉢でセットを構成している。

96・97は第6群1類に属する深鉢の口縁部、98は第6群の胴部である。

■石器（第29図）99はチャート製の微細剥離片である。微細剥離痕は縁辺に観察される。

■第29号竪穴住居跡（SA29 第30図）

概要 C区の東部中央付近から検出された。輪郭は不明瞭で、かろうじて南西部で壁面を検出した。壁面は皿状に立ち上がり、残存高は約10cmであ



第14図 第1号凹地状遺構出土の土器(5) S=1/3

る。遺構内と推定される範囲には環状をなす複数のピットが検出された。

明確に伴う遺物は確認できなかったが、第I層出土として取り上げた遺物が本来この遺構に含まれた可能性がある。

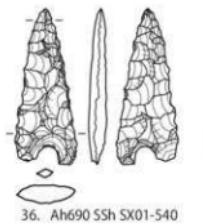
■第30号竪穴住居跡（SA30 第31図）

概要 C区北東部のSA27に隣接して検出された。東半は輪郭が不明瞭であったが、直径約3mの円形プランと考えられる。検出面からの残存高は5cm程度である。皿状に立ち上がる可能性がある。遺構内には複数のピットが検出された。主柱穴は2本である可能性がある。

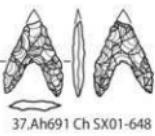
明確に伴う遺物は確認できなかったが、第I層出土として取り上げた遺物が本来この遺構に含まれた可能性がある。

■第31号竪穴住居跡（SA31 第32図）

概要 C区北側に位置し、SA32を切っている。直径約2mの不整形プランと考えられるが、図の上半は明らかでない。壁面は皿状に立ち上がる。



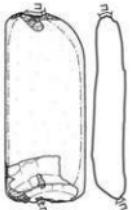
36. Ah690 5Sh SX01-540



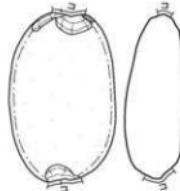
37. Ah691 Ch SX01-648



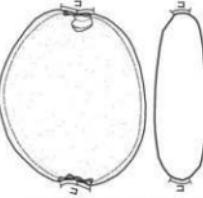
38. Ah689 Ch SX01-133



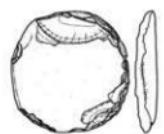
39. 打欠石錘 Sh II SX01-1204



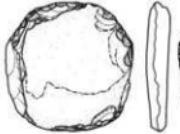
40. 打欠石錘 Sa I SX01-954



41. 打欠石錘 Sa SX01 ピット



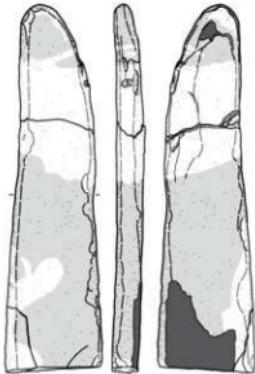
42. 円盤 Sh II SX01-748



43. 円盤 Sh II SX01-896



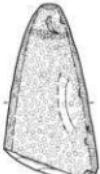
45. 円盤 Sh I 覆土



44. 扁平棒状石器 Sh II SX01-1220



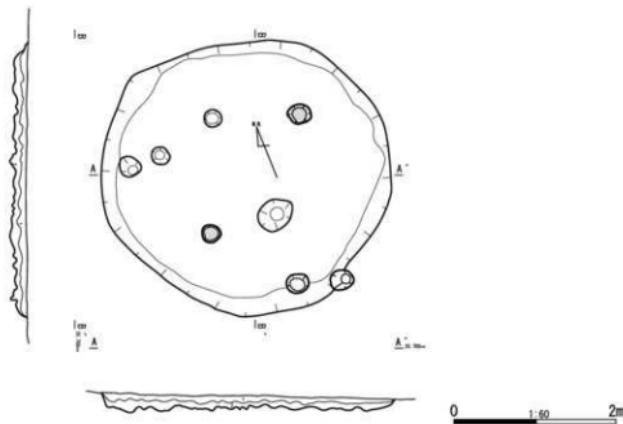
46. 敲石 Os SX01P2



47. 磨斧 Ho III SX01-484

0 2:3 5cm
0 1:3 10cm

第15図 第1号凹地状遺構出土の石器 36～38:S=2/3, 39～47:S=1/3

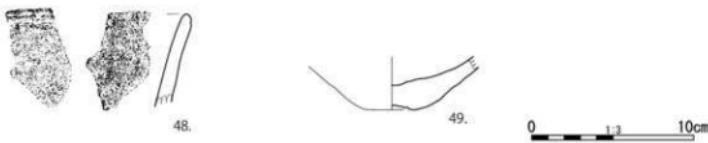


SA20 土層注記

1: 黒褐色 (10YR2/2.5) 砂質土。粘性・しまりは弱い。

2: 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土。褐褐色 (10YR3/2.5) 土のブロックを部分的に含む。炭化物粒 (径2~3mm) を部分的に含む。

第16図 第20号竪穴住居跡 (SA20) S=1/60



第17図 第20号竪穴住居跡出土の土器 S=1/3

明確な主柱穴は検出されなかった。

出土遺物

■土器 (第33図) 複数時期の土器が出土しているが、主体となるのは、後期後葉である。深鉢、注口土器でセットを構成している。

104は第1群I類A-I、102は第5群1類のそれぞれ口縁部で、前者は後期中葉、後者は晩期に帰属する。

101は第6群1類に属する深鉢の口縁部、103~105は同群2類の口縁部である。106・107は同じく胴部である。

108は第4群B-2の浅鉢、109は第4群C類の注口土器の注口である。

■石器(第33図) 石鏃、異形石器、台石などの他、剥片・石核類が出土している。

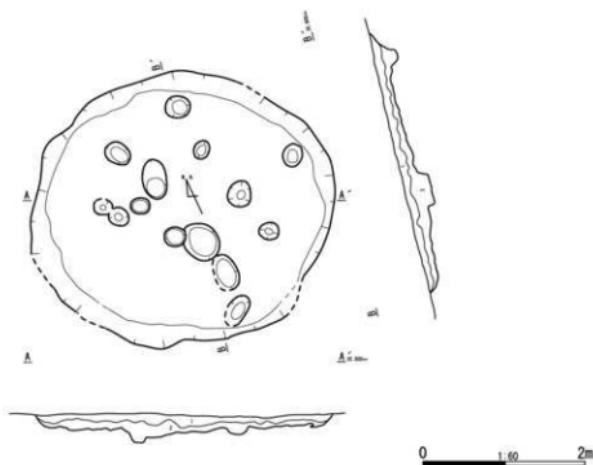
111はチャート石の石鏃である。背面左側の脚部を欠損するが、右側には明確な脚部を作出せず、左右非対称となる。未完成か。112は凸字形の異形石器である。表裏面bの中央付近はいずれも研磨により平滑に仕上げられる。113は砂岩製の台石である。敲打痕の集中する箇所が複数認められる。敲打痕はいずれも浅い。

■第32号竪穴住居跡 (SA32 第34図)

概要 C区北側に位置し、SA31に切られる。直径約4mの円形プランである。やはり壁面は皿状に立ち上がる。明確な主柱穴は検出されなかった。

出土遺物

■土器 (第34図) 複数時期の土器が混在しているが、主体となるのは後期後葉の土器群である。

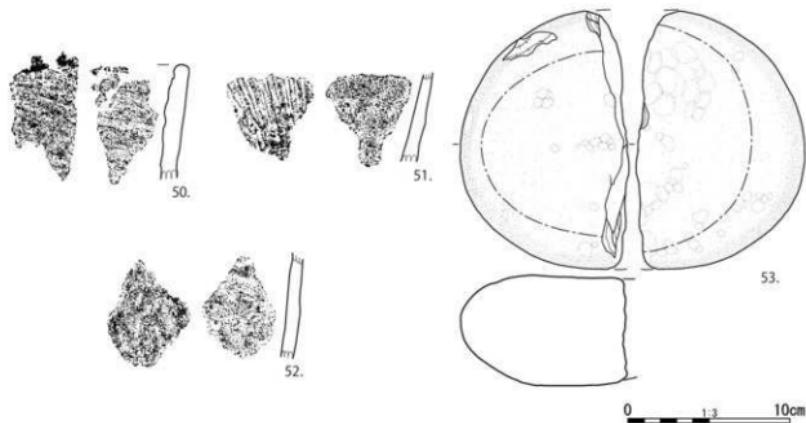


SA21 土層注記

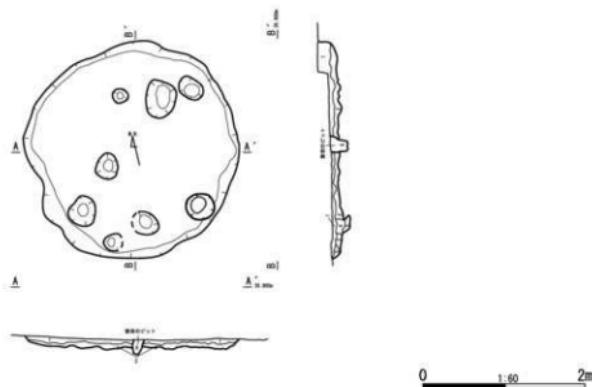
1：黒褐色（10YR2/2.5）シルト質土。軟質でボロボロとくずれ、粘性に乏しい。炭化物（径1～2cm）をごく少量含む。SA 22 の埋土1剖面に類似。

2：黒褐色（10YR3/2）粘質土。硬質で若干粘性あり。暗褐色（10YR3/3.5）のブロック（径3～4cm）を少量含む。炭化物（径1～2cm）、燒土（赤色で径3mm前後）を部分的に含む。

第18図 第21号竪穴住居跡 (SA21) S=1/60



第19図 第21号竪穴住居跡出土の土器・石器 50～52:S=1/3, 53:S=1/4



SA22 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10YR2/2.5) シルト質土。やや粘性があるが、しまりは弱い。
- 2 : 黒褐色 (10YR2/2.5) シルト質土。1を母体に暗褐色 (10YR3/3.5) 粘質土のブロック (径 2 ~ 3cm) を部分的に含む。炭化物 (径 1 ~ 2mm) を少量含む。
- 3 : 黒褐色 (10YR2/3) シルト質土。粘性・しまりが強い。暗褐色 (10YR3/3.5) 粘質土のブロック (径 2 ~ 3cm) を部分的に含む。
- 4 : 黑褐色 (10YR2/3.5) 粘質土。暗褐色 (10YR3/3.5) 粘質土のブロック (径 2 ~ 3cm) を部分的に含む。粘性は強くしまりは3よりも弱い。縄文後期のピット埋土。
- 5 : 黑褐色 (10YR2/1.5) 粘質土。しまりは4よりも弱い。暗褐色 (10YR3/3.5) 粘質土のブロック (径 2 ~ 3cm) を少量含む。縄文後期のピット埋土。
- 6 : 黑褐色 (10YR2/2) シルト質土。やや粘性があり、しまりは1よりも強い。後世のピット埋土 (埋土Ⅱ)。

第20図 第22号竪穴住居跡 (SA22) S=1/60

深鉢のみでセットを構成する。

114は第6群2類の深鉢の口縁部、115~118は第6群1類の深鉢の口縁部である。

119~121は底部であり、119・120は平底、121は上底である。119は底部を焼成後穿孔されている。

■石器（第34図）石鎌、石錐の他、多数の剥片・石核類が出土している。

■第33号竪穴住居跡 (SA33 第35図)

概要 C区北側に位置し、SA28に隣接する。直徑約4mの円形プランである。壁面は皿状に立ち上がる。明確な主柱穴は検出されなかった。

出土遺物

■土器（第36~38図）後期後葉の土器がまとまって出土している。深鉢、浅鉢でセットを構成する。

126は第2群1類の胴部である。127~136は第6群に属する深鉢の口縁部、137は第6群に属する深鉢の胴部である。

141は第4群B-1、139・140・142は第4群B-2の浅鉢である。139~142は、口縁部文様

帶に2本の沈線文が施されている。

143~150は底部であるが、出土した底部は、全て上底である。

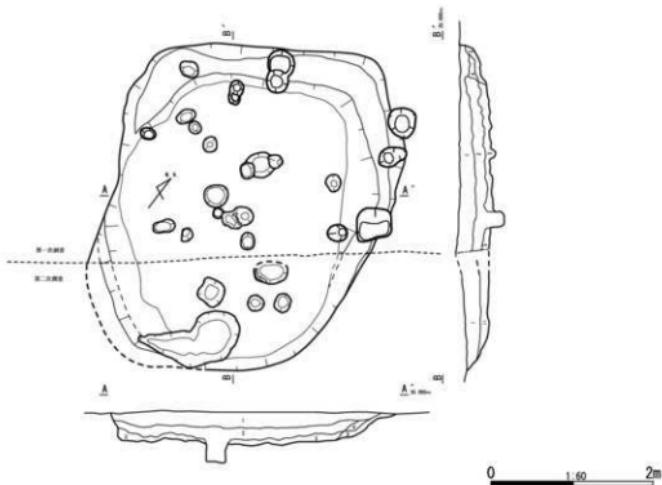
151~153は土器片錠である。

■石器（第39図）石鎌、石錐、打製石斧、敲石、台石などの他、多数の剥片・石核類が出土している。また特筆すべき遺物として、ヒスイ輝石製の丸玉（703）があるが、詳細は後述の別項を参照されたい。

158は磨製石斧の未完成と考えられる。扁平棒状縫を素材とし、周縁から剥離成形した後、表面の一部に敲打を加えている。160は砂岩製の台石である。表裏面ともに若干の窪みを有する円盤を素材とし、敲打痕が観察される。周縁の成形痕は認められない。

■第34号竪穴住居跡 (SA34 第40図)

概要 C区東南部、SA35に隣接する地点で検出された。直徑約4mの円形プランであり、検出面からの残存高は約10cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。やや大形のピット2つと小形のピットの2つがそれぞれ2本柱の主柱穴である可能性が考



SA25 土層注記

第一次調査

- 1 : 噴褐色 (10YR2/4) 粘質土。粘性やや弱く、しまりは普通。第Ⅲ層起源のブロック (径 1~4 cm) をごくわずかに含む。
- 2 : 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土。粘性は 1 より強く、しまりは 1 と同程度。第Ⅲ層起源のブロック (径 1~3 cm) をごくわずかに含む。
- 3 : 噴褐色 (10YR2/5/4) 粘質土。粘性は弱く、しまりはやや弱い。第Ⅳ層 (Kv-Kd) 起源のブロックをマーブル状に多く含む。
- 4 : 噴褐色 (10YR3/3) 粘質土。粘性は弱く、しまりはやや強い。第Ⅳ層 (Kv-Kd) 起源のブロック (径 1~5 mm) を多く含む。
- 5 : 噴褐色 (10YR2/5/3) 粘質土。粘性は弱く、しまりはやや強い。第V層 (MB1)・VI (AT) 層起源のブロックをマーブル状に多く含む。

第二次調査

- i : 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。粘性・しまりともにやや弱い。
- ii : 黑褐色 (10YR3/2) 粘質土。i に比べ、しまりがやや強い。第V層起源と推定されるブロックを含む。

第 21 図 第 25 号竪穴住居跡 (SA25) S = 1 / 60

えられる。床面北半には硬化面が 2 部所確認された。

遺物

■石器 (第 41 図) 遺構内から図示に耐えうる土器の出土は見られなかった。床面からは少量の石器が出土した。

■第 35 号竪穴住居跡 (SA35 第 42 図)

概要 C 区南部、S A 34・39 に挟まれる位置から検出された直径約 4 m の大形住居跡である。SA39 と接する状態で検出されたが、本来的には切り合ひ関係にあったと推定される。新旧は不明である。北側の一部が現在の搅乱坑により乱されている。この搅乱坑からはヒスイ輝石製の管玉 (702) が出土しており、SA35 に関連した遺物である可能性が指摘される。

出土遺物

■土器 (第 43 図) 複数時期の土器が混在するが、主体となるのは、後期後葉の土器群である。深鉢のみでセットを構成している。

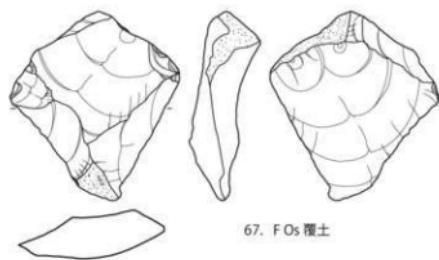
162 は第 2 群 2 類の深鉢である。163・164 は第 2 群 2 類の深鉢に属する口縁部であり、165・166 はその胴部であると考えられる。167~171 は第 6 群に属する深鉢の口縁部である。172 は第 5 群 1 類の口縁部である。173 は深鉢の底部で平底を呈する。底面は焼成後に穿孔されている。175 は土器片錐である。

■石器 石鏃、石錐、打製石斧、磨製石斧、敲石などの他、多数の剥片・石核類が出土している。

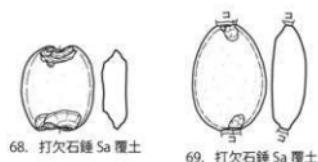
176~179 は覆土中から出土した石鏃である。180 は第 II 類と第 III 類の中間的形態を持つ石錐



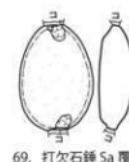
第22図 第25号竪穴住居跡出土の土器 S=1/3



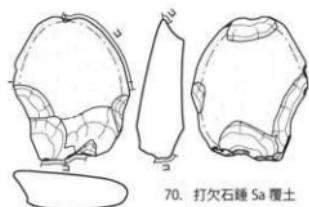
67. F Os 覆土



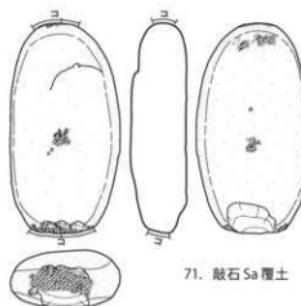
68. 打欠石鍤 Sa 覆土



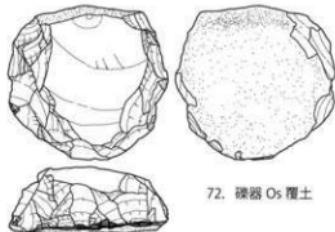
69. 打欠石鍤 Sa 覆土



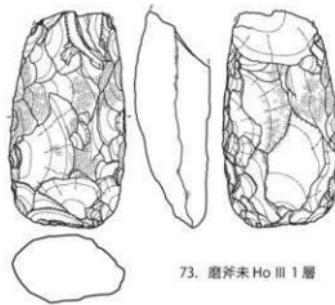
70. 打欠石鍤 Sa 覆土



71. 駄石 Sa 覆土



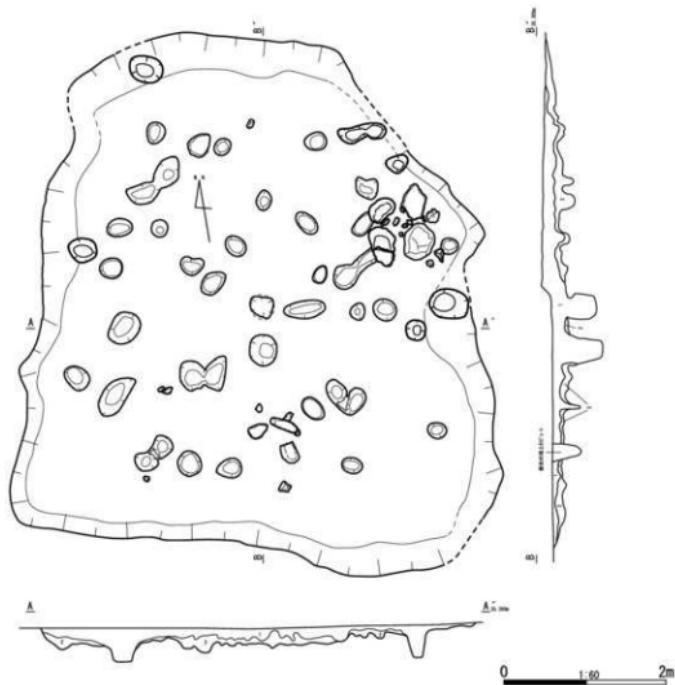
72. 穢器 Os 覆土



73. 磨斧未 Ho III 1層

0 1:2 10cm

第23図 第25号竪穴住居跡出土の石器(1) 67:S=1/2, 68~73:S=1/3



SA26 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10YR2/1.5) 粘質土。しまりは普通。炭化物をごくわずかに含む。
- 2 : 黒褐色 (10YR3/1.5) 粘質土。粘性は強く、第IV (MLI)・V (MBI) 層を起源とするブロック (径3cm程度) を数々に含む。
- 3 : 粘質土。2に類するが、ややしまりが強い。

第24図 第26号竪穴住居跡 (SA26) S=1/60

である。181は床面から出土した尾鈴山産溶結凝灰岩製の剥片である。182・183は打製石斧としたが、いずれも厚みがあり、磨製石斧の未成品である可能性も考えられる。

■第39号竪穴住居跡 (SA39 第45図)

概要 C区南側に位置する。直径約4mの大形の円形プランである。検出面からの残存高は約60cmを超え、壁面はボウル状に立ち上がる。明確な主柱穴は検出されなかった。

出土遺物

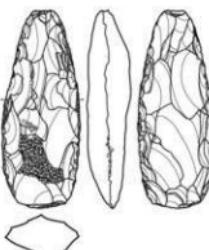
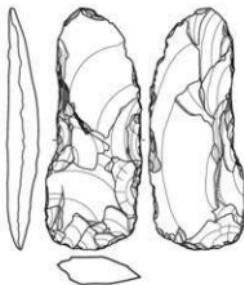
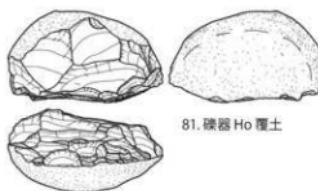
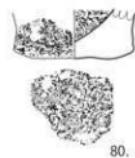
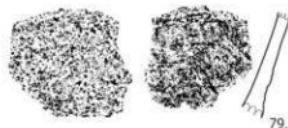
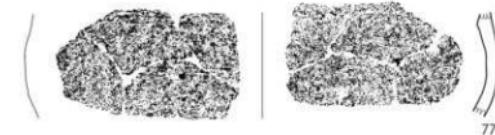
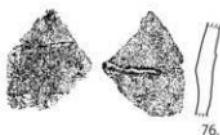
■土器 (第46~48図) 複数時期の土器が混在しているが、主体となるのは後期後葉の土器群で

ある。深鉢のみでセットを構成している。

188~193は第2群に属する深鉢の口縁部、195~201は第6群の深鉢の口縁部である。

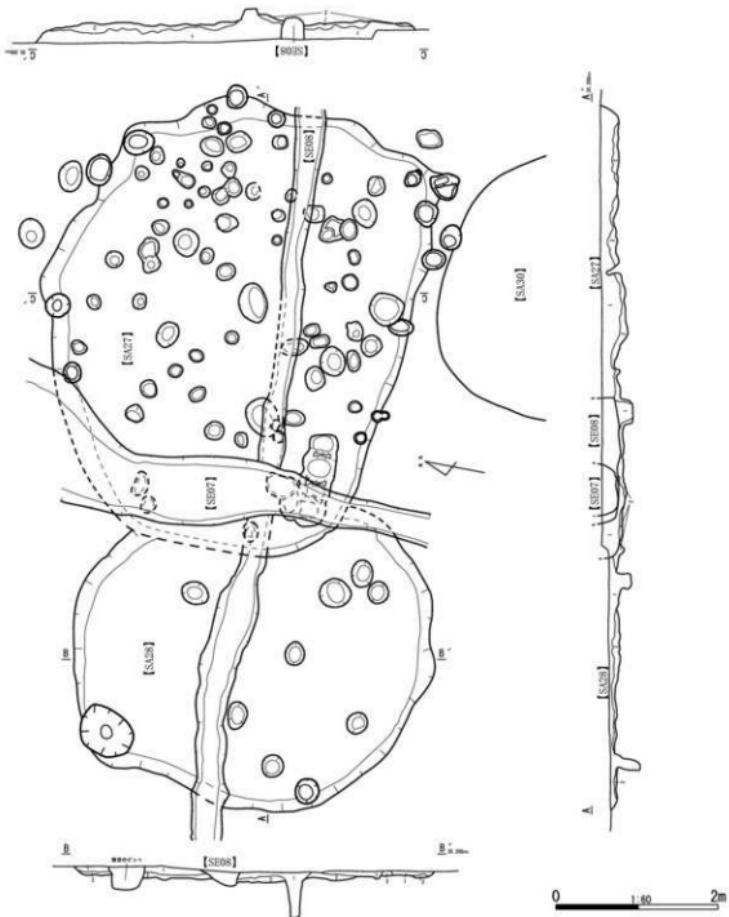
202~207は底部である。202~205が平底、206・207が上底である。203は底部から、大きく胴部に広がってゆくが、おそらくSA35出土の162のような器形を呈するのであろう。

■石器 石鏃、石錐、楔形石器、打欠石錐、打製石斧、磨製石斧、横刃形石器、敲石、台石に加え、剥片・石核類など多数の石器が出土した。特筆されるのはSA47出土資料と接合関係を持つ元下須型石刀である。観察所見は別項に後述する。



0 10cm

第25図 第26号竪穴住居跡出土の土器・石器 S=1/3

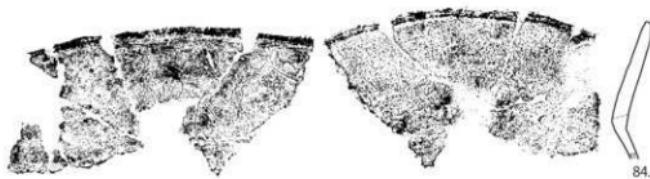


S A 27・28 土層注記

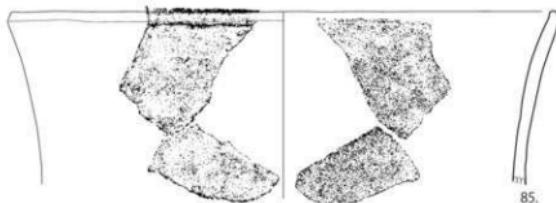
1: 黒色 (10 YR 2/1.5) 細砂～シルト質土。軟質で粘性なし。炭化物 (径3mm) をまばらに含む。

2: 黒褐色 (10 YR 2.5/3) 細砂～シルト質土。軟質で粘性あり。炭化物 (径5mm) をまばらに含む。

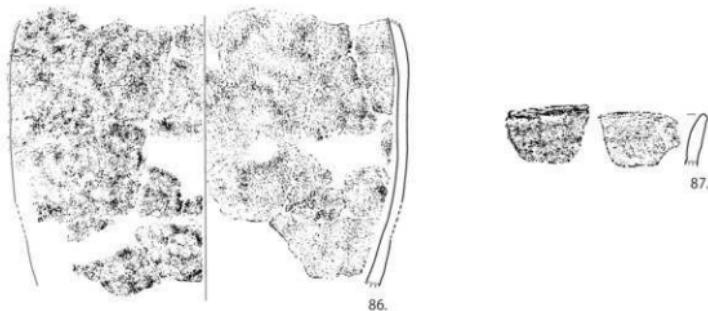
第26図 第27・28号竪穴住居跡 (SA27・28) S=1/60



84.



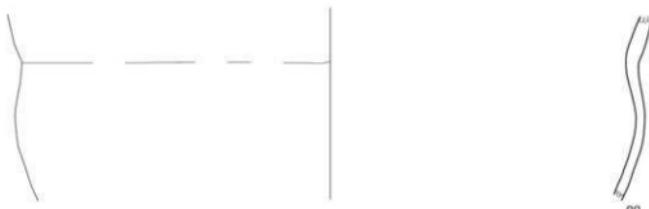
85.



86.



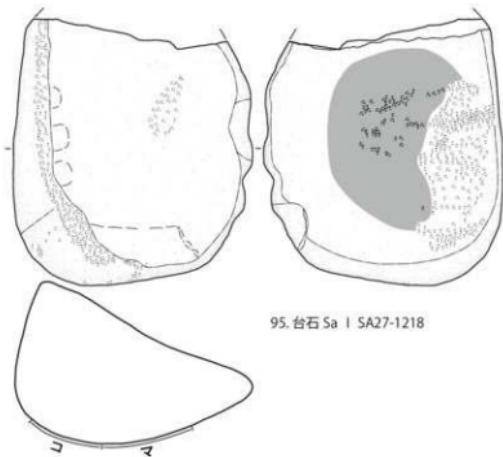
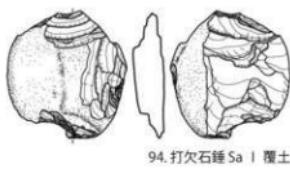
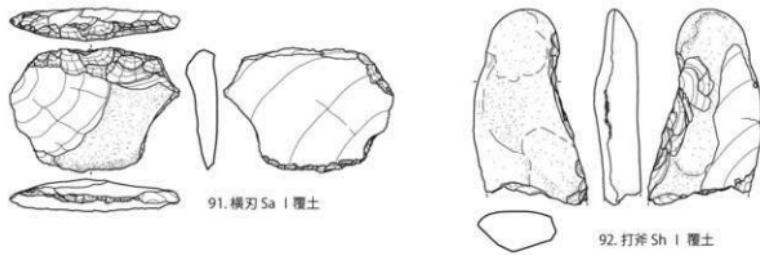
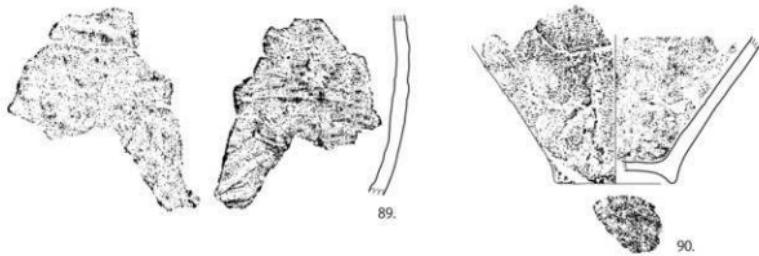
87.



88.

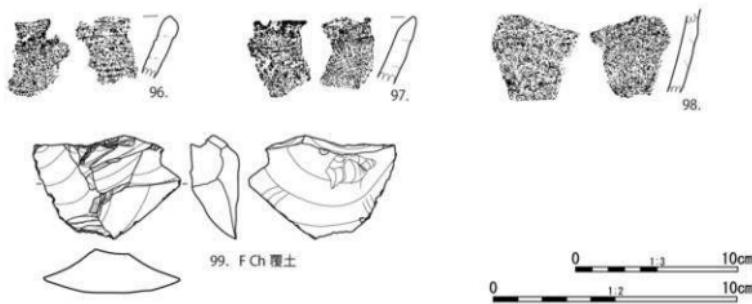


第27図 第27号竪穴住居跡出土の土器(1) S=1/3

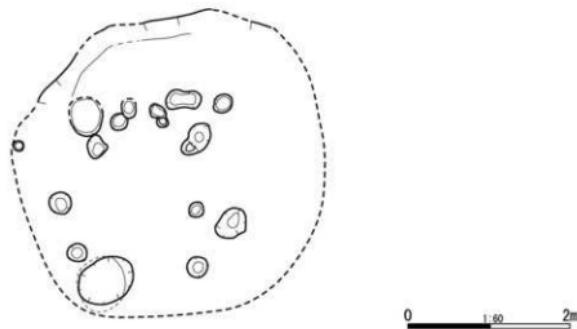


0 1:3 10cm 0 1:4 20cm

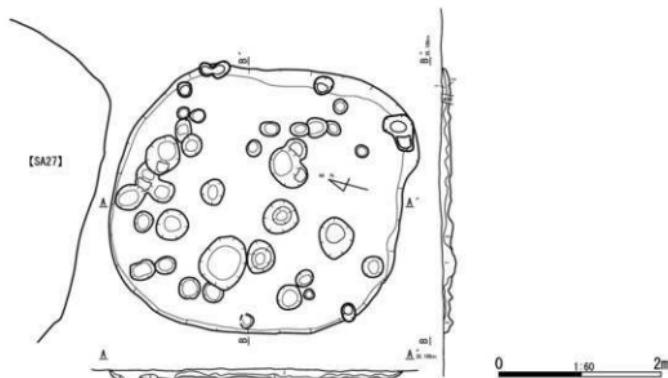
第28図 第27号竪穴住居跡出土の土器(2)・石器 89~94:S=1/3, 95:S=1/4



第29図 第28号竪穴住居出土の土器・石器 96～98:S=1/3, 99:S=1/2



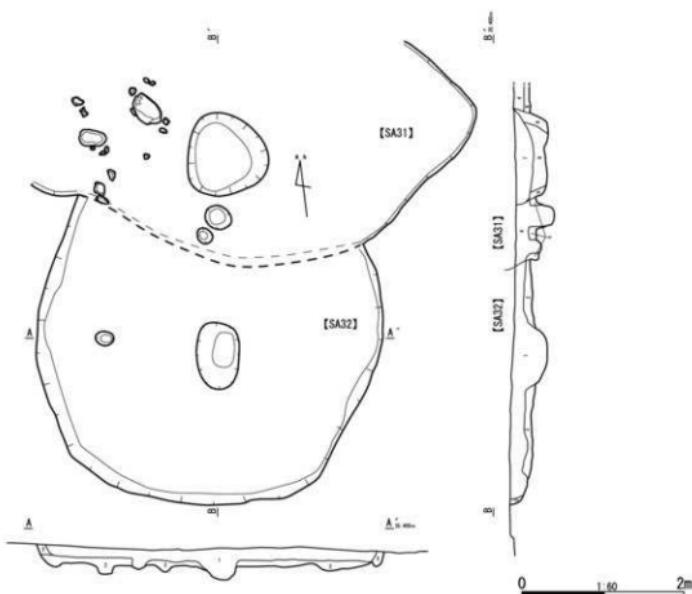
第30図 第29号竪穴住居跡 (SA29) S=1/60



SA30 土層注記

- 1: 黒色 (10YR2/1.5) シルト質土。粘性はほとんど無く、しまりは弱い。暗褐色土のブロック (径1～4m) と炭化物粒 (径1～2mm) を縫間に含む。
- 2: 黒褐色 (10YR2.5/3) シルト質土。粘性はほとんど無く、しまりは1よりも強い。暗褐色土のブロック (径5～20mm) を多く、炭化物粒 (径1～2mm) を縫間に含む。

第31図 第30号竪穴住居跡 (SA30) S=1/60



SA31・32 土層注記

- 1 : 噴褐色 (10YR2.5/3) 粘質土。しまりは普通。第VI層 (AT) ブロック (径10mm程度) をわずかに含む。
- 2 : 噴褐色 (10YR3/2.5) 粘質土。しまりはやや強い。第VI層 (AT) 起源のブロック (径10~20mm) をわずかに含む。
- 3 : 噴褐色粘質土。1と第V層 (MB1) との漸移層。
- 4 : 噴褐色 (10YR2.5/3) 粘質土。しまりは普通。炭化物粒 (径5mm程度) をわずかに含む。
- 5 : 噴褐色 (10YR3.5/5) 粘質土。しまりは普通。周出土 (第IV層~ML1か) のブロックを少量含む。
- 6 : 噴褐色 (10YR3.5/15) 粘質土。しまりは強い。全体的に褐色土 (第IV層~ML1か) のブロックを多く含む。硬化面。
- 7 : 黒褐色 (10YR2.5/2) 粘質土。しまりはやや弱い。炭化物粒 (径1mm程度) を数粒に含む。
- 8 : 黑褐色 (10YR2/2) 粘質土。しまりはやや弱い。炭化物粒 (径1mm程度) 第VI層 (AT) 起源のブロック (径5mm程度) を数粒に含む。
- 9 : 黑褐色 (10YR2.5/2.5) 粘質土。しまりはやや弱い。4と8の混在。

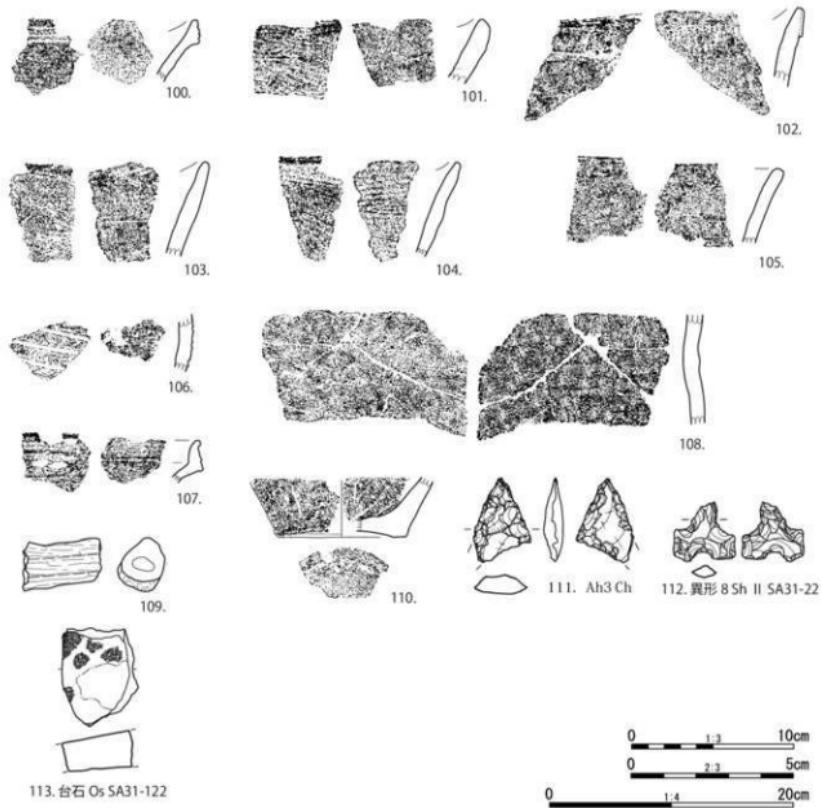
第32図 第31・32号竪穴住居跡 (SA31・32) S=1/60

208~216は打製石器である。床面からではなく、覆土からの出土が目立つ。全体的な傾向として完形品に乏しく、先端部などを破損した資料が多い。208は赤色頁岩を用い、後述の楔形石器と製作工程上関連する可能性がある。

217は削器と認定したが、縦形の石匙とみることもできる。219~221は楔形石器である。219は赤色頁岩製で、石器の製作に関連する可能性が指摘できる。

222~234は打欠石錐である。232・233や234のように紐掛け部に潰れが観察できる資料があるが、割合としては少ない。ほとんどが砂岩

を用いる。235は粗粒の砂岩II群を用いた横刃形石器である。236は尾鈴山産溶結凝灰岩を用いた敲石であり、長軸の一端にストーンリタッチャー状の敲打面が形成される。237は砂岩I群製の敲石で、長軸両端に大小の敲打・剥離痕が観察される。比較的硬質の対象物が想定されよう。238は磨製石斧またはその未成品である。全面に敲打整形痕が認められるが、石理に影響されたものか、複数個に破損している。239~241は打製石斧である。掲載資料も含めて側縁に抉りを持たない資料が主体と考えられる。



第33図 第31号竪穴住居跡出土の土器・石器 100～110: S = 1/3, 111・112: S = 2/3, 113: S = 1/4

■第40号竪穴住居跡 (SA40 第49図)

概要 C区南西部、SA41・SA42に隣接する位置から検出された。直径約3.3mの円形プランである。検出面からの残存高は約20cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。明確な柱穴は検出できなかつた。

出土遺物 土器・石器ともに出土量は乏しく、実測図の掲載は割愛した。

■第41号竪穴住居跡 (SA41 第50図)

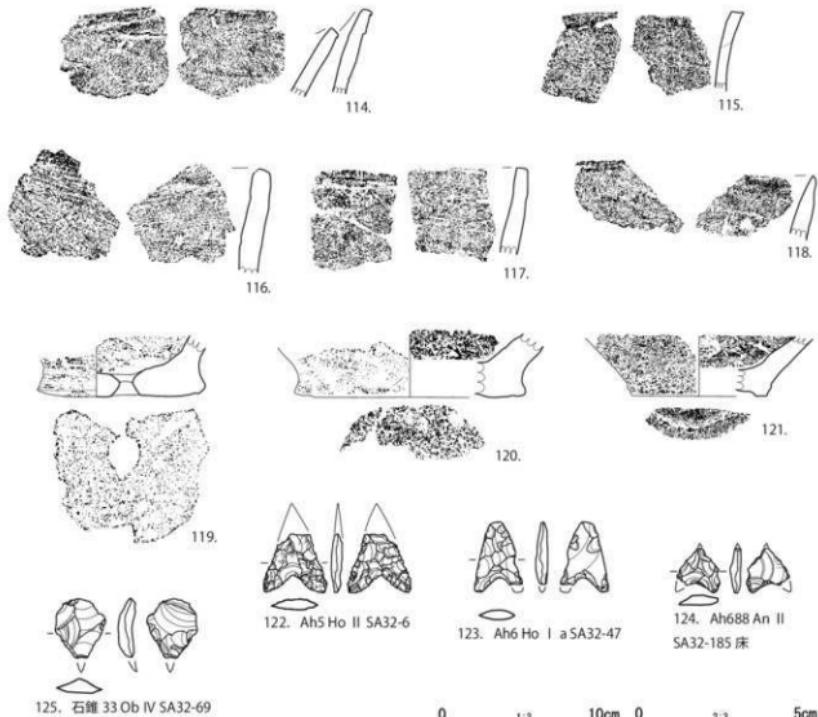
概要 C区南西部に位置する。SA40に接し、SA53に隣接する。直径約4m以上の円形プラン

と推定されるが、残存状況は良好ではない。東端に擾乱坑があり、北西端をSA47が切り、SE09にも中央を切られる。また、南西半分は壁面も明確に検出できなかった。北東半分における検出面からの残存高もおよそ5cm以下であり、壁面の状況も明瞭には把握できなかった。主柱穴の配列は不明である。

出土遺物

■土器 (第51図) 出土量は少ないながらも後期後葉の深鉢でセットを構成する。

242は第2群3類に属する深鉢の口縁部、



第34図 第32号竪穴住居跡出土の土器・石器 114～121: S=1/3, 122～125: S=2/3

243・244は第6群の口縁部である。

■石器（第51図） 245は姫島産安山岩製の石鎚である。片脚を欠損する。

■第42号竪穴住居跡（SA42 第52図）

概要 C区南西部、SA39・SA40・SA47に隣接する位置から検出された。直径約6mの大形の円形プランで、SA39を挟んだ位置にあるSA35と同規模の竪穴住居跡である。当初は、窪地状遺構と認識していたため、詳細なピットの記録に欠けるが、SA35と同程度のピット数が存在した可能性が高い。

出土遺物

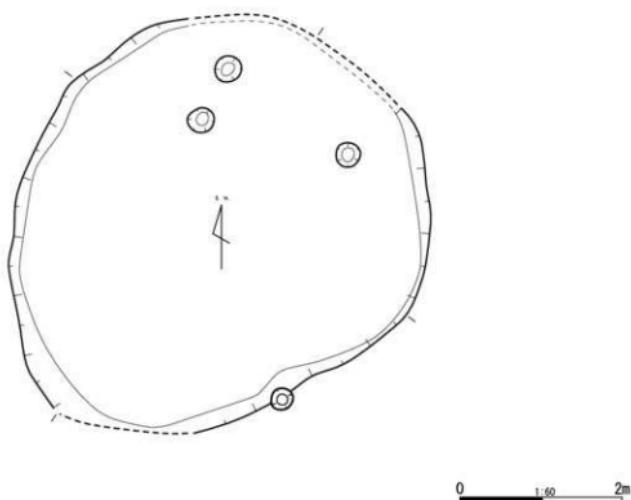
■土器（第53図） 少数の土器が出土した。245・246とともに第6群に属する深鉢の口縁部で

あるが、245が貝殻条痕調整主体であるのに対し、246はナデ調整である。器形の齊一性にも乏しく、これら資料に時期的な齊一性があるとは考え難い。

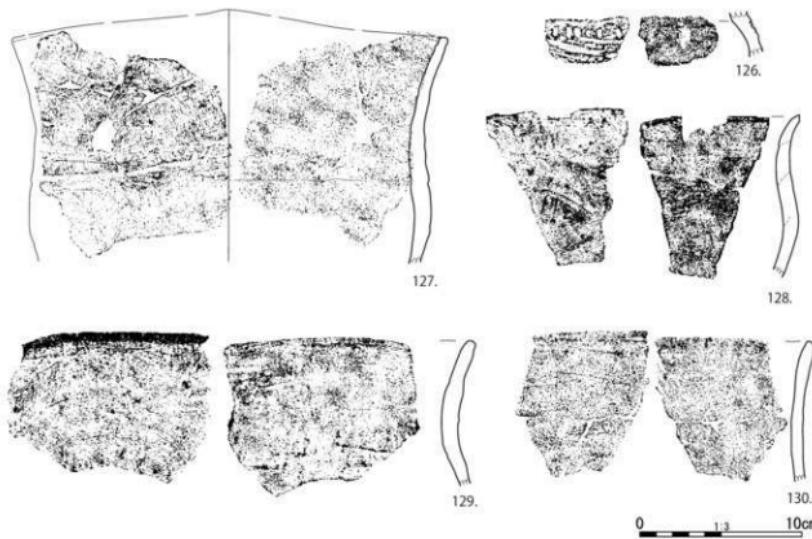
■石器（第53図） 土器と同様出土量は少ない。247は姫島産安山岩製の石鎚である。

■第43号竪穴住居跡（SA43 第54図）

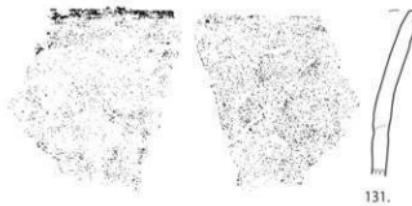
概要 C区南東部の隅において、古墳時代の第19号竪穴住居跡（SA19）に切られる形で検出された。南側縁辺を搅乱坑に切られ、若干プランが不明瞭となっているが、直径約4.3mの円形プランと推定される。検出面からの残存高は約15cmであり、皿状に立ち上がる。プランの中央に主柱穴の可能性あるピット4基の配列を確認した。



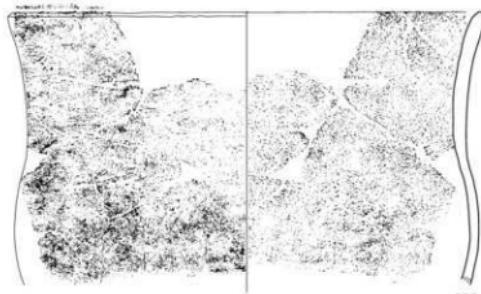
第35図 第33号竪穴住居跡 (SA33) S= 1 / 6 0



第36図 第33号竪穴住居出土の土器 (1) S= 1 / 3



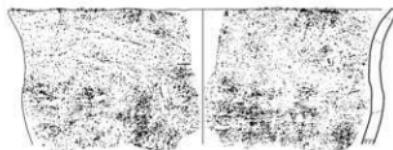
131.



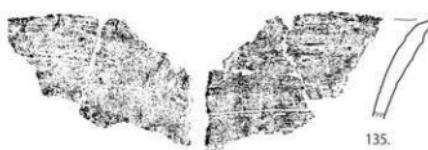
132.



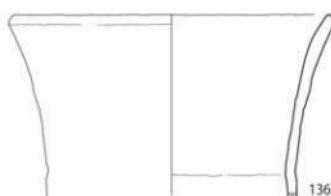
133.



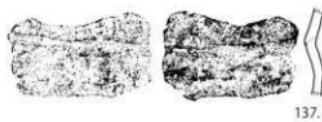
134.



135.



136.



137.



138.



第37図 第33号竪穴住居跡出土の土器(2) S=1/3



139.



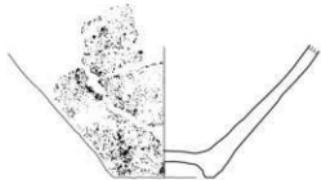
140.



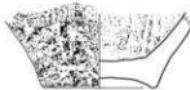
141.



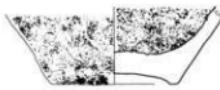
142.



143.



144.



145.



146.



147.



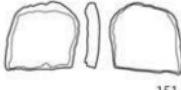
148.



149.



150.



151.



152.



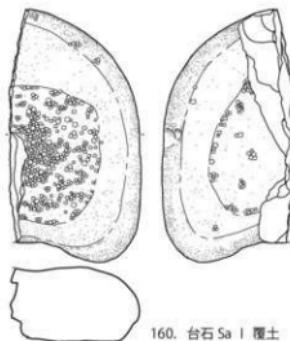
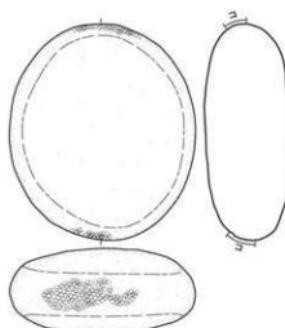
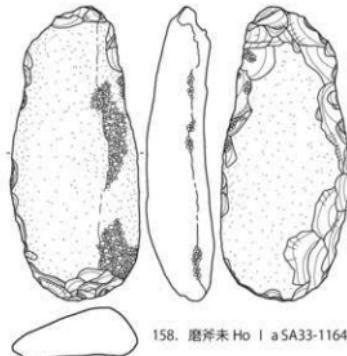
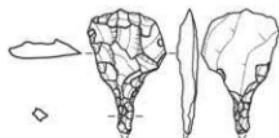
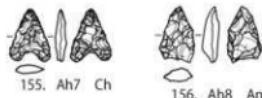
153.



154.



第38図 第33号竪穴住居跡出土の土器（3）・土製品 S=1/3



第39図 第33号竪穴住居跡出土の石器 155～157: S=2/3, 158・159: S=1/3, 160: S=1/4

柱穴間の芯々距離は、東西約2m、南北約2mで対角線上にはほぼ正方形の配置をとる。また、プランの北半周囲には支柱穴と考えられるピットも巡る。

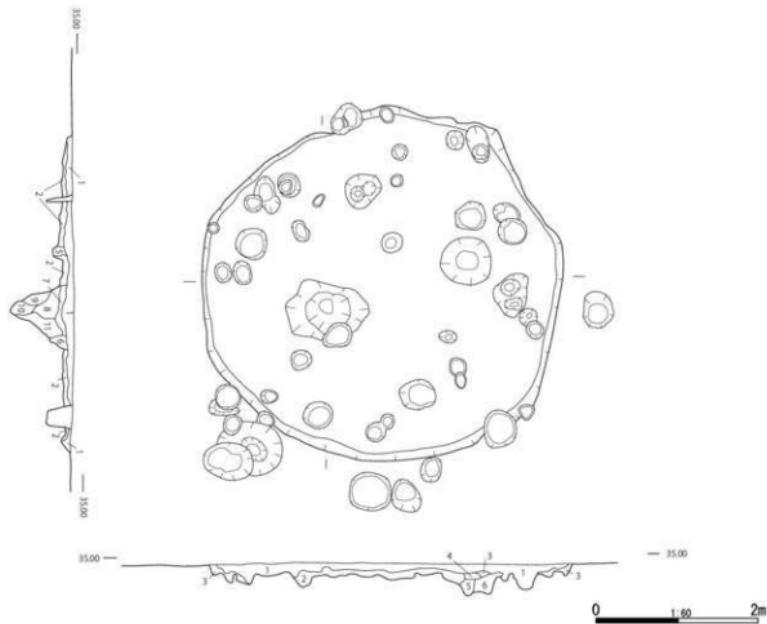
出土遺物

■土器（第55図）おそらく後期と推測される土器が、わずかに出土している。

248は第6群2類の口縁部、249は同じく底部である。

■石器（第54図）土器と同様に出土量は少ない。

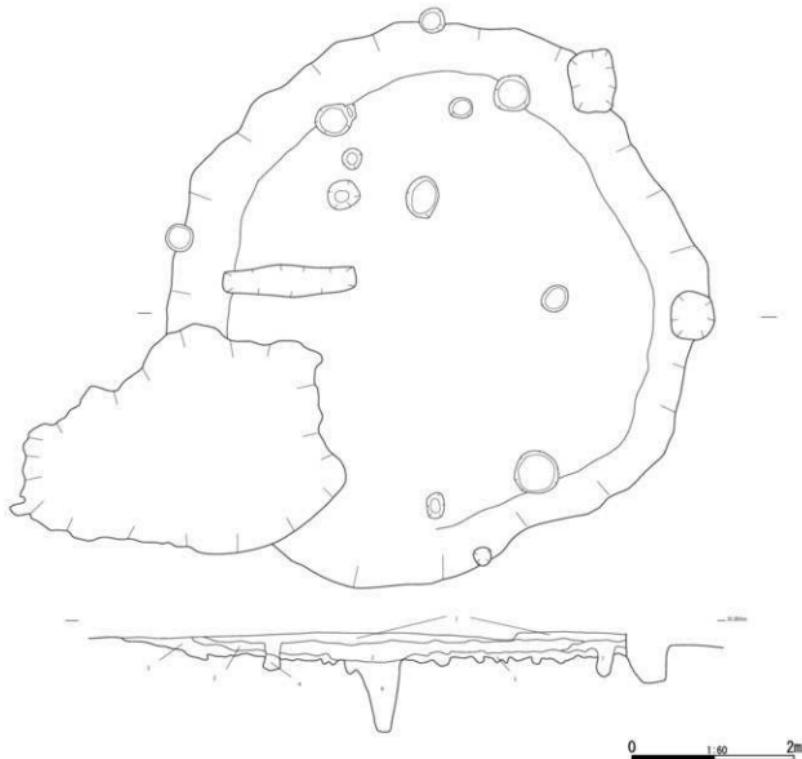
特記事項として、床面の北東部から打欠石錐およびその素材と考えられる円礫の集積が確認された。当初は古墳時代のSA19に帰属する可能性も考慮したが、出土状態を再検討した結果、SA43の所産と考えるのが適当と判断した。ここから出土した打欠石錐は第I層や表土から大量に出土する同器種の平均サイズより、大きく重い傾向がある点が注目されよう。



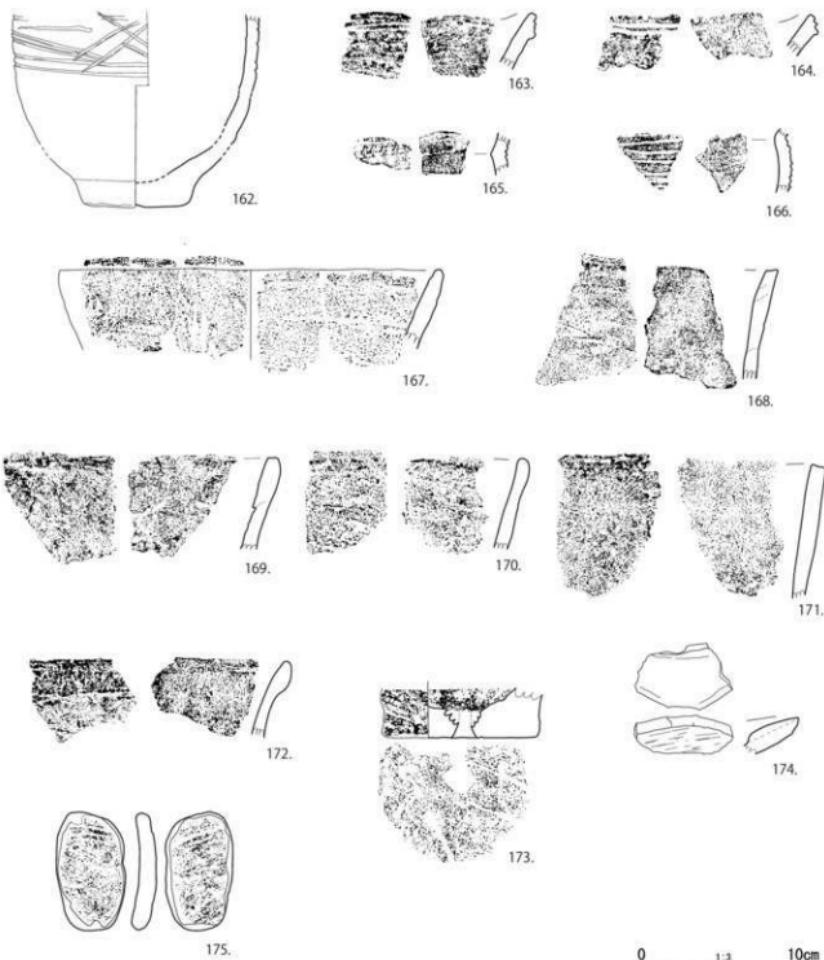
SA34 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10YR2/2.5) 細砂シルト質土。しまり・粘性ともに普通。
- 2 : 黒褐色 (10YR2.5/2) 細砂シルト質土。しまりは普通、粘性は弱い。炭化物粒 (径 1mm) をごくわずかに含む。
- 3 : 黒褐色 (10YR2.5/3) 細砂シルト質土。しまり・粘性ともに普通。
- 4 : 黒色 (10YR2.5/1) 細砂シルト質土。しまりは弱く、粘性も弱い。炭化物粒 (径 2mm) をわずかに含む。

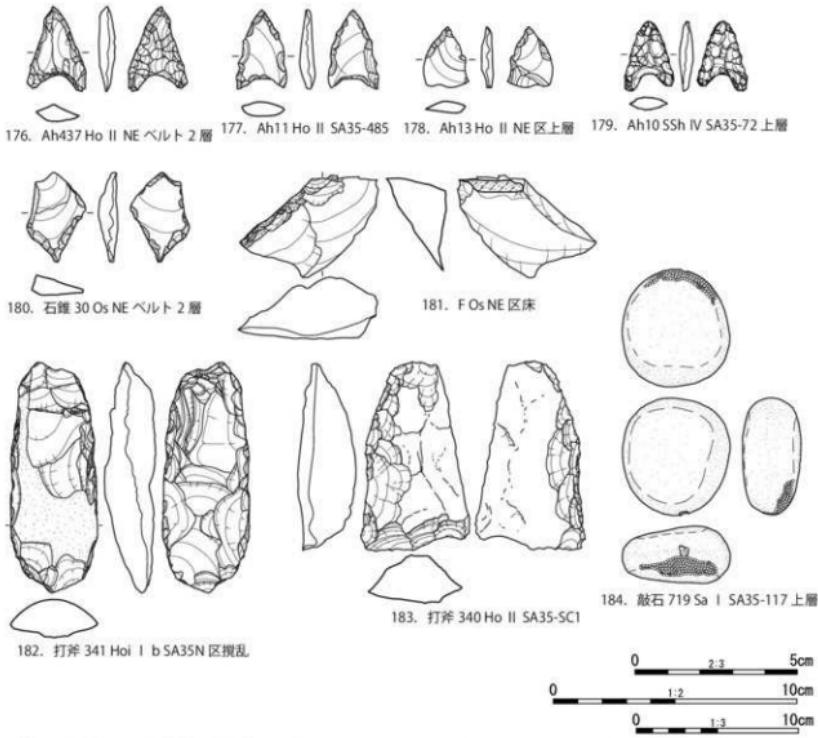
第 40 図 第 34 号竪穴住居跡 (SA34) S= 1 / 6 0



第42図 第35号竪穴住居跡 (SA35) S=1/60



第43図 第35号竪穴住居跡出土の土器 S= 1 / 3



第44図 第35号竪穴住居跡出土の石器 176～180：S=2／3, 181：S=1／2, 182～184：S=1／3

■第47号竪穴住居跡 (SA47 第56図)

概要 C区南西部から検出された、土壤の色調に変化が認められた範囲をSA47と総称している。

覆土の色調が薄く、切り合い関係の把握には苦慮した。厳密な確定には至らなかったものの、北側にSA35・42と並ぶ規模の直径約6mの大形不整円形プランが1軒 (SA47-1: 繩文後期)、SA47-1を切る不整円形プランが1軒 (SA47-2: 古墳初頭か)、SA41を切る隅円方形ないし不整形プランと推定される竪穴住居跡が1軒 (SA47-3: 時期不明)、中央部に隅円方形プラン (SA47-4: 古墳中期か) が1軒と、最少で4軒の竪穴住居跡が切り合う可能性が高い。

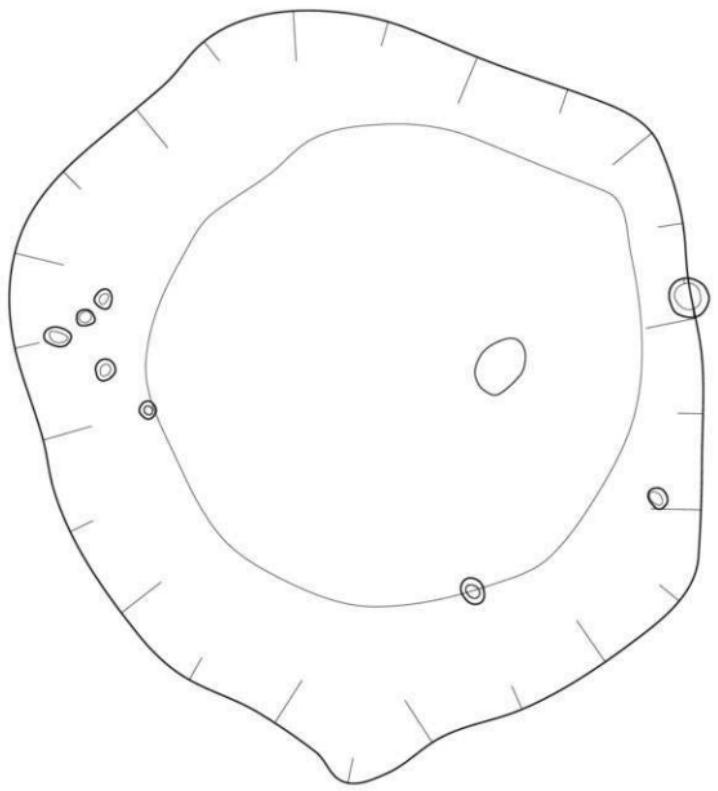
出土遺物

■土器 (第57図) SA47-1を中心に、後期後葉の深鉢がまとまって出土した。深鉢のみでセットを構成するが、形態的なバリエーションに富む。

250～253が第2群、254～262が第6群である。

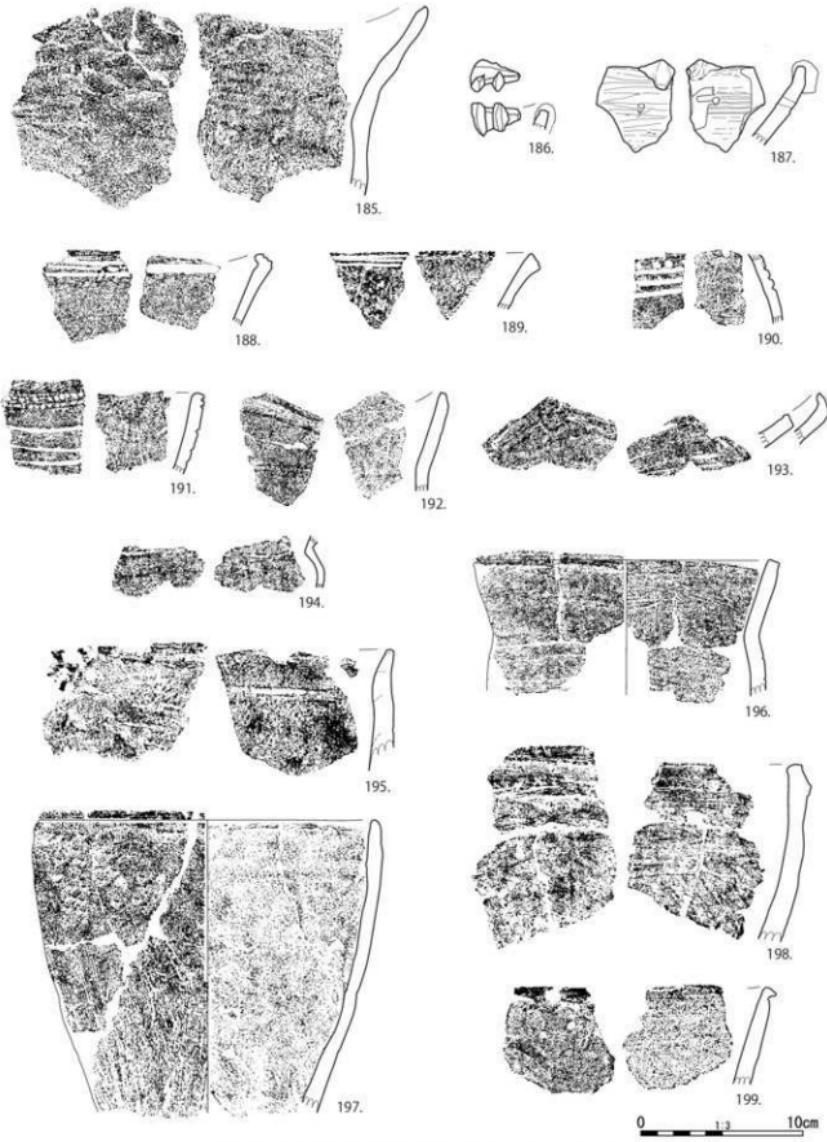
■石器 (第57図) 特筆される資料として、先述したSA39出土資料と接合関係を持つ元下須型石刀がある。また、SA47-3ないし4の範囲からはヒスイ輝石製の丸玉 (玉11) が出土した。いずれも実測図と視察所見は別項に譲る。

この他にも多くの石器が出土したが、先述した切り合い関係の不明瞭さから、帰属がはっきりし

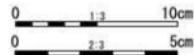
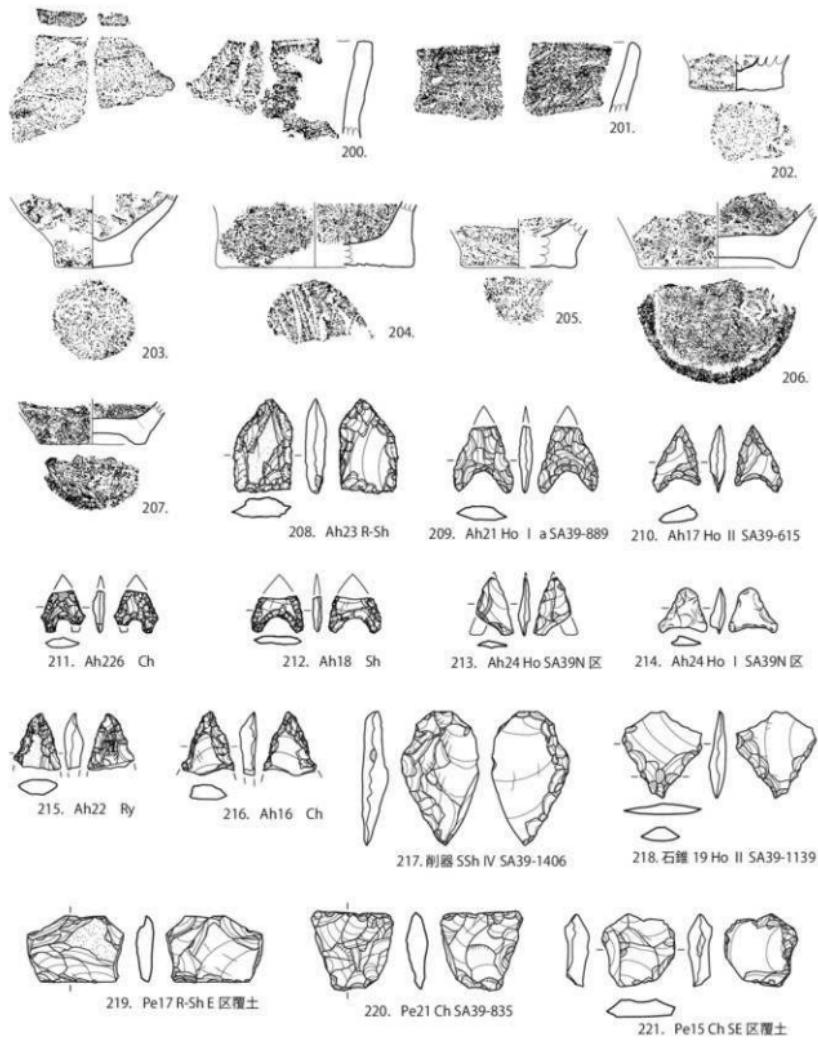


0 1:60 2m

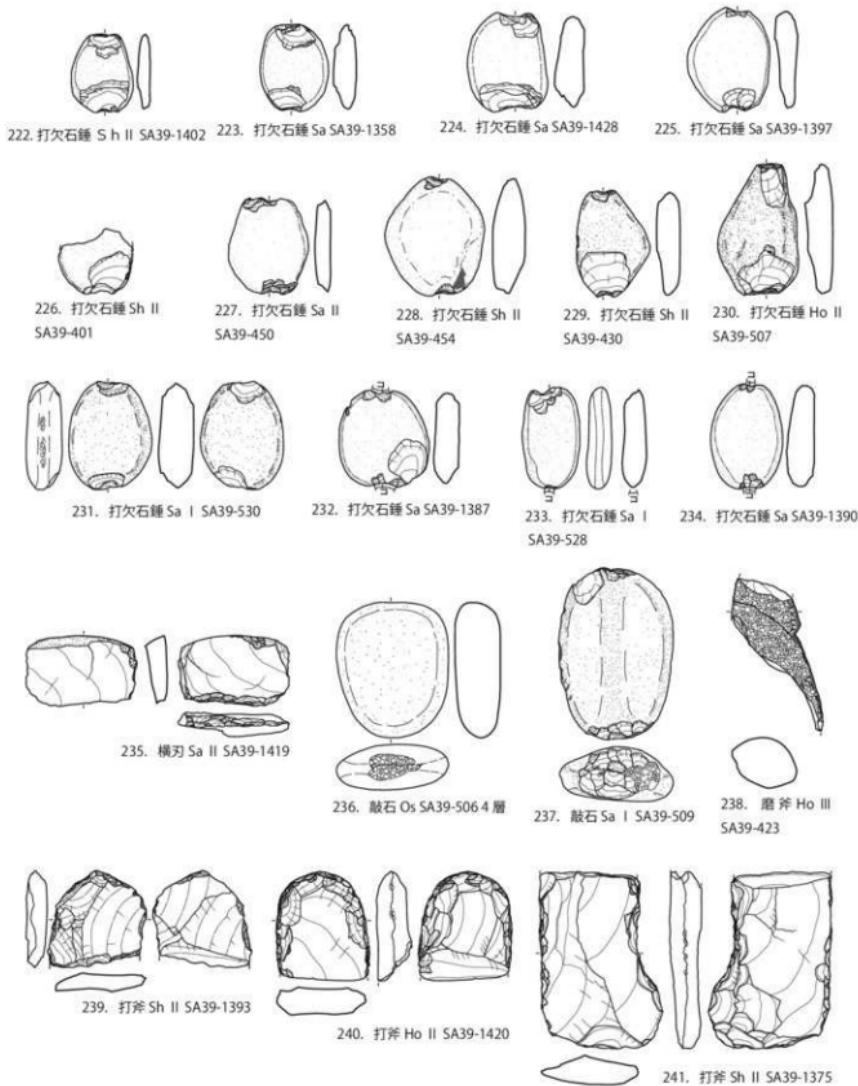
第45図 第39号竪穴住居跡 (SA39) S=1/60



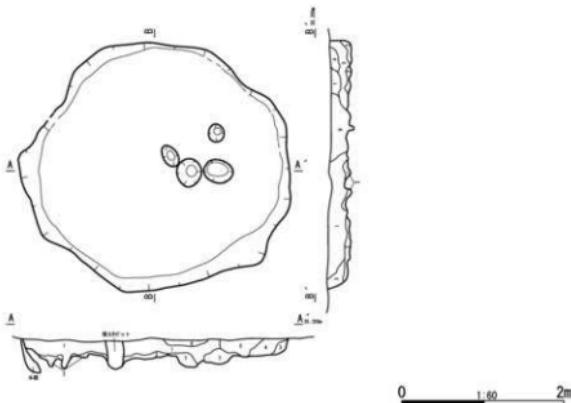
第46図 第39号竪穴住居跡出土の土器(1) S=1/3



第47図 第39号竪穴住居跡出土の土器（2）・石器（1） 200～207:S=1/3, 208～221:S=2/3



第48図 第39号竪穴住居跡出土の石器（2） S=1/3



SA40 土層注記

- 1: 喀斯特色 (10YR2.5/3) 粘質土。しまり・粘性ともに普通。第VI (AT) 崩起源のブロック (径1~5mm程度) をごくわずかに含む。
- 2: 喀斯特色 (10YR3/3.5) 粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。第VI (AT) 崩起源のブロック (径1~30mm程度) を確認し含む。
- 3: 喀斯特色 (10YR3/3) 粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。第V (MB1)・VI (AT) 崩起源のブロック (径1~30mm) をマーブル状にわずかに含む。
- 4: 喀斯特色 (10YR3/3) 粘質土。しまり・粘性ともにやや強い。第V (MB1)・VI (AT) 崩起源のブロック (径1~30mm) を確認し含む。
- 5: 1と類似するが、若干明るめ。
- 6: 1と類似し、5よりも更に明るめ。
- 7: 喀斯特色 (10YR3.5/3.5) しまり・粘性ともに普通。第V (MB1)・VI (AT) 崩起源のブロック (径1~40mm) を多く含む。
- 8: 喀斯特色 (10YR2.5/3) しまり・粘性ともに普通。第VI (AT) 崩起源のブロック (径1~50mm程度) をわずかに含む。

第49図 第40号竪穴住居跡 (SA40) S=1/60

ない資料が多い。器種としては、石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨敲石・敲石・打欠石錐などが認められた。ここではごく一部のみ掲載する。

263はチャート製の石錐である。小形の石核を素材とする。264は尾鉢山産溶結凝灰岩製の敲石である。側縁に複数の敲打面が形成される。

■ 第48~50・59号竪穴住居跡 (SA48~50・59 第58図)

概要 C区南西部からまとめて検出された。

SA48・49・59は切り合い関係を有し、新しい方から順に示すと、SA49→SA59→SA48となる。SA48は更にSA47南西端に切られる。SA49とSA50も切り合い関係を持つ可能性があるが、検出面では際どく接する状態である。

SA49は直径約5.4mの不整円形プランである。検出面からの残存高は約15cmであり、皿状に立ち上がる。明確な主柱穴は検出されなかった。

SA59はプランの大半をSA49に切れらるが、

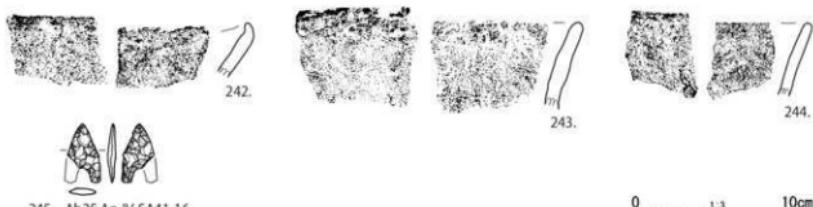
確認できる範囲では、およそ2m×2mの小形開円方形プランになると推定される。検出面からの残存高は約10cmであり、壁面は緩やかに立ち上がる。後述するSA51と同規模である可能性が考えられる。

SA48は直径約4.2mの円形プランである。検出面からの残存高は約15cmであり、複数のピットが確認されたが、主柱穴などの配列は不明である。

SA50は直径3.2mの円形プランを持つ。検出面からの残存高は約10cmであり、壁面は緩やかに立ち上がる。複数のピットが確認されたが、主柱穴などの配列は明らかではない。

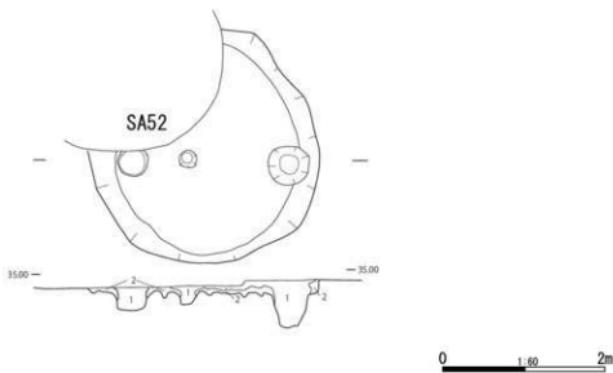
出土遺物

■ SA49出土の土器 (第59・60図) 後期後葉の土器が大量に出土した。深鉢・浅鉢でセットを構成する。深鉢には数種類が認められるが、主体となるのは第6群である。

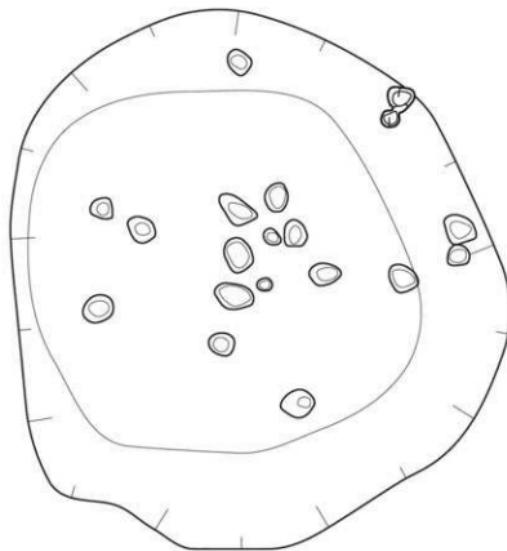


245. Ah25 An IV SA41-16

第51図 第41号竪穴住居跡出土の土器・石器 242～244：S=1／3, 245：S=2／3

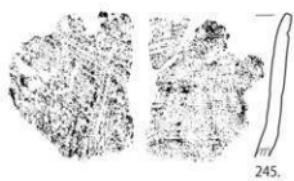


第50図 第52号竪穴住居跡 (SA52) S=1／60



第52図 第42号竪穴住居跡 (SA42) S = 1 / 60

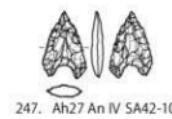
0 1:60 2m



245.



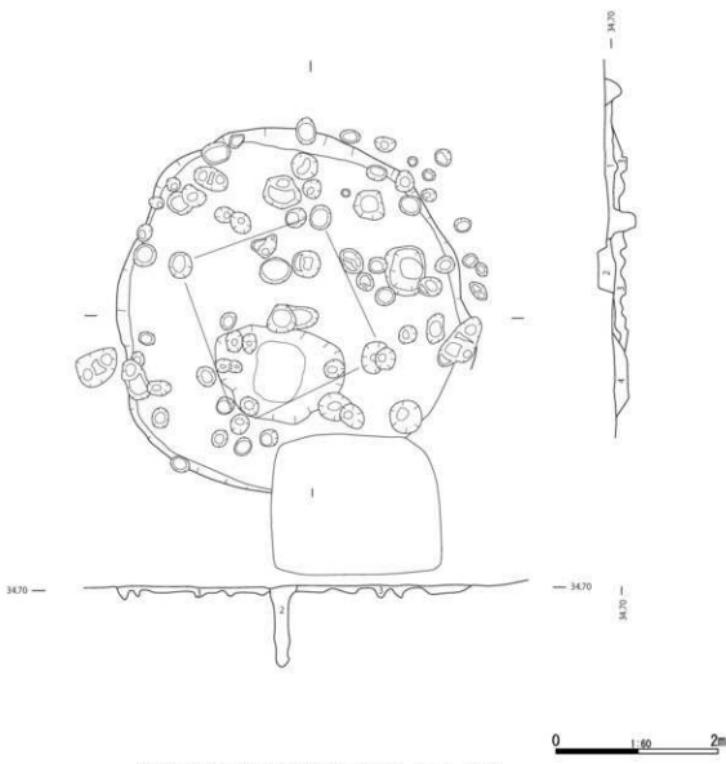
246.



247. Ah27 An IV SA42-10

0 1:3 10cm

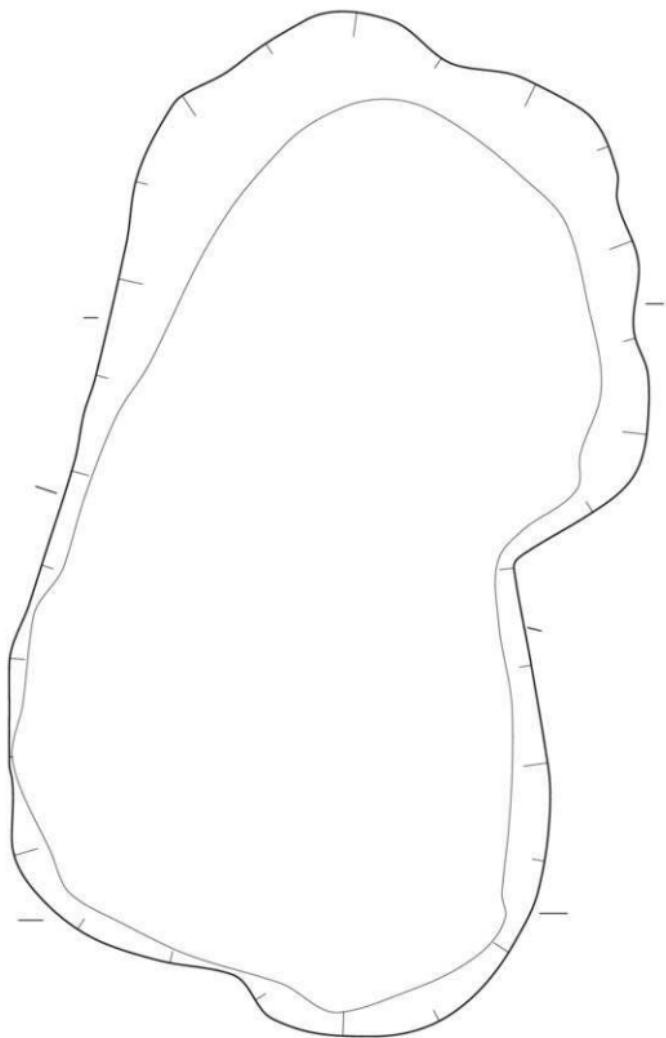
第53図 第42号竪穴住居跡出土の土器・石器 245・246: S = 1 / 3, 247: S = 2 / 3



第54図 第43号竪穴住居跡 (SA43) S= 1 / 60

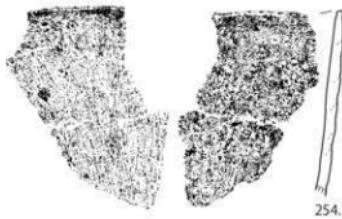
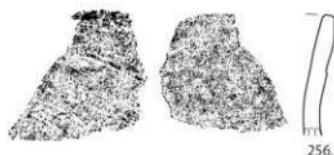
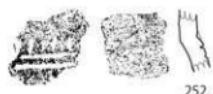


第55図 第43号竪穴住居出土の土器 S= 1 / 3



0 1:60 2m

第56図 第47号竪穴住居跡 (SA47) S= 1 / 60

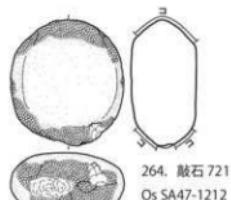
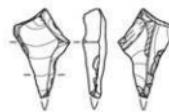
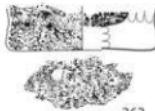


1

2

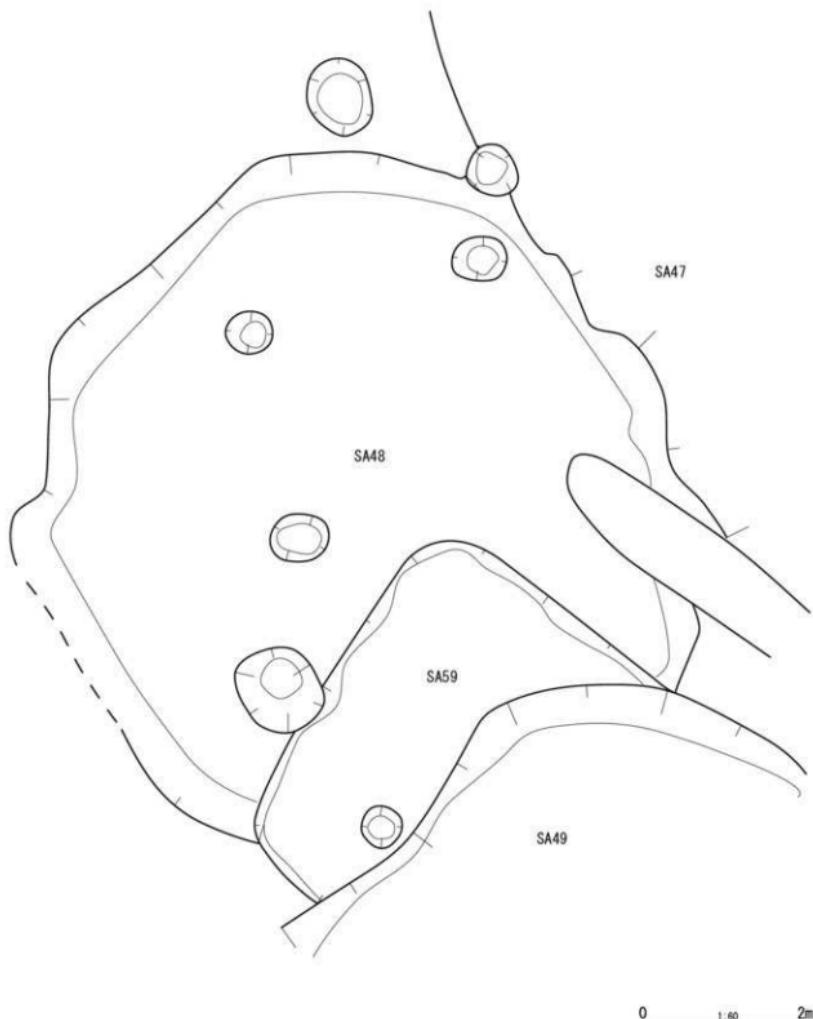
3

4



0 1:3 10cm

第 57 図 第 47 号竪穴住居跡出土の土器・石器 250～262・264：S = 1 / 3, 263：S = 2 / 3



第 58 図 第 48 ~ 50 + 59 号竪穴住居跡 (SA48 ~ 50 + 59) S = 1 / 60

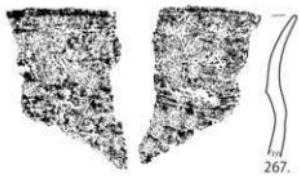
0 1:60 2m



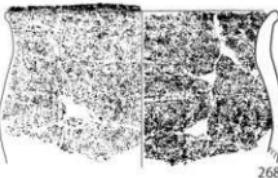
265.



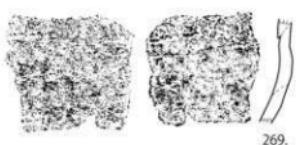
266.



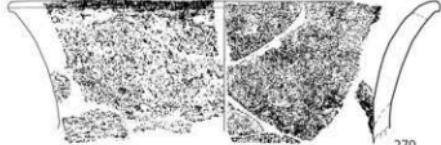
267.



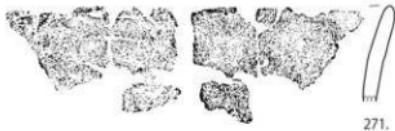
268.



269.



270.



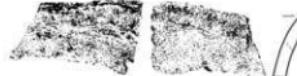
271.



272.



273.



274.



275.



276.



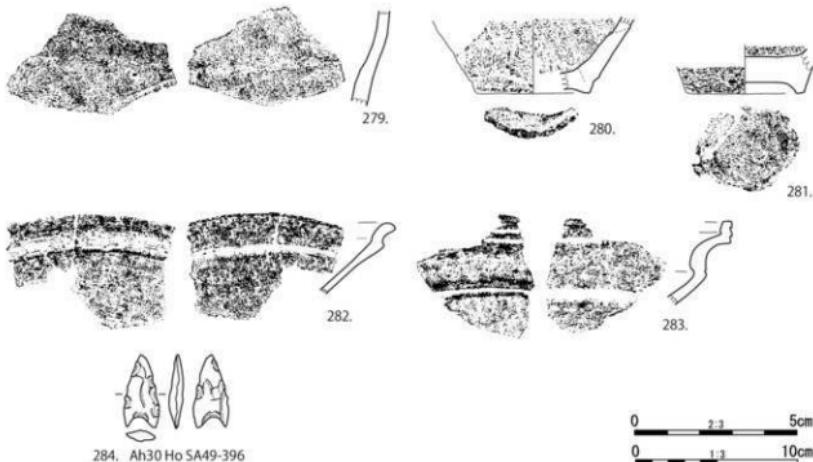
277.



278.



第 59 図 第 49 号竪穴住居跡出土の土器 (1) S=1/3



第60図 第49号竪穴住居跡出土の土器(2)・石器 279～283:S=1/3, 284:S=2/3
284. Ah30 Ho SA49-396

265・266は第2群に属する深鉢の口縁部である。267～269は第6群第1類、270～279は第6群第2類の深鉢の口縁部および胴部である。

280・281は深鉢の底部であるが、どの資料の同一個体であるかは判然としない。282は第4群B-3の浅鉢、283は同群B-2類の鉢である。

■SA49出土の石器(第60図) 石鎚などの他、剥片・石核類が出土した。ここではごく一部のみ掲載する。284はホルンフェルス製で風化が激しく、剥離面は明瞭でない。

■第51号竪穴住居跡(SA51 第61図)

概要 C区南西部から検出された。2.8m×2.2mの隅円長方形のプランを持つ。検出面からの残存高は約20cmを測る。内部からは複数のピットが検出されたが、主柱穴と認定できるような配列ではない。床面のほぼ中央付近では80cm×60cmほどの範囲から炭化物が集中して観察された。ただし、明確な焼土は認められなかった。また、はっきりとした掘り込みも確認できなかった。

出土遺物

■土器(第61図) 出土量は少ない。実測図の掲載は割愛したが、第61図中に図示したように、西辺壁面付近のピット上面から深鉢の胴部破片が

出土している。

■石器(第61図) 土器と同様に出土量は少ない。第61図に図示したように、炭化物集中範囲から、台石ないし砥石が出土した。

■第52号竪穴住居跡(SA52)

概要 遺構実測図の掲載は割愛した。C区南部に位置する。直径約2.8mの小形の円形プランである。南東部を搅乱坑によって大きく切られる。検出面からの残存高は約10cmであり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。東西の壁面付近にある二つのピットが主柱穴である可能性が考えられる。

出土遺物

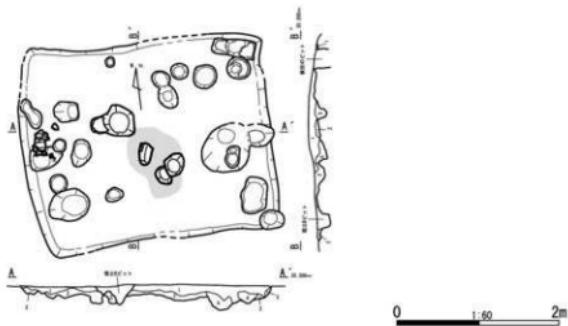
■土器(第62図) 後期後葉の深鉢が、わずかに出土している。285は第2群第3類の口縁部、286は第6群の胴部である。

■第53号竪穴住居跡(SA53 第63図)

概要 遺構実測図の掲載は割愛した。C区南部に位置し、SA41・SA52に隣接する。2.9m×2.5mの不整楕円形プランを持つ。検出面からの残存高は約10cmであり、壁面は皿状に立ち上がる。明確な主柱穴は検出されなかった。

出土遺物

■土器(第63図) 遺構内から出土した遺物は少



SA51 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。粘性・しまりは普通。第IV層起源のブロック (径 1 ~ 5m) をわずかに含む。
- 2 : 噴褐色 (10YR2/3) 粘質土。粘性・しまりは普通。第IV層起源のブロック (径 1 ~ 15m) を多く含む。
- 3 : 噴褐色 (10YR2/3) 粘質土。粘性は普通。しまりはやや弱い。第IV層を母体とするが、黒味が強い。
- 4 : 噴褐色 (10YR3/3.5) 粘質土。粘性が強く、しまりはやや弱い。第IV層起源のブロック (径 1 ~ 40m) を縦らに含む。
- 5 : 噴褐色 (10YR2/3) 粘質土。粘性が強く、しまりはやや弱い。第IV層起源のブロック (径 1 ~ 3m) を縦らに含む。

第 61 図 第 51 号竪穴住居跡 (SA51) S = 1 / 60

なく、後期後葉の深鉢がわずかに出土した。287 は第 6 群の胴部、288 は同群 6 類の胴部である。

■第 54 号竪穴住居跡 (土坑 SA54)

概要 当初は竪穴住居跡の可能性を考慮し掘り進めたが、最終的には性格不明の不整形土坑と判断したものである。遺構実測図の掲載は割愛した。

C 区南部に位置し、SA52・SA53 に隣接する。三つの突出部を持つ三叉状の不整形プランを持ち、中央の最深部では検出面から約 1.6 m を測る。あるいは後世の防空壕に関連する遺構かもしれない。ただし、出土遺物は縄文時代の所産に限られる。

出土遺物

■土器 (第 64 図) 後期後葉の土器と晩期の土器が混在するが、主体となるのは前者であり、深鉢・浅鉢でセットを構成する。碎片が多く、ほとんどの資料は図化に耐えられない。

289 は第 6 群の口縁部および胴部、290 は第 5 群第 2 類の口縁部である。291 はおそらく第 4 群 B-3 の口縁部、292 は上げ底の底部である。

■第 56 号竪穴住居跡 (SA56)

概要 C 区の SA29 南側において検出した浅い皿状の土色変化に関し、竪穴住居跡の可能性を考慮して認定したが、プランも不明瞭である。明確に

伴う遺物は確認できなかったが、第 I 層出土として取り上げた遺物が本来この遺構に含まれた可能性がある。

■第 58 号竪穴住居跡 (SA58 第 65 図)

概要 B 区南西側に位置する。C 区の縄文後期後葉の集落から離れて位置する点、隅円方形のプランを持つ点などを考慮すると、古墳時代の所産である可能性も排除できないが、出土遺物の様相からここで報告しておく。約 3 m 四方の隅円方形プランを持つ。北西部は確認トレンチを入れた際に誤って未記録のまま掘り進めている。

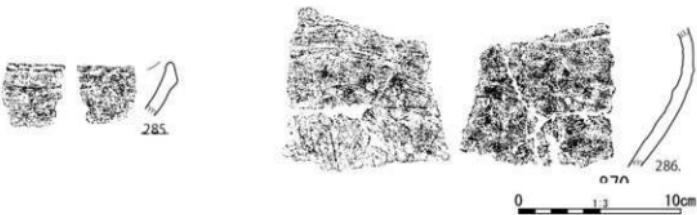
出土遺物

■土器 (第 65 図) 深鉢のみが、ごく少量出土している。

293 は第 6 群の口縁部、294 は胴部である。

■第 61 号竪穴住居跡 (SA61)

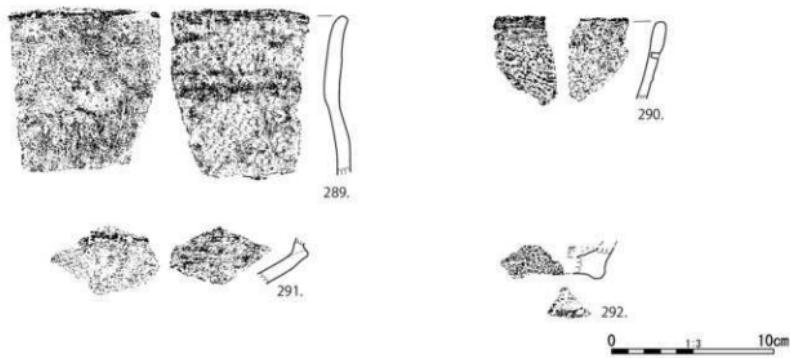
概要 C 区北西部、古墳時代の竪穴住居群 (SA13・14・45) に囲まれる位置から検出された。他の縄文時代後期の竪穴住居跡群に比較して、覆土の色調が薄い。これは構築時の掘削面の違いによる可能性がある。約 6 m の円形プランを持ち、SA35・42 に匹敵する規模であるが、残存状況は良くない。



第62図 第52号竪穴住跡出土の土器 S= 1 / 3



第63図 第53号竪穴住跡出土の土器 S= 1 / 3



第64図 第54号竪穴住跡（土坑）出土の土器 S= 1 / 3



第65図 第58号竪穴住跡出土の土器 S= 1 / 3

■第 80 号竪穴住居跡 (SA80 第 66 図)

概要 B 区中央部から検出された。北東・南西 4.5 m × 北西・南東 4.2 m の楕円形プランを持つ。内部に複数のピットが検出され、うち 4 基に主柱穴の可能性が考えられた。これらの柱穴は竪穴住居跡のプランにおける長軸とは垂直に交わる方向(北西・南東)に芯々距離の長軸(約 2.5 m)を向ける。短軸の芯々距離は 1.6 m を測り、長方形に近い平行四辺形の配置をとる。検出面からの残存高は約 35cm で良好な覆土の残存状況をみせる。壁面は皿状に緩やかに立ち上がる。

出土遺物

■土器 比較的良好な覆土の残存状況にもかかわらず、土器の出土量に乏しい。土器は細片のみにとどまり、時期を特定し難い。したがって、プランや覆土の色調などから古墳時代の所産である可能性は排除できるが、当該遺構の帰属を縄文時代の特定時期に絞ることは困難である。C 区の後期後葉の竪穴住居跡群からは離れた位置に存在するため、A 区の SX01 と同様に後期中葉に遡る可能性も捨て切れない。

■石器(第 67 図) 土器と同様に出土量は少ない。打欠石錘のみ図示した。295 は長軸両端の紐掛け部に潰れが観察される。

■第 90・91 号竪穴住居跡

(SA90・91 第 68 図)

概要 B 区南西端から検出された。SA61 同様、残存状況は良好ではない。いずれも直径 2.5 m ~ 3 m 程度の円形ないし不整形のプランを有すると考えられる。SA91 とした西側は調査区外にプランが伸びる。検出可能であった遺構の輪郭から判断すると、両者が切り合い関係を有することは疑いないが、先後関係は確定できなかった。いずれも内部に複数のピットが認められたが、明確な主柱穴は確認されなかった。SA90 とした東側のプランは二つの土坑(SC105・106)に切られる。

出土遺物 土器・石器ともに出土量は僅少である。図示していないが、石器では石錐などが出土している。

■第 92 号竪穴住居跡 (SA92 第 69 図)

概要 SA90・91 に隣接して検出された。プラン

の大半は不明瞭であり、わずかに残存する遺構の輪郭から判断すると、約 2 m四方程度の小形方形プランが一応推定できよう。内部からピットの検出はない。床面からは打欠石錘と土器片錘の他、種子状の炭化物が出土した。

b 溝または道路状遺構

■第 2 号溝状遺構 (SE02 第 7 図)

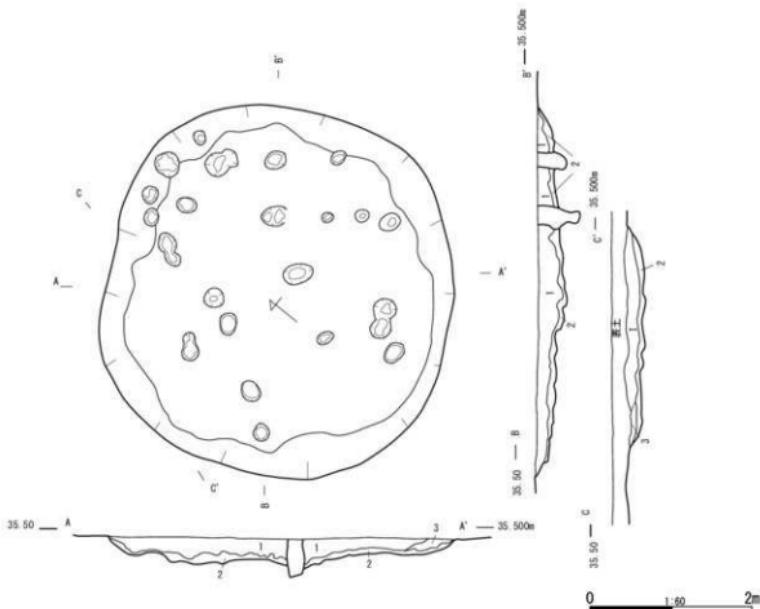
概要 当該遺構は、最も標高が高い B 区の J6 グリッド付近(35.200 m)から始まり、最も標高の低い A 区の北東隅(34.000 m)まで、ごく緩やかな傾斜を保ちつつ、野首第 1 遺跡内に存在する谷部へと下るものと考えられる。幅は最大で 7 m を超える部分もあり、高所ほど狭くなる傾向にあるが、検出時の輪郭の不明瞭さも考慮すると、本来はより広い幅を持っていた可能性が高い。実際、第二次調査では、A 区と B 区の間に位置する範囲(F 区)において、第一次調査よりも広い幅の SE02 を検出することに成功している。

遺構内からは後期旧石器時代に始まり、縄文時代早期・後期の遺物が検出されたが、主体は縄文時代後期後葉である。遺構内には縄文時代早期の集石遺構も検出されたが、原形を保っているとはいせず、SE02 の形成はおよそ縄文時代後期に開始したと考えて差し支えないであろう。A 区における後期中葉の SX01 が SE02 とわずかに接して構築されていることを考慮すると、当時には既に当該溝状遺構が意識されていた可能性も指摘できる。とはいえ、出土遺物の様相と、特に B 区における SE02 を含めた“土器捨て場”的な空間利用、および C 区の竪穴住居跡群に繋がるような方向性を持つこの溝状遺構の特徴を考慮するならば、最も盛んに利用されたのは縄文時代後期後葉のことと推定できよう。

出土遺物 当該遺構の出土遺物は先述したように縄文後期後葉が主体となる。これは第 I 層の包含層出土遺物の様相と概ね重なるため、別項で一括して後述することにしたい。

c. 土坑

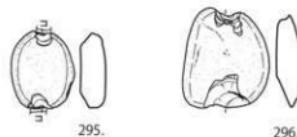
概要 本遺跡においては、各時代を通じて大小様々な形態の土坑が 100 基以上検出された。それらの中には、遺物の出土がないものもあること



SA80 土層注記

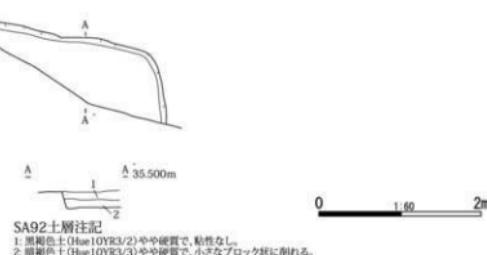
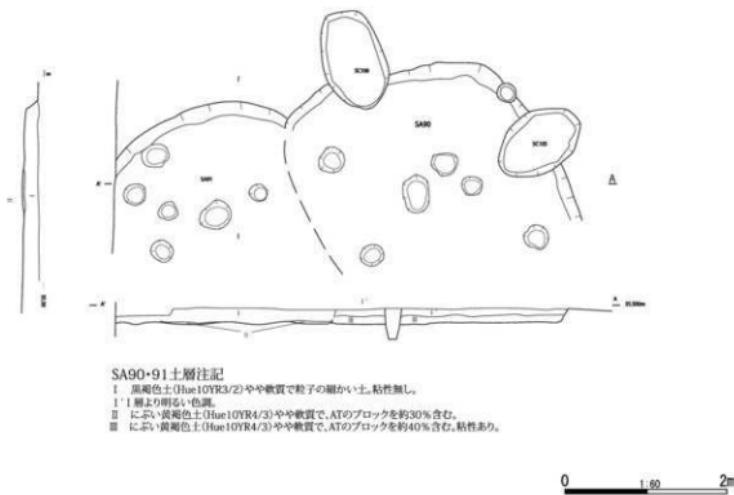
- 1 : 周褐色 (7.5YR3/3) 粘質土。しまりはやや弱く、粘性は普通。炭化物粒をごくわずかに含む。
- 2 : 1 を母体として褐色 (7.5YR4/4) 粘質土が混在する。しまりは普通で、粘性は強い。
- 3 : 周褐色 (10YR3/3) 粘質土。炭化物粒をごくわずかに含む。

第 66 図 第 80 号竪穴住居跡 (SA80) S = 1 / 60



0 1.3 10cm

第 67 図 第 80 号竪穴住居跡出土の石器 S = 1 / 3



第69図 第92号竪穴住居跡 (SA92) S=1/60

から、全ての土坑についての時間的評価は困難といわざるをえない。この点を考慮し、ここでは遺構の形態的な特徴による分類に基づいた報告を行なう。報告にあたっては、各類型の中で、最もその特徴を表しているものを抽出した。

■第1類 棒状礫を挿入した土坑・ピット
(第70図)

SC119・SC120などが代表的な事例である。C区の竪穴住居跡群と重複して分布する傾向が認められる。直径30cm～50cm程度のピットに棒状礫が垂直に近い状態で挿入される遺構である。礫が棒状ではなく、複数個の不定形な礫が入る場合もある。

■第2類 円形プランで掘り込みが深い土坑
(第71・72図)

SC24・SC25・SC45・SC81・SC84・SC94-1・SC110などが該当する。

プランは約1m前後の円形を呈し、深さも約1m近く掘り込まれる場合がある。SC81のように一回り大きなサイズも認められる。

覆土がレンズ状に堆積する事例は稀であり、人為的に埋没させたと推測されるものが多い。

SC84は床面で礫が出土している。

■第3類 円形プランで掘り込みが浅い土坑
(第73図)

SC34・SC56・SC74・SC75・SC76・SC90・SC94・SC15などに代表される類型である。

平面形は約50cm～1m程度の円形を呈し、約20cm程度掘り込まれる場合が多い。

■第4類 楕円形プランの土坑(第73・74図)

SC30・SC55・SC58・SC76・SC91などに代表される類型である。

平面形は長軸約50cm～1m程度の楕円形を呈し、掘り込みは概して浅い。

■第5類 長隅円方形プランの土坑
(第74図)

SC54・SC85などに代表される類型である。

検出数はごく少ない。平面形は80cm×40cm程度の隅円長方形を呈し、掘り込みは概して浅い。

覆土は床面に対し、水平に堆積するものが多い。

■第6類 不整形プランの土坑(第71・74図)

SC22・SC29・SC32・SC42・SC43・SC95-1・SC95などに代表される類型である。プランの形態・規模は規格性に乏しい。

(4) 包含層出土の遺物

a 出土遺物の概要

A・B(D)・C・Eいずれの調査区においても、第1層を中心とした包含層からは相当量の当該期遺物の出土がみられた。先述のとおり、とりわけB(D)区からは夥しい量の土器・石器類の出土が認められた。そこで、取りあげは基本的に5m×5mの小グリッドごとに行ない、一部の遺物についてドット記録を併用する方法を探った。

b 遺物詳説

以下では、遺構および包含層中から検出した代表的な遺物について図示し、解説を加える。

■土器

第Ⅲ章第1節の分類に基づいて報告を行なう。

各遺物の詳細は観察表(第6～14表)を参照されたい。なお掲載数と各類型の出土割合は必ずしも比例しない。また各類型における製作の動作連鎖に関しては第Ⅳ章第2節において詳述する。

□第1群 貝殻文系

1類A-1 (第78図313～323)

口縁部がゆるやかな「くの字」状をなすもの(313～316)と、断面三角形のもの(317～319)に細分される。口縁部形態による、器面調整等の差異は看取されない。

1類A-2 (第78・79図324～328)

口縁部が丸みをおびるもの(325～327)と、断面三角形のもの(324～326)に細分される。

口縁部は両者ともに波状をなす。また器面調整等の差異は看取されない。

1類B (第79・80図329～345)

残念ながら完形資料には恵まれなかった。

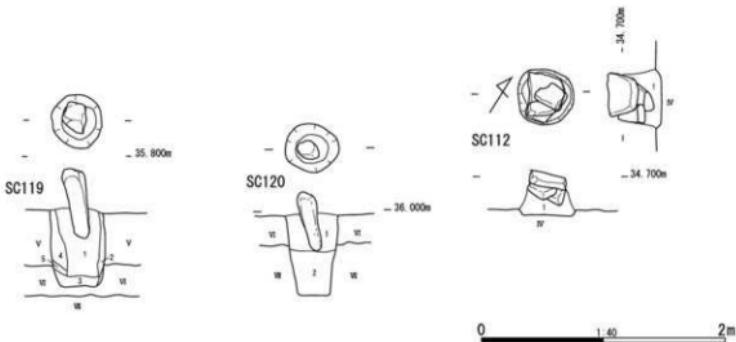
皿部

i 竹管文 (第79図329・330)

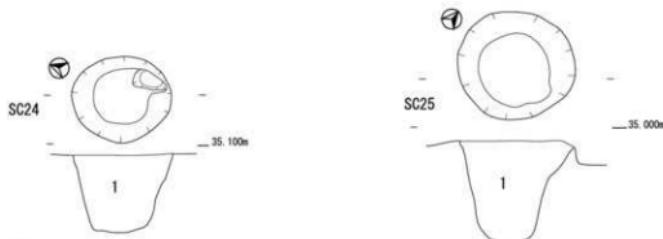
329・330が該当する。329は竹管文と貝殻腹縁刺突文が併用されている。

ii 突帯文・粘土貼付 (第79図331～338)

332は口縁部形状に沿って、粘土による肥厚帯を形成する。332は曲線状の突帯文を施している。



第70図 棒状礫の入った土坑 S=1/40



SC24 土層注記

1: 黒褐色 (7.5 YR 2/2) 極細砂質土。やや軟質で粘性あり。ごく僅かに炭化物を含む。

SC25 土層注記

1: ぶい赤褐色 (5 YR 2/2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。僅かに炭化物を含む。

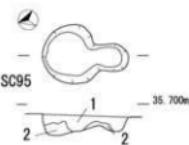


SC95-1 土層注記

1: 黒褐色 (7.5 YR 3/2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。まばらにIV層土、炭化物を含む。

2: 暗褐色 (7.5 YR 3/4) 極細砂質土。やや軟質で、若干粘性あり。

マー：ブル状にA T粒（径2mm前後）を僅かに含む。



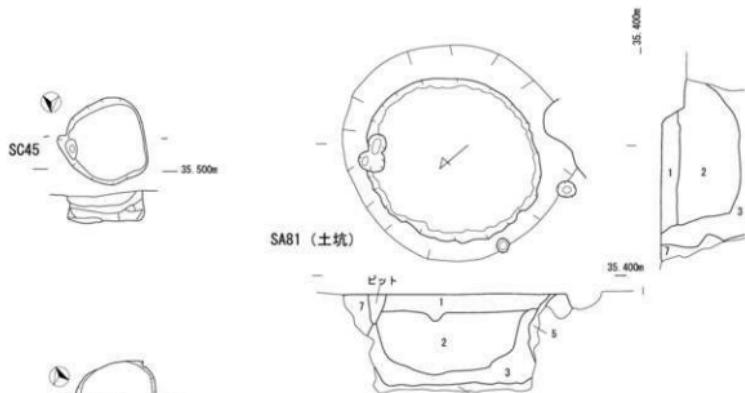
SC95 土層注記

1: 極暗褐色 (7.5 YR 2/3) 極細砂質土。軟質で、若干粘性あり。ごくわずかに炭化物を含む。

2: 1層とIV層が混在している。



第71図 土坑(1) S=1/40

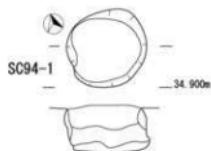


SA81 (土坑) 土層注記

- 1 黒褐色土(Hue5YR2/1) 極細砂質土。軟質で粘性あり。わずかに炭化物を含む。
- 2 黒褐色土(Hue5YR2/2) 極細砂質土。やや硬質で粘性に富む。わずかに炭化物を含む。
- 3 黑褐色土(Hue7.5YR2/2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。わずかに炭化物を含む。
- 4 3層と複数の混合土。
- 5 黑褐色土(Hue7.5YR3/3) 極細砂質土。やや軟質で粘性あり。
- 6 黑褐色土(Hue7.5YR3/2) 極細砂質土。やや硬質で粘性あり。
- 7 極細砂質土(Hue7.5YR2/3) 極細砂質土。やや軟質で粘性あり。

SC84 土層注記

- 1 : 喀赤褐色(5 YR 3/2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。
ごくわずかに炭化物を含む。
- 2 : 1層と A.T. の混在層。



SC110 土層注記

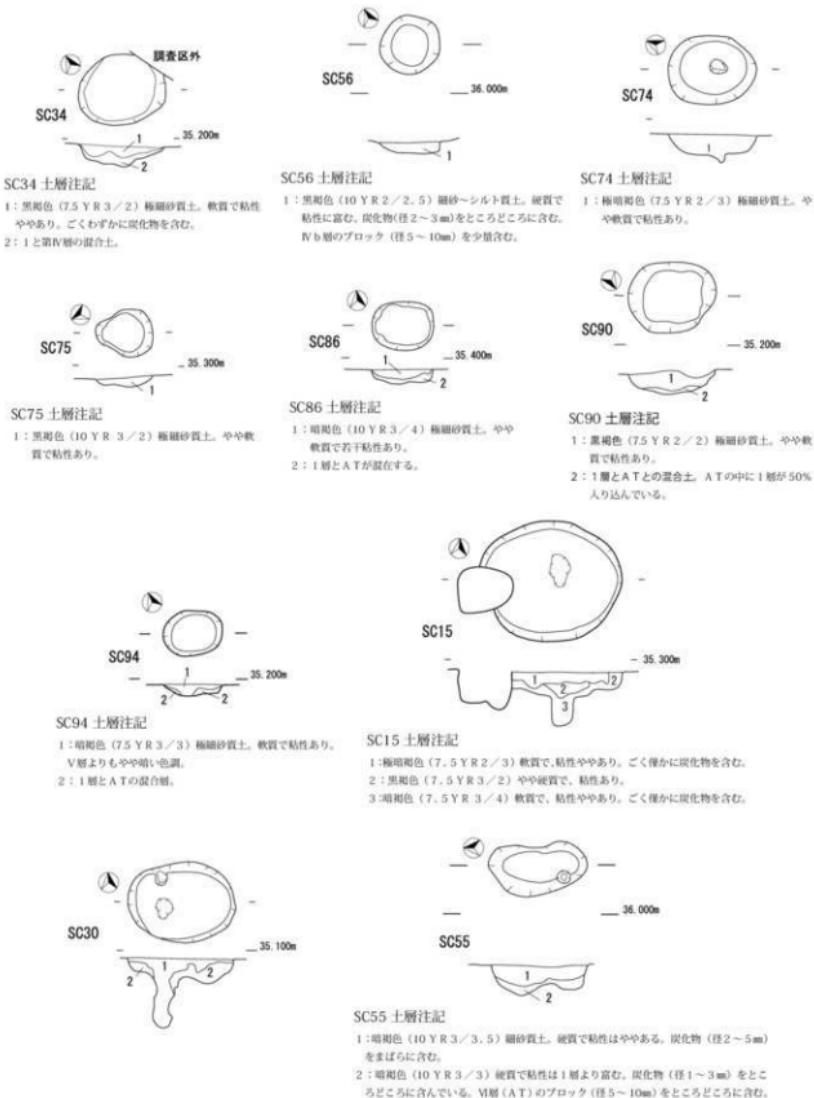
- 1 : 黒褐色(10 YR 2/3) 軟質。A.T. ブロック(径5mm~10mm)をまばらに含む。V層を斑状に含む。
- 2 : 黑褐色(10 YR 2/2) 軟質(1層より軟質) A.T. ブロック(径5mm~10mm)をまばらに含む。V層を少額斑状に含む。

SC94 土層注記

- 1 : 喀褐色(7.5 YR 3/3) 極細砂質土。軟質で粘性あり。V層の土よりもや暗い色調。
- 2 : 1層と A.T. の混合層。



第72図 土坑(2) S=1/40



第73図 土坑(3) S=1/40

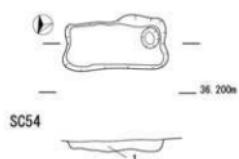


SC58 土層注記
1: 黒褐色 (10 YR 2/2.5) 細砂質土。硬質で粘性に乏しい。炭化物はほとんど含まない。

SC76 土層注記
1: 暗褐色 (10 YR 3/3) 極細砂質土。やや軟質で粘性あり。

SC91 土層注記

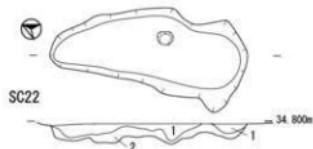
1: 暗褐色 (7.5 YR 2/3) 極細砂質土。やや粘性で粘性あり。
2: 黑褐色 (7.5 YR 2/2) 極細砂質土。やや軟質で粘性ややあり。



SC54 土層注記
1: 黒褐色 (10 YR 2/2.5) 細砂質土。硬質で粘性に乏しい。炭化物はほとんど含まない。



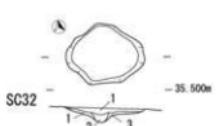
SC85 土層注記
1: 黒褐色 (7.5 YR 2/2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。
2: 1層と A T が混在する。



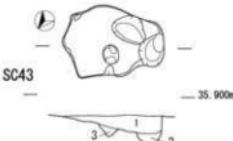
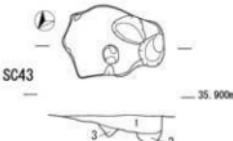
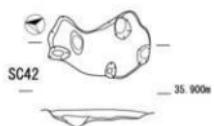
SC22 土層注記
1: 黒褐色 (7.5 YR 3/1) 硬質で粘性ややあり。ごく僅かに炭化物を含む。
2: にじみ赤褐色 (5 YR 4/4) 軟質で粘性あり。



SC29 土層注記
1: 暗褐色 (5 YR 2/3) 極細砂質土。やや軟質でやや粘性あり。ごく僅かに炭化物を含む。



SC32 土層注記
1: 茶色 (7.5 YR 4/3) 極細砂質土。やや軟質で粘性ややあり。ごくわずかに炭化物を含む。
2: 暗褐色 (7.5 YR 3/3) 極細砂質土。軟質で粘性あり。
3: I 層と IV 層の混合土。

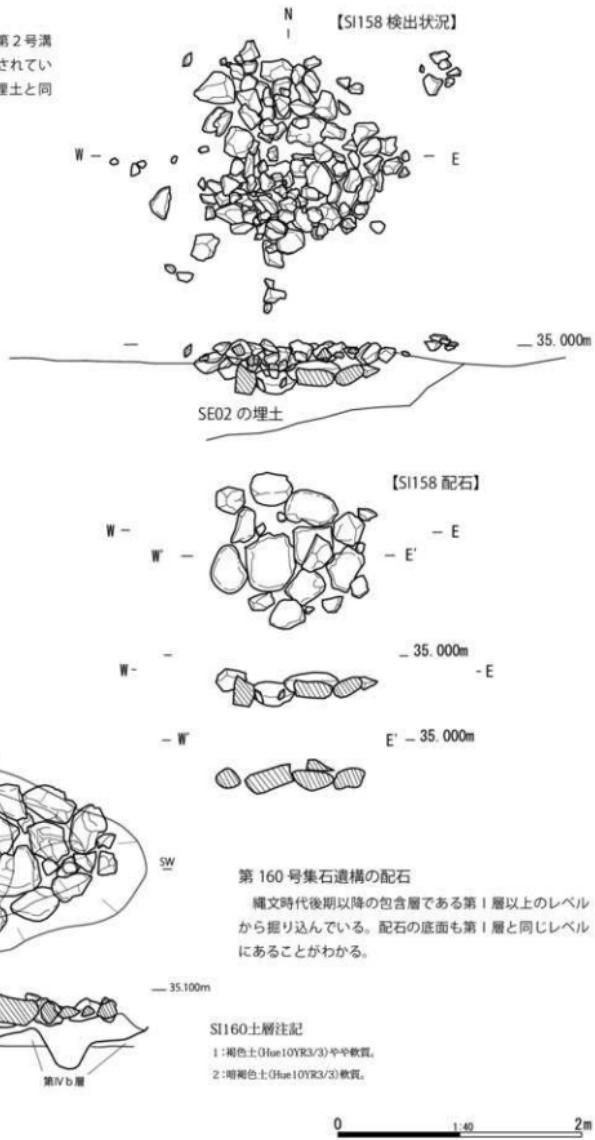


0 1:40 2m

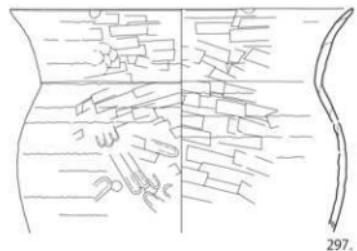
第74図 土坑 (4) S=1/40

第 158 号集石遺構

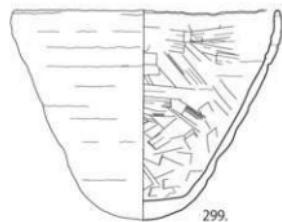
縄文時代後期以降に形成された第 2 号溝状遺構 (SE02) を掘り込んで構築されている。掘り込みのラインは SE02 の埋土と同化しており、不明瞭であった。



第 75 図 縄文時代後期以降の集石遺構 S = 1 / 4 0

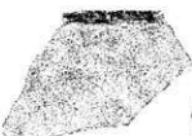


298.

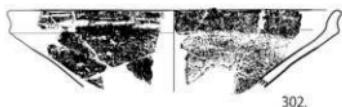


299.

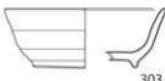
300.



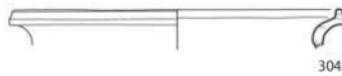
301.



302.



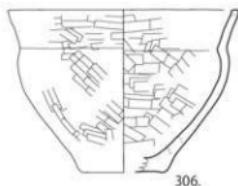
303.



304.



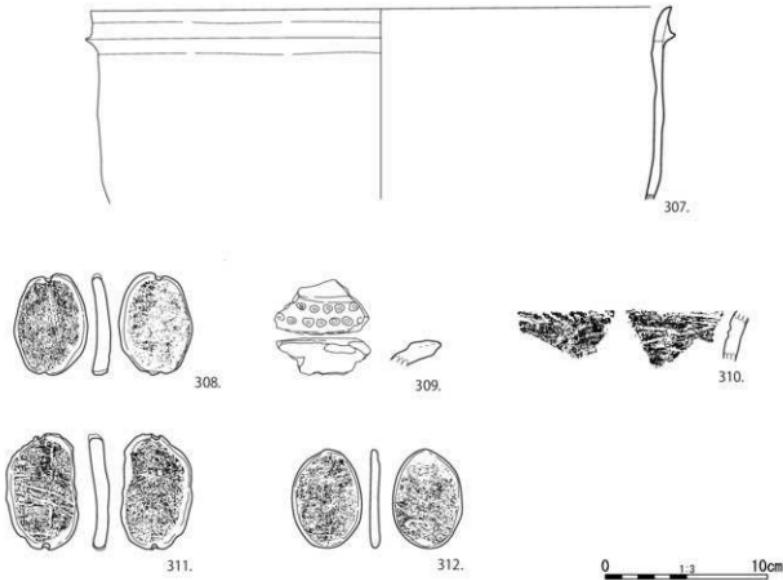
305.



306.



第 76 図 土坑出土の縄文土器 (1)・土師器 S = 1 / 3



第 77 図 土坑出土の縄文土器 (2) S=1/3

333 は粘土紐の貼付が施されるが、波頂部から放射状に広がるモチーフを構成する。334 も同様のモチーフとなる可能性が高い。

335～337 は口唇部に 2 本の粘土粒を貼付けている。

338 は波頂部に突起を付けている。

iii 沈線文 (第 80 図 339)

1 点のみの出土である。皿部内面に 2 列の並行沈線文を曲線状に施す。沈線文は一筆書きの要領で施されているわけではなく、沈線文を施した際にできる粘土の弛みも丁寧に処理している。

iv 貝殻文 (第 80 図 340)

1 点のみの出土である。皿部内面に連続貝殻腹縁刺突文を施している。

v i + ii (第 80 図 341)

住居中からは最も多く出土しているが、包含層からの出土は少ない。基本的に図示したパターンのものが出土しており、SX01 で出土したような資料とは一線を画している。

脚部 (第 80 図 343～345)

皿部の文様の多彩さに対し、脚部は装飾に乏しいものが大半を占める。底面に土器製作台の痕跡を残す資料も多い。

なお 343 は、隣接する野首第 1 遺跡出土資料と接合する。

□ 第 2 群 磨消縄文系

1 類 (第 81～83 図 346～384)

第 2 群の中において最も出土点数が多い。また全ての資料において該当することであるが、黒色磨研が施された資料に乏しく、半精製とも呼ぶべき土器が大半を占める。

346～384 が深鉢の口縁部、367～373 が同じく脚部、435 が椀の口縁部である。

口縁部の文様モチーフは 3 本単位の沈線文+磨消縄文の組み合わせであり、沈線文は波頂部で集約されるものが多い。

脚部の文様モチーフは平行沈線文+磨消縄文であり、頸部に連続刺突文を施す。

2類-i (第81図354~360)

360は深鉢の口縁部である。2本単位の沈線文を基調とした磨消繩文を文様モチーフにしている。

2類-ii (第82図361~362)

2類の中で最も出土比率が高い。2類-iとの差異は、磨消繩文の他に、口縁部の形態にも表れている。2類-iの口縁部が、ゆるやかな「逆くの字」形をなすのに対し、2類-iiの口縁部は断面三角形であり、口唇部の屈曲が見られない。

3類 (第83~88図376~431)

第2群中で、最も出土比率が高い。野首第2遺跡出土繩文土器中で主体となる土器群である。

① (第83・84図376~394)

口唇部断面形が三角形となる一群である。内面に沈線文を持つもの(376~384)と、無文(385~394)のものが混在する。

波状口縁が多く、波頂部で沈線文を集約するものが多い。また、口唇部内面をつまみ出している資料も存在する(385・390)。

② (第85・86図395~412)

口唇部断面形状がゆるやかな三角形となる一群である。内面に沈線文の有無がある点は、①と同様であるが、内面に2本の沈線文を施した資料が存在する(397~400)。

③ (第86・87図413~423)

口唇部形状が平坦あるいは丸い一群である。内面の施文パターンは②に準ずる。

4類 (第88図424~431)

いずれも球形を基調とした器形を成し、内面に明瞭な稜を持つ。粗いミガキ調整を施されたものが多い。

4類 (第89図436~442)

436~442の基本的な口縁部形態は第2群1類に類似している。口縁部外面を主な文様帶とし、ここに2本の沈線文を、頭部にも同じく沈線文を施している。

5類 (第89図443~444)

同じ文様モチーフであるが、2個体存在する。全出土点数を図示している。

6類 (第82図364~366)

上記1類及び2類に含まれないものの総体である。それぞれ1~2個体の出土しか見られない。

364・365が深鉢の口縁部、366が同じく胸部である。

365は頭部に連続刺突文が施されており1類との親和性が考えられる。

364の、口唇部に2本の沈線文を施すという文様構成は2類に準じるものと推測される。

□第3群 沈線文系

特定型式の枠内に含まれなかった資料で沈線文を施された資料の集合体である。

1類 (第89・90図445~451)

445~446は外面に縦方向の沈線文が施される。

447~451は横方向の沈線文が施されるが、器形等は異なっており、型式的な差は大きい。

このうち447・449は指宿式、448は天城式に該当する。

2類 (第90図452~460)

452~456は波状の沈線文を口縁部に施す。

457・458は波状沈線文と直線的な沈線文の組み合わせである。

459・460は脚台の外面に沈線文が施される。調整が第1群と異なるため、ここで掲載した。

3類 (第90図461~463)

462・463は、波状口縁の外面に2単位の弧状沈線文が施される。この沈線文は波頂部で集約されている。

□第4群 黒色磨研系

度々、言及することあるが、本遺跡出土の黒色磨研土器はごく少数に限られる。ここで報告する資料は、黒色磨研が施された土器の他に、半精製ともいえる資料も含まれる。

A (第91図465~471)

明確に確認できたものは胸部片のみである。出土個体数は非常に少ない。

いずれも、胸部屈曲部つまり胸部最大径付近である。ここが文様帶となり、沈線文が1条ほどされるものの他、2条施されたもの、無文のもののが存在する。

B-1 (第91~93図472~496)

第4群中では、最も出土量が多い。凹線文が4条のもの、3条のもの、2条のものが存在するが、3条のものが最も出土量が多い。

全ての資料は内外面ともにミガキ調整が施され、凹線文もミガキにより施されている。

B-2 (第94図498~511)

B-1に次いで出土量が多い。類型内において形態の差異は少ないが、わずかに頸部の長さに差異が認められる。

基本的な文様帶は口縁部外面であり、ここに1条の沈線文を施すもの、無文のものがある。沈線文の施文方法に着目すると、棒状の工具で線を引いたものと、ミガキにより沈線文を施すものの2者に大別できる。

B-3 (第95図512~521)

頸部において外面側にわずかな屈曲部を持つが、そこから伸びる口縁部の形態に若干の差異がある。

口縁部が長いものと口縁部が短いものであるが、基本的な作りは両者ともに差異は認められない。

B-4 (第95・96図522~528)

出土量は数少ない。全ての資料は丁寧にミガキ調整が施される。

B-5 (第96図529~535)

全ての土器は、丁寧にミガキによる調整が施されている。534・535は口唇部にリボン状の突起が付けられている。

C 注口土器 (第97図536~539)

出土点数は非常に少ない。住居跡出土の資料と合わせて4個体が出土している。

536が注口部、537~539が胴部に相当する。この中で537と539が同一個体であると推測される。

D 高坏 (第97図540~544)

出土点数はごく少量にとどまっている。坏部に関しては、浅鉢と同じ形態のものが多く、破片では器種分類が困難である。そのため、分類作業中に誤認がある可能性は否定できない。

540・541が口縁部、542~544が脚部である。器面全体に非常に丁寧なミガキ調整が行なわれて

いる。

□第5群 突帯文系

1類 (第98・99図545~560)

無刻目突帯文の断面形状は545~551が①に、552~555が②、556~560が③に該当する。

器面調整に関しては、①がナデ、条痕調整主体であり、②と③は条痕調整が主体となる。

2類 (第99・100図561~576)

無刻目突帯文の断面形状に着目した場合、①に属する資料が存在しない点が目を引く。

器面調整は1類②・③と同様であり、この類型との親和性が指摘されよう。

3類 (第100図577)

刻目突帯文が施された資料は、ここに図示したものが全てである。2つの資料とも、異なる文様・調整であり、これらが共伴関係にあるとは考え難い。

□第6群 無文系

野首第2遺跡出土土器の主体をなす一群である。

1類 第2群3類③との相違点として、口縁部の外反が緩やか、頸部内面の稜が緩やか、調整が異なる、という3点があげられるが、型式学的には近親性が認められる。

2類 無文土器のうち第1・2群、第6群1類に該当しない資料であり、最も多くの出土数があるといつても過言ではない。しかし、この類型の遺構床面からの出土は皆無に等しく、時間的な位置付けを困難にしている。

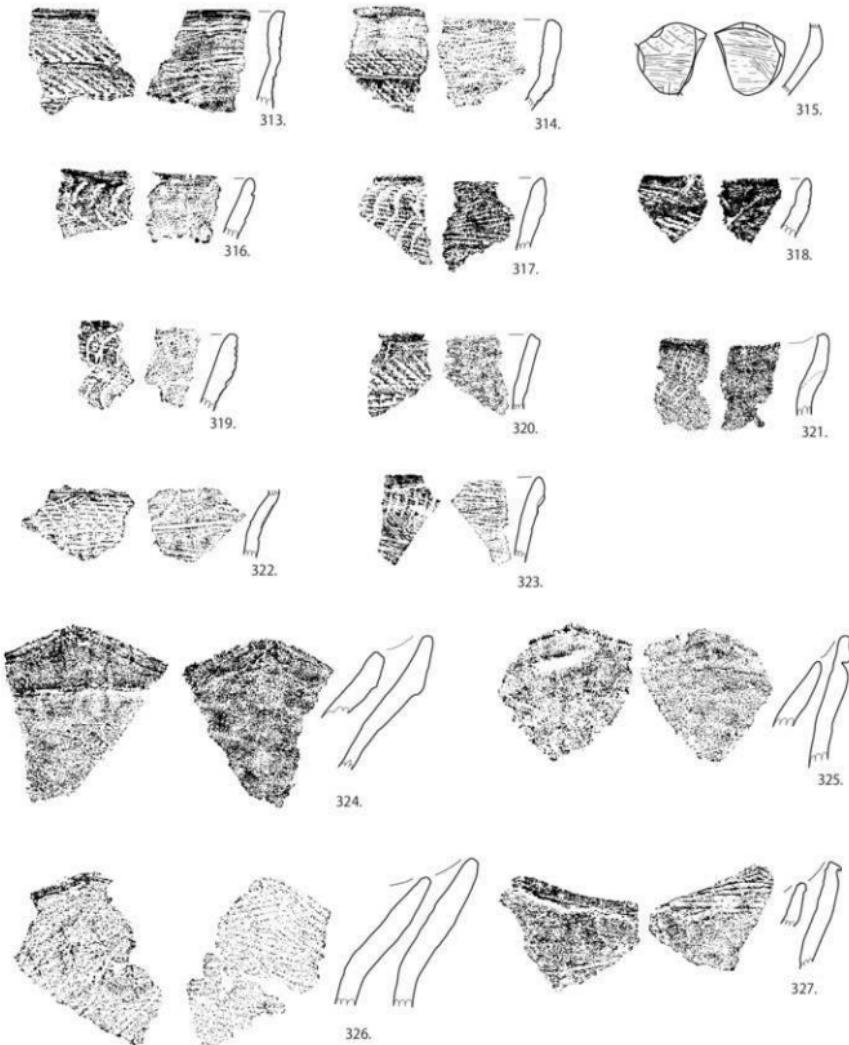
587などは、繩文時代早期終末の条痕文土器に類似するが、器面調整・施文パターンなど異なっている。

底部 文様分類に基づいて報告を行なっている中で、土器の部位を抽出して掲載する事に、ためらいが無いわけではないが、完形資料に恵まれたとは言えず、特定器種と特定類型の親和性が看取されないため、このような措置をとった。

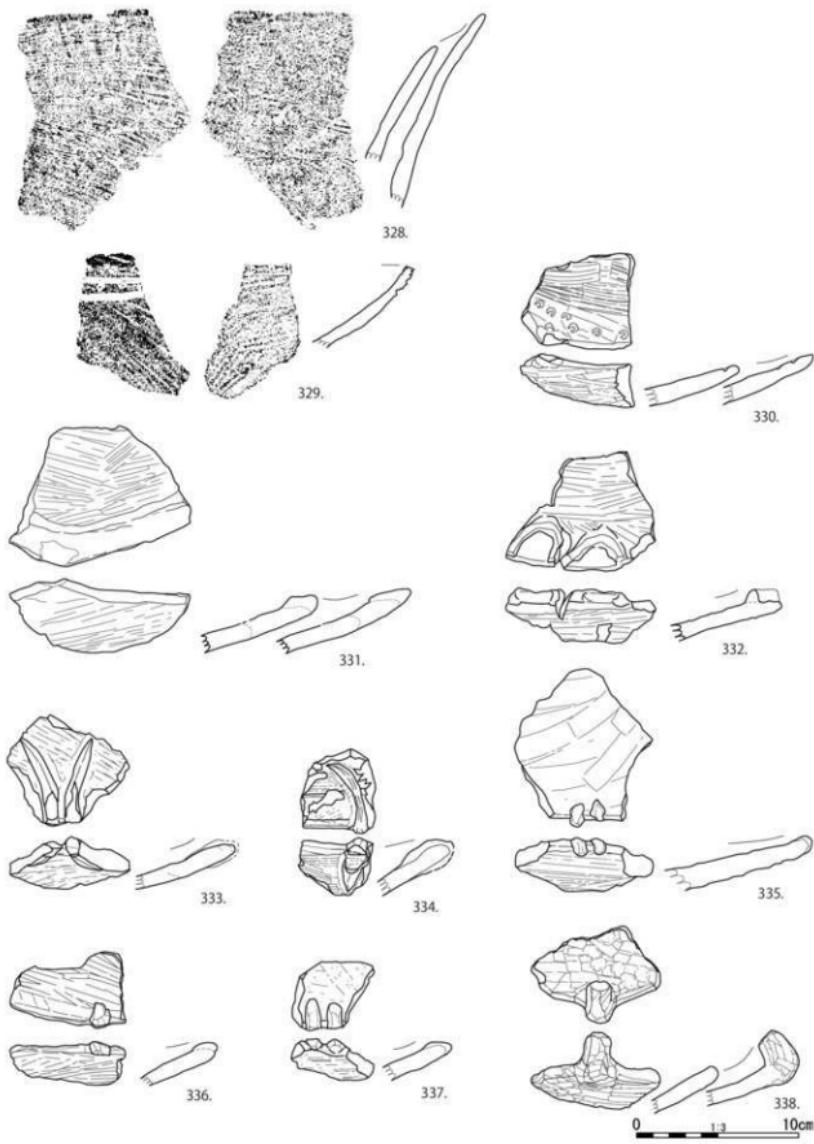
なお底部外面に二次的な焼成痕が残されている資料は確認できなかった。

1類 平底 (第106・107図612~633)

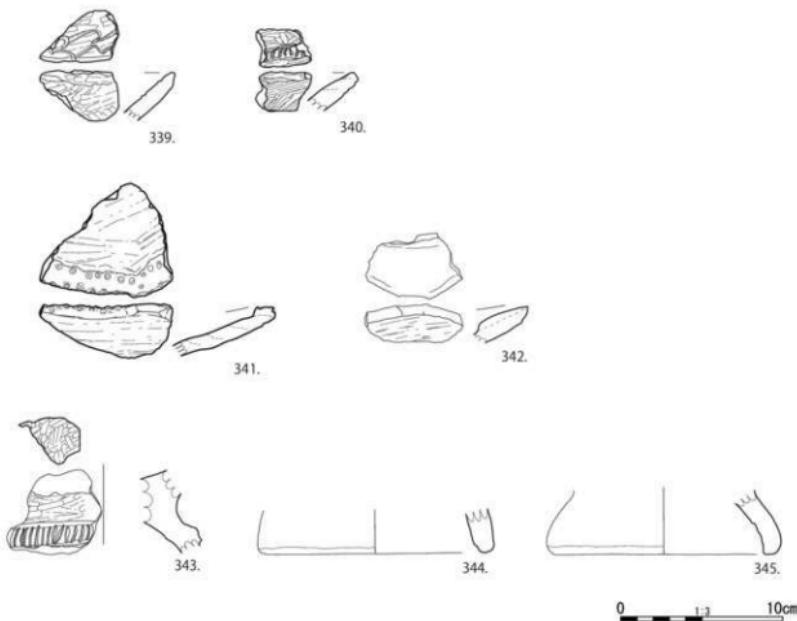
1類の出土量は多いとは言い難い。調整痕とし



第78図 包含層出土の縄文土器 (1) S=1/3



第79図 包含層出土の縄文土器（2） S=1/3



第 80 図 包含層出土の縄文土器 (3) S = 1 / 3

ては貝殻条痕が観察されるため、第 1 群の同一個体である可能性が最も高い。

① (第 106 図 612 ~ 616)

全体的に器壁が厚ぼったい。底径は、ほぼ同じ大きさである。

② (第 106・107 図 617 ~ 626)

張り出し部を持つ一群であるが、①と底径の大きさは変わらない。貝殻条痕による調整が顕著に観察され、第 1 群との親和性が認められる。

③ (第 107 図 628 ~ 633)

平底中で、最も出土量が少ない。第 2 群の底部である可能性が高い。

2 類 上底 (第 107 ~ 109 図 634 ~ 670)

出土底部の主体をなすのが 2 類である。その中でも 2 類③の出土量が卓越している。

器面調整、胎土との関連性でいえば、第 2・4・5・6 群との関連が推測される。

④ (第 107 図 634 ~ 642)

出土量は非常に少ない。いずれの資料も、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。

⑤ (第 108・109 図 643 ~ 653)

調整はミガキの他に、ナデが多用される。底部に二次的な焼成痕がある資料は無い。

⑥ (第 109 図 654 ~ 670)

器形の形成手法は②と同じである。底径も②とほぼ同じ大きさであり、法量は統一性が高い。このうち 668 ~ 670 は脚台である。

■ 土製品

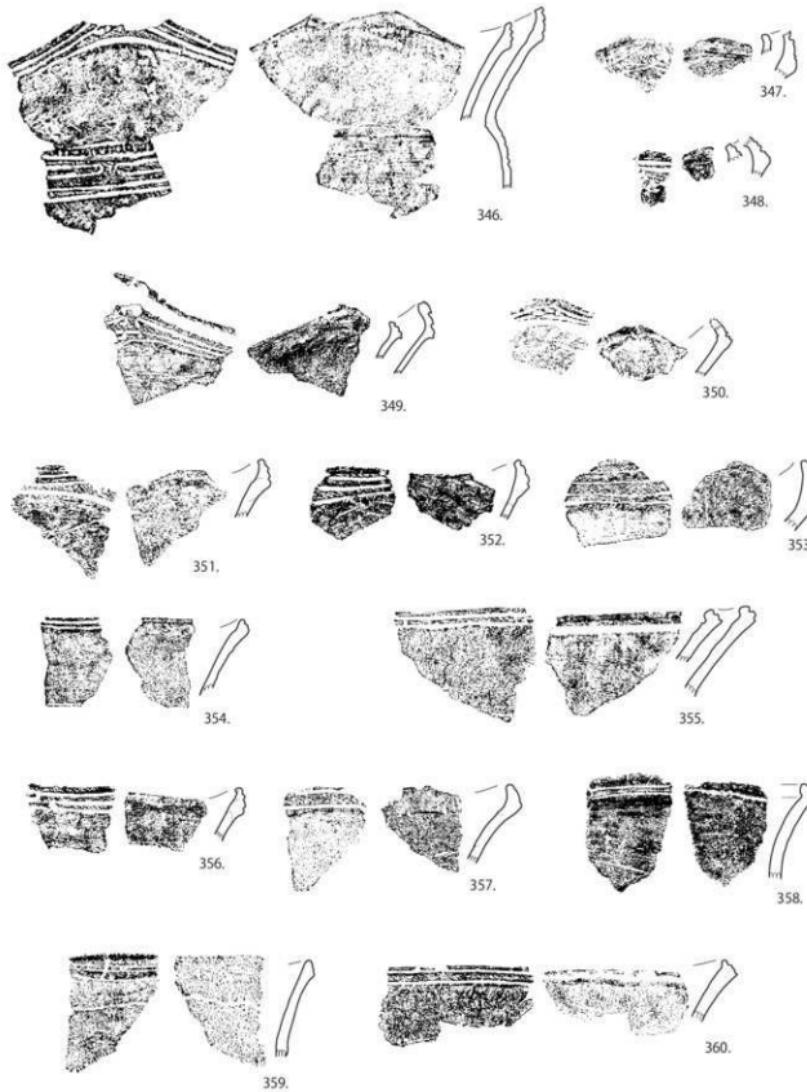
□ 土器片錐 (第 110 図)

第 III 章第 1 節の分類に基づき報告を行なう。

なお、各類型の資料掲載数と、実際の資料出土割合は比例している。

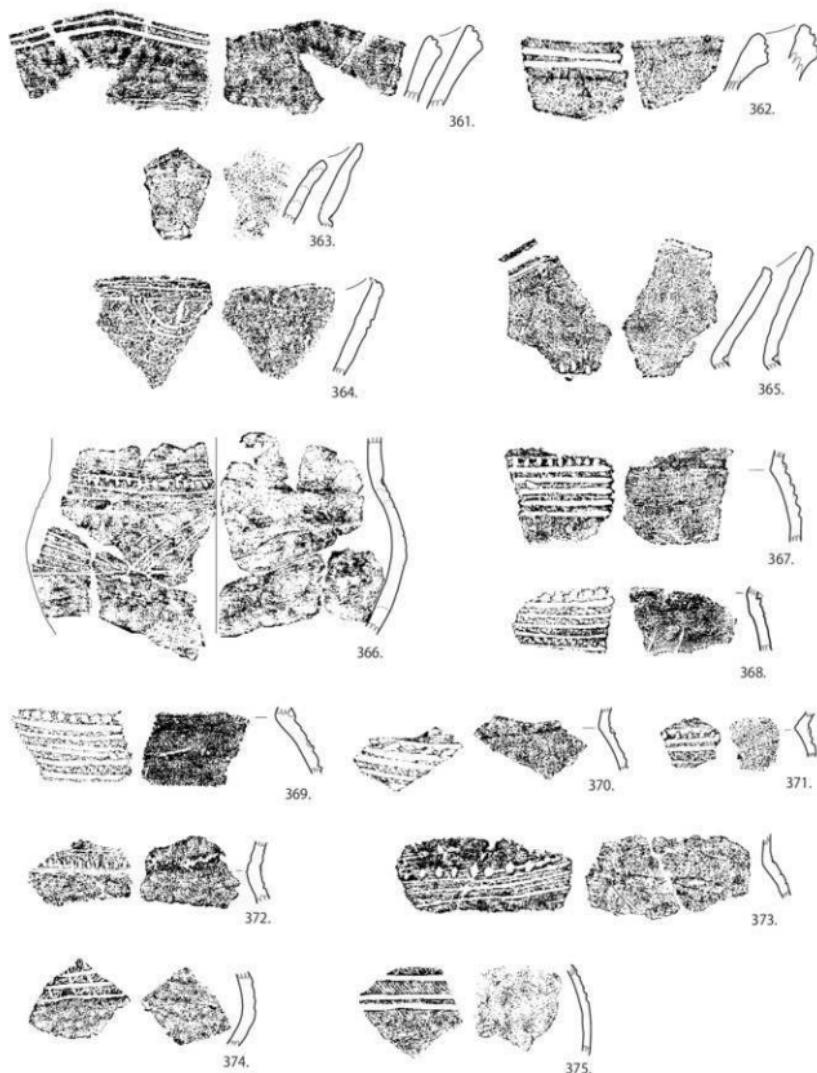
1 類 A (第 110 図 672 ~ 692)

677 ~ 680 に代表される形態であり、野首第



0 1:3 10cm

第81図 包含層出土の縄文土器 (4) S=1/3

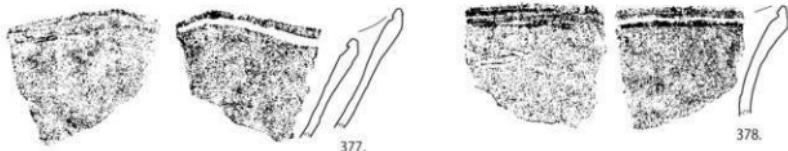


0 1:3 10cm

第82図 包含層出土の縄文土器 (5) S=1/3



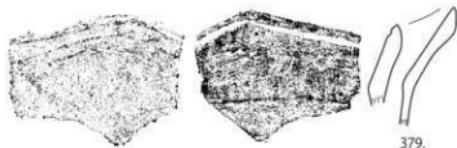
376.



377.



378.



379.



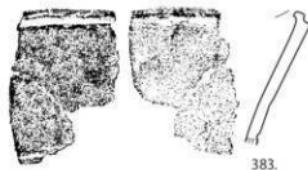
380.



381.



382.



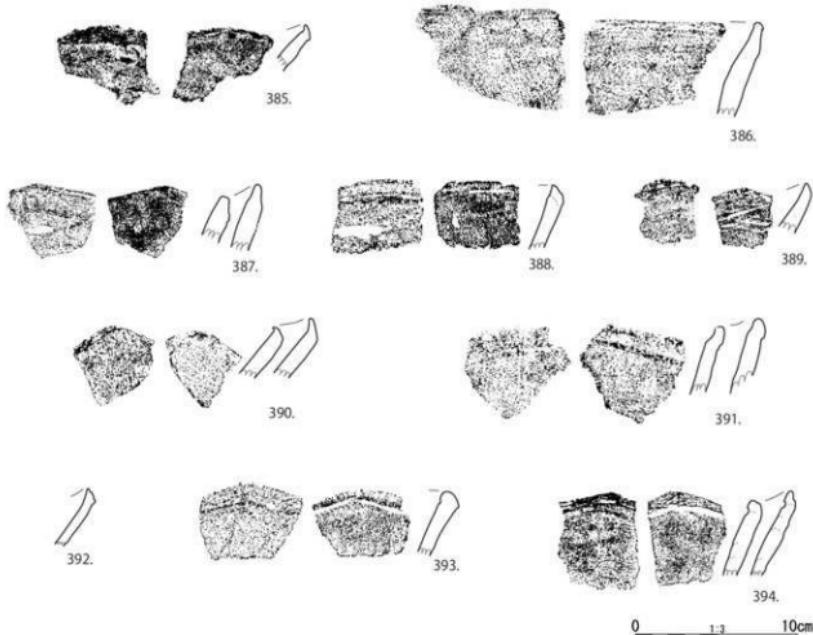
383.



384.



第83図 包含層出土の縄文土器 (6) S=1/3



第 84 図 包含層出土の繩文土器 (7) S = 1 / 3

2 遺跡出土土器片錐の中でも主体となる形態である。調整痕は多彩であることから、比較的長い時期に亘って製作されていたことが窺える。

法量に関しては、大きく 2 つのグループに分類することが出来る。比較的大ぶりなものは、器面に貝殻条痕調整が施されているが、これは第 1 群に顕著に現れる属性である。一方、小ぶりなものは、ナデ調整が主体である事から、第 4 群を転用して製作された可能性が高い。

以上の事柄を勘案すると、1 類 A の中でも、「形態が大ぶりなもの→小ぶりなもの」という大まかな時間的变化が看取されよう。

2 類 A (第 110 図 689~700)

694~696 に代表される形態である。調整痕は多彩であり、比較的長い時期に亘って製作されていたことが窺える。法量は固体ごとの差に乏し

い。

各類型の器面調整痕は多彩であるが、これは比較的長期間に亘って土器片錐を使用していた傍証とも受け取れる。また各類型に固有の器面調整痕は存在しない点から、土器片錐使用当初から、2 つの形態が並存していたと推測される。

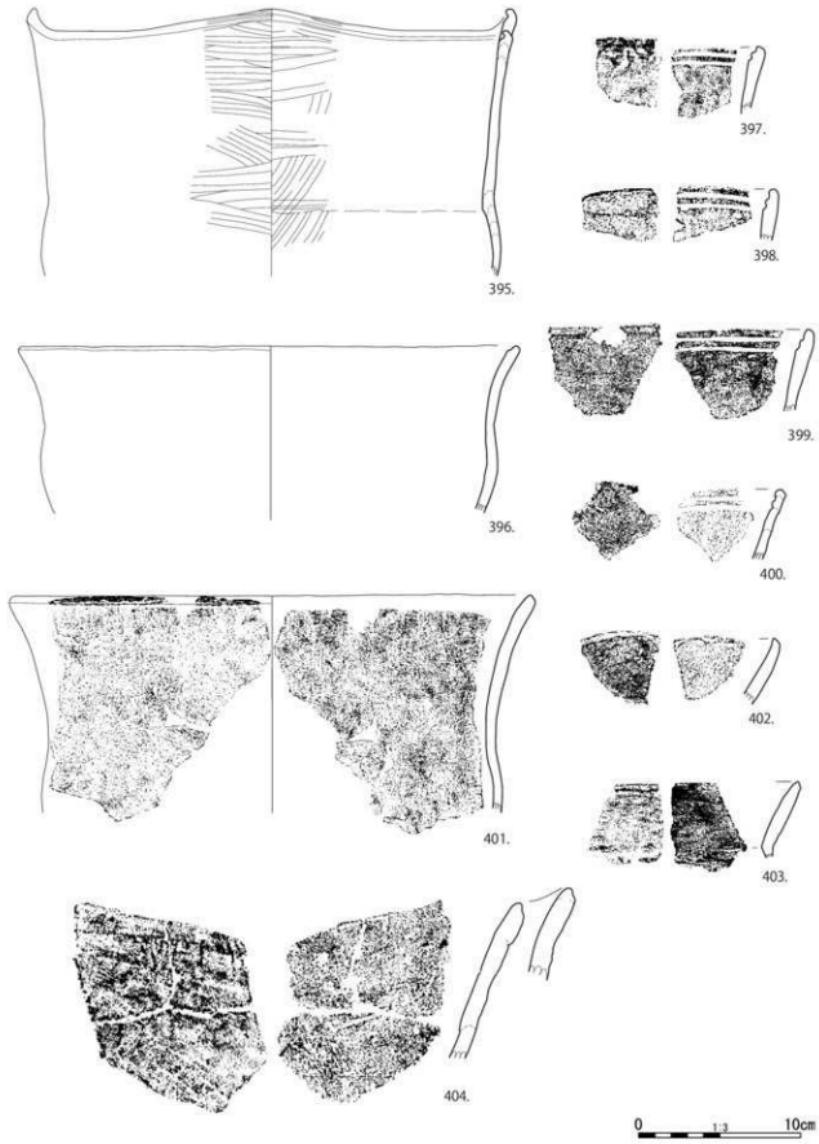
■石器・石製品

□玉類 (第 111・112 図、第 15 表)

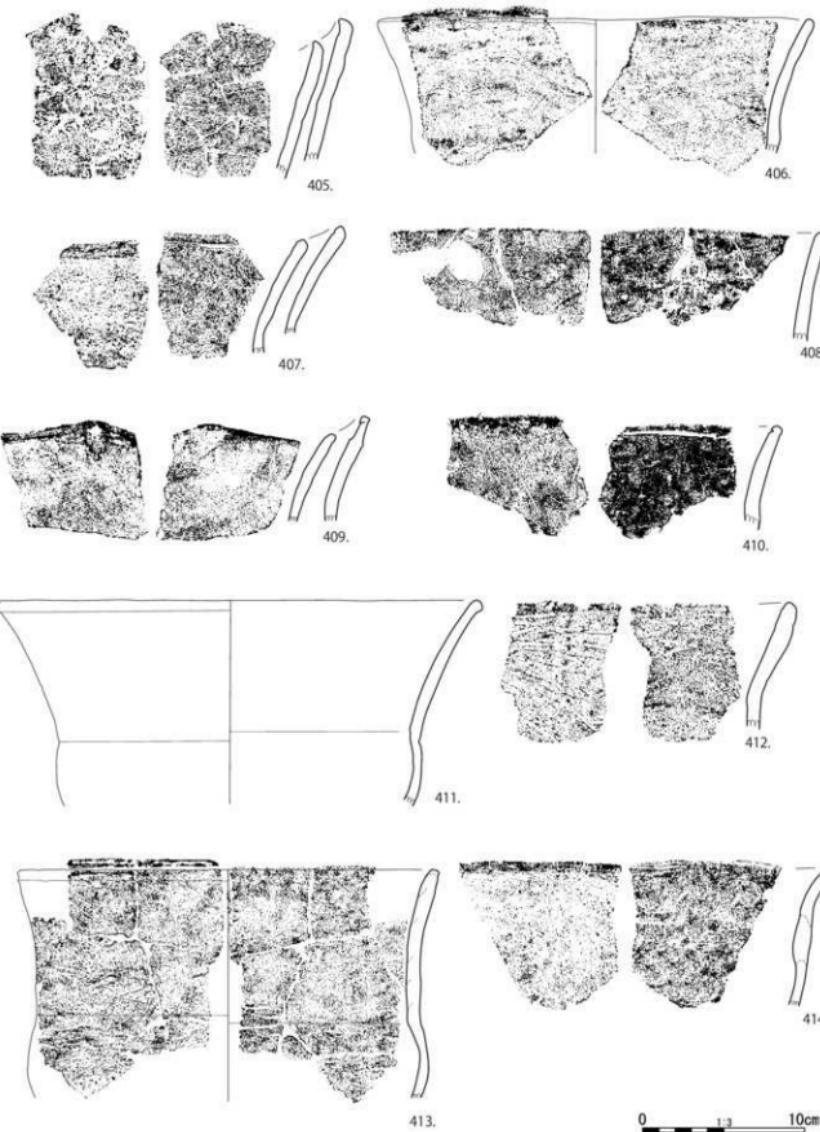
概要 ここでは、石製の玉類を次のように定義する。

玉【使用石材を問わず、穿孔・線刻・研磨などの加工が施された石製遺物】

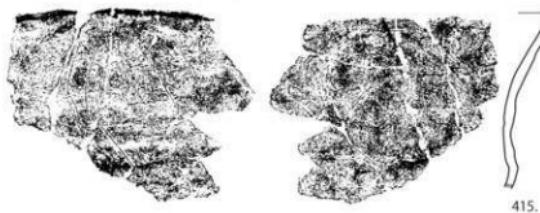
該当資料には装飾品としての用途を強く示唆するものが多い。総計 29 点を認め、七つの類型設定が可能である。ただし、弥生時代以降の遺物も包含する I 層や表土、擾乱中の遺物も含むため、



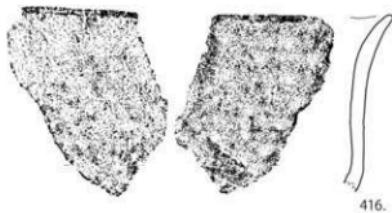
第85図 包含層出土の縄文土器 (8) S=1/3



第86図 包含層出土の縄文土器 (9) S=1/3



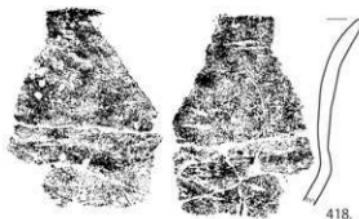
415.



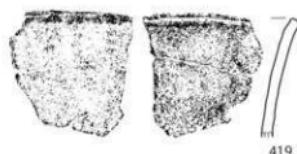
416.



417.



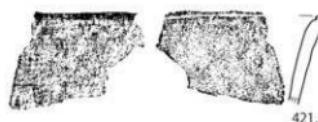
418.



419.



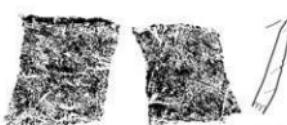
420.



421.



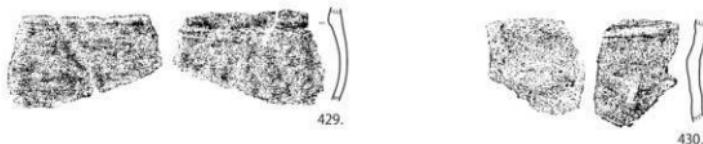
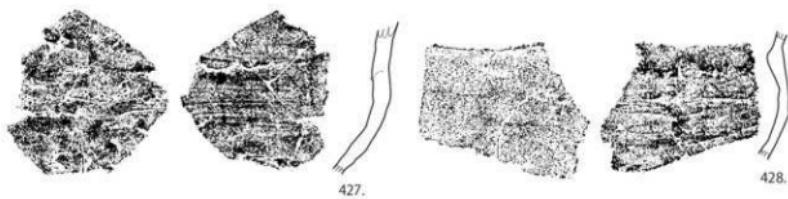
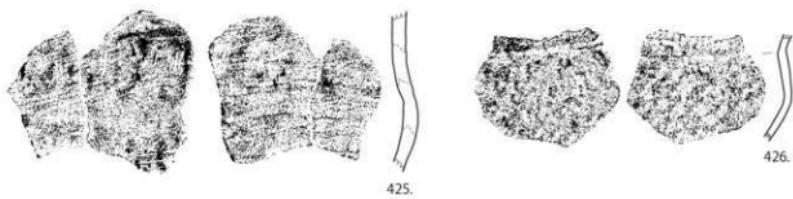
423.



422.



第87図 包含層出土の縄文土器 (10) S=1/3



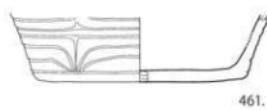
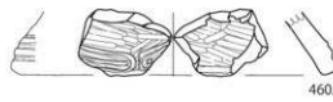
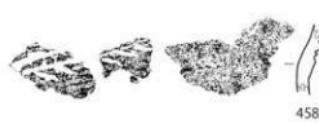
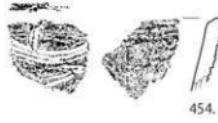
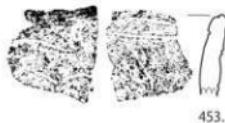
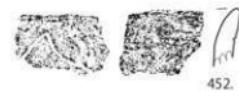
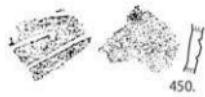
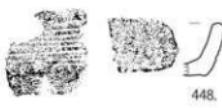
0 1:3 10cm

第88図 包含層出土の縄文土器 (11) S=1/3



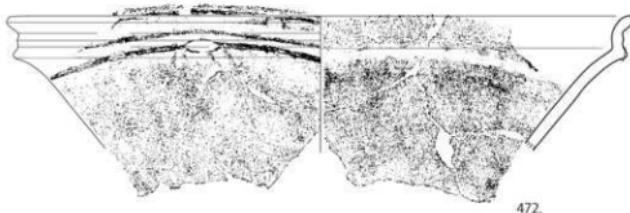
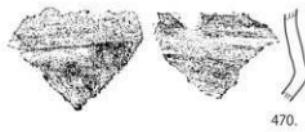
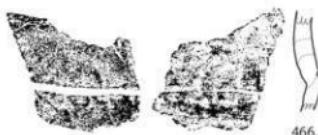
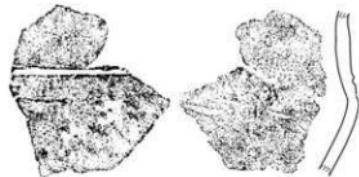
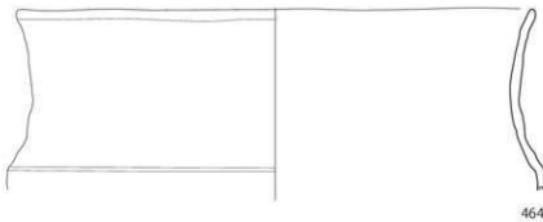
0 1:3 10cm

第89図 包含層出土の縄文土器 (12) S=1/3



0 1:3 10cm

第90図 包含層出土の縄文土器 (13) S = 1 / 3



0 1:3 10cm

第91図 包含層出土の縄文土器 (14) S=1/3

厳密な時代・時期の判定が困難な資料もある。なお、各類型の名称は、大枠では鈴木克彦氏の設定した体系（文献 19）に準拠し、逸脱資料については大坪志子氏の論考（文献 20・21）を参照したほか、本報告書に独自の名称を与えたものもある。また石材同定に関して、大坪志子氏を通じて弥生時代以降の玉類を含めた 46 点中 38 点について福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎氏による化学分析が実施された。本報告書では、明確な判定結果が出たものについては、化学分析の同定に従い、他については肉眼観察の所見を基にした記載をおこなった。

観察所見 以下、七つの類型に分け所見を記す。
I類：縄文丸玉・小玉（第 111 図 704～710）

7 点確認されており、全て片側からの穿孔を主とする技術的特徴を共有する。全品糸魚川・青海産と思しきヒスイ輝石を用いる。肉眼観察では 708 のみ判断に迷ったが、化学分析の結果によりヒスイ輝石との判定結果が出た。706 は被熱が原因と推定される劣化が激しい。

鈴木分類に従えば、長軸 1cm を境に、704～707 が丸玉、708～710 が小玉と認定できる。7 点中 3 点は竪穴住居跡からの出土であり、707 が古墳時代の竪穴住居跡であるのを除いては、いずれも縄文時代後期後葉の遺構である（707：SA18、704：SA33、710：SA47）。

710 は覆土上層からの出土であるが、704 は床面付近からの出土であることから、およそ縄文時代後期後葉の所産と考えてよかろう。B 区から出土した他の資料もおよそ同時期と捉えたい。

705 は黒色土が表面の間隙に付着している。707 の小さな方の孔は周囲をやや破損している。ガジリを受けにくい部位でため、当時の破損か。

いずれの資料も線状痕を残さない丁寧な研磨が施される。

II類：縄文管玉（第 111 図 703）

1 点確認された。ヒスイ輝石を用いる。シルエットは胴が張るエンタシス状を呈する。貫通孔の形状は両側からの穿孔により、中央付近でくびれる鼓状の縦断面形をなす。被熱のためか激しく風化・劣化している。現代の擾乱坑の付近から出土して

おり、観察される被熱痕跡は最近のものである可能性もある。縄文時代後期後半の集落跡を擁する C 区からの出土であることを考慮すると、縄文時代後期後葉の編年的位置付けが考えられる。

III類：縄文勾玉（第 112 図 720・721・722・723・724）

722 は、縄文勾玉の製作途上品と考えられるもので、側面から切り目状の加工が施される。側縁に研磨加工の作業単位面、線状痕を明瞭に残し、板状素材を用いることなどから、「コの字勾玉」（文献 22）ないし E 字形を目指した可能性が指摘される。藻科哲男氏により結晶片岩様綠色岩（文献 23）とされてきた岩石を用いている。化学分析では含クロム白雲母岩と判定された。コの字勾玉が出土した鹿児島県上加世田遺跡（文献 24）・大坪遺跡（文献 25）の共伴土器が上加世田式～入佐式古段階であることを考慮して縄文時代後期後葉～終末の編年位置付けが妥当であろう。

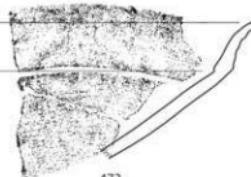
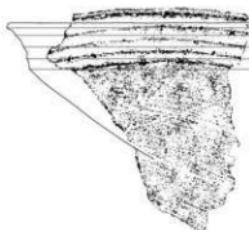
黒灰色滑石製の 721 も、出土状況から厳密な時期判定はできないものの、技術的特徴から、少なくとも縄文時代後期～晩期の時期に収まる資料と考えられる。概報 II（文献 26）図 9 の 3 で滑石製と表記した資料である。

これらに関連する可能性の高い資料として、723・724 の両品がある。いずれも含クロム白雲母岩と判定された資料で、724 は分割巣、723 は研磨痕を残す破片である。攻玉に関わるものか興味深い。

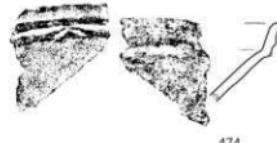
IV類：小珠・垂玉（第 111 図 701・702）

不整橢円形の厚みのある素材に両側からの筒状穿孔がみられる。特筆すべきは、701 に二つの孔が空けられている点である。いずれもヒスイ輝石を用いる。研磨による成形と推定されるが、線状の擦痕は認められない。鈴木分類に沿えば、長軸 3cm を境に、701 は小珠、702 は垂玉と認定できる。

701 は A 区の SX01 の床面付近からの出土であり、縄文時代後期中葉の丸尾式に伴う遺物と評価できる。なお、701 は概報 II（文献 26）の図 9 の 1 として提示したもので、当時は「硬玉製」と表記した資料である。702 は B 区の表土中から



473.



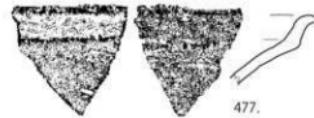
474.



475.



476.



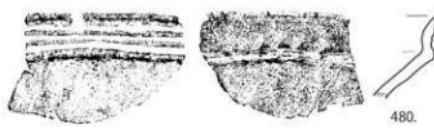
477.



478.



479.



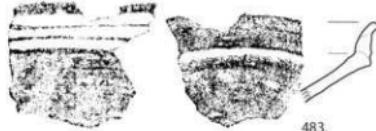
480.



481.



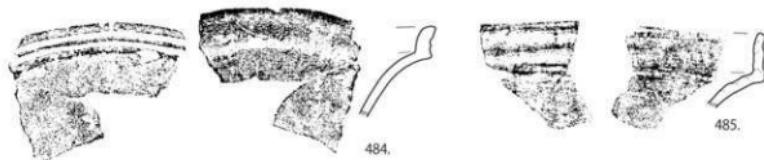
482.



483.



第92図 包含層出土の縄文土器 (15) S=1/3



484.



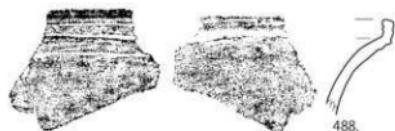
485.



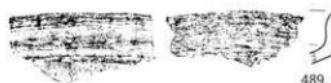
486.



487.



488.



489.



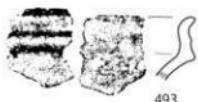
490.



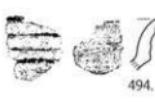
491.



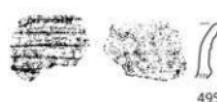
492.



493.



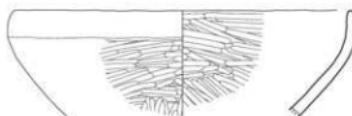
494.



495.



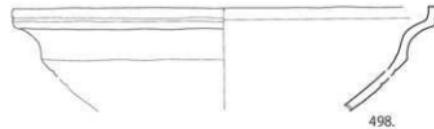
496.



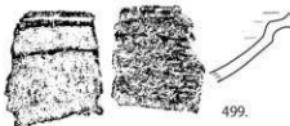
497.

0 1.3 10cm

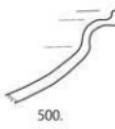
第93図 包含層出土の縄文土器 (16) S=1/3



498.



499.



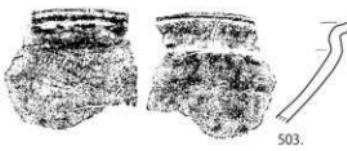
500.



501.



502.



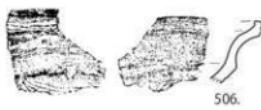
503.



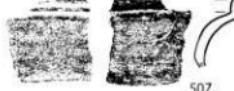
504.



505.



506.



507.

508.



509.



510.



511.



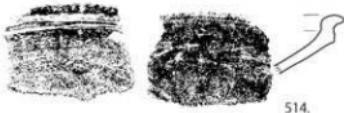
第94図 包含層出土の縄文土器 (17) S=1/3



512.



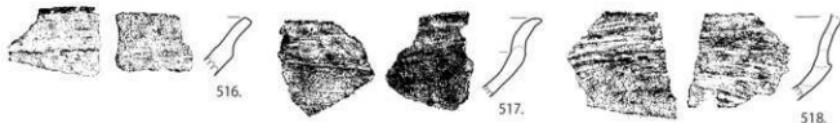
513.



514.



515.



516.



517.

518.



519.



520.



521.



522.



523.



524.

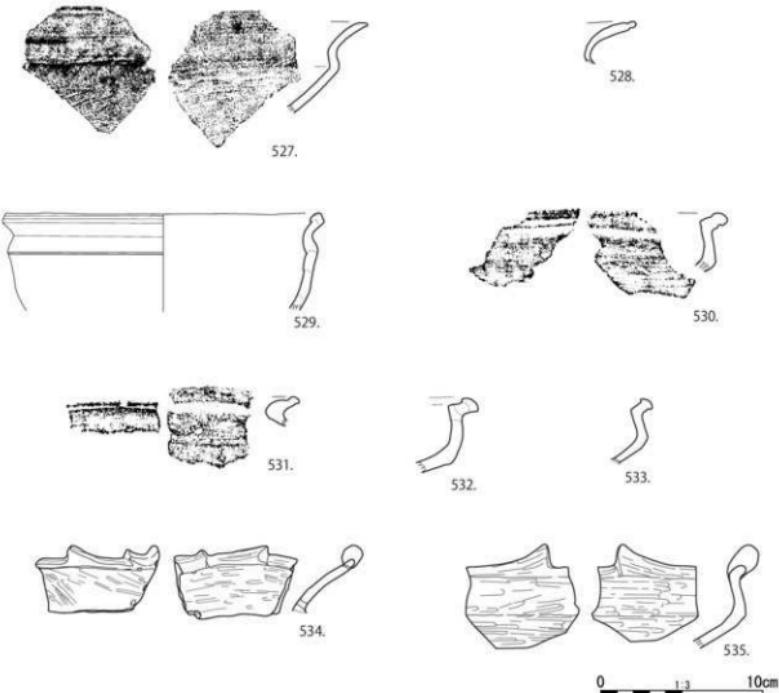


525.



0 1:3 10cm

第95図 包含層出土の縄文土器 (18) S=1/3



第 96 図 包含層出土の繩文土器 (19) S = 1 / 3

の出土であり、時期は絞り込めないが、縄文時代後期中葉から後葉の範囲に収まる可能性が高い。

V類：紡錘形小型垂飾 (第 111 図 711 ~ 719)

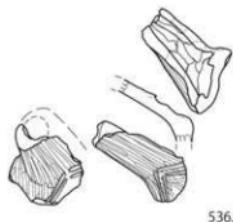
紡錘形ないし略長楕円形を呈し、体部に刻み(線刻)が施される一群。体部表面に線刻、上端に穿孔を施す一群(A類)、体部側面に線刻がなされ、一端が加工によって開放され、Y字状を呈する資料(B類)、その他(C類)に細分される。6点確認された。これら以外にA類ないしB類の未成品・素材と考えられる資料が3点認められる。

A類 712・713は、淡緑色の滑石ないし蛇紋岩を用い、研磨によって整形される。両側から穿孔がなされ、鼓状の縦断面形をなす。器体は縱方向にやや湾曲する。712は、体部表面に1条の線刻が施され、線刻面と他の表面とは風化度に差が

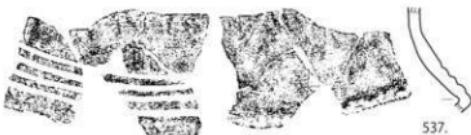
みられるが、使用当時のものであろう。713も穿孔箇所のやや下側に、1条の線刻を施すが、下半部にも若干、線刻を試みた痕跡が認められる。上端部を折損する。

B類 711は、1か所に穿孔が施され、体部右側面に2条の線刻が観察される。上端部穿孔は両側からなされるが、中央付近に明確な稜線を形成しない。線刻箇所は異なるが、技術的特徴はA類と共通する。淡緑色滑石製。

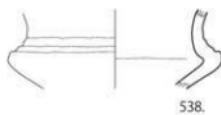
C類 素材や穿孔箇所などはA類に類似するが、穿孔方法が異なり、両側から擂鉢状の穿孔を施す一群である。718は、研磨により整形する。1箇所に片側からの穿孔を施すが、器体長軸の中心線上からわずかに左にズレているためか、作業を中止している。肉眼観察では淡い色調の緑色岩と判



536.



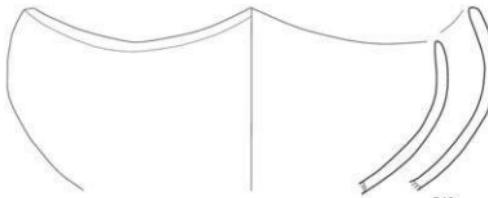
537.



538.



539.



540.



541.



542.



543.



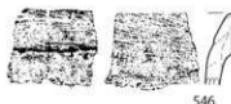
544.



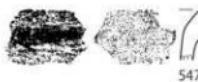
第97図 包含層出土の縄文土器 (20) S=1/3



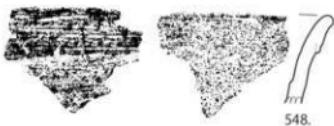
545.



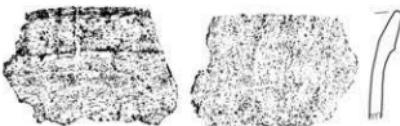
546.



547.



548.



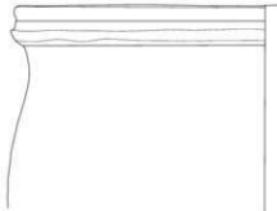
549.



550.



551.



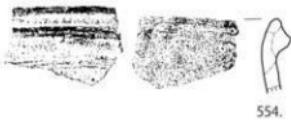
552.



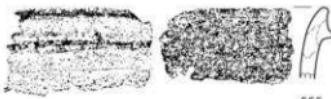
553.

0 1:3 10cm

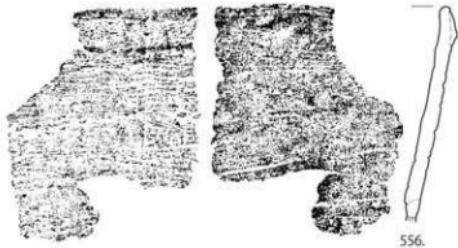
第98図 包含層出土の縄文土器 (21) S=1/3



554.



555.



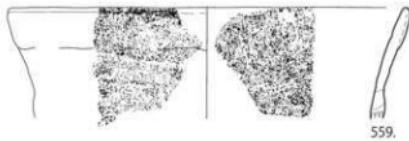
556.



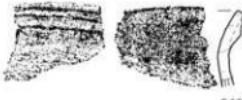
557.



558.



559.



560.



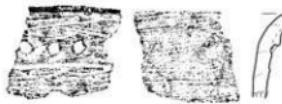
561.



562.



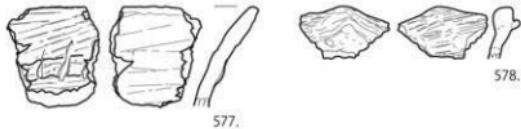
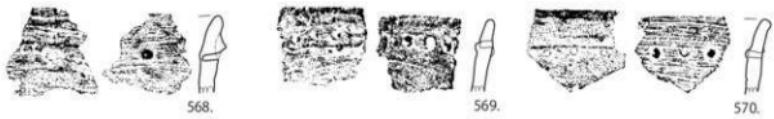
563.



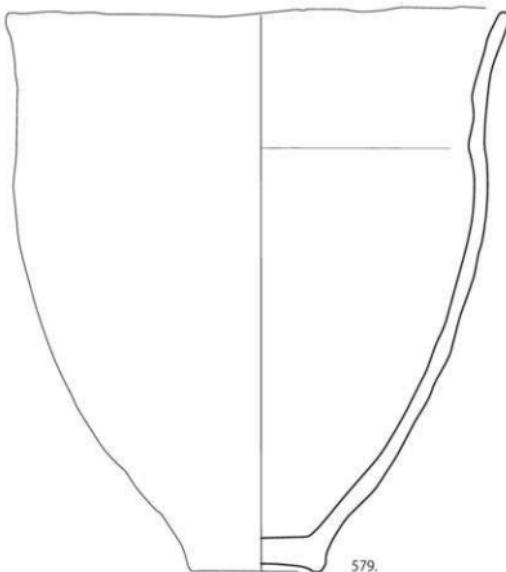
564.



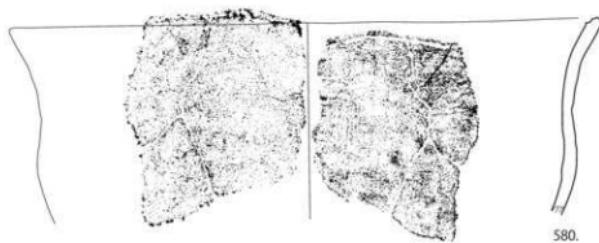
第99図 包含層出土の縄文土器 (22) S=1/3



第100図 包含層出土の縄文土器 (23) S=1/3



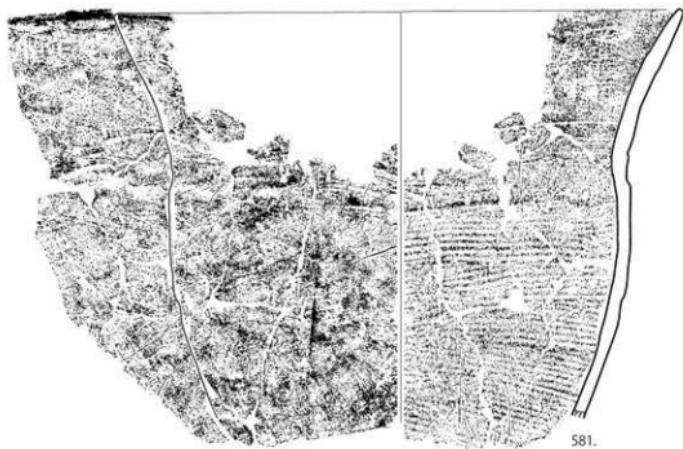
579.



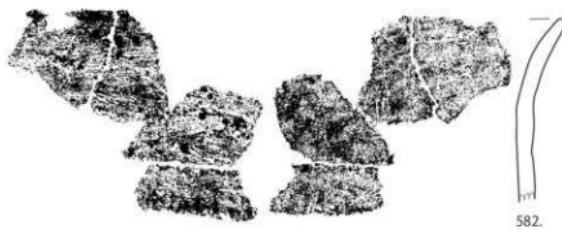
580.

0 1:3 10cm

第101図 包含層出土の縄文土器 (24) S=1/3



581.



582.



583.



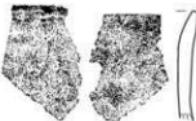
584.



第 102 図 包含層出土の縄文土器 (25) S = 1 / 3



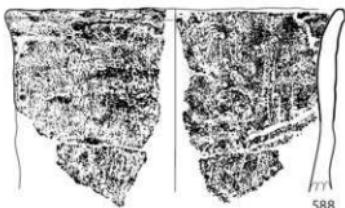
585.



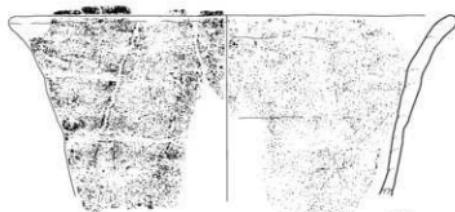
586.



587.



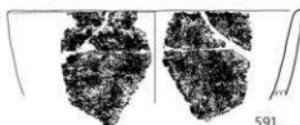
588.



589.



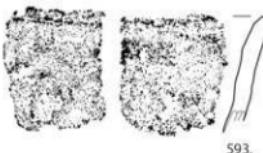
590.



591.



592.



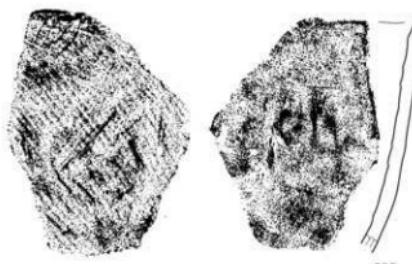
593.



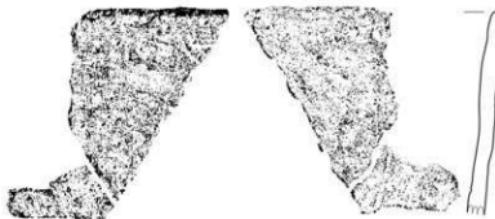
594.



第 103 図 包含層出土の縄文土器 (26) S = 1 / 3



595.



596.



597.



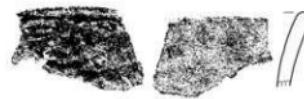
598.



599.



600.



601.



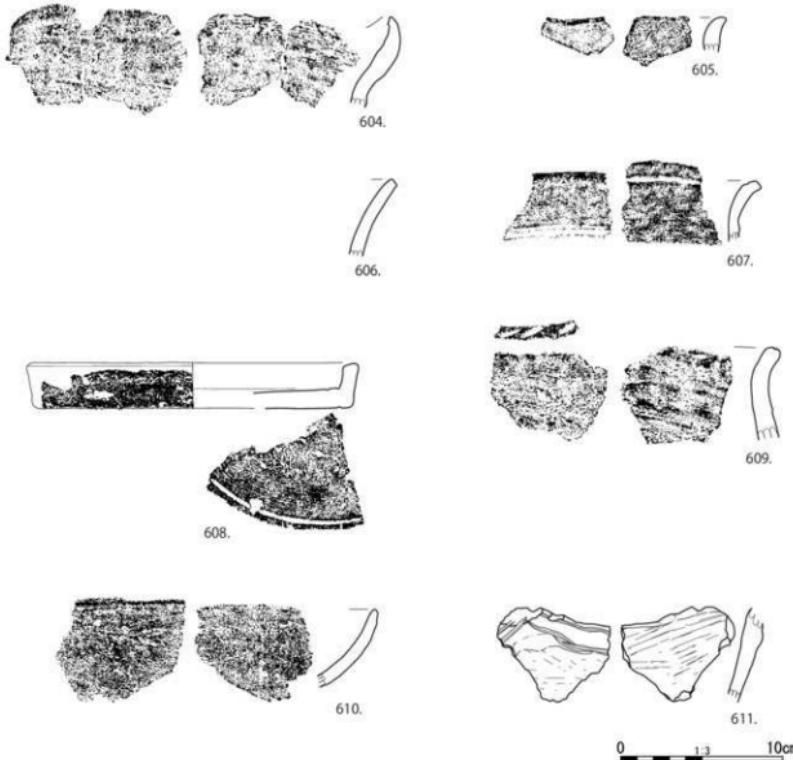
602.



603.



第 104 図 包含層出土の縄文土器 (27) S = 1 / 3



第105図 包含層出土の縄文土器 (28) S = 1/3

断したが、化学分析ではヒスイ輝石との結果が出ている。概報II(文献26)図9の2で蛇紋岩製と表記した資料である。719は、およそ半分が折損しているが、718と同じカテゴリーに含まれる可能性が高い。黒色頁岩製。

未完成 いずれもB区からの出土でチャートに似た淡緑色の石英質石材を用いる。4点ともに研磨整形が施され、716はより完成品に近い。714・715・716の表面は、わずかに線状痕を残すのみで、丁寧に磨かれている。717はこれらの製作に伴う破片であろう。玉714・715・717は包含層(第I層)からの出土であるが、716は第57

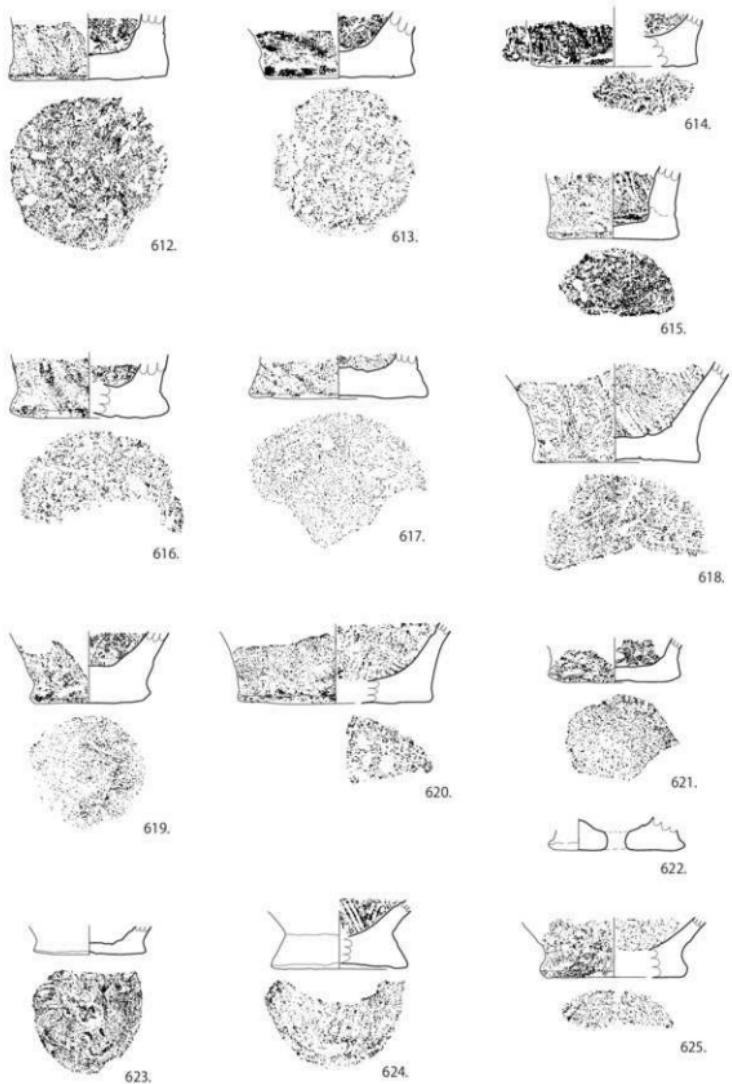
号土坑からの出土である。

A～C類および未完成・素材を含む小型垂飾の一群と共に伴する土器等は、遺構に伴う資料がほとんどないことから不明であるが、包含層中に最も多い縄文時代後期後葉の土器群とセットである可能性が有力である。ただし、熊本県ワクド石遺跡の類例などを考慮すると、後期終末～晩期前半に下る可能性もある。

VI類：楕円形小型垂飾(第112図玉725～728)

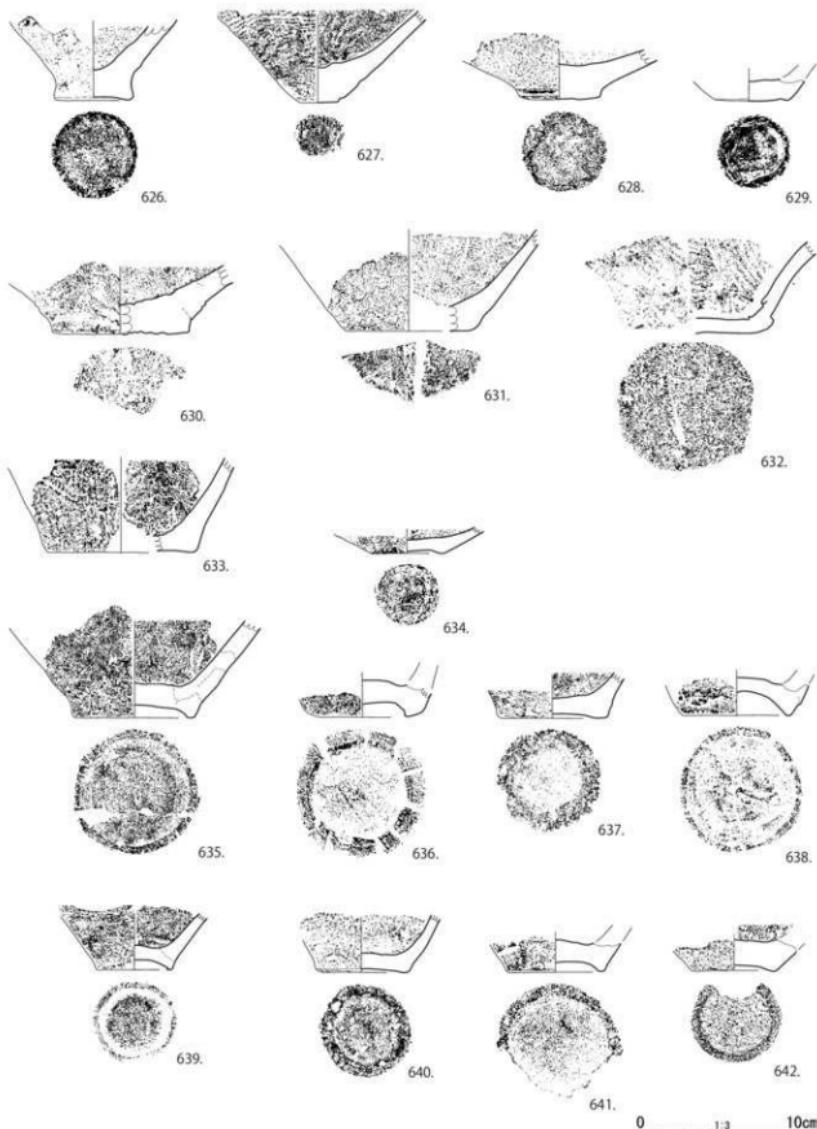
楕円形ないし橢円長方形のシルエットを有する一群をまとめた。4点を数える。

725は黒色の頁岩(I群)を用い、基本的素材

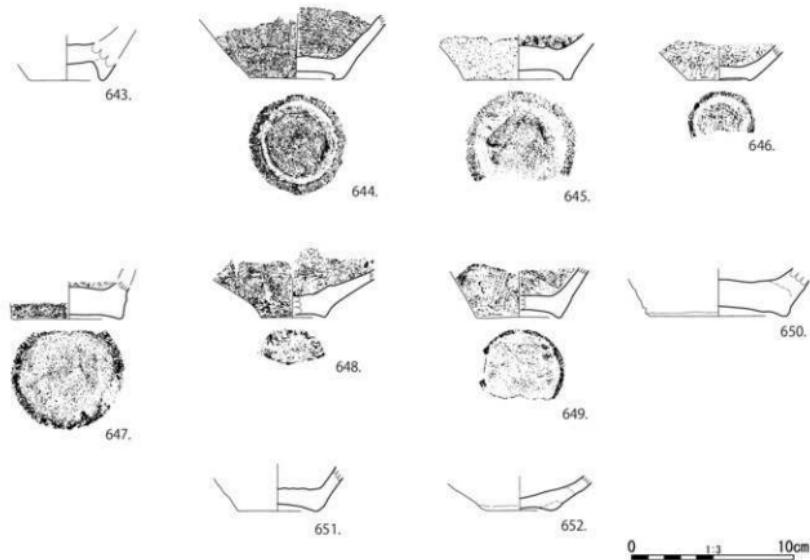


0 1:3 10cm

第106図 包含層出土の縄文土器 (29) S=1/3



第 107 図 包含層出土の縄文土器 (30) S = 1 / 3



第108図 包含層出土の縄文土器 (31) S = 1/3

形状を活かすが側面に若干の面取りを施す。穿孔は2箇所に観察されるが、一方は貫通しない。貫通する孔は両側からの穿孔である。727も725に類するがおよそ半分を欠損する。1箇所認められる孔は両側からの穿孔による。風化が激しく表面の観察は困難であるが、やはり素材礫の形状を活かしたものであろう。726も風化の進んだホルンフェルスを素材とするが、前二者に比べ、素材の変形度は高い。周縁は丁寧な面取り整形がなされ、表裏面も研磨されている可能性がある。ただし、1箇所観察される孔は貫通しておらず。その位置も中心線よりズレている。

728は残存する部分に穿孔はみられないが、素材形状は前三者と共通する。切目石錘に共通するような線刻が数条施される。黒色の頁岩製。

VII類：大型垂飾（第112図729）

楕円ないし長楕円形の自然礫をそのまま用いるか、1箇所に穿孔を施す一群である。1点確認された。729は、砂岩の自然礫に両側からの穿孔

を1箇所施す。穿孔の技術的特徴は、V-C類と共通する。ここでは、大型垂飾の名称を用いるが、大坪氏の規定（文献21）とは若干ニュアンスが異なる。

□有孔石・軽石製品（第113図）

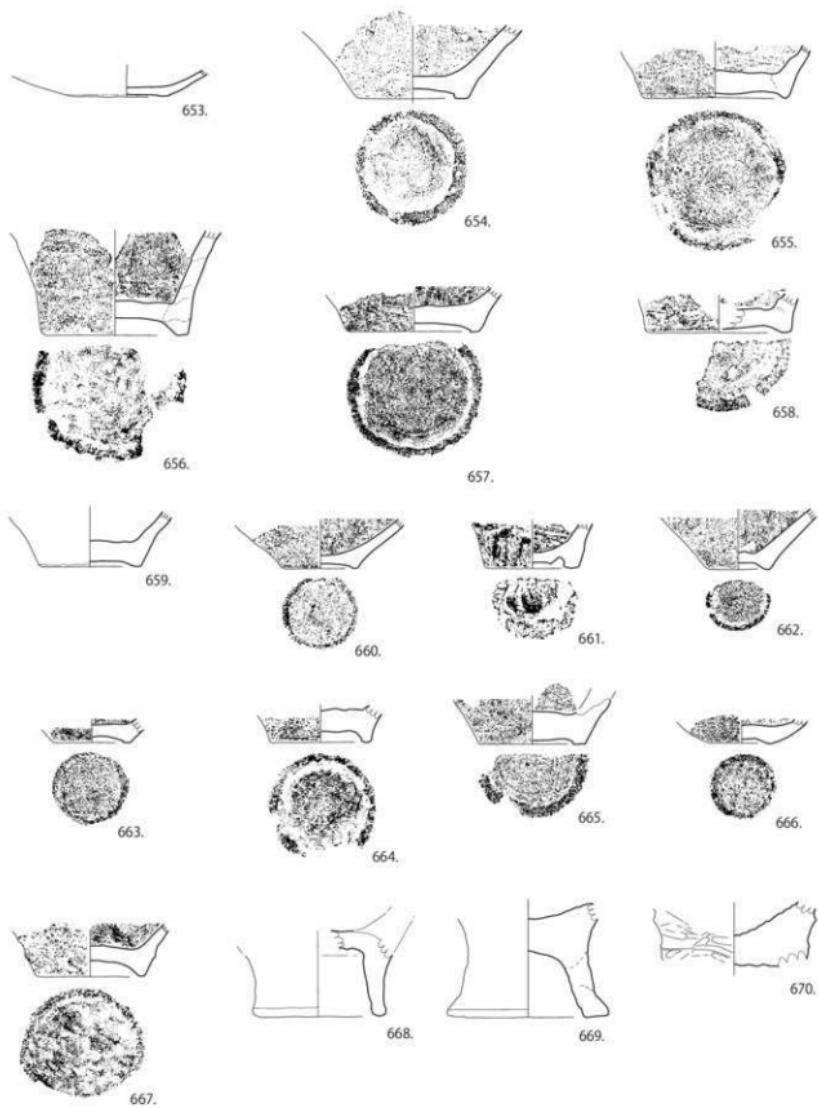
概要 少量ではあるが、孔の開いた自然礫、軽石製品も認められる。732・733はいずれも軽石製品で、若干の整形を施している。

□石錘（第114～120図）

概要 第I層以上から出土した石錘の大半を縄文時代後期以降の所産と判断したが、第II層以下からの上方拡散を考慮すべき資料も見受けられる。

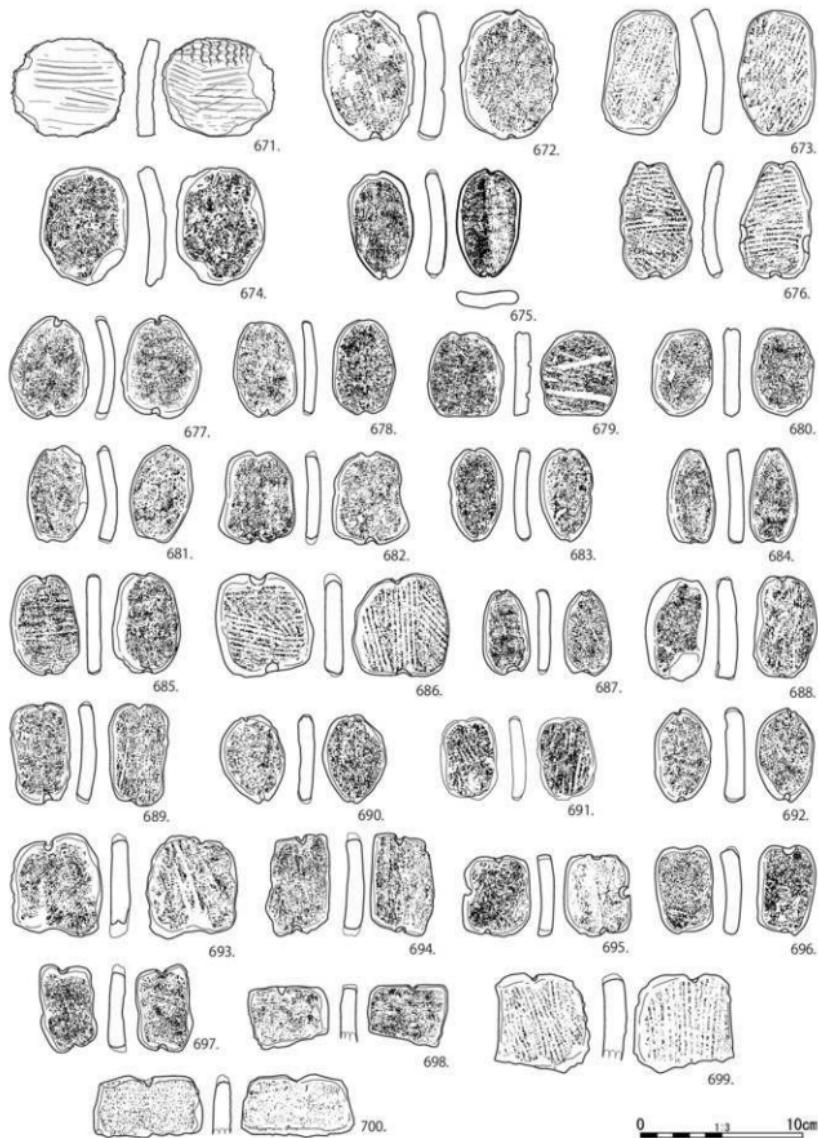
そうした資料の一部については、すでに第一分冊において5点を報告しているが（文献1：165頁756～760）、本書においても、石錘を含めた縄文早期以前に属する石器の追加資料を報告したい。

それら技術・形態的に縄文早期以前に属する資料を除いた第I層以上出土の石錘は総計583点を



第109図 包含層出土の縄文土器 (32) S = 1 / 3

0 1:3 10cm



第110図 包含層出土の縄文土器 (33) S=1/3

0 1:3 10cm

第1表 穫穴住居跡出土の縄文土器観察表(1)

編號	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點・層位	調査・文様 外側 内面	法量(cm)			色調		胎土	備考
							口径	底径	器高	外側 内面	外側 内面		
1	縄文土器	鉢	口縁部	95	S01	日向原南一ノゾー2号墳 斜坡部縄文	—	—	—	褐色	褐色	白色	外層大入付唇
2	縄文土器	鉢	口縁部	722	S01	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
3	縄文土器	鉢	口縁部	926	S01	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	外層大入付唇
4	縄文土器	鉢	口縁部	124	S01	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	内・外層大入付
5	縄文土器	鉢	口縁部	20	S01	日向原南	日向原南	—	—	褐色	褐色	白色	外層大入付唇
6	縄文土器	鉢	口縁部	869	S01	玉串	玉串	—	—	赤褐色	赤褐色	白色	外層大入付唇
7	縄文土器	鉢	口縁部	219	S01	日向原南一ノゾー	日向原南一ノゾー	—	—	褐色	褐色	白色	外層大入付唇
8	縄文土器	鉢	底	100	S01	ナデ一箇頭に平行斜縞 押文	ナズリ	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外層大入付唇
9	縄文土器	鉢	底	924 + 930 + 936	S01	ナデ?	日向原南一ノゾー	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	
10	縄文土器	鉢	底	563 + 863 + 1107	S01	玉串	ナデ	—	—	褐色	褐色	白色	白色透明白
11	縄文土器	鉢	口縁部	445 + 562	S01	玉串や口縁部に竹文 ナデ一箇頭	ナデ一箇頭	—	—	褐色	褐色	白色	内・外層大入
12	縄文土器	鉢	底	370	S01	ヘラナデ	ヘラナデ	—	0.0	—	褐色	褐色	白色
13	縄文土器	腰付鉢	底部	204	S01	玉串、口縁部に竹文 玉串や口縁部に竹文	玉串や口縁部に竹文	—	—	褐色	褐色	白色	腰付
14	縄文土器	腰付鉢	底部	866	S01	玉串	玉串→2列の竹文	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	
15	縄文土器	腰付鉢	底部	517	S01	玉串	玉串	—	—	褐色	褐色	白色	
16	縄文土器	鉢	口縁部	605 + 861 + 867	S01	ナデ	ナデ一箇頭	—	—	赤褐色	褐色	白色	腰付
17	縄文土器	腰付鉢	底部	145	S01	玉串ナデ? (1列横に斜縞 點付)	ナズリ	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	
18	縄文土器	鉢	口縁部	336	S01	玉串、口縁部に竹文 玉串や2列の竹文	玉串や2列の竹文	—	—	灰褐色	褐色	白色	内・外層大入
19	縄文土器	鉢	口縁部	580	S01	玉串	玉串→3列の竹文	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	内・外層大入
20	縄文土器	腰付鉢	底部 (内付部)	22	S01	ナデ一箇頭	—	—	—	褐色	褐色	白色	
21	縄文土器	腰付鉢	底部	86	S01	玉串	玉串→一箇頭斜縞 点付	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	内・外層大入
22	縄文土器	鉢	口縁部	980	S01	玉串	玉串→3列の竹文	—	—	灰褐色	褐色	赤褐色	内・外層大入
23	縄文土器	腰付鉢	底部	500	S01	ナデ	ナデ	—	—	褐色	褐色	赤褐色	白色
24	縄文土器	腰付鉢	底部	441	S01	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	内・外層大入
25	縄文土器	腰付鉢	底部	976 + 987	S01	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	赤褐色
26	縄文土器	腰付鉢	底部	492	S01	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	赤褐色
27	縄文土器	腰付鉢	底部	495	S01	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	
28	縄文土器	腰付鉢	底部	122	S01	地た溝しい	地た溝しい	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	
29	縄文土器	腰付鉢	底部	501	S01	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	腰付
30	縄文土器	腰付鉢	底部	22	S01	ナデ	ナデ	—	—	褐色	褐色	白色	腰付
31	縄文土器	腰付鉢	底部	503	S01	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	
32	縄文土器	腰付鉢	底部	474 + 1006	S01	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	
33	縄文土器	鉢	腰付口縁部	581	S00	日向原	ナズリ	—	—	褐色	褐色	白色	
34	縄文土器	行付鉢	底部	501	S01	玉串	玉串→竹文	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	白色
35	縄文土器	鉢	口縁一側部	501	S01	日向原	日向原	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	
36	縄文土器	鉢	口縁部	5420	S01	ナデ	ナデ	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
37	縄文土器	鉢	底部	5425	S01	ナデ	ナデ	—	—	褐色	褐色	赤褐色	

第2表 穫穴住跡出土の縄文土器観察表(2)

器種名	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點・標位	調整・文様 外側	内面	法量(cm)			色調		胎土	備考	
								口径	底径	高さ	外側	内面			
50	圓文土器	深鉢	C38E	58	S421	ナゲ	ナゲ	—	—	—	灰褐色	褐色	砂利土	西高天ノ村	
51	圓文土器	深鉢	B38E	56	S421	玉子形	玉子形	—	—	—	褐色	黄褐色	砂利土	西高天ノ村	
52	圓文土器	深鉢	B38E	55	S421	玉子形	玉子形	—	—	—	褐色	黄褐色	白色透明白	西高天ノ村	
54	圓文土器	深鉢	C38E	1008	S425	玉子形→弦文	玉子形	—	—	—	褐色	褐色	黑色透明白、白色		
55	圓文土器	深鉢	C38E	—	S425	ヘラナギ→弦文	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	砂利土、透明白、本焼	西高天ノ村	
56	圓文土器	深鉢	C38E	128	S425	ナゲ	ナゲ	—	—	—	灰褐色	褐色	砂利土		
57	圓文土器	深鉢	C38E	—	S425	ヘラナギ→弦文	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	本焼	西高天ノ村	
58	圓文土器	深鉢	C38E	—	S425	丁字縦ナギ	丁字縦ナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	透明白、本焼粘土	西高天ノ村	
59	圓文土器	深鉢	C38E	129	S425	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	本焼粘土		
60	圓文土器	深鉢	C38E	60	S425	ナゲ→弦文	ナゲ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	本焼粘土	西高天ノ村	
61	圓文土器	深鉢	C38E	13419	S425	玉子形→2列の内縁文、内縁文→2列の外縁文	玉子形	—	—	—	褐色	褐色	黑色透明白、白色透明白	西高天ノ村	
62	圓文土器	深鉢	C38E	14254	S425	玉子形→2列の内縁文	玉子形	—	—	—	褐色	褐色	砂利土		
63	圓文土器	浅鉢	C38E	138-側面	10009	S425	玉子形	玉子形	—	—	—	灰褐色	灰褐色	透明白	
64	圓文土器	浅鉢	C38-EH	—	S425	玉子形→側面に内縁文	玉子形→内縁文	—	—	—	灰褐色	褐色	砂利土	西高天ノ村	
65	圓文土器	瓶	C38E	7077	S425	ナゲ	ナゲ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	白色		
66	圓文土器	深鉢	底盤	—	S425	ナゲ	ナゲ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	本焼粘土		
67	圓文土器	深鉢	C38E	SW-13	S426	ナゲ→ウチナギ	ナゲ→ウチナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	透明白		
75	圓文土器	深鉢	C38E	137	S426	玉子形	玉子形	1.00±0.10の底盤	—	—	灰褐色	灰褐色	砂利土	西高天ノ村	
76	圓文土器	深鉢	B38E	144	S426	ナゲ→玉子形	玉子形	—	—	—	褐色	褐色	砂利土	西高天ノ村	
77	圓文土器	深鉢	B38E	3	S426	ナゲ→玉子形	玉子形	—	—	—	褐色	褐色	透明白、白色	西高天ノ村	
78	圓文土器	深鉢	C38E	262	S426	玉子形	玉子形	—	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	西高天ノ村	
79	圓文土器	深鉢	新-側面	254	S426	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	褐色	白色透明白		
80	圓文土器	深鉢	底盤	210	S426	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	本焼粘土		
84	圓文	瓶	C38-EH	543	S427	泡ナギ→ヘラナギ	泡ナギ→ヘラナギ	(3.4)	—	—	—	—	—		
85	圓文土器	深鉢	C38-EH	19	S427	玉子形	玉子形	0.11±	—	—	灰褐色	褐色	白色透明白	西高天ノ村	
86	圓文土器	深鉢	新-側面	00-112	S427	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	砂利土		
87	圓文土器	深鉢	C38	16	S427	ナゲ	ナゲ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	砂利土		
88	圓文土器	深鉢	B38-EH	10+31+72	S427	玉子形	玉子形	—	—	—	灰褐色	褐色	白色透明白	西高天ノ村	
89	圓文土器	深鉢	B38-EH	17+39+	S427	ナゲ	ナゲ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	透明白	内-西高天ノ村	
90	圓文土器	深鉢	B38-EH	60	S427	ヘラナギ	ヘラナギ	—	(7.2)	—	灰褐色	褐色	透明白、砂利土	西高天ノ村	
96	圓文土器	深鉢	C38	2	S428	ナゲ	日加奈縫→ナギ	—	—	—	灰褐色	褐色	砂利土		
97	圓文土器	深鉢	C38	17	S428	ナゲ	丁字縦ナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	本焼粘土		
98	圓文土器	深鉢	B38-EH	12	S428	ナゲ	ナゲ	—	—	—	灰褐色	褐色	白色透明白		
100	圓文土器	深鉢	C38E	120	S431	玉子形→横文	玉子形	—	—	—	灰褐色	褐色	白色透明白、砂利土	西高天ノ村	
101	圓文土器	深鉢	C38E	20	S431	日加奈縫→ナギ	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	褐色	白色	西高天ノ村	
102	圓文土器	深鉢	C38E	118	S431	ナゲ→側面内縁文	ナゲ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	白色透明白、白色	砂利土	
103	圓文土器	深鉢	C38E	87	S431	日加奈縫→ナギ	日加奈縫→ナギ	—	—	—	灰褐色	褐色	砂利土		
104	圓文土器	深鉢	C38E	99	S431	日加奈縫→ナギ	日加奈縫→ナギ	—	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	西高天ノ村	
105	圓文土器	深鉢	C38E	24	S431	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	灰褐色	褐色	白色透明白、砂利土	西高天ノ村	

第3表 穂穴住跡出土の縄文土器観察表(3)

部類No.	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地点・層位	調査・文様 外側 内面	法 量(cm)			色調		胎土	備考
							口径	底径	高さ	外側 内面	外側 内面		
100	縄文土器	深鉢	側面	19	SAS1	ナガリ-3本の平行凹文 ナギ	—	—	—	赤褐色	同褐色	赤褐色	内面丸刃部
102	縄文土器	深鉢	側面-側面	10	SAS1	ヘラナギ	—	—	—	赤褐色	同褐色	赤褐色	内面丸刃部、研磨、内面丸刃部
106	縄文土器	深鉢	C面	37	SAS1	エギテ-2本の内凹線、内凹線	—	—	—	赤褐色	同褐色	赤褐色	側面
109	縄文土器	浅口深鉢	底面	130	SAS1	エギテ	—	—	—	褐色	褐色	褐色	白い透明白
110	縄文土器	深鉢	底面	91	SAS1	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	赤褐色	同褐色	白色	内面透明白、白色透明白
114	縄文土器	深鉢	C面	72	SAS2	エギテ	ヘラナギ	—	—	赤褐色	同褐色	赤褐色	透明白
115	縄文土器	深鉢	C面	11	SAS2	ナギ	ナギ	—	—	同褐色	同褐色	白色	白色透明白
116	縄文土器	深鉢	C面	84	SAS2	羽根状縦-ナギ	ナギ	—	—	同褐色	同褐色	白色	内面丸刃部、白色、内面丸刃部
117	縄文土器	深鉢	C面	50	SAS2	ヘラナギ	ヘラナギ	20.4	—	褐色	褐色	褐色	透明白
118	縄文土器	深鉢	C面	21	SAS2	ナギ	ナギ	—	—	赤褐色	同褐色	赤褐色	内面丸刃部
119	縄文土器	深鉢	底面	—	SAS2	ヘラナギ-横筋指付	ヘラナギ	—	—	赤褐色	同褐色	赤褐色	研磨
120	縄文土器	深鉢	底面	9	SAS2	ナギ	ナギ	—	(14.2)	褐色	褐色	赤褐色	赤褐色
121	縄文土器	深鉢	底面	27 + 61	SAS2	ヘラナギ	羽根状縦-ナギ	—	(8.0)	褐色	褐色	褐色	透明白
126	縄文土器	深鉢	底面	268	SAS3	エギテ-横筋-内凹線	エギテ	—	—	赤褐色	透明白	赤褐色	内面丸刃部
127	縄文土器	深鉢	C面	343	SAS3	エギテ-横筋	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	白色	内面丸刃部
128	縄文土器	深鉢	C面	138-405	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	同褐色	同褐色	白色	内面丸刃部
129	縄文土器	深鉢	C面	138-406	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ-ナギ	—	—	同褐色	同褐色	白色	内面丸刃部
130	縄文土器	深鉢	C面	270	SAS3	ナギ	ナギ	—	—	褐色	褐色	研磨	内面丸刃部
131	縄文土器	深鉢	C面	252-30-サブ	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	褐色	褐色	研磨	内面丸刃部
132	縄文土器	深鉢	C面	138-406	SAS3	ナギ	ナギ	—	—	—	—	—	内面丸刃部
133	縄文土器	深鉢	C面	747-781-005	SAS3	ヘラナギ-ナギ	ヘラナギ	—	—	—	—	—	内面丸刃部
134	縄文土器	深鉢	C面	138-406	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	赤褐色	同褐色	白色透明白、研磨	内面丸刃部
135	縄文土器	深鉢	C面	194	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	同褐色	同褐色	白色	研磨
136	縄文土器	深鉢	C面	138-406	SAS3	ナギ	ナギ	—	—	同褐色	同褐色	白色透明白	内面丸刃部
137	縄文土器	深鉢	底面	220	SAS3	エギテ	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	研磨	内面丸刃部
138	縄文土器	深鉢	C面	138	SAS3	エギテ	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	研磨	内面丸刃部
139	縄文土器	深鉢	C面	64	SAS3	エギテ	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	褐色	透明白
140	縄文土器	深鉢	C面	138	SAS3	エギテ-横筋2本の底 縫合	エギテ	—	—	褐色	褐色	褐色	透明白
141	縄文土器	深鉢	C面	407-729	SAS3	エギテ	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	研磨	内面丸刃部
142	縄文土器	深鉢	C面	309-447-AN K	SAS3	エギテ-横筋2本の底 縫合	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	褐色	内面丸刃部
143	縄文土器	深鉢	底面	205-581	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	同褐色	同褐色	褐色	透明白
144	縄文土器	深鉢	底面	415-602	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	褐色	褐色	白色	内面丸刃部
145	縄文土器	深鉢	底面	231 + 640 + 655	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	同褐色	同褐色	研磨	内面丸刃部
146	縄文土器	深鉢	底面	394	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	褐色	褐色	研磨	内面丸刃部
147	縄文土器	深鉢	底面	546	SAS3	ナギ	ナギ	—	—	同褐色	同褐色	研磨	内面丸刃部
148	縄文土器	深鉢	底面	57	SAS3	ナギ	ナギ	—	—	褐色	同褐色	研磨	内面丸刃部
149	縄文土器	深鉢	底面	21	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	褐色	同褐色	白色透明白	内面丸刃部
150	縄文土器	深鉢	底面	801	SAS3	エギテ	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	白色	研磨
151	縄文土器	上口深鉢	側面	543	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	褐色	褐色	白色	研磨
152	縄文土器	上口深鉢	側面	512	SAS3	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	褐色	褐色	褐色	透明白
153	縄文土器	上口深鉢	側面	803	SAS3	エギテ	エギテ	—	—	同褐色	同褐色	研磨	透明白

第4表 穴穴住跡出土の縄文土器観察表(4)

実測番号	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點・層位	調整・文様	法量(cm)			色調		胎土	備考	
							外側	内面	口径	底径	器高	外側	内面	
154	縄文土器	腰付口沿	底部	210	SAS3	ヘラナギ→深鉢	ヘラナギ→底付	—	—	—	高脚白色	浅褐色	赤褐色	赤褐色
142	縄文土器	深鉢	腰付口沿	312-395-021	SAS4	ヘラナギ→ナガリ→滑頭文	ヘラナギ→ナガリ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
167	縄文土器	深鉢	口沿部	362	SAS5	玉串文→本の浅鉢文	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
184	縄文土器	深鉢	口沿部	357	SAS5	玉串文→本の浅鉢文	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
195	縄文土器	深鉢	底部	362	SAS5	玉串文→浅鉢文→腰付	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
196	縄文土器	深鉢	腰付	311	SAS5	玉串文→腰付	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
161	縄文土器	深鉢	口沿部	525	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
148	縄文土器	深鉢	口沿部	—	SAS5	ナゲ	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
169	縄文土器	深鉢	口沿部	—	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
170	縄文土器	深鉢	口沿部	—	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ→ナガリ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
171	縄文土器	深鉢	口沿部	524	SAS5	ナゲ	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
172	縄文土器	深鉢	口沿部	544	SAS5	ナゲ→腰付	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
173	縄文土器	腰付口沿	底部	307	SAS5	ヘラナギ→腰付	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
174	縄文土器	腰付口沿	底部	—	SAS5	ヘラナギ→ナゲ	ヘラナギ→ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
175	縄文土器	上口付深鉢	底部	—	SAS5	口縁部→ナゲ	口縁部→ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
180	縄文土器	深鉢	口沿部	503	SAS5	ナゲ	ナゲ	20.0	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
186	縄文土器	深鉢	口沿部	1230	SAS5	ナゲ→口縁部→腰付	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
187	縄文土器	深鉢	口沿部	21	SAS5	ナゲ→腰付	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
188	縄文土器	深鉢	腰付	1134	SAS5	玉串文→腰付	玉串文	28.0	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
189	縄文土器	深鉢	口沿部	292	SAS5	玉串文→腰付	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
190	縄文土器	深鉢	腰付	1229	SAS5	2列の浅鉢文→腰付	丁寧なナガリ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
191	縄文土器	深鉢	口沿部	1126	SAS5	一上二列の浅鉢文に腰付	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
192	縄文土器	深鉢	口沿部	24+100	SAS5	ナゲ	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
193	縄文土器	深鉢	口沿部	—	SAS5	玉串文	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
194	縄文土器	深鉢	腰付	301	SAS5	玉串文	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	赤褐色	赤褐色
195	縄文土器	深鉢	腰付	138+140	SAS5	ナゲ→ナゲ	ナゲ→ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
196	縄文土器	深鉢	腰付	1475	SAS5	ナゲ→ナゲ	ナゲ→ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
197	縄文土器	深鉢	腰付	138+140+141	SAS5	玉串文→口縁部	口縁部	38.0	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
198	縄文土器	深鉢	腰付	0.50+0.50+0.544	SAS5	ナゲ	ナゲ	28.0	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
199	縄文土器	深鉢	腰付	571+573	SAS5	玉串文→腰付	口縁部→玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
200	縄文土器	深鉢	腰付	1086	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
201	縄文土器	深鉢	腰付	1104	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
202	縄文土器	深鉢	腰付	873	SAS5	ナゲ	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
203	縄文土器	深鉢	腰付	64	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
204	縄文土器	深鉢	腰付	418+418	SAS5	ナゲ	ナゲ	—	(1.0)	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
205	縄文土器	深鉢	腰付	290	SAS5	ナゲ	ナゲ	—	(1.5)	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
206	縄文土器	深鉢	腰付	1119	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
207	縄文土器	深鉢	腰付	733	SAS5	ナゲ	ナゲ→ナゲ	—	(0.4)	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
208	縄文土器	深鉢	腰付	1270	SAS5	玉串文	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
209	縄文土器	深鉢	腰付	71	SAS5	玉串文	玉串文	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
210	縄文土器	深鉢	腰付	43	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
211	縄文土器	深鉢	腰付	66	SAS5	ナゲ	ナゲ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色
212	縄文土器	深鉢	腰付	16	SAS5	ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	—	高脚白色	高脚白色	白色	白色

第5表 穫穴住跡出土の縄文土器観察表（5）

実測番号	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點・層位	調査・文様	法量(cm)			色調		胎土	備考
							外側 内面	口径 底径 高さ	壁厚	外側 内面			
246	縄文土器	湯舟	口縁部	14	S442	ヘラナード	ヘラナード	—	—	褐色	褐色	砂粒土	
248	縄文土器	湯舟	口縁部	13+17	S443	ヘラナード	ヘラナード	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	
249	縄文土器	湯舟	底盤	83	S443	ヘラナード	無地のため不明	—	—	褐色	褐色	白色土	
250	縄文	碗	口縁	1308	S447	ヘラナード→後突→後突→ 後ナード	ヘラナード	—	—	—	—		
251	縄文	碗	口縁→底盤	1428	S447	ヘラナード→後突→後ナード	ヘラナード	—	—	—	—		
252	縄文土器	湯舟	底盤	308	S447	ナゲ→2段の平行凹溝付ナゲ	ナゲ	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	赤褐色丸刀目
253	縄文土器	湯舟	底盤	401	S447	無地のため不明	ヘラナード	—	—	褐色	褐色	白粘土	赤褐色丸刀目
254	縄文土器	湯舟	口縁部	228	S447	ナゲ	ナゲ	(18.0)	—	褐色	褐色	白色土	赤褐色丸刀目
255	縄文土器	湯舟	口縁部	380+397	S447	ヘラナード	ヘラナード	27.8	—	灰褐色	灰褐色	透明白	赤褐色
256	縄文土器	湯舟	口縁部	18	S447	口縁部→ナゲ	口縁部→ナゲ	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	赤褐色
257	縄文土器	湯舟	口縁	276	S447	ヘラナード	ヘラナード	—	—	灰褐色	灰褐色	砂粒土	透明白
258	縄文土器	湯舟	口縁部	90	S447	ナゲ	ナゲ	—	—	—	—		
259	縄文土器	湯舟	口縁部	72	S447	口縁部→ナゲ	口縁部→ナゲ	—	—	灰褐色	灰褐色	赤褐色	
260	縄文土器	湯舟	底盤	87	S447	ヘラナード	ヘラナード	—	—	—	—		
261	縄文土器	湯舟	底盤	327	S447	ヘラナード	ヘラナード	—	(6.2)	—	—		
262	縄文土器	湯舟	底盤	413	S447	ナゲ	ナゲ	—	(9.0)	—	—		
265	縄文土器	湯舟	口縁部	230	S449	エラボ	エラボ	—	—	褐色	褐色	黑色透明	
266	縄文土器	湯舟	口縁部	204	S449	エラボ×2本の凹溝文	エラボ	—	—	—	—		
267	縄文土器	湯舟	口縁部	280	S449	口縁部上のカギリ→ナゲ	口縁部上のカギリ→ナゲ	—	—	褐色	褐色	透明白	透明白
268	縄文土器	湯舟	口縁部	8	S449	ヘラナード	ヘラナード	—	—	褐色	褐色	砂粒土	赤褐色丸刀目
269	縄文土器	湯舟	底盤	92	S449	ヘラナード	ヘラナード	—	—	—	—		
270	縄文土器	湯舟	口縁部	49+175	S449	ナゲ	ナゲ	—	—	褐色	褐色	白粘土	赤褐色丸刀目
271	縄文土器	湯舟	口縁部	213	S449	ヘラナード	ヘラナード	—	—	—	—		
272	縄文土器	湯舟	口縁部	263	S449	ナゲ	ナゲ	—	—	赤褐色	赤褐色	白色土	赤褐色
273	縄文土器	湯舟	口縁部	92	S449	ヘラナード、透明白背景	ヘラナード	—	—	褐色	褐色	褐色	赤褐色丸刀目
274	縄文土器	湯舟	口縁部	216	S449	ナゲ	ナゲ	—	—	灰褐色	灰褐色	透明白	透明白
275	縄文土器	湯舟	口縁部	318	S449	ヘラナード	ヘラナード	—	—	褐色	褐色		
276	縄文土器	湯舟	口縁部	391	S449	ヘラナード	ヘラナード	—	—	—	—		
277	縄文土器	湯舟	口縁部	414	S449	ナゲ	ナゲ	—	—	赤褐色	赤褐色	白粘土	
278	縄文土器	湯舟	口縁部	327	S449	エラボ	エラボ	—	—	—	—		
279	縄文土器	湯舟	底盤	20	S450	ヘラナード	ヘラナード	—	—	褐色	褐色	黑色透明	砂粒土
280	縄文土器	湯舟	底盤	100	S450	ヘラナード	ヘラナード	—	—	褐色	褐色	白粘土	
281	縄文土器	湯舟	底盤	3	S450	ヘラナード	ヘラナード	—	—	褐色	褐色	砂粒土	
282	縄文土器	湯舟	口縁部	218+221	S450	エラボ	エラボ	—	—	—	—		
283	縄文土器	湯舟	口縁部	57	S450	エラボ×2本の凹溝文 無文、透明白背景	エラボ	—	—	褐色	褐色	白色土	
285	縄文土器	湯舟	口縁部	10	S452	エラボ	エラボ	—	—	褐色	褐色	砂粒土	
286	縄文土器	湯舟	底盤	11	S452	エラボ	エラボ	—	—	褐色	褐色	白粘土	赤褐色丸刀目
287	縄文土器	湯舟	底盤	8	S453	エラボ	エラボ	—	—	褐色	褐色	白粘土	
288	縄文土器	湯舟	底盤	1	S453	エラボ	エラボ	—	—	—	—		
289	縄文土器	湯舟	口縁部	33	S454	エラボ	エラボ	—	—	—	—		
290	縄文土器	湯舟	口縁部	101	S454	ヘラナード→透明白	ヘラナード	—	—	灰褐色	灰褐色	白色土	砂粒土
291	縄文土器	湯舟	底盤	204	S454	エラボ	エラボ	—	—	褐色	褐色	砂粒土	
292	縄文土器	湯舟	底盤	104	S454	ナゲ	ナゲ	—	—	—	—		
293	縄文土器	湯舟	口縁部	15	S456	ナゲ	ナゲ	—	—	—	—		
294	縄文土器	湯舟	底盤	4	S456	ナゲ	ナゲ	—	—	—	—		

第6表 包含層出土の縄文土器観察表（1）

測定點 種別 器種 部位 取上番号	出土区・地點・調整・文様 層位 外側 内側	法 量 (cm)		色調		胎土	備考
		口径 底径	高さ	外側 内側	外側 内側		
113 縄文土器 鋼鋸 1388 一 CIXO3-1上	日加未→2列の連続目輪紋和田文目輪紋	—	—	—	褐色	褐色	砂利土 外縁火打有
114 縄文土器 鋼鋸 1389 2480 B.I.C	日加未→2列の連続目輪紋和田文目輪紋	—	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	砂利土 外縁火打有
115 縄文土器 鋼鋸 1390 5825 B.I.C上	日加未→1列の連続目輪紋和田文	日加未	—	—	褐色	褐色	砂利土
116 縄文土器 鋼鋸 1391 3093 A.I.C上	日加未→2列の連続目輪紋	日加未→ナゲ	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	砂利土
117 縄文土器 鋼鋸 1392 4298 A.I.C上	日加未→2列の連続目輪紋	日加未→ナゲ	—	—	灰褐色	灰褐色	砂利土
118 縄文土器 鋼鋸 1393 一 CIXQ1 表	ナガ→2列の連続目輪紋和田文	ナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土 外縁火打有
119 縄文土器 鋼鋸 1394 17 A.I.C上	日加未→2列の連続目輪紋和田文目輪紋	—	—	—	褐色	褐色	砂利土
120 縄文土器 鋼鋸 1395 一 B.I.C	日加未→2列の連続目輪紋和田文	日加未→ナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土 外縁火打有
121 縄文土器 鋼鋸 1396 一 CIXP1	ナガ→1列の連続文	ナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土 外縁火打有
122 縄文土器 鋼鋸 888 3214 B.I.C	日加未→2列の連続目輪紋和田文目輪紋	—	—	—	褐色	褐色	砂利土 外縁火打有
123 縄文土器 鋼鋸 1398 403 S.A.S	日加未→2列の連続目輪紋和田文	日加未	—	—	褐色	灰褐色	白色系 塗装有
124 縄文土器 鋼鋸 1399 5978 B.I.C上	ナゲリ→ナゲ	ナゲ	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	砂利土 外縁火打有
125 縄文土器 鋼鋸 1400 12773 B.I.C上	ナゲリ→ナゲ	ナゲナゲ	—	—	浅褐色	浅褐色	本物的
126 縄文土器 鋼鋸 1401 869 一 A.I.C上	日加未→ナゲ	日加未→ナゲ	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	白色
127 縄文土器 鋼鋸 1402 一 CIXQ1 18	ナゲナゲ	ナゲナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土
128 縄文土器 鋼鋸 1403 19304 B.I.C上	ナゲナゲ	ナゲナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土
129 縄文土器 鋼鋸 1405 一 B.I.C上	—	L.S.T.	—	—	—	—	—
130 縄文土器 鋼鋸 1406 388 一 O.I.3上	ナゲナゲ	ナゲナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土
131 縄文土器 鋼鋸 1407 3722 B.I.C	ナゲナゲ	ナゲナゲ	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	塗装有
132 縄文土器 鋼鋸 1408 一 C.I.C上	日加未→ナゲ	日加未→ナゲ→L.S.T.	—	—	褐色	褐色	塗装有
133 縄文土器 鋼鋸 1409 一 CIXM1.1上	ナガ→1列の連続文	ナガ→1列の連続文	—	—	浅褐色	浅褐色	白色
134 縄文土器 鋼鋸 1410 一 丁表土	ナガナゲ	ナガナゲ	—	—	褐色	灰褐色	本物的
135 縄文土器 鋼鋸 1411 一 CIXO2.1上	ナゲナゲ→1列の連続文	ナゲナゲ→1列の連続文	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	白色
136 縄文土器 鋼鋸 1412 一 O.8-1.1上	ナゲ	ナゲ→1列の連続文	—	—	褐色	褐色	本物的
137 縄文土器 鋼鋸 1413 一 CIXM1.1上	ナガナゲ	ナガナゲ	—	—	褐色	褐色	本物的
138 縄文土器 鋼鋸 1414 一 T.2.1B	ナゲナゲ	ナゲナゲ→1列の連続文	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	本物的 外縁火打有
139 縄文土器 鋼鋸 1415 一 T.4-3	ナゲナゲ	ナゲナゲ→2列の連続文	—	—	灰褐色	灰褐色	本物的
140 縄文土器 鋼鋸 1416 一 H.6-1.1上	日加未	日加未→日加未	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	砂利土
141 縄文土器 鋼鋸 1417 一 —	ナガナゲ	ナガナゲ→1列の連続文	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	本物的
142 縄文土器 鋼鋸 1418 一 —	ナガナゲ	ナガナゲ→1列の連続文	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	本物的
143 縄文土器 鋼鋸 1419 一 A.I.C上	ナガ→1列の連続文	ナゲナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土 外縁火打有 ●砂利
144 縄文土器 鋼鋸 1420 1833 B.I.C	ナゲナゲ	ナゲナゲ	—	—	褐色	浅褐色	本物的
145 縄文土器 鋼鋸 1421 一 B.I.C	ナゲ	ナゲナゲ	—	—	灰褐色	灰褐色	白色
146 縄文土器 鋼鋸 1422 12996 B.I.C上	ナガ→1列の連続文和田文	ナガナゲ	—	—	本物的	本物的	外縁火打有
147 縄文土器 鋼鋸 1423 一 CIXN1.2	ナガ→1列の連続文	ナガナゲ	—	—	褐色	灰褐色	砂利土 外縁火打有
148 縄文土器 鋼鋸 1424 4296 B.I.C上	ナガ→1列の連続文	ナガナゲ	—	—	灰青-褐色	灰青-褐色	白色
149 縄文土器 鋼鋸 1425 4297 B.I.C上	ナガナゲ	ナガナゲ	—	—	褐色	褐色	白色
150 縄文土器 鋼鋸 1426 19759 B.I.C上	ナガ→1列の連続文(和田文文)→1列	ナガナゲ	—	—	本物的	本物的	砂利土
151 縄文土器 鋼鋸 1427 一 CIXO1.1上	ナガ→1列の連続文(和田文文)	ナガナゲ	—	—	褐色	褐色	本物的、砂利土
152 縄文土器 鋼鋸 1428 16820 B.I.C上	ナガ→1列の連続文	ナガナゲ	—	—	本物的	本物的	砂利土
153 縄文土器 鋼鋸 1429 4298 B.I.C上	ナガ→1列の連続文(和田文文)	ナガナゲ	—	—	本物的	本物的	砂利土

第7表 包含層出土の縄文土器観察表（2）

実測番号	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點	調整・文様	法量(cm)		色調		胎土	備考
							外側 点・部位	内面	外側 口径 底径 高さ	内面		
354	縄文土器	湯舟	口縁部	—	B区	丸ガタ→直線文の切妻文	直径=11.6cmの切妻	—	—	黒褐色	黒褐色	黒色濃明、薄白
355	縄文土器	湯舟	口縁部	—	C区(?)上縁	丸ガタ→圓錐形の切妻文(?)	直径2.2cmの切妻	—	—	褐色	褐色	砂利土、外縁火入付
356	縄文土器	湯舟	口縁部	—	E区(?)A表	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cm	—	—	褐色	褐色	青褐色斑、砂利土
357	縄文土器	湯舟	口縁部	10000	B区	丸ガタ→直線文	直径2.5cm	—	—	褐色	褐色	青褐色斑、砂利土
358	縄文土器	湯舟	口縁部	—	C区(?)上縁	ハラカタ→圓錐形の切妻文(?)	ハラカタ	—	—	黒褐色	黒褐色	白色斑、砂利土、外縁火入付
359	縄文土器	湯舟	口縁部	—	—	ハラカタ→直線文	ハラカタ	—	—	—	—	—
360	縄文土器	湯舟	口縁部	—	—	丸ガタ→直線文(?)	丸ガタ	—	—	褐色	褐色	本褐色斑、砂利土
361	縄文土器	湯舟	口縁部	—	B区(?)A表	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cm	—	—	黒褐色	黒褐色	白色斑、外縁火入付
362	縄文土器	湯舟	口縁部	23238	B区(?)	ナガリ舟形(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	浅褐色	浅褐色	本褐色
363	縄文土器	湯舟	口縁部	—	B区(?)A-1縁	丸ガタ→圓錐形の切妻文(?)	直径2.5cm	—	—	黒褐色	黒褐色	本褐色斑、薄白
364	縄文土器	湯舟	口縁部	—	B区(?)	ナガリ舟形(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	褐色	褐色	青褐色斑、白色斑、外縁火入付
365	縄文土器	湯舟	口縁部	—	—	丸ガタ→直線文、圓錐形(?)	直径2.5cm	—	—	黒褐色	黒褐色	本褐色斑
366	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	C区(?)上縁	丸ガタ→圓錐形の切妻文(?)	直径2.5cm	—	—	褐色	黒褐色	白色濃明、薄白、内縁火入付
367	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	3799	B区	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cm	—	—	褐色	褐色	白色濃明
368	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	3399	B区(?)上縁	直筒式(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	褐色	褐色	透明白、砂利土
369	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	4393	B区(?)上縁	直筒式(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	褐色	褐色	青褐色斑
370	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	E区(?)A表	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	褐色	褐色	砂利土
371	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	10000	A区(?)	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	浅褐色	浅褐色	透明白
372	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	14242	B区(?)	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	本褐色	本褐色	白色濃明、薄白、内縁火入付
373	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	C区(?)上縁	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	黒褐色	黒褐色	本褐色
374	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	8030	S425	直筒式(?)	直径2.5cmの切妻文(?)	—	—	紅褐色	紅褐色	本褐色
375	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	3018	B区(?)上縁	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cm	—	—	褐色	黒褐色	白色濃明、砂利土
376	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	138-405-22039	B区(?)上縁	丸ガタ	丸ガタ→1.6cmの切妻文	—	—	紅褐色	紅褐色	白色濃明
377	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	B区(?)A表	丸ガタ	丸ガタ→直線(?)ナメ	—	—	褐色	褐色	白色濃明、砂利土
378	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	B区(?)B表	ハラカタ	ハラカタ→1.6cmの切妻文	—	—	褐色	褐色	本褐色
379	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	5007+37948-0108	B区	ナメ	ナメ→切妻(?)直線文	—	—	褐色	褐色	白色斑、砂利土
380	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	N7-1上縁	ハラカタ	ハラカタ	—	—	褐色	褐色	白色斑、砂利土
381	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	10000	S404	丸ガタ	丸ガタ→1.6cmの切妻文	—	—	褐色	褐色	白色濃明
382	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	3008	S433	丸ガタ	丸ガタ	—	—	褐色	黒褐色	白色斑
383	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	—	丸ガタ→直線文(?)	直径2.5cm	—	—	褐色	褐色	白色斑
384	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	B区	丸ガタ→2.5cmの直線文(?)	丸ガタ→2.5cmの切妻文(?)	—	—	褐色	褐色	砂利土
385	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	B区(?)	丸ガタ	丸ガタ	—	—	黒褐色	黒褐色	白色濃明
386	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	3482	B区	ハラカタ	ハラカタ	—	—	紅褐色	紅褐色	本褐色
387	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	2791	B区(?)	ナメ	ナメ	—	—	褐色	褐色	透明白、白色
388	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	O-1-1上縁	ハラカタ	ハラカタ	—	—	紅褐色	紅褐色	本褐色
389	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	B区(?)A-1上縁	丸ガタ	丸ガタ	—	—	黒褐色	黒褐色	白色濃明、砂利土
390	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	B区(?)A-2上縁	丸ガタ	丸ガタ	—	—	黒褐色	黒褐色	本褐色
391	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	B区(?)	ナメ	ナメ→1.6cmの切妻文	—	—	紅褐色	紅褐色	砂利土
392	縄文土器	湯舟	縁一部斜面	—	C区(?)上縁	丸ガタ→2.5cmの直線文(?)	丸ガタ	—	—	紅褐色	紅褐色	本褐色

第8表 包含層出土の縄文土器観察表（3）

第9表 包含層出土の縄文土器観察表（4）

実測番号	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地	調整・文様	法量(cm)		色調		胎土	備考	
							点・部位	外面	内面	口徑	底径	器高	
435	萬古土器	瓶	瓶身	—	8区17.2上	土器1-2列の弦紋と1列のV字溝	1.9寸	—	—	褐色	褐色	白色	
436	萬古土器	瓶	口縁-瓶身	—	CIX.05.3上	土器1-2列の弦紋と1列のV字溝	1.9寸	—	—	赤褐色	褐色	褐色	
437	萬古土器	瓶	口縁部	2440	8区	土器1-2列の弦紋と1列のV字溝	1.9寸	—	—	淡黃褐色	淡黃褐色	米褐色	
438	萬古土器	瓶	口縁部	—	—	土器1-2列の弦紋	土器1-2列の弦紋	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
439	萬古土器	瓶	口縁部	—	8区17.3上	土器1-2列の弦紋	土器1-2列の弦紋	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵入り付
440	萬古土器	瓶	口縁部	—	—	ハラナギ-弦紋	ハラナギ	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵入り付
441	萬古土器	瓶	口縁部	—	8区18.4	土器-弦紋	土器	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
442	萬古土器	瓶	口縁部	353	8区	土器-弦紋	土器	—	—	米褐色	米褐色	白色	
443	萬古土器	瓶	口縁部	4009	8区17	土器-1列の斜溝と1列のV字溝	土器-1列の斜溝	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵入り付
444	萬古土器	瓶	口縁部	20208	8区17	土器-1列の斜溝と1列のV字溝	土器-1列の斜溝	—	—	淡黃褐色	淡黃褐色	米褐色	所蔵入り付
445	萬古土器	瓶	口縁部	13457	8区17	土器-1列の斜溝	土器	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵入り付
446	萬古土器	瓶	口縁部	—	8区17	目刻斜溝-ハラナギ-1列のV字溝	目刻斜溝-ハラナギ	—	—	褐色	褐色	褐色	所蔵入り付
447	萬古土器	瓶	口縁部	—	—	ハラナギ-1列のV字溝	ハラナギ	—	—	米褐色	米褐色	米褐色	所蔵入り付
448	萬古土器	瓶	口縁部	—	8区17.2上	土器1-2列の弦紋	土器1-2列の弦紋	—	—	淡黃褐色	淡黃褐色	米褐色	
449	萬古土器	瓶	瓶身	—	—	土器1-2列の弦紋	土器1-2列の弦紋	—	—	褐色	褐色	白色	所蔵入り付
450	萬古土器	瓶	口縁部	1296	8区	土器-弦紋	土器	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵入り付
451	萬古	瓶	口縁-瓶身	5470	—	ハラナギ-1列の斜溝	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	白色	
452	萬古土器	瓶	口縁部	13830	8区17	土器-1列の斜溝	土器	—	—	褐色	褐色	白色	所蔵①
453	萬古土器	瓶	口縁部	24173	8区17	ハラナギ-1列のV字溝	ハラナギ	—	—	褐色	褐色	褐色	
454	萬古土器	瓶	口縁部	13830	8区17	土器-1列の弦紋	土器	—	—	米褐色	米褐色	白色	
455	萬古土器	瓶	口縁部	—	8区17.4	目刻斜溝-ハラナギ-1列のV字溝	目刻斜溝-ハラナギ	—	—	褐色	褐色	白色	所蔵入り付
456	萬古土器	瓶	口縁部	—	CIX.05.2上	土器-1列の斜溝と1列のV字溝	土器-1列の斜溝	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
457	萬古土器	瓶	瓶身	—	8区18.2上	土器-3列の斜溝と1列のV字溝	土器	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵入り付
458	萬古土器	瓶	瓶身	—	8区17	土器-3列の斜溝と1列のV字溝	土器	—	—	淡黃褐色	淡黃褐色	米褐色	所蔵入り付
459	萬古土器	瓶	瓶身	10337	8区17	土器-1列の斜溝	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	白色	
460	萬古土器	瓶	瓶身	—	17	土器-1列の斜溝	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
461	萬古土器	瓶	瓶身	4755	8区17	土器-1列の斜溝	1.9寸	—	—	淡黃褐色	淡黃褐色	褐色	
462	萬古土器	瓶	口縁部	—	CIX.05.1上	土器1-2列の弦紋	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵②
463	萬古土器	瓶	口縁部	—	8区17.4	土器-1列の斜溝	1.9寸	—	—	淡黃褐色	淡黃褐色	白色	
464	萬古土器	瓶	口縁部	—	—	ハラナギ-1列の斜溝に1列のV字溝	1.9寸	—	—	褐色	褐色	褐色	
465	萬古土器	瓶	口縁部	—	CIX.05.1	ハラナギ-1列の斜溝に1列のV字溝	ハラナギ	—	—	米褐色	米褐色	褐色	所蔵入り付
466	萬古土器	瓶	口縁部	—	CIX.05.1上	土器1-2列の弦紋	1.9寸	—	—	褐色	褐色	褐色	所蔵入り付
467	萬古土器	瓶	口縁部	—	CIX.05.1上	ハラナギ-1列の斜溝	1.9寸	—	—	淡黃褐色	淡黃褐色	褐色	所蔵入り付
468	萬古土器	瓶	口縁部	—	CIX.05.2上	土器	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
469	萬古土器	瓶	口縁部	10387	8区17	土器	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
470	萬古土器	瓶	口縁部	11236	8区17	土器	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
471	萬古土器	瓶	口縁部	16493	8区17	土器	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵③
472	萬古土器	瓶	口縁部	138-188	8区17	土器-1列の斜溝	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	白色	所蔵④
473	萬古土器	瓶	口縁部	138-188	8区17	土器-1列の斜溝	1.9寸	—	—	米褐色	米褐色	褐色	

第10表 包含層出土の縄文土器観察表（5）

実測番号	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點・層位	調査・文様 点・解説	法量(cm)		色調		胎土	備考	
							外側 内面	口径 底径 高さ	外側 内面	外側 内面			
471	縄文土器	陶器	口縁部	130-1600-341	B区	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	赤褐色
475	縄文土器	陶器	口縁部	—	B区30-2层土	1.75cm	1.75cm	—	—	灰褐色	灰褐色	白色	
476	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区17.2-1層	1.75cm×1.75mmの木の紋様文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	白色	木の紋様
477	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区18-1層	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	赤褐色
478	縄文土器	陶器	口縁部	—	B区34-1层土	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	白色	紅少
479	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区18-1層	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	赤褐色
480	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区30-2-1層	1.75cm	—	—	—	—	—	—	赤褐色
481	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	褐色
482	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	白色	白色
483	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	褐色
484	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	白色	褐色
485	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文、切妻の縁部	1.75cm×1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	褐色
486	縄文土器	陶器	口縁部	13115	B区1層	1.75cm×2.4cmの腹文、内側丸頭に目状の突起文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	白色	白色
487	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区27.2-1層	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	—	—	—	赤褐色
488	縄文土器	陶器	口縁部	3009	B区	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色
489	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	白色	褐色
490	縄文土器	陶器	口縁部	—	B区3层土	1.75cm×1.75mmの木の紋様文	1.75cm	—	—	—	—	—	木の紋様
491	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区58-1層	1.75cm×2.4cmの木の紋様文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	白色	白色
492	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区58-2-1層	1.75cm×2.4cmの木の紋様文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	白色	
493	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	—	—	—	褐色
494	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区11	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	褐色
495	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	白色	白色
496	縄文土器	陶器	口縁部	13005	B区1層	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	白色	白色
497	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	褐色
498	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色
499	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	—	—	—	褐色
500	縄文土器	陶器	口縁部	13007	B区1層	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	白色	白色
501	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色
502	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	—	—	—	褐色
503	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区1層	1.75cm	—	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色
504	縄文土器	陶器	口縁部	13012	B区1層	1.75cm×2.4cmの腹文、輪郭線 大柱2-3mmの突起文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	
505	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区50-4-1層	1.75cm×1.75mmの木の紋様文 大柱2-3mmの突起文	—	—	—	褐色	褐色	白色	白色
506	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの木の紋様文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
507	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの木の紋様文	1.75cm	—	—	—	—	—	褐色
508	縄文土器	陶器	口縁部	5003-3-5	SAT6	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	
509	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区17.2-1層	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	米褐色	米褐色	褐色	
510	縄文土器	陶器	口縁部	—	B区2-1層	1.75cm×2.4cmの木の紋様文 輪郭線に1.75mm	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	
511	縄文土器	陶器	口縁部	—	—	1.75cm×2.4cmの木の紋様文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	
512	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区19-1層	1.75cm	—	—	—	—	—	—	褐色
513	縄文土器	陶器	口縁部	—	B区34-1层土	1.75cm	—	—	—	米褐色	米褐色	褐色	褐色
514	縄文土器	陶器	口縁部	—	C区19-1層	1.75cm×2.4cmの腹文	1.75cm	—	—	褐色	褐色	褐色	

第 11 表 包含層出土の縄文土器観察表（6）

実測番号	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點・層位	調整・文様	法量(cm)			色調		胎土	備考	
							点・層位	外側	内面	口径	底径	高さ		
510	縄文土器	陶瓶	口部	—	M.I.1+148.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	褐色	砂利土		
518	縄文土器	陶瓶	口部	—	O.I.3.1層	エギボ	エギボ	—	—	褐色	褐色	砂利土		
517	縄文土器	陶瓶	口部-腹部	—	I.O.I.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	黒褐色	黒褐色	泥質透明白		
518	縄文土器	陶瓶	腹部-側面	—	C.IX.Q10.1層	エギボ	エギボ	—	—	褐色	黒褐色	泥質透明白		
519	縄文土器	陶瓶	口部	—	C.IX.S6.4.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色-褐色	透明白		
520	縄文土器	陶瓶	口部	2020	B区	ナゲ	ナゲ	—	—	黒褐色	黒褐色	白砂利		
521	縄文土器	陶瓶	口部-側面	—	148-1層	エギボ	エギボ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色-褐色	透明白		
522	縄文土器	陶瓶	口部-側面	—	O.I.4.1層	丸化著しい-側面内腹反	丸化著しい	—	—	褐色	褐色	白色透明白	目	
523	縄文土器	陶瓶	口部-側面	—	A.IX.a.9	エギボ	エギボ	—	—	褐色	褐色	砂利土	外蓋入り材	
524	縄文土器	陶瓶	口部	3439	B区	エギボ	エギボ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色	透明白		
525	縄文土器	陶瓶	口部	3688.0	B区C層	エギボ-模様文	エギボ	—	—	褐色	褐色	透明白		
526	縄文土器	陶瓶	口部	—	B区.S6.2	エギボ	エギボ	—	—	黒褐色	黒褐色	透明白		
527	縄文土器	陶瓶	口部-側面	4511.0	B区C層	エギボ	エギボ	—	—	黒褐色	黒褐色	白色透明白		
528	縄文土器	陶瓶	口部-側面	3234	A区C層	エギボ	エギボ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色	透明白		
529	縄文土器	陶瓶	口部-側面	—	C.IX.S2.1層	エギボ-口輪部に側面斜め入に模様文	エギボ	—	—	褐色	褐色	透明白		
530	縄文土器	陶瓶	口部	148-1層	S23	A区C層	エギボ	エギボ	—	—	黒褐色	黒褐色	砂利土	
531	縄文土器	陶瓶	口部	148-1層	3612	A区C層	エギボ	エギボ	—	—	褐色	褐色	砂利土	
532	縄文土器	陶瓶	口部	—	C.IX.a.3	エギボ	エギボ	—	—	紅褐色	紅褐色	砂利土		
533	縄文土器	陶瓶	口部	—	341	エギボ	エギボ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色-褐色	透明白		
534	縄文土器	陶瓶	口部-側面	—	B区.J.1	エギボ-口部斜め入-側面斜め入-横模	エギボ	—	—	褐色	褐色	砂利土		
535	縄文土器	陶瓶	口部-側面	—	C.IX.O.1層	エギボ-模様文	エギボ	—	—	黒褐色	黒褐色	砂利土		
536	縄文土器	陶瓶	口部	15870	B区C層	エギボ-2列の横模様文	エギボ	—	—	黒褐色	黒褐色	泥質透明白		
537	縄文土器	陶瓶	口部	322	322	エギボ	エギボ-2列の横模様文	エギボ	—	—	黒褐色	黒褐色	砂利土	外蓋入り材
540	縄文土器	口付口縁	縁部	4017	B区C層	エギボ-3列の横模様文	ナゲ	—	—	黒褐色	黒褐色	白色透明白	白色	
539	縄文土器	口付口縁	縁部	—	B区C層	エギボ-模様文	エギボ	—	—	褐色	褐色	白色透明白	外蓋入り材	
540	縄文土器	口付	口部	148-1層	84	C区C層	エギボ	エギボ	—	—	褐色	褐色	砂利土	外蓋入り材
541	縄文土器	瓶	口部	—	C.IX.P.1層	エギボ	エギボ	—	—	褐色	褐色	白色透明白	目	
542	縄文土器	瓶	口部	—	C.IX.Q10.1層	エギボ-2列の横模様文-透かし	エギボ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色-褐色	砂利土		
543	縄文土器	瓶	口部	—	C.IX.Q10.1層	エギボ-2列の横模様文-透かし	エギボ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色-褐色	砂利土		
544	縄文土器	高杯	縁部	22223	B区C層	エギボ-口部の透かし	エギボ	—	—	黒褐色	黒褐色	砂利土		
545	縄文土器	高杯	口部	—	3484	B区	ヘラナガ-側面斜め入	ヘラナガ	—	—	黒褐色	黒褐色	砂利土	外蓋入り材
546	縄文土器	高杯	口部	—	C.IX.O.2.1層	ナゲ-側面斜め入	ヘラナガ	—	—	黒褐色	黒褐色	砂利土	内蓋入り材	
547	縄文土器	高杯	口部	—	3485.25	SA18	ナゲ-側面斜め入	ナゲ	—	—	褐色	褐色	白色透明白	
548	縄文土器	高杯	口部	3485.26	3486	B区	自鉢縁-側面斜め入-口部斜め入-口部斜め入	ヘラナガ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色-褐色	小球	外蓋入り材
549	縄文土器	高杯	口部	—	3486	—	エギボ	ヘラナガ-側面斜め入	ナゲ	—	—	褐色	褐色	砂利土
550	瓶	瓶	口部	—	—	口部斜め入	口部斜め	—	—	—	—	—		
551	縄文土器	高杯	口部	—	C.IX.O.2.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	紅褐色-褐色	紅褐色-褐色	砂利土		
552	縄文土器	高杯	口部	148	292	B区	ヘラナガ-側面斜め入	ヘラナガ	—	—	褐色	黒褐色	砂利土	

第12表 包含層出土の縄文土器観察表（7）

第13表 包含層出土の縄文土器観察表（8）

実測部番	種 別	基 標	部 位	取上番号	出土区・地	調整・文様 点・割位	法 墓 (cm)			色調		胎土	備考		
							外 面	内 面	口徑	底径	高さ	外 面	内 面		
005	攢式土器	深鉢	口縁-側面 3731	全径	日加奈前一ナゾ	日加奈前一ナゾ	—	—	—	—	—	白褐色、赤褐色	白色系、赤褐色	赤褐色	赤褐色
006	攢式土器	深鉢	口縁-側面 5063	全径1周	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	白色系	白色系
007	攢式土器	深鉢	口縁-側面	76	SA43	ヘラナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色
008	攢式土器	深鉢	口縁-側面	26	SA18	ヘラナゾ	ヘラナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	白色系
009	攢式土器	深鉢	口縁-側面	20400	8.0区1周	ヘラナゾ-側面	ヘラナゾ	—	—	—	—	—	白褐色	白褐色	白色系
010	攢式土器	深鉢	口縁-側面	3861	8.0区1周	ヘラナゾ	ヘラナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	白色系
011	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	8.0区8.0区1周	ヘラナゾ	ヘラナゾ	—	—	—	—	—	黑褐色	褐色	白色系、褐色系、当藏式1
012	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	8.0区4.0区1周	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	黑褐色	黑色	褐色
013	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	黑褐色	黑色	白色系
014	攢式土器	深鉢	口縁-側面	521	SA3	ヘラナゾ	ヘラナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
015	攢式土器	深鉢	口縁-側面	95	SA48	ナゾ	ナゾ	8.0	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色
016	攢式土器	深鉢	口縁-側面	92	SA18	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
017	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	1.0区-2.0区	エナメル-側面に波状文	エナメル-側面文	—	—	—	—	—	褐色	褐色	白色系
018	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	2.0区-3.0区	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色
019	攢式土器	深鉢	口縁-側面	4047	8.0区1周	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色
020	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	8.0区1周	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
021	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	8.0区7.0区1周	ナゾ-2.0区の波状文	日加奈前一ナゾ	—	—	—	—	—	黑褐色	黑色	褐色系
022	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
023	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	白褐色	白色系	白色系
024	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
025	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
026	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
027	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
028	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
029	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
030	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
031	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色系
032	攢式土器	深鉢	口縁-側面	—	—	ナゾ	ナゾ	—	—	—	—	—	白褐色	白色系	白色系

第14表 包含層出土の縄文土器観察表（9）

実測番号	種別	器種	部位	取上番号	出土区・地點・層位	調整・文様	法量(cm)		色調		胎土	備考
							外側	内面	口徑	底径	器高	
633	縄文土器	深鉢	直腹	48	C.0.5AAT	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	黒褐色
634	縄文土器	深鉢	直腹	—	N.T.4.1層	エダナ	エダナ	エダナ	—	—	灰褐色	灰褐色
635	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	直L.	ヘラナガ→ナガ	ヘラナガ→ナガ	ヘラナガ→ナガ	ヘラナガ→ナガ	—	—	褐褐色	灰褐色
636	縄文土器	深鉢	直腹	—	OB.3.1層	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
637	縄文土器	深鉢	直腹	7001	L層	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
638	縄文土器	深鉢	直腹	—	P10.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	褐色
639	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	—	N.T.4.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐褐色	褐褐色
640	縄文土器	深鉢	直腹	—	R.O.G.2	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
641	縄文土器	深鉢	直腹	—	直L.	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
642	縄文土器	深鉢	直腹	—	OB.2	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
643	縄文土器	深鉢	直腹	—	R.O.G.1	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	褐色
644	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	—	M.T.1.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	灰褐色	灰褐色
645	縄文土器	深鉢	直腹	—	R.区	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	灰褐色
646	縄文土器	深鉢	直腹	—	R.O.G.2	エダナ	エダナ	エダナ	—	—	褐色	褐色
647	縄文土器	深鉢	直腹	—	P9.1層	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
648	縄文土器	深鉢	直腹	3821	R.区	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
649	縄文土器	深鉢	直腹	—	34.1	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
650	縄文土器	深鉢	直腹	—	—	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
651	縄文土器	深鉢	直腹	430+431	C.0.5AAB	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	灰褐色	灰褐色
652	縄文土器	深鉢	直腹	280	R.区	エダナ	エダナ	エダナ	—	—	灰褐色	灰褐色
653	縄文土器	深鉢	直腹	10000	R.O.G.1	エダナ	エダナ	エダナ	—	—	褐褐色	褐褐色
654	縄文土器	深鉢	直腹	—	R.区	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	褐色
655	縄文土器	深鉢	直腹	10001	R.O.G.2	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
656	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	—	R.区	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
657	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	—	L8.2.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐褐色	褐褐色
658	縄文土器	深鉢	直腹	直一筋	—	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
659	縄文土器	深鉢	直腹	3703	R.O.G.1	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	褐色
660	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	19052	R.O.G.1	エダナ	エダナ	エダナ	—	—	褐色	褐色
661	縄文土器	深鉢	直腹	20	SATB	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	褐色	褐色
662	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	—	M.T.1.1層	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
663	縄文土器	深鉢	直腹	—	P9.1層	エダナ	エダナ	エダナ	—	—	褐褐色	褐褐色
664	縄文土器	深鉢	直腹	—	M.O.2.1層	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
665	縄文土器	深鉢	直腹一肩第一	—	L8.2.1層	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
666	縄文土器	深鉢	直腹	—	P10.1層	エダナ	エダナ	エダナ	—	—	灰褐色	灰褐色
667	縄文土器	深鉢	直腹	—	直L.	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
668	縄文土器	深鉢	直腹	2805	R.区	只見縞ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
669	縄文土器	深鉢	直腹	3792	R.区	ナガ	ナガ	ナガ	—	—	褐色	褐色
670	縄文土器	縦目印	直腹	—	O.G.1.1層	ヘラナガ	ヘラナガ	ヘラナガ	—	—	灰褐色	灰褐色

数える。これに含まれる弥生時代の磨製石鎌 6 点を除き、計 577 点が縄文時代後期および晩期の石鎌と判断される。そのうち竪穴住居跡出土分を除いた 196 点を第 114 ~ 120 図 (734 ~ 930) に掲載した。

全体的な傾向として半数以上の 357 点が凹基無茎鎌で占められる。使用石材はホルンフェルス類が 152 点と最多で、次いでチャート類が 133 点と多い。安山岩、頁岩・珪質頁岩類がこれに続き、他に黒曜石類、赤色頁岩、凝灰岩、流紋岩類などが使用される。黒曜石類では、姫島産である IV 類が最も多用される。姫島産では安山岩も一定程度認められる。

調査区別の集計では、A 区 16 点、B (D) 区 276 点、C 区 166 点、E 区 13 点となる。これは、概ね縄文時代後期後葉を中心とする他の石器・土器類の出土量に比例している。

観察所見 以下、個別の石鎌について特筆すべきものをいくつか挙げ、説明を加える。

926 は、チャート製で表土からの出土である。注目されるのは、石器の表面の稜線が読み取れないほどの摩滅が観察される点である。研磨に伴う線状痕などは認められない。原因は判然としないが、ライフサイクルのいずれかの時点で、水磨を経た可能性が考えられよう。

特徴的な形態として、中央付近の側縁に角を持つ略五角形の凹基無茎鎌がある。866・878・885・891・916・917 がこれにあたる。いずれも包含層からの出土で、明確な共伴土器は不明である。石材としては、6 点中 3 点が安山岩を用いている。

この他、通常は石鎌製作に用いられない尾鈴山産溶結凝灰岩製の石鎌が 1 点のみ認められた。

□異形石器（第 121 図）

概要 計 10 点確認した。うち 1 点は SA31 の項で報告した安山岩製の資料である。ここでは 5 点を図示した。931・932 は三つの突出部を持つ資料で、前者が安山岩製、後者が西北九州産と推定される黒曜石製である。933 は糸巻形で桑ノ木津留・上青木系の黒曜石を用いる。他の資料に比べ、やや不恰好であるため未成品かもしれない。

934 は蝙蝠形とでも呼ぶべき資料で、安山岩製である。935 は星形で白色の不純物をわずかに含む黒曜石を用いる。

□石錐（第 122・123 図）

概要 計 38 点を確認し、竪穴住居跡出土資料を除く 31 点を図示した。ここでは齊藤基生氏の分類案（文献 25）に従い、形態を整理しておく。なお齊藤分類 I 類（つまみ部がなく、棒状を呈する）に関しては本遺跡に該当する資料は見出されなかった。

II 類（936 ~ 944・951）

つまみ部を持ち、身（軸部）は細長い。10 点を図示した。940 は軸部を折損するが、つまみ部を方形に整形する点で特徴的である。

III 類（945 ~ 950・952・953）

つまみ部が大きく、短い軸部を持つ。8 点を図示した。形態変異に富む。

IV 類（954 ~ 966）

つまみ部と尖頭部の境界が不明瞭で、細長い三角形を呈する。954 は珪質頁岩製で、二次加工の度合いが低く素材面を多く残す。後期旧石器時代包含層からの上方拡散である可能性も考えられる。956 もこれに似た特徴を備える。958 はある種の削器である可能性も考えられる。

□石匙（第 124 図）

概要 計 3 点を確認した。967 が横形で、968・969 が縦形である。縦形は作りが粗雑で、小形である点は縄文時代早期の資料と共通する。下層からの上方拡散か。

□楔形石器（第 125 図）

概要 計 33 点を確認し、竪穴住居跡出土資料を除く 16 点を図示した。石材としてはチャートが 33 点中 19 点と最も多い。多くの資料が石鎌の製作に関わる可能性が指摘できる。

970・971 などは五ヶ瀬川産の可能性がある流紋岩を素材とする点で注目される。本遺跡の後期旧石器時代にはこうした形態の楔形石器が目立つわけではないので、縄文人が旧石器時代の石器類を素材として楔形石器に再利用した可能性も充に考えうる。

□二次加工剥片・剥片・石核類、原石

(第 126 ~ 132 図)

概要 本遺跡では各種石材について夥しい量の二次加工剥片・剥片・石核類、原石が出土している。ここでは、わずかな資料のみサンプル的に記載する。御寛恕願いたい。

桑ノ木津留・上青木系黒曜石製資料 (第 126 図)

986 は第 1 層中からの出土であるが、細石刃核のプランクに似る。988 は針状の原石である。こうした資料が他にも複数認められた。流通形態を探るうえで興味深い。

西北九州産黒曜石製資料 (第 127 図)

あくまで肉眼による判定であることを断っておくが、このグループには特徴的な資料が 2 点認められた。989 と 990 には剥片の側縁、あるいは末端に研磨痕ないし擦痕が観察される。989 のそれは明瞭な線状痕を残す。990 のそれは磨ガラス状を呈する。

991 は二次加工剥片である。小形の削器とも受け取れる。997・998 は石核である。本遺跡では、これ以上のサイズの資料は認められなかった。

姫島産黒曜石・安山岩製資料 (第 128 図)

999 ~ 1005 が黒曜石、1006 が安山岩である。量的には前者が圧倒的に多く、後者は石鐵などのトゥールに多い印象を受ける。サイズとしては 1005 を超える資料はない。

その他の石材製資料 (第 129・130 図)

1007 は水晶の結晶である。搬入品の可能性がある。1008 は珪質頁岩、1009 はチャート製の石核である。後者は比較的良質のチャートでは大きなサイズといえる。1010 はサヌカイト製の石核である。原産地は明らかでないが、大形のサイズが搬入されている点は注目に値する。ただし、どういった器種に素材が供給されているかは明らかでない。より精緻な観察と分析を要する。

1011 はホルンフェルス製の石核とした。礫器的な用途も考慮すべきかもしれない。

点数・重量ともに最多であるのはこのホルンフェルスおよび頁岩類である。これには、前者が磨製石斧、後者が打製石斧類というヘヴィーデューティー・ツールの材料として選択されてい

るところに最大の理由がある。また本遺跡が、豊富に石材を要する小丸川に近い立地であることでも大きく影響している。

この他、図示が足りなかつた石材としては一定量用いられている砂岩がある。

尾鉢山産溶結凝灰岩製資料 (第 130 ~ 132 図)

当該石材の剥片・石核類も重量のうえでは無視できない比率を占める。ただし、これらの剥片剥離・分割作業が何を目的として行なわれたかは、今ひとつ不明である。定形的なトゥールとしては、第 23 図 72 の礫器ないし插器や、石錐、石鐵などの剥片石器にもごく少数が供給されているが、あくまでも一部にとどまる。

1021 は背面に磨滅した面を持ち、磨石の破片と推測できるが、他の剥片は用途・来歴が不明である。1024 ~ 1026 は石核である。1024・1025 は不定形な剥片を剥取しているが、1026 は縱長剥片を志向している様子も窺える点で注目される。1027 は側縁に不規則な二次加工痕が認められる。

□打製石斧 (第 133 ~ 145 図)

概要 壓穴住居跡出土資料を除く表土や第 1 層、遺構などからの出土品から総計 1000 点以上を確認し、うち 128 点を図示した。使用石材は大半がホルンフェルス類および頁岩類で占められ、ごく少数のみ砂岩・緑色岩が用いられる。

資料群は形態変異に富むが、この多様性は必ずしも完成段階の諸形態を直接に反映するものではない。破損品や製作途上で生じた剥片などが多量に存在することを考え併せれば、後述するようにライフサイクル中の諸変形をも考慮する必要がある。

ここでは形態変異を能う限り整理するために、三つの観点から分類をおこなった。

- ①着柄の仕様の違いを想定した基部形態の大別、
- ②製作・使用時におけるリダクションを考慮した体部および刃部形態の理解、
- ③機能・用途の想定

である。第一の観点、着柄の仕様では、基部付近に抉りを持たないもの（無抉群）、基部付近に抉

りをいれるもの（有抉群）、柄部を有するもの（有柄群）の三大別が可能である。さらに、以上の大別三群について、破損後の変形と機能・用途的側面を念頭におき、特に刃部形態の差異から細別し、結果十類型およびその細別類型を設定した。

なお成形・整形技術に関して、「打製石斧」と称しつつも、部分磨製ないし前面磨製に近い資料もこのカテゴリーに含んでいる。あるいは「打製土掘具」などの名称が適當かもしれないが、ここでは用途の限定を避け、通称である「打製石斧」の用語を用いる。

■無抉群

体部平面形の両側縁が基本的にほぼ直線ないし若干張り出すラインで構成されるグループ。

I類：短冊形

長方形ないし隅円長方形の平面形を有し、基端部がほぼ直線で構成されるもの。両側縁がほぼ平行するものをI a類（1039・1040など）、両側縁がやや膨らみ気味のものをI b類（1042・1089など）とした。刃部は平刃。

II類：垂短冊形

I類とはほぼ同じ仕様であるが、刃部側に向かってわずかに両側縁が広がる長台形の平面形を有する。両側縁がほぼ直線で構成されるものをII a類（1030・1053など）、両側縁がやや膨らみ気味のものをII b類（1050・1052など）とした。両側縁の広がりの程度が進むと、形的にはIII類（撥形）に連続する。刃部は平刃。

III類：撥形

II a類に連続する長台形のIII a類（1072・1135など）、基端が尖り刃部を底辺とする二等辺三角形の平面形を持つIII b類（1071など）、両側縁がやや内反りになるIII c類（1036・1155など）の細別が可能である。刃部は平刃または円刃。

IV類：小判形

I類に含まれる平面形が隅円長方形のものが、さらに丸みを帯び、長楕円形の平面形を有するもの。器長が長いものをIV a類（1043など）、ずんぐりとした楕円形のシルエットのものをIV b類（1069など）とした。刃部は円刃。

V類：細形

細身の体形を有するもので、両側縁がほぼ平行するものをV a類（1070など）、刃部・基部の両端がすぼまり気味となり紡錘形に近いものをV b類とした。

■有抉群

体部中程ないし上半の側縁に着柄に関連すると思しき抉りを施すグループ。

VI類

体部上半の両側縁に抉りを有するグループ。刃部形態の差異から、VI a類（平刃：1104など）、VI b類（尖刃：1107など）、VI c類（1137など）、VI d類（円刃：1138など）に細別した。VI類内の形態変異は多分に刃部再生の結果を反映する可能性も高いと思われる。なお、尖刃のVI b類については弥生時代の所産である可能性にも注意する必要がある。

VII類：分銅形

体部中程の両側縁に抉りを有し、ほぼ上下対称の形態をなすグループ。隅円三角形状の形態が連結するものをVII a類（1109など）、円形が連結するものをVII b類（1110など）とした。

■有柄群

体部上半と下半の幅が異なり、抉りではなく肩ないし段状の境界を有するグループで、上半が柄と理解できるもの。必ずしも有抉群と画然と分かたれるわけではなく、中間的な資料が両群を取り結ぶ。

VIII類

下半部が円形をなすもの。柄部が短小なものを作VIII a類（1035など）、相対的に柄部が長く下半部が狭小なものをVIII b類（1114・1115など）とした。

IX類：漏斗形

短小な柄部から刃部に向かって両側縁が末広がりになるもの（1154など）。

X類

先鋒な肩部を有する一群。いわゆる「有肩」と形容される資料を含む。正方形ないし長方形の長軸の一端に短小な柄部が組み合わさるX a類（羽子板形：1150など）、長方形の短軸の一端に柄

部が組み合わさる X b 類（凸字形：1151）、尖った刃部を有する X c 類（矢印形：弥生時代）に細分した。X 類内の形態変異も刃部再生の結果を反映する可能性がある。

観察所見 以下、いくつかの資料について観察所見を記す。なお図示した資料には完成品だけではなく、未完成品も含んでいる。また、磨製石斧の未完成品である可能性を持つ資料も含まれる。

1033 は A 区の第 I 層から出土した有抉群第 VI a 類である。背面の一部に煤状の付着物が観察される。1034 は A 区第 III 層からの出土である。本来は縄文時代早期の包含層であるが、形態的に縄文時代後期以降の所産と判断される。有抉群第 VI 類の範疇に入るが、基部側に図示した箇所も整形加工によって尖銳に仕上げられる。あるいはこの部分が機能部かもしれない。1046 は無抉群第 II 類であるが、刃部は尖刃である。1050 は両側縁が若干弓なりに湾曲するもので、次項の横刃形石器と関連する可能性もある。1062 も器体の薄さから横刃形石器に関連するかもしれない。

1054 は器体表面と基端に磨滅痕が観察される資料で、相対的にやや厚めの器厚を持つ。小形磨製石斧の未完成品か。1065・1066 なども器体表面に磨滅・研磨痕が観察される小形の一群である。器厚の薄さから「土掘具」的な用途が想定される。大型品には 1132 がある。

第 138 図にまとめたのは、器長に対して相対的に幅の広い一群である。磨製石斧の未完成品である可能性も排除できないが、対応する完成品は見当たらない。1107 はわずかに抉りを入れる有抉群第 VI b 類であるが、弥生時代の所産である可能性も指摘できる。器体表面の一部に整形のための研磨痕が残る。

□ 横刃形石器（第 146 図）

総計 9 点を認定した。当初は打製石斧およびその破損・未成・失敗品などと理解していたものを含む。板倉氏の指摘（文献 26）を踏まえたうえで、あらためて形態・刃部の位置・形状に注意を払って器種認定を行なった。ただし、名称としては「横刃型」ではなく「横刃形」とした。

器種認定の基準としては、長軸の端部に打製石

斧のような刃部形成が認められず、横断面を観察した場合に、どちらか一方に傾斜して刃部を認定しうる二等辺三角形を呈する形態的特徴を重視した。使用石材は打製石斧および次項にある磨製石製品類と共に、頁岩・ホルンフェルスを多用する。整理作業途中の器種分類体系の変更であったため、現在打製石斧をはじめとする他器種の中にも、多くの横刃形石器が混在する可能性が高い。今後の再整理が必要とされる。

少数のみの抽出ではあるが、刃部形態には直線刃・外湾刃・内湾刃の三種が確認された。1157 は直線刃で背縁は敲打によって調整される。1162 は軽い内湾刃の薄手の資料である。1164 は外湾刃で、1157 とは対象的な形態を有する。

□ 削器（第 147 図）

遺構・包含層中からは、当該器種に認定しうる資料があるが、ここでは特筆すべき 1 点のみ提示する。1165 は砂岩製の打欠石錐を転用した削器である。長軸一方の縁辺にやや鋸歯状線状を呈する刃部が設けられる。あるいは横刃形石器に近い用途を備えた可能性があるが、横刃形石器よりも刃部に厚みがある。

□ 石鎌（第 147 図）

2 点を図示した。いずれも打製石斧の製作技術と類似した工程で製作される。1168 は張り出した側の側縁が銳利で仕上げられる。風化でよく観察できないものの、表面を若干研磨している。形態的な類似から元下須型石刀の未完成品の可能性も指摘できる。

□ 磨製・敲打石製品（第 148～150・157 図）

概要 石棒・石刀・石冠状石製品などをこのカテゴリーに含めた。総計 84 点を数える。内訳を示すと石棒およびその類品 4 点、石剣・石刀類 34 点、石冠状石製品 2 点、その他の磨製石製品 44 点となり、うち 46 点を図化した。記載にあたり、次のような定義を用いる。

その他の磨製石製品とした 44 点は、研磨痕・摩滅痕ある剥片のうち、石棒・石刀・石剣類の剥片である可能性が指摘できる資料の他、磨製石斧や磨製石礫、石盤など磨製石器類の破片も含まれる可能性がある。

■石棒（第 148 図 1169）

記載は次の定義による。

石棒【長い棒状の磨製・敲打製の石製品。側縁を走る稜・刃部がない。断面形は円形ないし橢円形】

なお本遺跡から出土した資料 4 点は、全ていわゆる無頭石棒であり、破損している。ここでは 1 点のみ提示した。他には第 75 図に提示した縄文時代早期の集石遺構の傍らから検出された大形品などがある。

1169 は B 区の表土中からの出土であるが、縄文時代後・晚期の所産と考えられる。断面は橢円形で、表面全体に線条痕が残る研磨加工が施される。図の上側に向って両側縁が若干すぼまってゆく形状をとる。層状構造の残る頁岩を用い、被熱によるものか、若干の赤化が認められる。小形品としては他に C 区から出土した 1 点がある。

■石刀（第 148 ~ 150 図）

通常、石剣と石刀の違いは、側縁の稜・刃部の数によるが（文献 27）、本州の成果を基に組み立てられた器種觀は、九州地方の実状を理解する際には若干の齟齬をきたす。そこで、ここでは遠部慎氏の論考（文献 28）を参考し、記載を次の定義によりたい。

石刀【長い扁平な磨製の石製品。断面形が隅円長方形や、弱い稜線により凸レンズ・菱形の断面形または一方の側縁のみに強い稜を持つ。器体は変異に富み、湾曲するもの、扁平で幅広いものなどを含む。】

上記の定義に該当する資料は二大別される。

I 類：元下須型石刀（第 148 図 1173 + 1174）

従来「天附型」とされてきた型式（文献 29）であり、近年改称が提言された（文献 28・30）。

1173 + 1174 は SA39・47 間の接合資料である。いずれも覆土上層からの出土であり、竪穴住居跡に伴うというよりは、廃棄に関わる文脈で理解できよう。表面が若干赤化していることから、この資料が破碎した要因には被熱も考えられる。頁岩を用い、表面には研磨による線状痕が残る。当該型式に関連する可能性がある資料としては、いずれも破損品であるが、他に 8 点が認められた。

なお 1173 + 1174 と同一母岩と思われる資料もあるが接合関係は確認できなかった。また、自然面を多く残す 1177 も当該型式の未成品である可能性を指摘できよう。

II 類：尾烟型石刀（第 148 図 1171 + 1172）

尾烟あるいは大原型と呼ばれる資料である。確實なものは 1171 と 1172 の接合からなる 1 資料のみ確認された。1 点は第 1 層、もう 1 点は古墳時代の第 15 号竪穴住居跡（SA15）から出土した。

人為的なものか、複数部位に破損している。表面には顕著な線状痕が残る。赤化は認められないが、部分的にタール状の付着物が観察される。

以上の二類の他、石刀に関連する可能性が高い、研磨・線状痕を有する石製品の破片が多数確認された。

■石冠状石製品（第 157 図）

2 点確認された。下面に平坦面を配し、上面が始刃状の稜を持つ石冠状の資料である。側面觀はほぼ半月形であるが、その両端を断ち落とす格好をとる。いずれも C 区の第 1 層からの出土である。

類例は縄文後期中葉の熊本県西平貝塚（文献 31）や縄文晚期の長崎県黒丸遺跡（文献 32）にあり、前者は稜付近に朱塗りが認められる資料である。一方、南九州における古墳時代の魚形石偶（文献 33）も、当該資料と形態的に類似し関連する可能性も排除できないが、本遺跡の出土品に関しては縄文時代後・晚期の幅で時期を推定したい。

1264 は、ほぼ完形品で、橙黄白色の凝灰岩を素材とする。全面に研磨による線状痕が残り、両側面の下部にも弱い稜線が走る。底面の中央付近に、器体長軸に沿った窪みが観察される。

1265 も 1264 と同質の凝灰岩を素材とするが、人為的なものか、複数個に破損している。接合して、ほぼ完形品に復元される。1264 に比較して器高が高く、構成面数が少なく、より曲面的な形態をとる。底面は平滑で、窪みは観察されない。

■その他の磨製石製品（第 148 ~ 150 図）

以上のカテゴリーから外れる形態のうち特筆すべき資料について説明を加える。

1170 は、厚みのある橢円形の断面を持ち、器体は湾曲する。石棒あるいは元下須型石刀に関連

する資料か。

1175は扁平棒状で尖頭部を持つ形態である。表面には顯著な線条痕が観察される。淡緑色の赤色頁岩を素材とする。やはり石刀に関連する資料か。1176も形態的に類似した資料である。

1178・1179は平面形は幅広で、器厚は薄い一群である。前者は上部が鈍角の尖頭部を持つ。両側縁には平坦面が形成されていることから、刃部ではないことがわかる。後者も側縁は前者と同様の特徴を持ち、下辺には刃部が形成される。このことから、両者には実用品の側面を考慮する必要があるが、器体の薄さから、土掘具的な用途は想定しにくい。1180も1178と類似する。1205～1208は相対的に厚みがあり、より打製石斧などの実用品に近い。

1181～1184、1188～1204には、石刀の破損品以外にも、1178などと同一の範疇に含まれる資料の破損品が含まれる可能性があろう。

1185～1187は長楕円形の平面形を有し、周縁を剥離と研磨によって整形する。明確な刃部は形成されない。

□円盤形石器（第151・152図）

12点を図示した。サイズでは1213～1215の小形品、その他の大形品の二者が認められる。

素材としては、砂岩や頁岩、ホルンフェルスなどの円形扁平礫を用い、周縁のみ剥離整形して最小限の加工を施すものが大半で、1218～1221のように器体の中央までに達する剥離を加える資料も認められる。1222・1223は大振りな剥離が周縁の一部に施されるものであり、小形の礫器とも捉えられるが、円盤形石器の未成品である可能性を推したい。1222の表裏両面には細かな敲打痕や爪形状の打痕が中央付近に観察され、凹石との関わりも指摘できる。1224は破損品である。

□十字形・X字形石製品（第152図）

5点を図示した。いずれも層状構造の顯著な頁岩を素材とし、打製石斧や横刃形石器と共通する。

1228・1229は、抉入部の奥に、敲打によるものか、縁辺の潰れが観察される。

□礫器（第153図）

5点を図示した。1230は円盤形石器の素材・

加工が共通するが、相対的に厚みを持つことから礫器と認定した。

1231・1232は両刃礫器、1233・1234は片刃礫器である。1233は刃部を先鋒に作出する点でやや特異な資料である。

□磨製石斧（第154～156図他）

概要 破損品や未成品も含めて総計1,000点以上を確認したが、わずか29点を図示するにとどまった。

使用石材は大半がホルンフェルスで占められ、ごく少数のみ砂岩、尾鈴山産溶結凝灰岩、頁岩、緑色岩が用いられる。蛇紋岩製の資料は認められない。なお破損品や製作途上で生じた剥片なども多量に存在している。概して、完形品は少ない。

ここでは、完成形態を推定可能なものについて、平面形を基に五つに大別し説明する。

I類：撥形（第154図1235～1242、第239図1711・1712など）

基部から刃部に向かって両側縁が末広がりの体形を持つ。厚みでは、分厚なものと、相対的に薄めのものとの二者が認められる。主に前者では小形品の中に、いわゆる定角式に近い作りを持つものがある。後者は側面に不明瞭な稜を残し、横断面形はアーモンド状となる場合がある。基端部には、尖るものと平坦面・線からなるものなどの変異を認める。刃部にも円刃や直刃などの変異がある。

1235はホルンフェルス製で、全体がよく研磨された小形品である。横断面形は略長方形を呈し、側面にも平坦面を配する。1237は中形品で、敲打整形の後に、研磨加工を施した過程が看取される。1236は刃部を作出する直前の製作段の資料と思われる。1240は大形品の部類に入り、敲打・研磨加工を施す前の剥離による粗整形段階の資料である。基部の形状は異なるが1241も同製作段階の未成品であろう。

1238・1239は側縁を研磨し、平坦面を形成することで、打製石斧と弁別したが、器厚は薄く、厳密には磨製石斧とは呼べない。

II類：短冊形（第154図1245、第239図1710・1713、第240図1716など）

両側縁がほぼ平行し、大略、隅円長方形の平面形をなす。数量は少ない。1245は一方の側面に平坦な礫面を大きく残し、他の縁辺を剥離によって整形する。白抜き部分は風化のため判然としないが、研磨されている可能性がある。

III類：紡錘形（第154図1243・1244など）

胴部中央から刃部・基部に向かって両側縁がすぼまる形状をとる。数量は少なく、次の細形と形態・サイズなどの点で共通点が多い。1244は表裏両面に礫面を残し、素材礫の形状をほとんど変更することなく、剥離・敲打整形を加えている。風化によって判然としないが、刃部付近は研磨による整形であろう。

IV類：細形（第154図1243）

細長い棒状の体形をなす。1243は礫を石核とし、細長い剥片なし分割礫を素材としている。素材の形状を活かしつつ、敲打整形を加えている。

V類：石斧（第156図1259～1263）

計5点を確認した。頁岩・ホルンフェルスを素材とし、風化のために必ずしも明瞭ではないが、ほぼ全面を研磨によって整形する一群である。

1263は長軸の両端に刃部を形成することで、やや特異な資料といえる。

以上の類型以外で、他に特筆すべき資料について、数点の説明を加える。

第156図1254・1255は器種認定では打製石斧と判定されるが、一部に敲打痕が観察され、石材も打製石斧に多用される頁岩ではなく、磨製石斧に多用されるホルンフェルス(Ho I a)であることから、磨製石斧の破片を転用した可能性が高い。1255は横刃形石器の可能性もある。

1256はよく研磨された石片で、磨製石斧の破片と推定されるが、緑色岩を用いる点で注目される。同質の石材は他に1点認められるのみである。若干、蛇紋岩に似る石質である。

1257は数多い磨製石斧関連資料の中でも異彩を放つもので、横断面形が梢円形で、いわゆる円筒形石斧と呼びうる形態である。C区N7グリッド第1層から出土した。ホルンフェルス(Ho III)を用いる。器体上半部には剥離と敲打によって、わずかな抉りの作出が意図されているようにみえ

る。残念ながら刃部は欠損するが、総合的に判断して、丸鑿を想起させる点できわめて興味深い。

□打欠石錘（第158～161図）

概要 調査区全域から総計で5,000点に近い、夥しい量の打欠石錘が出土した。特に第2号溝状遺構が走るA・B区では、土器や他の石器に混在して多くの資料が確認された。藤木聰氏による宮崎県域の鍾具の考察（文献34）によれば、弥生・古墳時代以降まで打欠石錘の使用が継続される可能性が示唆される。本遺跡の資料も、弥生・古墳時代の資料を含みつつ、大半は縄文時代後・晚期に帰属するものと考えたい。その理由として、①弥生時代の遺構は認められず、遺物も少ないと、②古墳時代の竪穴住居跡の床面から検出される打欠石錘はほとんど無く、覆土に含まれる場合も石鐵や磨製石斧など縄文時代の石器も伴う場合が多いこと（例：古墳時代の第72号竪穴住居跡など）、③縄文時代後・晚期の土器や他の石器と共に包含層中から検出されるなど、層位論的にも分布論的にも当該期の遺物・遺構と関連が見出されること、などを挙げておきたい。

観察所見 以下では藤木氏や村松佳幸氏による分類（文献34・35）を参照し、紐掛け部の位置を基準に三つの類型を設けた。

I類：長軸打欠石錘（第158～160図）

素材の礫の長軸方向だけに紐掛け部を持つものである。本遺跡から出土した当該器種の大多数を占めるのがこの類型である。紐掛け部の作出には剥離、敲打、両極打法などが適用されていると推定される。

1278は剥離による典型的な打欠石錘の紐掛け部の作出を示す資料である。

1276は剥離面が器体の奥まで伸びず、紐掛け部の縁辺には顕著な潰れが観察されることから、敲打ないし擦りによる作出と判断されよう。

1277は紐掛け部に剥離面が観察されず、敲打による潰れが面的に残る。敲石の可能性もあるが、ここでは敲打整形による石錘の可能性を考えたい。

1281～1283は長軸のいずれか一方の剥離面が器体の奥まで長く伸びる特徴を有し、両極

打法による可能性が指摘できる。他には 1296・1297 など、紐掛け部の縁辺の挿入度合いが低く、線状に潰れが観察される資料などに両極打法が行使された可能性を指摘できよう。

また、形態と石材について、特徴的な対応関係が認められた。長軸：短軸が 3：1 程度を超える資料には頁岩の使用が目立ち、2：1 程度の場合は、砂岩が用いられる傾向である。採取される礫形状に影響される現象であろうが、使用時に何らかの区別があったものか興味深い。

製作技術以外で特筆すべき点にいくつか触れておきたい。1271 は片面の中央付近に、あたかも紐掛け部を結ぶように、擦痕が観察される資料である。ただし、この擦痕部分はやや新鮮な色調を呈し、発掘時の損傷である可能性も捨て切れない。参考までの言及にとどめる。

1272 は表裏両面に亘ってトーンで図示した範囲が赤化する資料である。使用時の装着に関連する可能性があろう。1273 も装着に関連するものか、片面の中央付近を線状に残して、両側に煤状付着物が観察される資料である。装着した状態で火を受けたものと推定される。

1304 は片面の中央付近に磨滅面が観察されるものである。時間的先後関係は明らかでないが、臨機的な転用と評価できようか。なお、砥石の記載で後述するが、本遺跡では砂岩製の磨石と考えられる石器が打欠石錘に転用された事例も確認されている。

II類：短軸打欠石錘（第 159 図）

素材の礫の短軸方向だけに紐掛け部を持つものの、長短比がおよそ 1：1 の略正円形・略正方形の素材も含む。I 類に比較して数量は少ない。

1289・1294・1312 などが該当する。1303 も残存形態は本類に該当するが、下辺はおそらくリダクションを受けている。

III類：双軸打欠石錘（第 160 図）

素材の礫の長軸・短軸方向の四方ないし三方に紐掛け部をもつもの。長短比がおよそ 1：1 の略正円形・略正方形の素材も含む。

製作技術の点では、I 類に見出された技術のレバートリーがほぼ出揃う。

1319・1325 は、凹凸的な用途にも兼用されたものであろう。ただし、1325 に顕著な線状の敲打痕は本遺跡の凹凸一般に観察されるものではなく、両極打法の台石として臨機的に使用された可能性も考えられる。

□切目石錘（第 161 図 1328～1332）

打欠石錘に比較して圧倒的に出土量は少なく、総計は 10 点前後である。5 点を図示した。

1328 は紐掛け部付近に顕著な磨滅が観察される点で注目される。1329 は裏面に配した左側上部付近にやはり磨滅面が観察される。1330 は一方の紐掛け部に 2 条の切目がある。1331・1332 は一般的な作りの資料である。

□有溝石錘（第 161 図 1333）

図示した 1 点のみ確認された。丁寧な敲打により、厚みのある礫の長軸に、若干蛇行する浅い溝が作出される。

□自然礫石錘（第 161 図 1334）

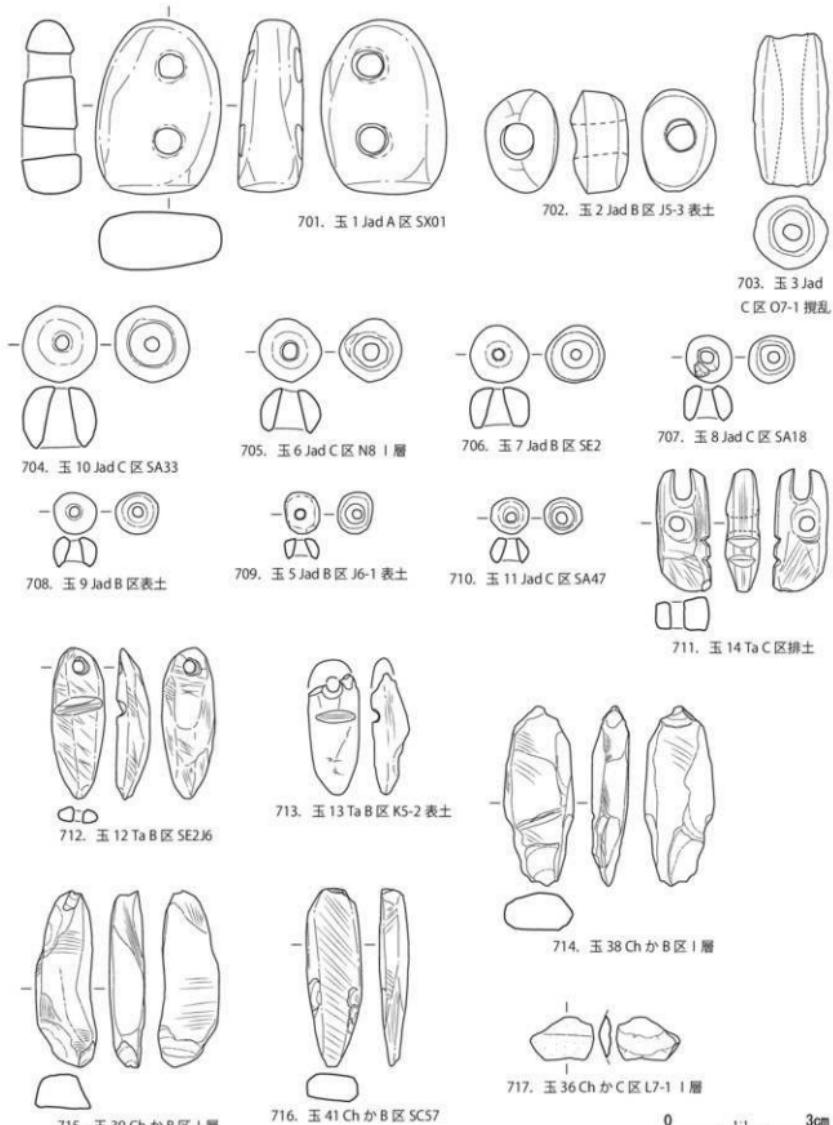
類品は多いが、参考資料として 1 点のみ図示した。1334 は元々の礫形状が錘具への利用に適したものである。

□磨石（第 162・163 図）

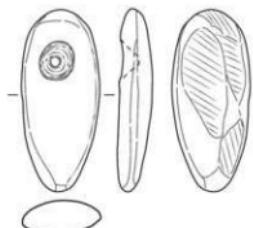
概要 使用に伴う摩滅と考えられる平滑面を有する資料を当該器種に含めた。資料には敲打痕が観察されるものも多いが、摩滅面を残すものは全て磨石の範疇に含めた。磨石と敲石の双方の用途を兼ねたか、あるいは一方から他方への転用の可能性が考えられる一群である。なお、大形の資料については、石皿・台石からの転用、あるいは弥生時代の太形蛤刃型石斧など大形磨製石斧類の未成品・素材の可能性を考慮すべきものもある。

以上の基準で抽出すると、総計数百点を超えるが、そのごく一部である 13 点を図示するにとどめた。本来は統計的な検討が有効と思われるが、今回は実施していない。

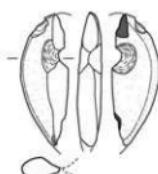
なお、本遺跡では、包含層中および表土中からも多量の磨石・敲石類が出土している。これらの資料は包含層の性格上、必ずしも縄文時代後・晩期の所産と断じ切れない部分があるが、ここでは後世（弥生・古墳時代以降）の可能性があるものも含めて分類を検討しておく。



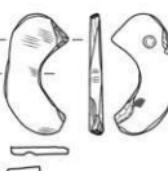
第 111 図 繩文時代後・晩期の玉類（1） S= 1 / 1



718. 玉 16 Jad か A 区 I 層



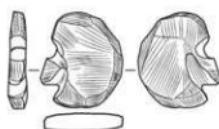
719. 玉 17 Sh I B 区 I 層



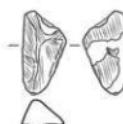
720. 玉 45 Sh I B 区 I 層



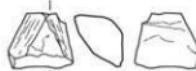
721. 玉 20 Ta A 区 SE1



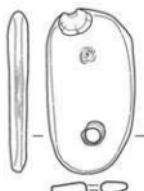
722. 玉 18 Fu C 区 P8 I 層



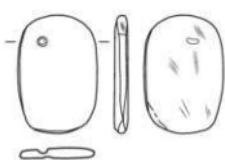
723. 玉 37 Fu B 区 K6・7 ベルト I 層



724. 玉 35 Fu C 区 L7-1 I 層



725. 玉 42 Sh I B 区 I 層



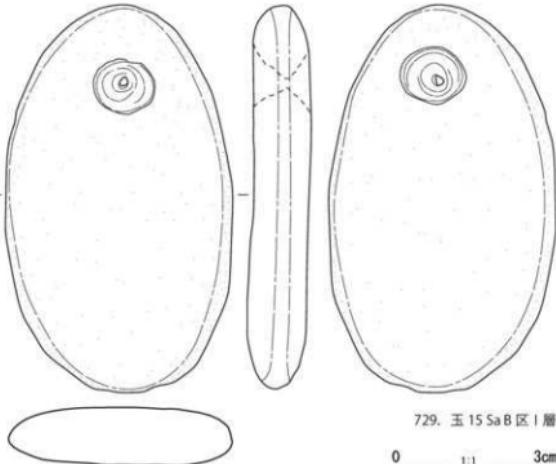
726. 玉 48 Ho I aB 区 K6-3 I 層



727. 玉 43 Ho I aB 区 Ib-2 I 層



728. 玉 44 Sh I B 区 I 層



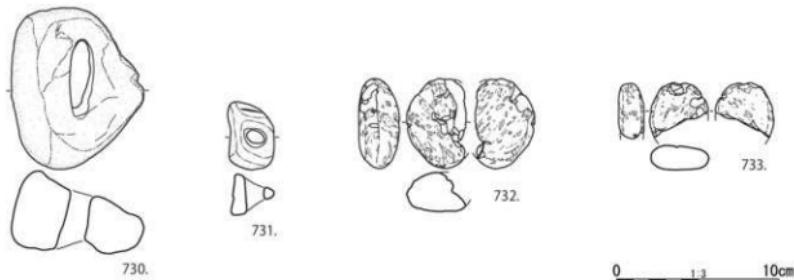
729. 玉 15 Sa B 区 I 層

0 1:1 3cm

第 112 図 繩文時代後・晩期の玉類（2） S= 1 / 1

第15表 繁文時代後・曉期の玉觀察表

規範No.	器種No.	注	記	色調	材種類	サイズ			形態	分類	基準	線刻	器種	時代・時期	備考
						長さ(cm)	幅幅(cm)	厚さ(cm)							
701	玉 1	ノクビ2 A	SX1	123	透明白・白箱	Jad	透明・半透明	ヒズイ	35.2	25.3	12.6	22.84	透明白	2	小珠
702	玉 2	ノクビ2 B	J5-3	表土	透明白・白箱	Jad	透明・半透明	ヒズイ	20.9	16.0	11.2	6.28	不透明白	1	片側・凹凸
703	玉 3	ノクビ2 C	07-1	1巻紐小鉢	透明白・白箱	Jad	透明・半透明	ヒズイ	30.9	15.2	15.0	10.44	透明白	—	玉管玉
704	玉 10	ノクビ2 C	SA33	600	白・鮮緑箱	Jad	透明・半透明	ヒズイ	15.6	15.0	12.8	4.86	路球	—	透明白
705	玉 6	ノクビ2 C	N8	1	白・鮮緑箱	Jad	透明・半透明	ヒズイ	12.9	12.3	8.4	1.98	扁球平底	1	片側
706	玉 5	ノクビ2 B	SE2	319	浅緑白	Jad	透明・半透明	ヒズイ	12.0	11.9	7.9	1.39	扁球平底	1	片側
707	玉 7	ノクビ2 C	SA18	70	黄白・鮮緑箱	Jad	透明・半透明	ヒズイ	9.0	9.4	7.0	0.95	扁球平底	—	透明白
708	玉 9	ノクビ2 B	—	表土	淡緑白	Jad	透明・半透明	ヒズイ	9.0	8.8	5.8	0.68	扁球平底	—	透明白
709	玉 5	ノクビ2 B	J6-1	表土	灰白・鮮緑箱	Jad	透明・半透明	ヒズイ	8.3	7.2	5.0	0.43	扁球平底	1	片側
710	玉 11	ノクビ2 C	SA47	583	白・鮮緑筋	Jad	透明・半透明	ヒズイ	7.8	7.3	5.0	0.41	扁球平底	1	片側
711	玉 14	ノクビ2 C	—	排土	淡緑白	Se/Ta	不明	滑石	25.4	10.9	6.9	2.86	—	—	上端を開放
712	玉 12	ノクビ2 C	SE2	76	淡緑	Se/Ta	不明	滑石	30.4	10.9	6.5	3.04	扁球筋	1	片側・凹凸
713	玉 13	ノクビ2 B	K5-2	表土	暗緑	Se/Ta	不明	滑石	(24.3)	10.0	6.9	2.15	扁球筋	1	片側・凹凸
714	玉 38	ノクビ2 B	5624	1	暗緑	Chka	不明	石英質石材	36.7	13.9	7.2	5.17	扁球筋	—	面取り整形
715	玉 39	ノクビ2 B	13980	1	淡緑	Chka	不明	石英質石材	36.3	11.6	6.9	4.32	扁球筋	—	面取り整形
716	玉 41	ノクビ2 C	SC57	—	淡緑	Chka	不明	石英質石材	36.2	11.2	6.1	3.89	扁球筋	—	面取り整形
717	玉 36	ノクビ2 C	L7-1	1	浅緑白	JaKa	不明	ヒズイ?	13.0	8.2	2.3	0.41	—	—	面取り整形
718	玉 16	ノクビ2 A	1	406	浅緑白	Gr	在地	ヒズイ	37.1	15.8	7.0	6.42	横構円	1	原石
719	玉 17	ノクビ2 B	10185	1	黒灰	Sh I	その他	その他の	(31.7)	(9.8)	(4.6)	1.30	長楕円	1	原石
720	玉 45	ノクビ2 B	I7522	1	黒灰	Sh I	未分析	24.7	12.9	2.4	1.02	C字	1	不明	
721	玉 20	ノクビ2 A	SE1	ヤドリコ	黒	Ta	不明	滑石	11.8	7.8	2.4	0.39	1	勾玉	
722	玉 18	ノクビ2 C	セリヤ	1	透明白・透明白	Fu	無本根か、さざなぎ状	透明白	19.9	17.8	3.7	2.20	研磨	—	透明白
723	玉 37	ノクビ2 B	セリヤ	1	濃鮮緑	Fu	無本根か、さざなぎ状	濃鮮緑	16.6	8.8	5.0	0.73	多面体状	—	その他
724	玉 35	ノクビ2 C	L7-1	1	濃鮮緑	Fu	無本根か、さざなぎ状	黒灰	13.4	12.2	9.5	1.65	角状	—	原石
725	玉 42	ノクビ2 B	18010	1	黒灰	Sh	在地	未分析	33.3	18.3	4.1	3.77	横構円	2	原石・凹凸
726	玉 48	ノクビ2 B	K6-3	1	淡黄灰	Ho I. a	在地	未分析	24.2	16.1	2.5	1.76	圓柱	1	小型垂飾
727	玉 43	ノクビ2 B	18-2	表土	淡黄灰	Ho I. a	在地	未分析	(22.2)	21.5	3.9	2.69	長楕円	1	小型垂飾
728	玉 44	ノクビ2 B	20862	1	淡黄灰	Sh	在地	未分析	(26.0)	5.0	5.08	0.67	原石	—	原石・小玉
729	玉 15	ノクビ2 B	3310	1	淡黄灰	Sa	在地	その他	79.0	46.6	12.9	71.95	長楕円	1	大型垂飾



第 113 図 有孔石・軽石製品 S = 1 / 3

観察所見 素材形状と残存形態から、以下のような類型設定が可能である。なお、以下の類型設定は敲石の範疇と交錯する部分があることを断わっておく。

I 類：碁石形

略円形ないし梢円形の扁平礫を素材とし、その表・裏面あるいはどちらか一方の面に摩滅面が観察される。周縁部は未加工・使用であり、素材本来の面を残す。明瞭な使用痕跡に乏しいものも含む。1338・1340などが該当する。

II 類：ボール形

球形を呈する砾を素材とし、表面に摩滅が観察されるものである。明瞭な使用痕跡に乏しく、搬入礫としての性格が強い。図示は割愛した。

III 類：タブレット形

略正円形ないし梢円形の扁平礫を素材とし、その表・裏面あるいはどちらか一方の面に摩滅面が観察される。加えて、敲打痕が摩滅面にほぼ直交する面を側縁に形成する。敲打痕の範囲の多少からさらに二類に細分される。

III a 類：敲打痕は單一の面が扁平礫の周囲を巡る格好をとる。厚みに変異があるが、扁平な円柱状の形態をとる点で共通する。図示は割愛した。

III b 類：敲打痕が部分的に観察されるもの。1336・1337・1339などがこれに該当する。

IV 類：算盤玉形

基本的には敲石の範疇に入る。厚みのある扁平礫を素材とし、その表・裏面あるいはどちらか一方の面に摩滅面が観察される。側縁には、摩滅面に対しやや斜めの角度からの敲打痕が観察され

る。敲打痕の範囲の多少と稜線の廻り方から、さらに三類に細分される。

IV a 類：敲打痕は平坦面を単位として複数の面から構成され、側縁には稜線が直線的に形成される。その結果、しばしば算盤珠状の多面体を呈する残存形態となる。第 172 図 1423 などが該当する。

IV b 類：IV a 類の敲打痕が部分的に観察されるもの。図示は割愛した。

IV c 類：敲打面によって形成される側面の稜線がジグザグに廻るもの。図示は割愛した。

V 類：俵形

厚みのある棒状礫が素材と推定され、その一方の端部または両端に敲打痕が観察され、残存形態は俵状ないし枕状を呈する。やはり、敲打痕の残された方から更に二類に細分される。

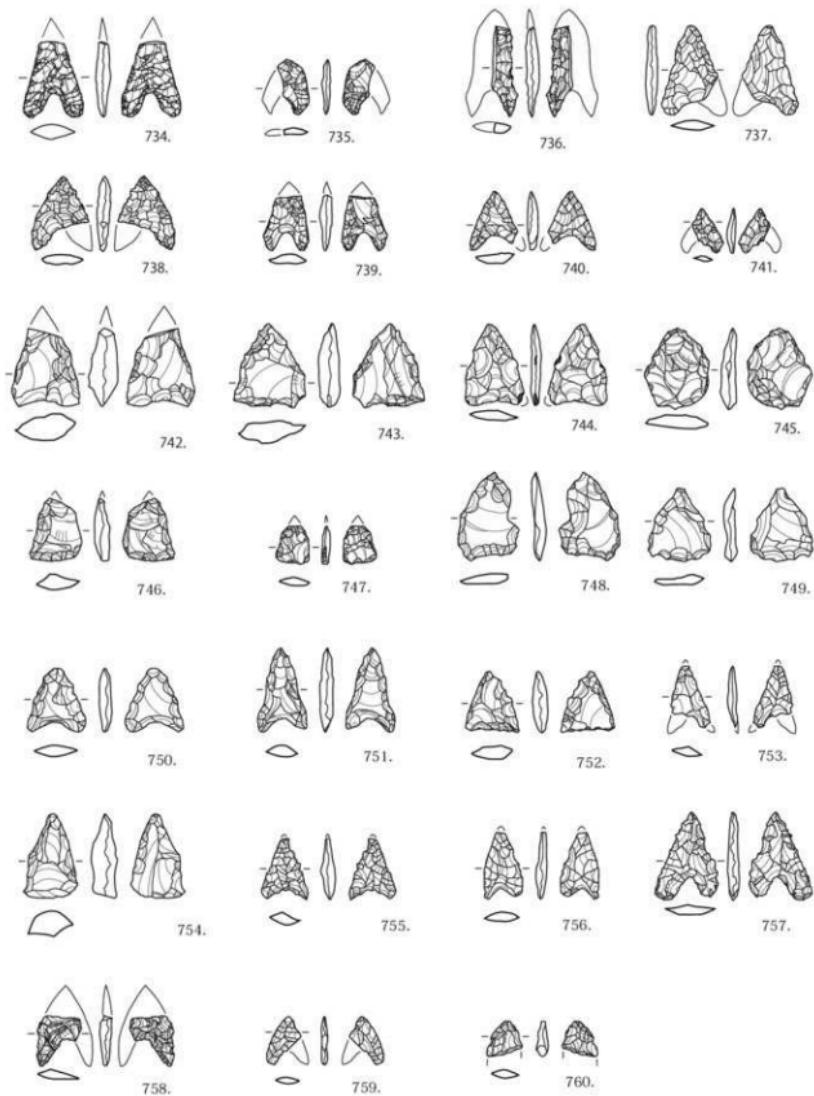
V a 類：長軸端部に、摩滅面にほぼ直交する敲打面が形成される。1335・1341などが該当する。1342 もこの範疇に入るが、長軸端部の敲打痕を抉るように、二つの小さな敲打痕が観察される点で特異な資料である。本遺跡では他に類例を見ない。

V b 類：敲打痕は平坦面を単位として複数の面から構成され、ストーンリッチャー様を呈する。図示は割愛した。

V c 類：上記二類以外の使用痕・整形痕が観察される資料を包括する。図示は割愛した。

以上の各類型を総合的に評価すると、以下のようないくつかの特徴を列挙できる。

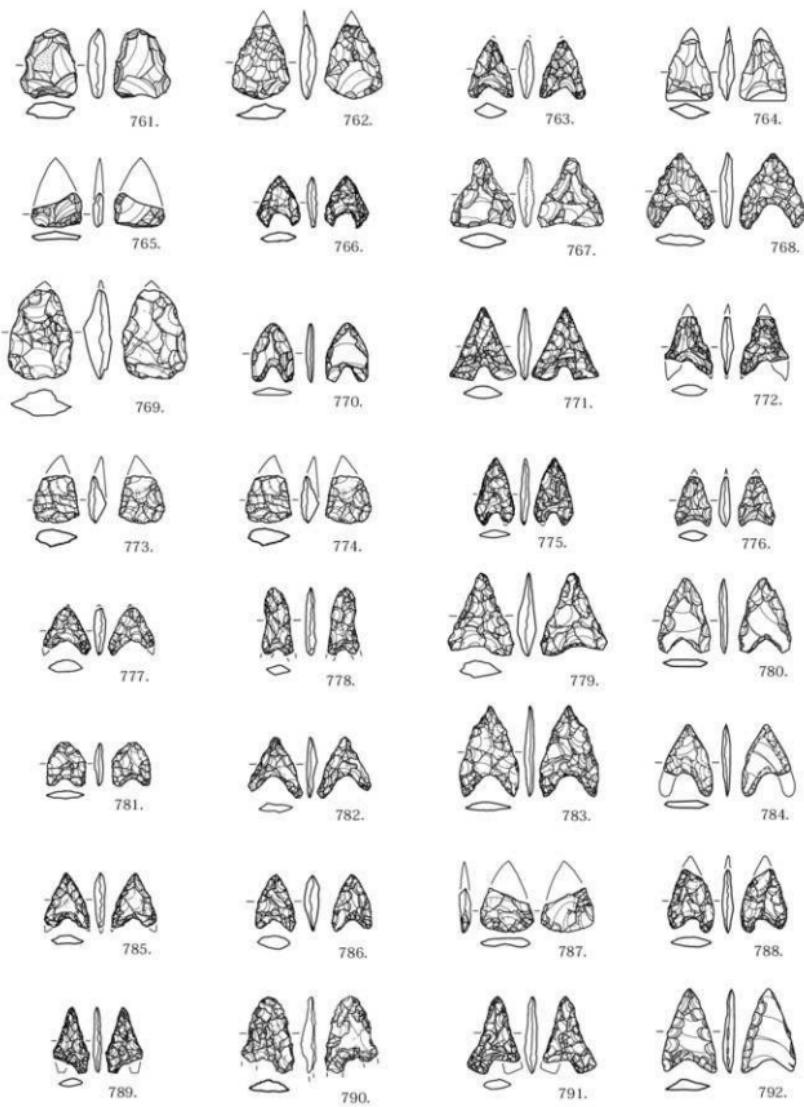
① 使用される石材は尾鈴山産溶結凝灰岩が圧倒



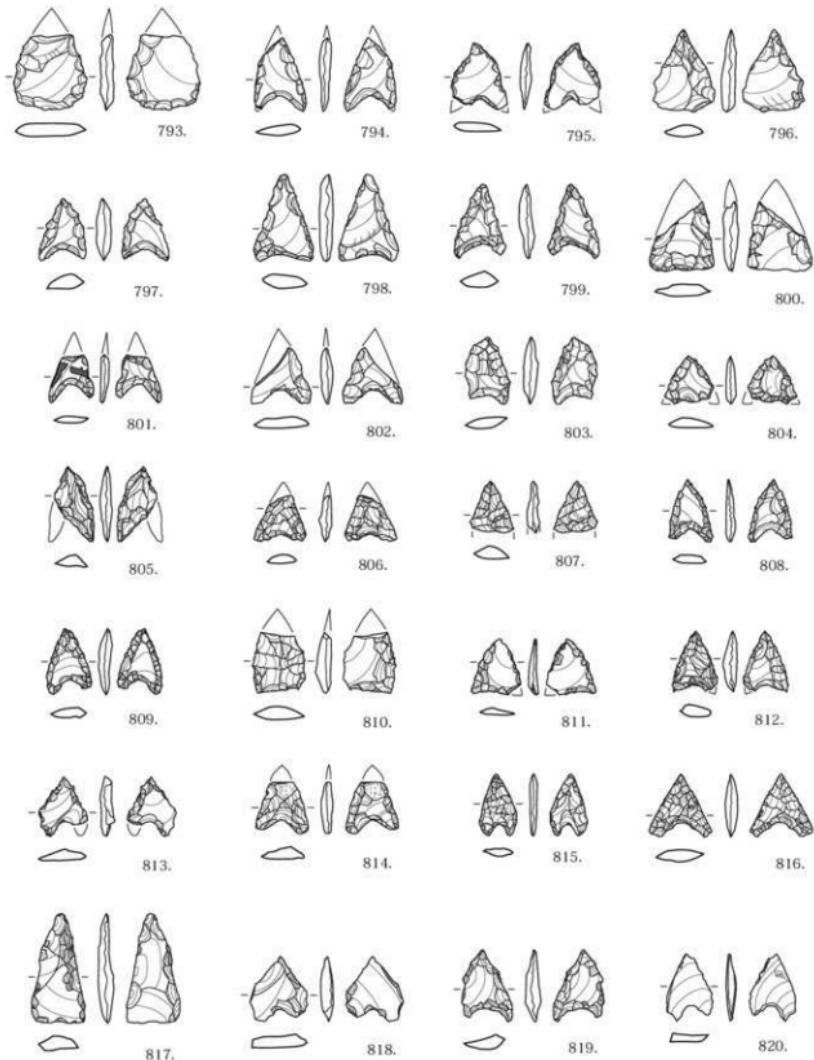
第 114 図 縄文時代後・晩期の打製石鏃 (1) A 区・B (D) 区出土①

0 2 3 5cm

S = 2 / 3

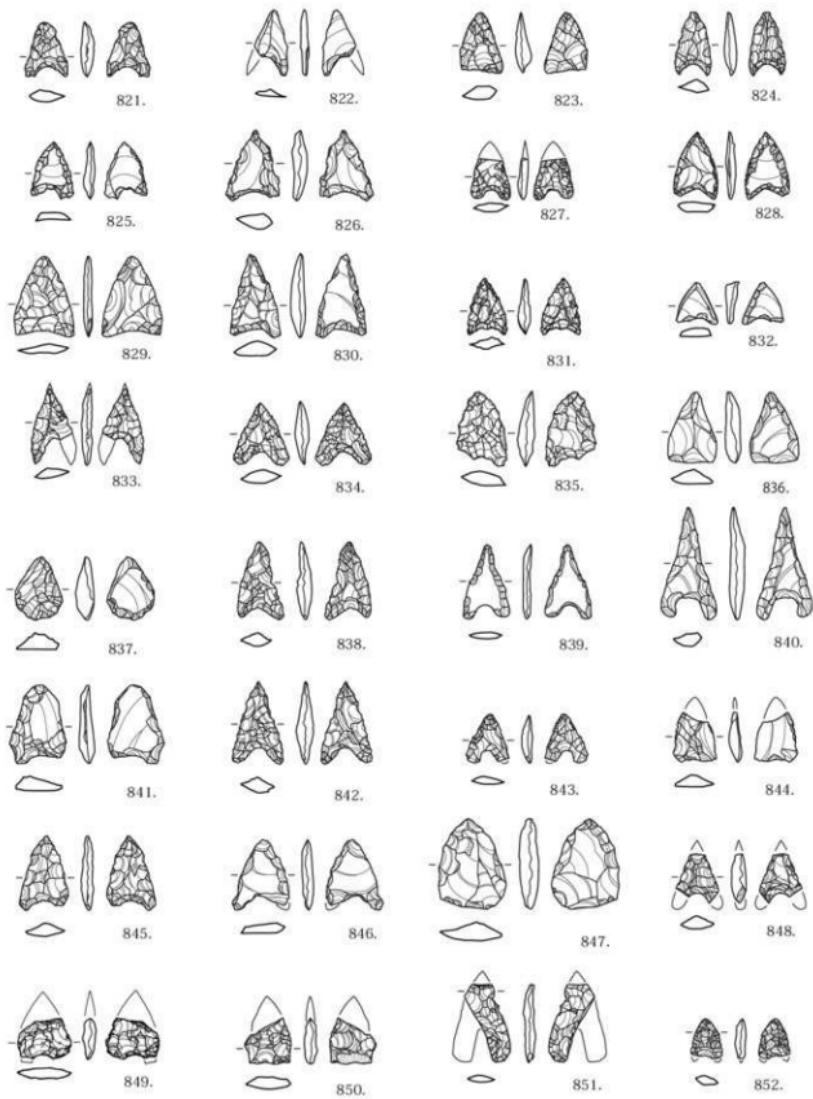


第115図 繩文時代後・晩期の打製石器(2) B(D)区出土② S=2/3

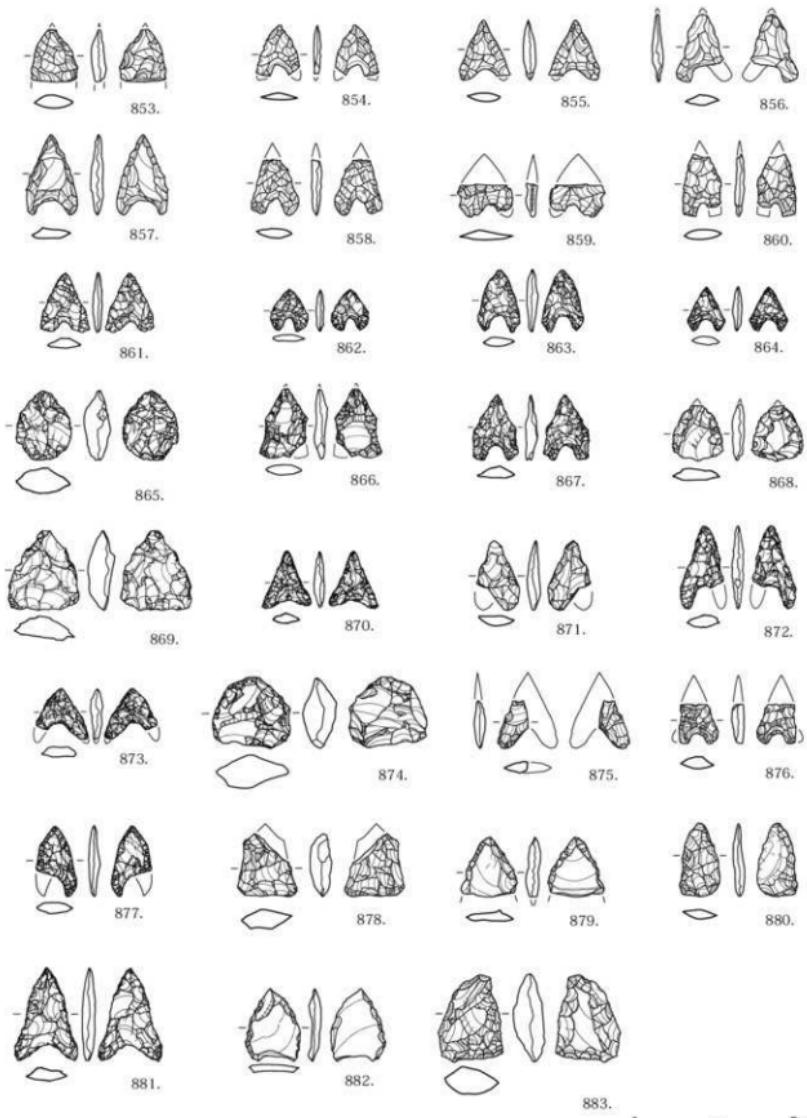


0 2.3 5cm

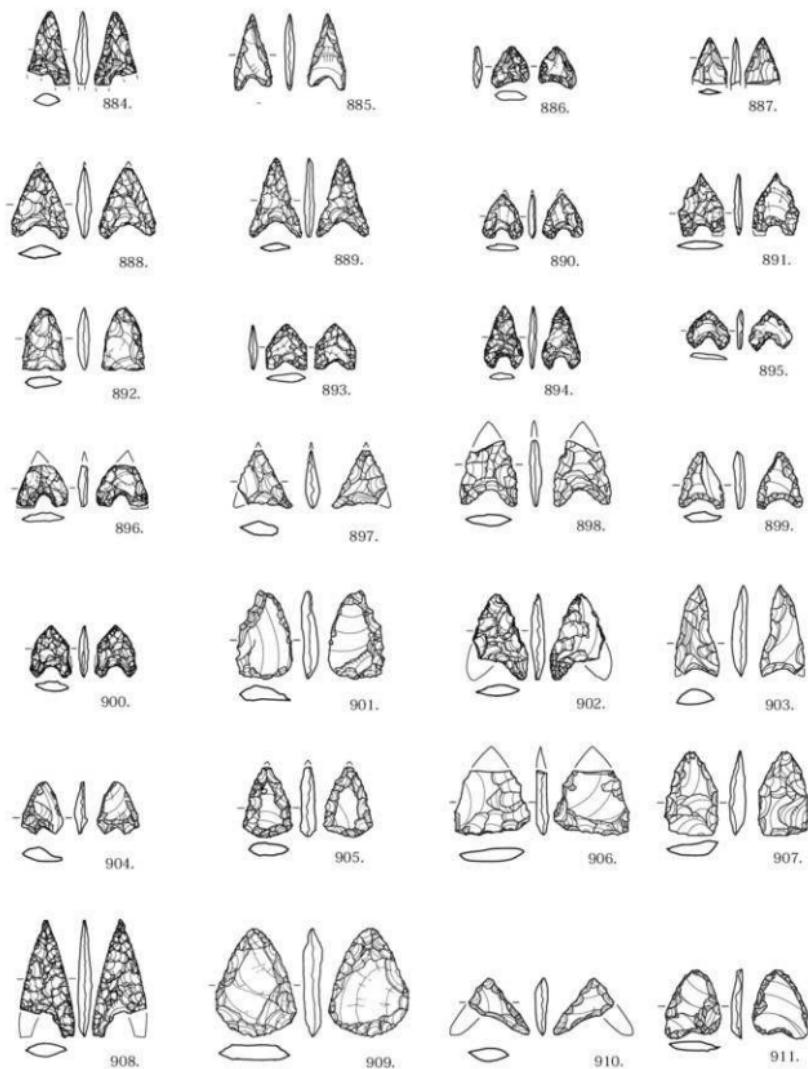
第116図 繩文時代後・晩期の打製石器（3） B (D) 区出土③ S = 2 / 3



第117図 縄文時代後・晩期の打製石器（4） B(D)区出土④・C区出土① S=2/3

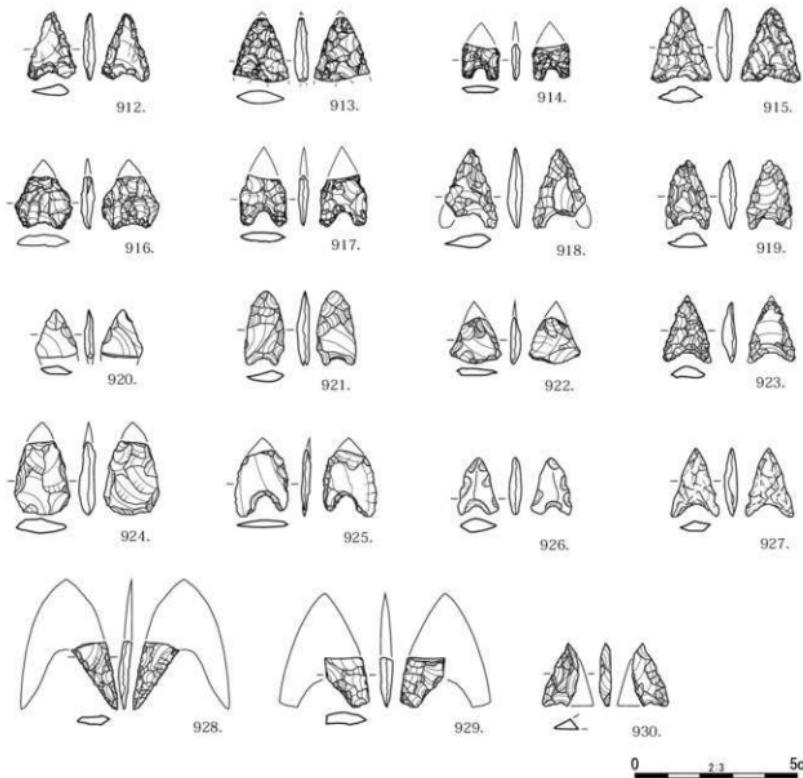


第 118 図 繩文時代後・晩期の打製石鏃 (5) C 区出土② S = 2 / 3

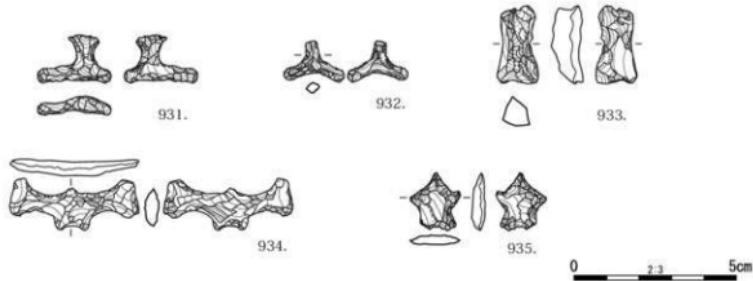


0 2.3 5cm

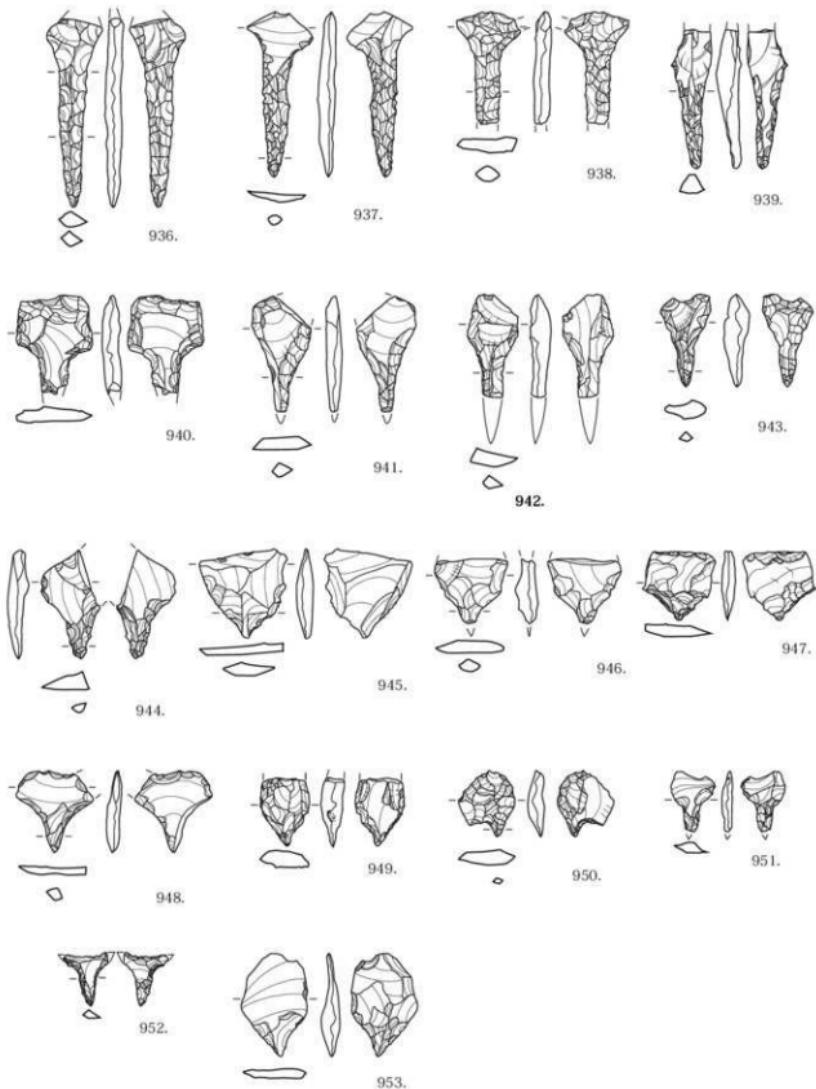
第119図 繩文時代後・晩期の打製石鏃（6）C区出土③ S=2/3



第120図 繩文時代後・晩期の打製石鏃（7） C区出土④・E区出土 S=2／3

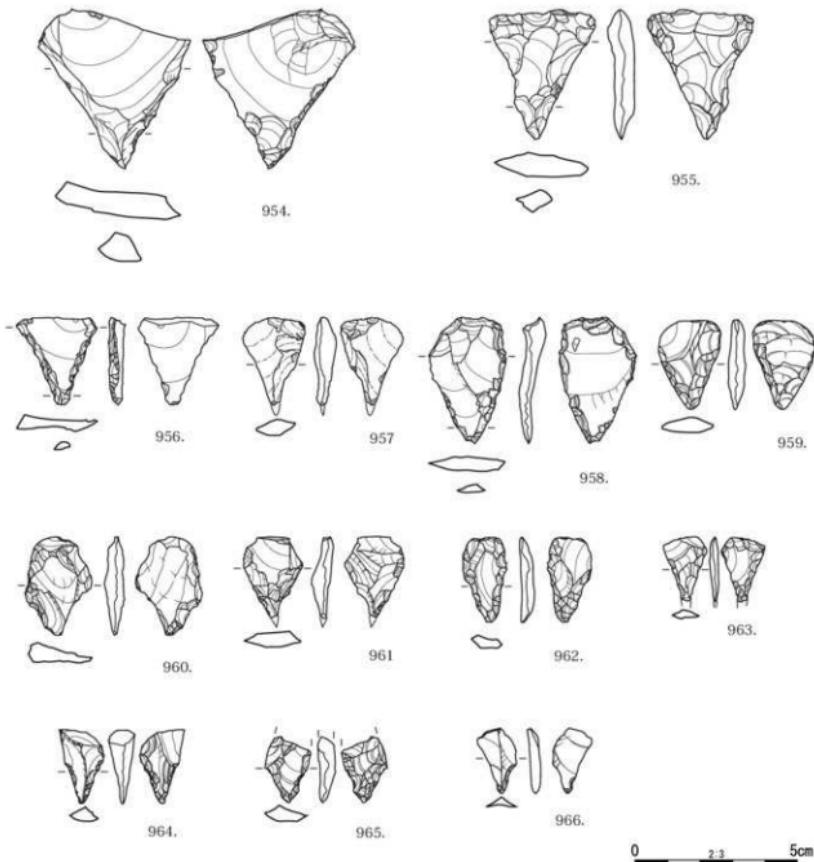


第121図 異形石器 S=2／3

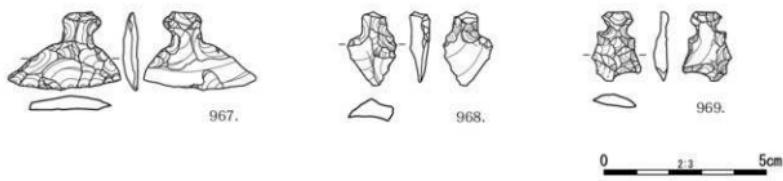


第122図 石錐(1) II・III類 S=2/3

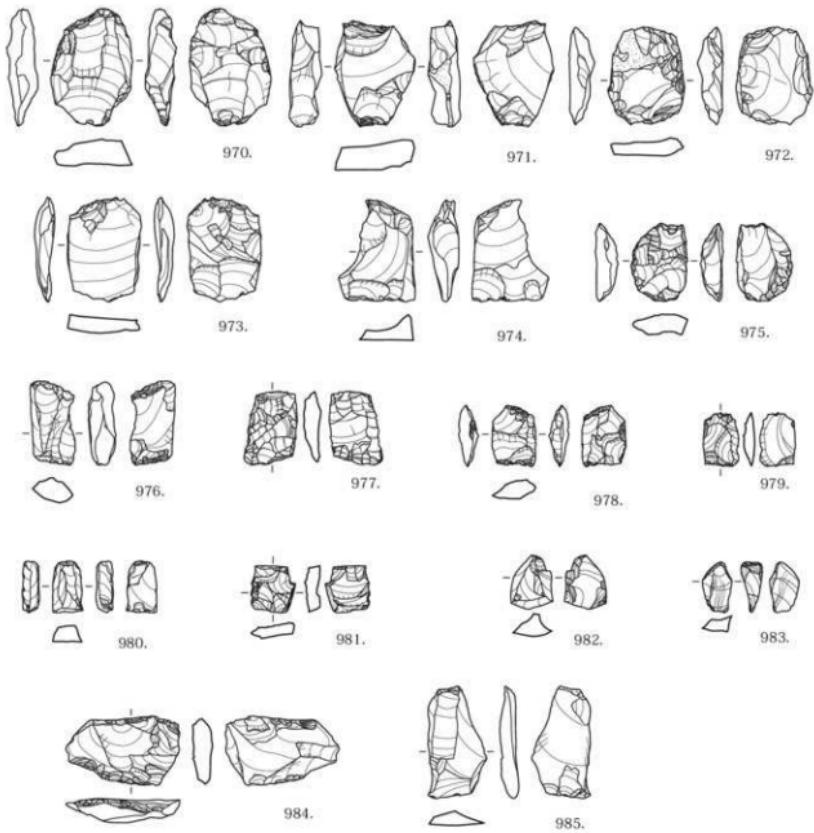
0 2.3 5cm



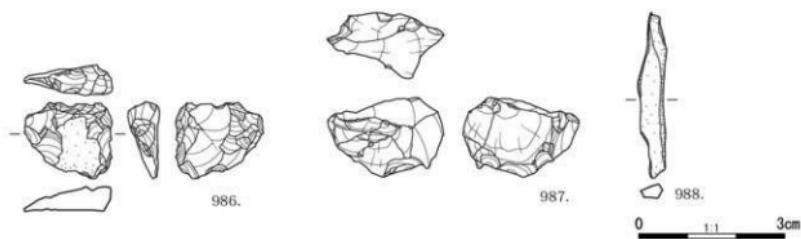
第 123 図 石錐（2）IV類 S = 2 / 3



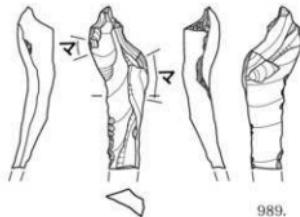
第 124 図 石匙 S = 2 / 3



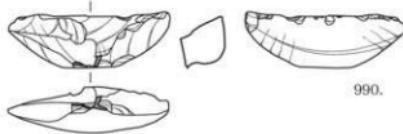
第125図 楔形石器 S=2/3



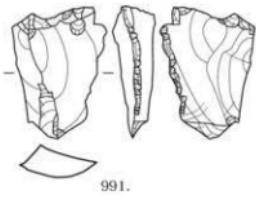
第126図 桑ノ木津留・上青木系黑曜石製石核・原石 S=1/1



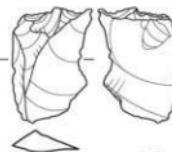
989.



990.



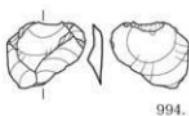
991.



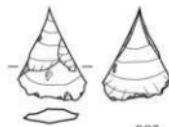
992.



993.



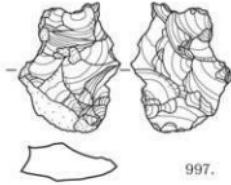
994.



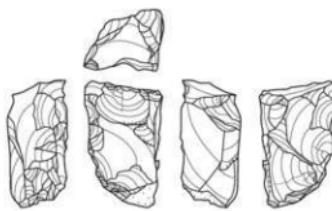
995.



996.



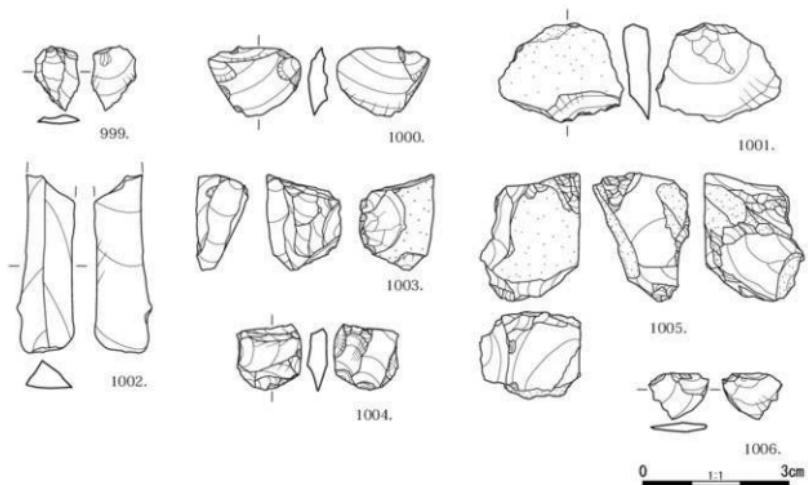
997.



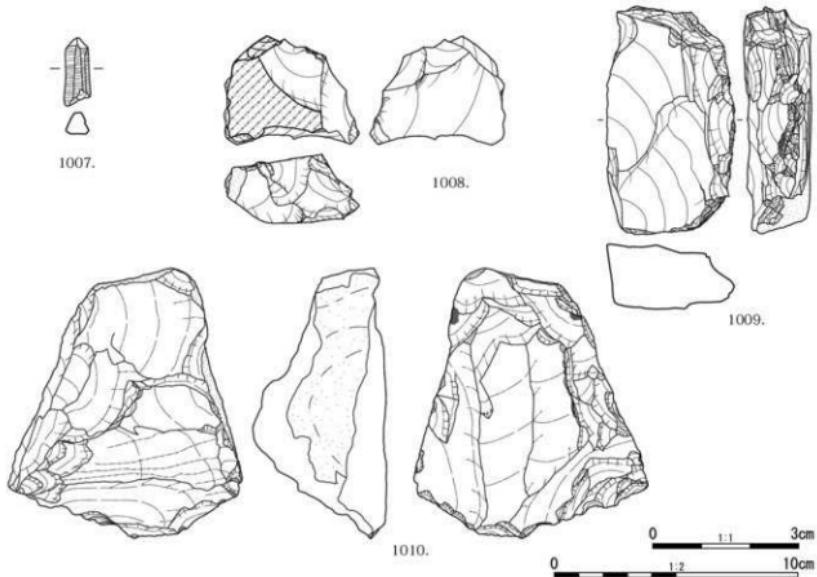
998.

0 1:1 3cm

第 127 図 西北九州産黒曜石製二次加工剥片・剥片・石核 S=1/1

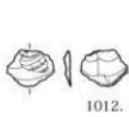
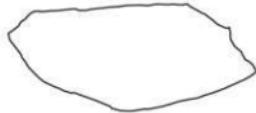
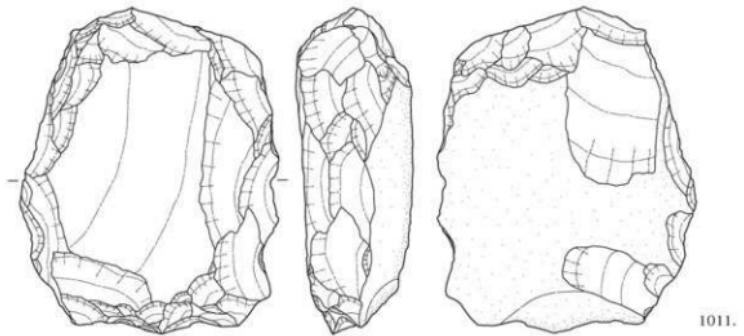


第128図 姫島産黒曜石製剥片・石核類 (999~1005), 姫島産安山岩製剥片 (1006) S=1/1

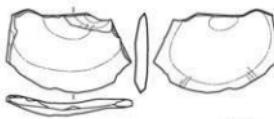


第129図 水晶原石 (1007), E区第5号土坑出土石核 (1008~1009), サヌカイト製石核 (1010)

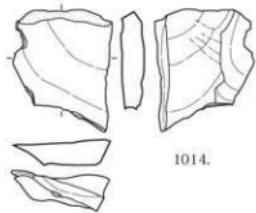
1007: S=1/1, 1008~1010: S=1/2



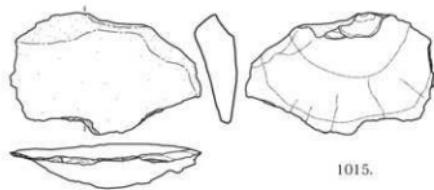
1012.



1013.



1014.



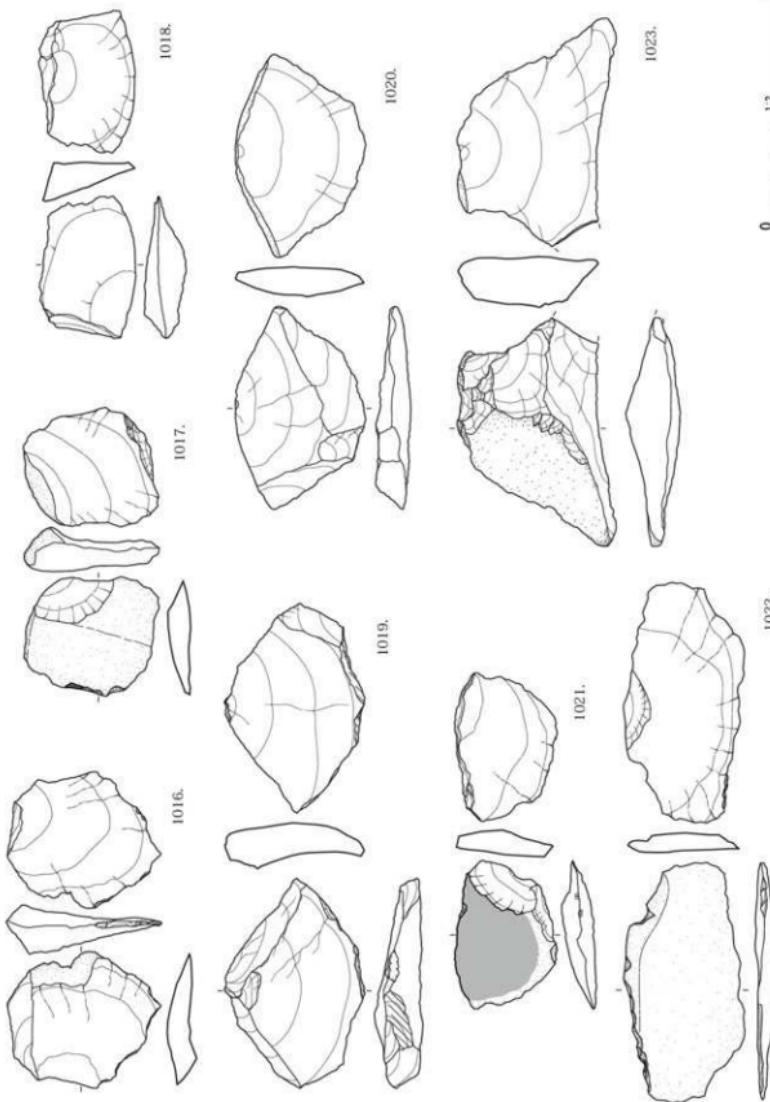
1015.

0 10cm

第130図 ホルンフェルス石核(1011), 尾鈴山産溶結凝灰岩製剥片・石核類(1)(1012~1015) S=1/2

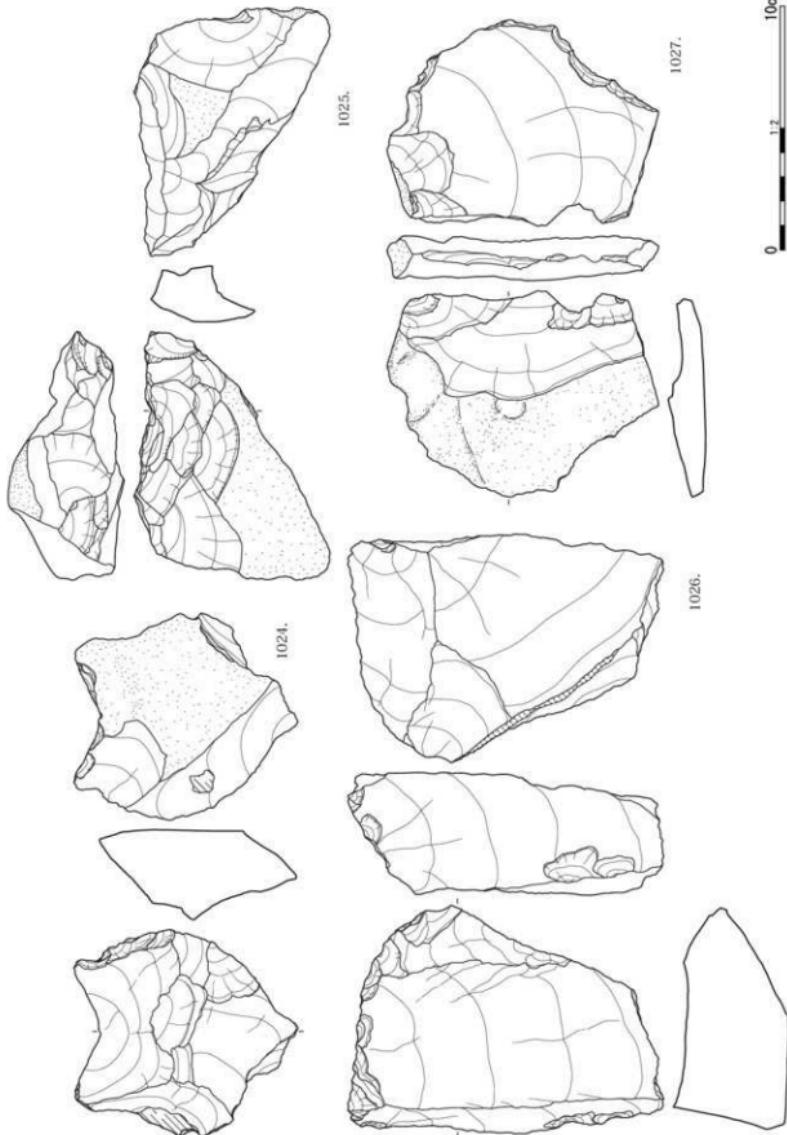
0 1/2 10cm

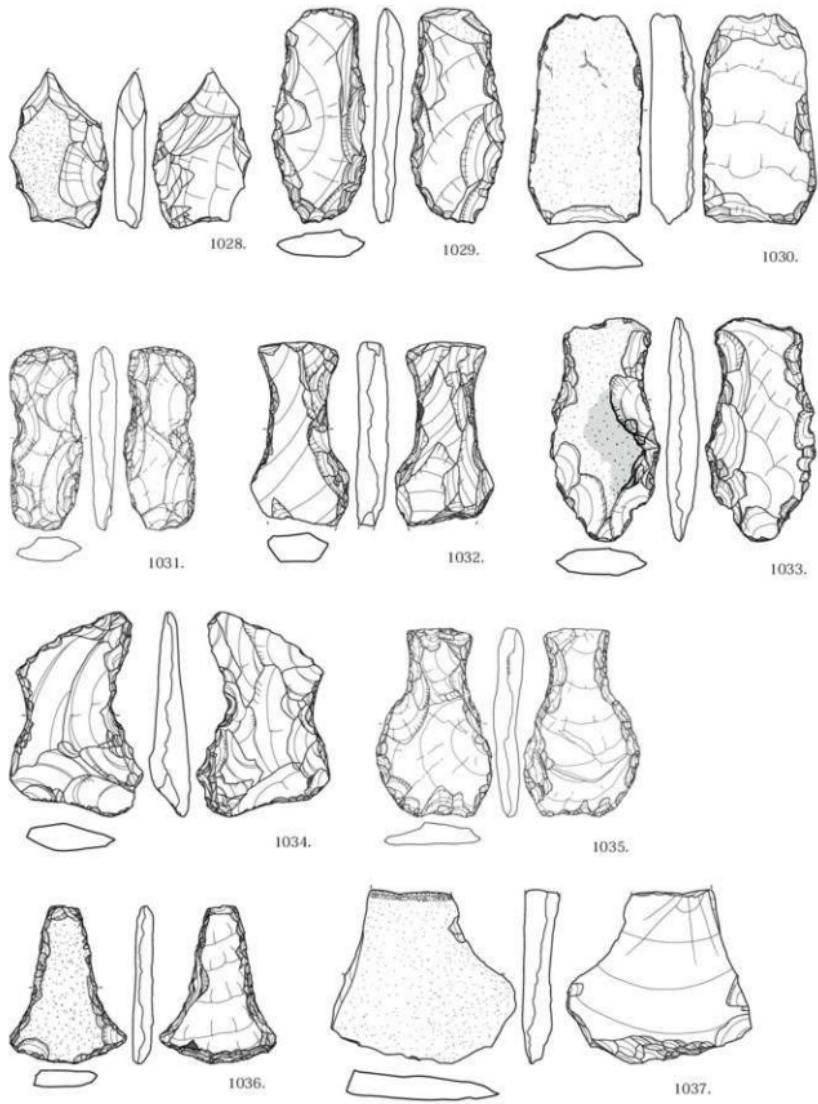
第131圖 尾鈴山產溶凝灰岩製割片・石核類(2) S=1/2



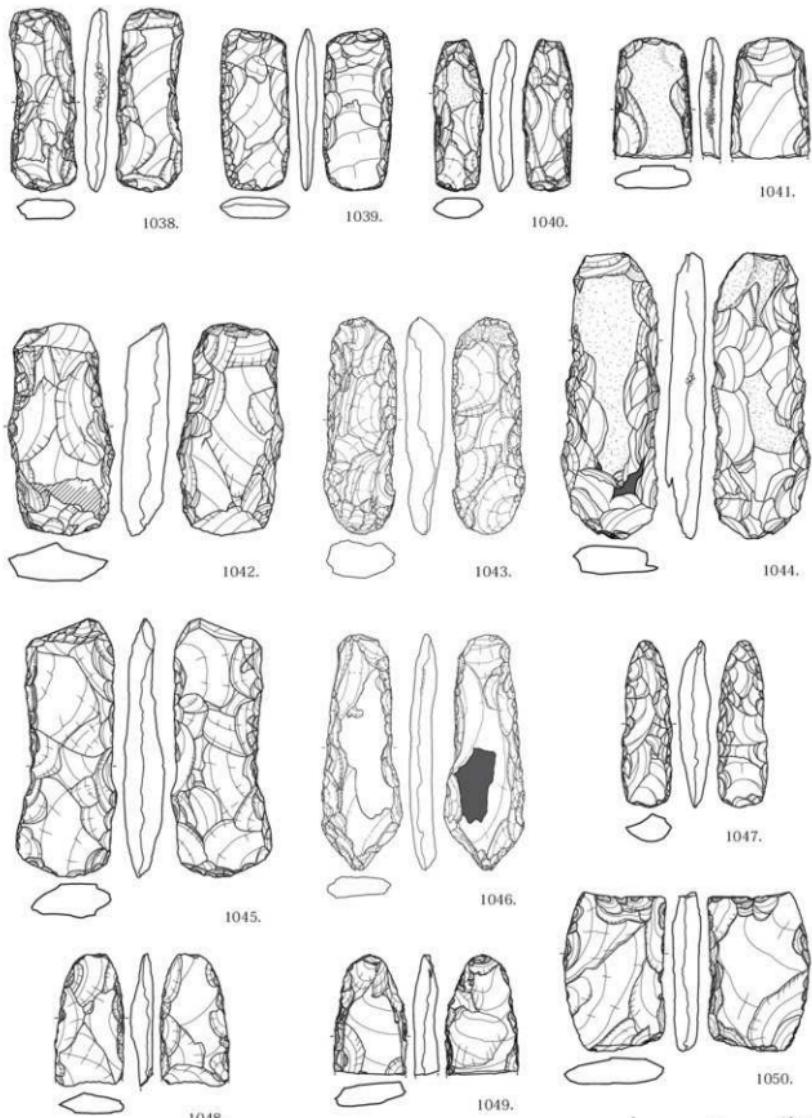
0 1:2 10cm

第132圖 尾鈴山產溶隙灰岩製割片・石核類(3) S=1/2

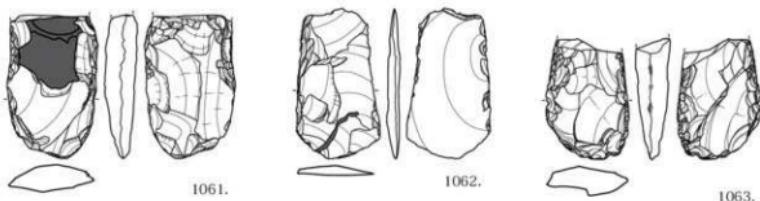
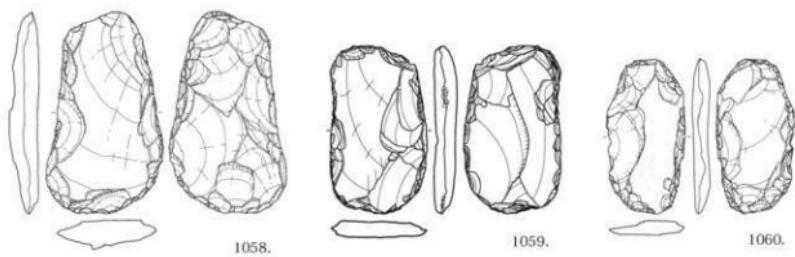
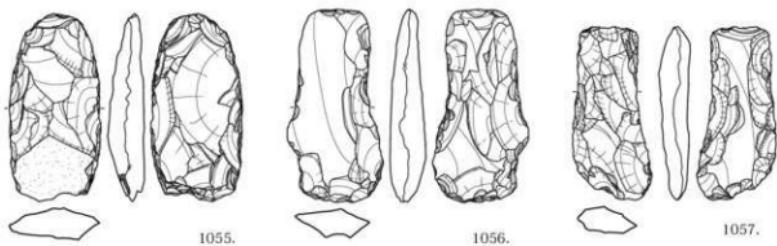
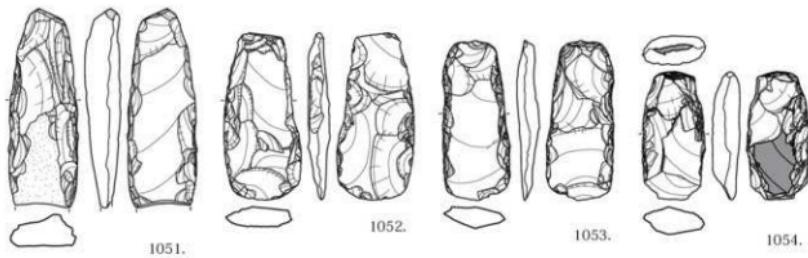




第133図 打製石斧(1) A区出土 S=1/3

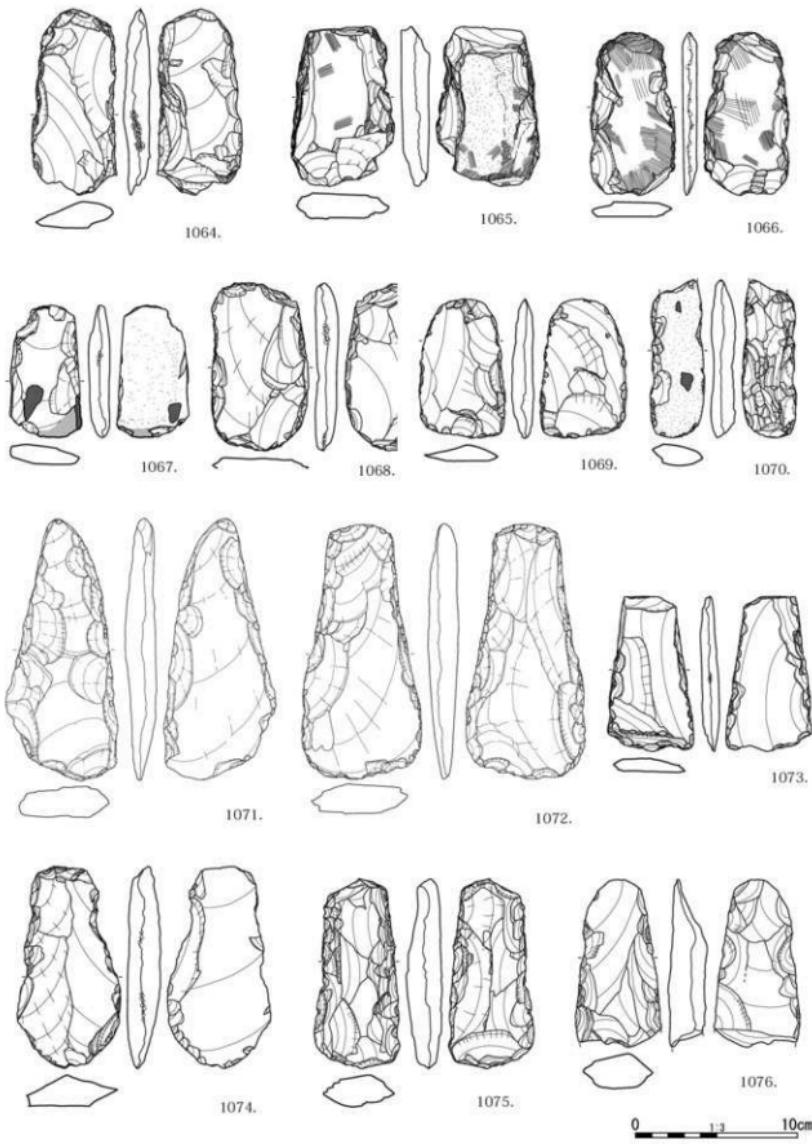


第134図 打製石斧(2) B区出土① S=1/3

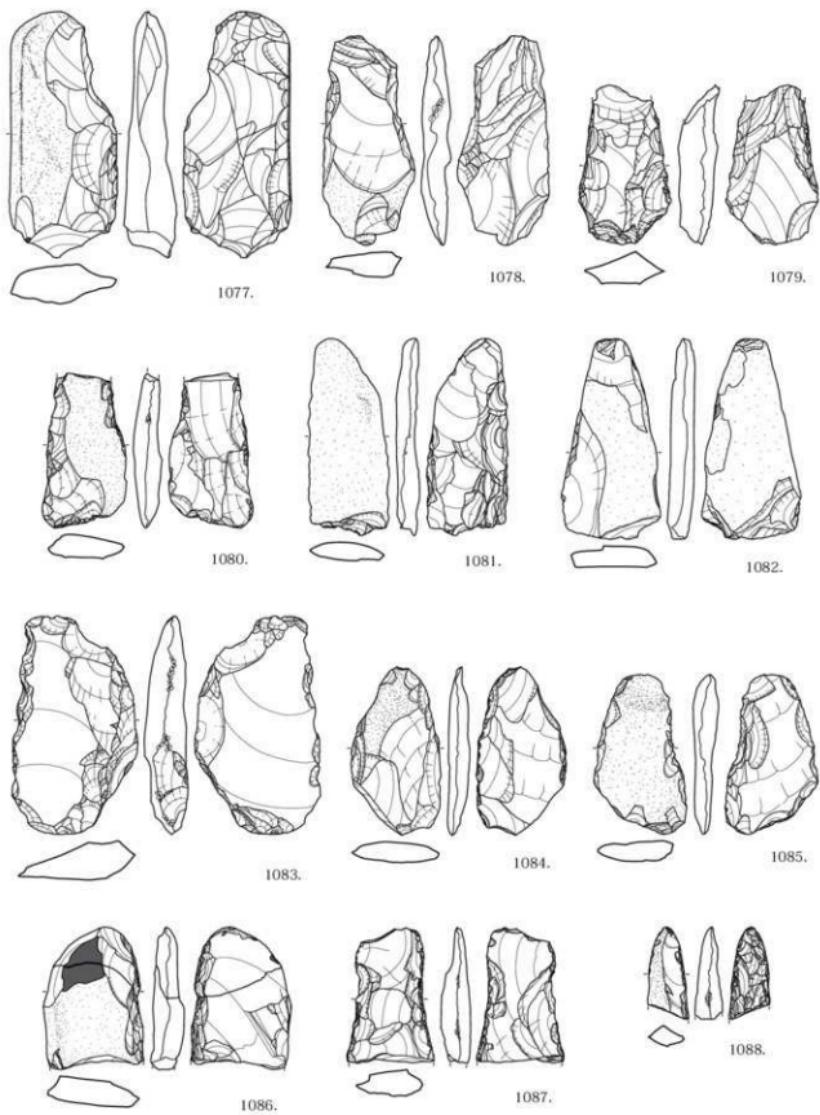


0 1:3 10cm

第135図 打製石斧(3) B区出土② S=1/3

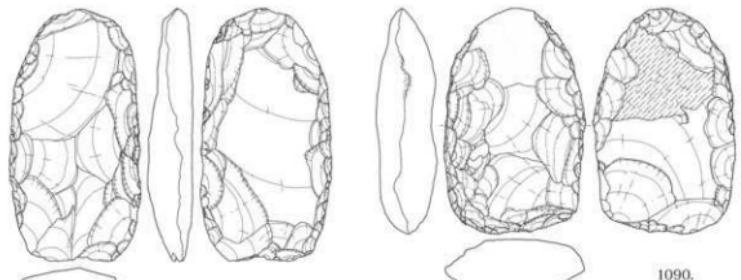


第136図 打製石斧(4) B区出土③ S=1/3



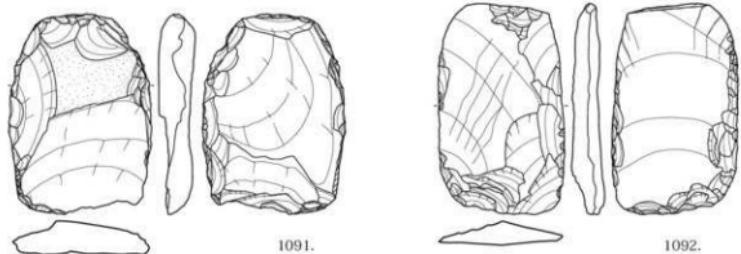
0 1:3 10cm

第137図 打製石斧(5) B区出土④ S=1/3



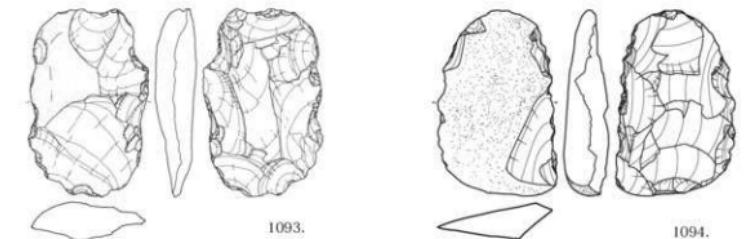
1089.

1090.



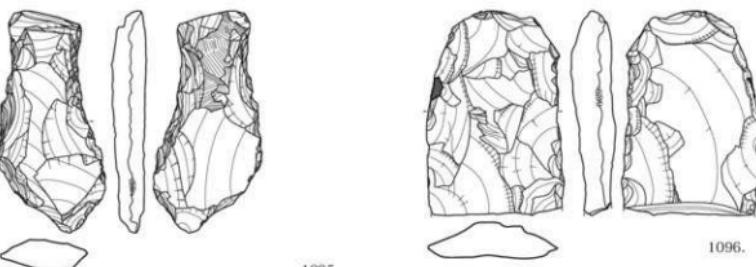
1091.

1092.



1093.

1094.

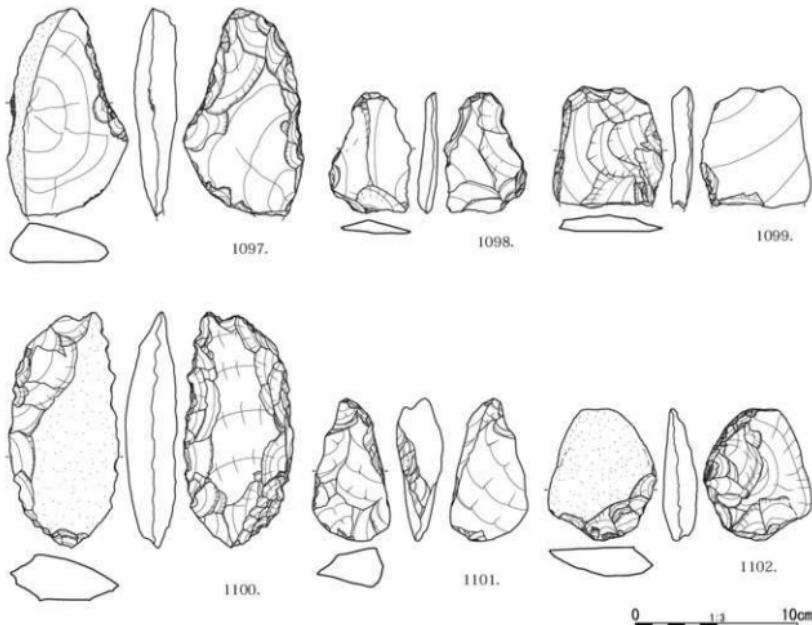


1095.

1096.

0 1:3 10cm

第138図 打製石斧 (6) B区出土⑤ S=1/3



第139図 打製石斧(7) B区出土⑥ S=1/3

的多数を占め、砂岩その他の石材が補完的に加わる。尾鈴山産溶結凝灰岩は、遺跡の北方に近接する小丸川流域に豊富に産出し、縄文時代後・晩期においても付近の河床・海浜・露頭などから容易に得られたものと推定される。

② I類はⅢ類およびⅣ類の素材を含む可能性がある。すなわちサイズを考慮すると、I類の一部からⅢ類を経て、Ⅳ類へと至る使用・消耗の過程を想定できる。

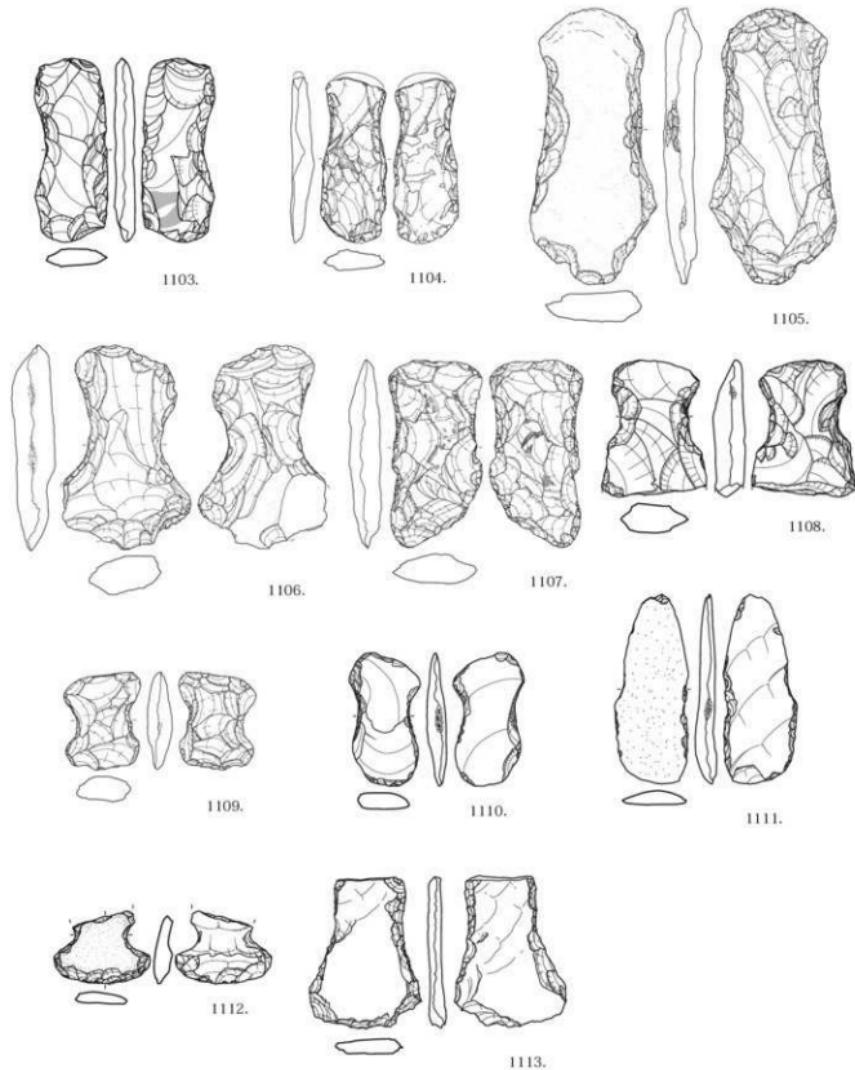
③ I・Ⅲ・Ⅳ各類の形態変異が【I類の一部→II類→IV類】という使用・消耗過程という脈絡に位置づけられるのに対し、Ⅳa・Ⅲa類（タブレット形とその前過程）とⅣb・Ⅲb類（算盤玉形とその前過程）の相違は敲打痕の形成過程に求められる。すなわち、似通った消耗過程を経つつも、使用者の敲打を行なう姿勢、敲打対象物との接触角度などの点に相違が認められる可能性が高い。

タブレット形は対象物側の面に対し、ほぼ垂直の打撃が想定されるが、算盤玉形はやや斜めからの打撃が繰り返された使用の在り方が想定される。いずれの場合にも礫の周囲を均等に用いるよう配慮がなされたことが窺えるが、その過程がⅢ類→Ⅳ類という流れに確認されるのである。

④ V類は素材形状の点でI～IV類と大きく異なる。使用法の点では対象物の面に垂直に当たるものと、やや斜めに当たるものとの二者が区別できる。ただし、使用法の転換がなされた可能性もあり、Ⅳa類→Ⅳb類、Ⅳb類→Ⅳa類のいずれの移行順序も想定できる。

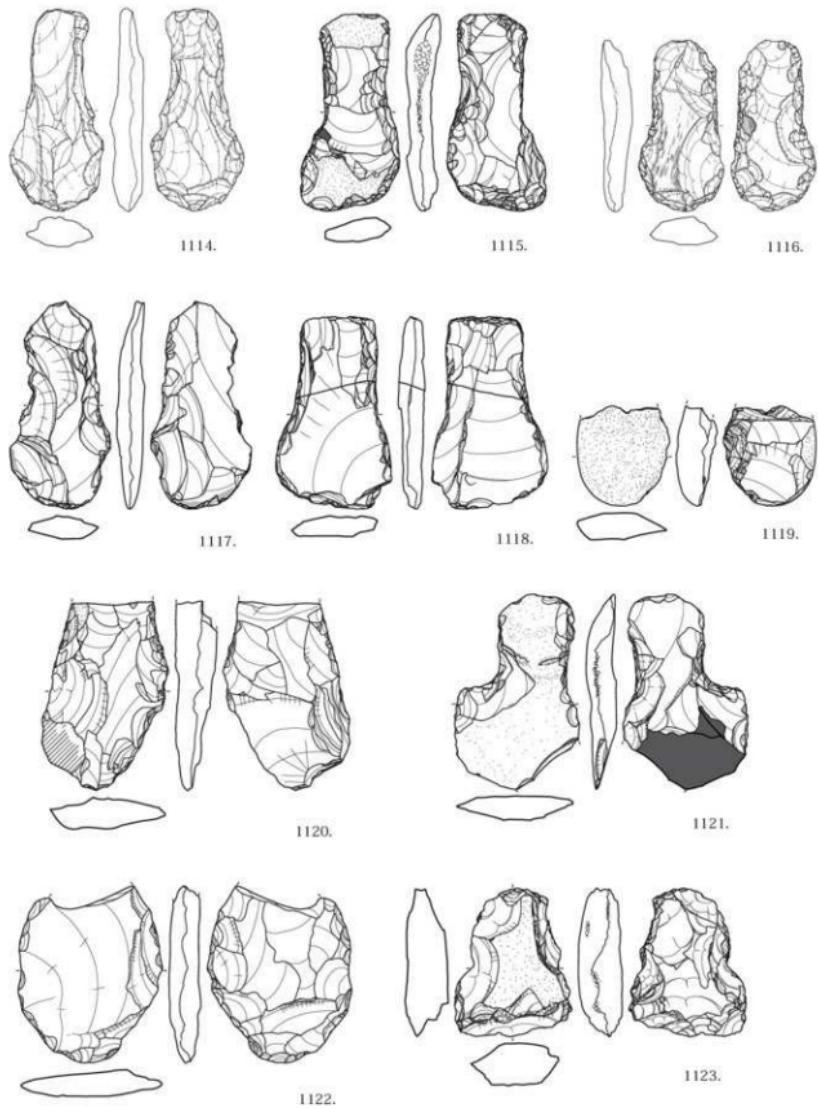
□ 砧石・筋砧石（第163～165図）

概要 第1層・表土中から出土した資料は30点以上を数える。技術・形態的なバリエーションに富む。大別すると、地面に据え置いて使ったと考えられる大形品、手に持つて使ったと考えられ



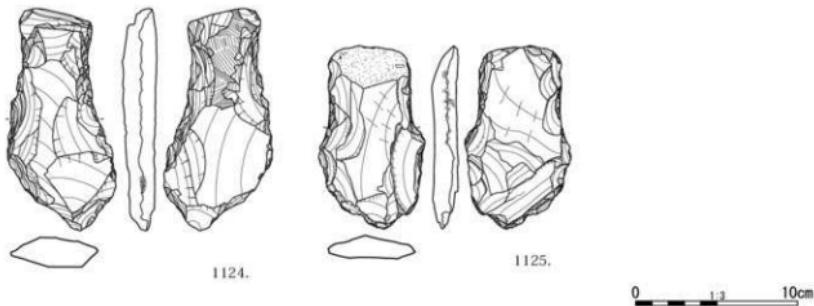
0 1:3 10cm

第140図 打製石斧(8) B区出土⑦ S=1/3



第 141 図 打製石斧 (9) B 区出土⑧ S = 1 / 3

0 1:3 10cm



第142図 打製石斧(10) B区出土⑨ S=1/3

る小形品、両者の中間的なサイズの中形品の三種を認めることができる。これらは包含層中からの出土であることから、縄文後期の厳密な特定は難しい。古墳時代中期の第2号竪穴住居跡(SAO2)の床面から大形品(第189図1472)が出土し、同遺構の覆土からは小形品も出土していることから、本節で提示する資料には古墳時代に帰属するものも多いと推定される。

しかし一方で、本遺跡の縄文後期集落とほぼ同時期の宮崎市平畑遺跡においても、小形品の出土が認められる。また、第164図1354のように、打欠石錘への転用品もあり、多くは縄文時代後・晩期の資料と考えられる。本書では、包含層出土資料については古墳時代の資料が混在する可能性を承知しつつも、縄文時代後・晩を扱う本節で一括して取り扱う。

観察所見 以下では、上記した三つのサイズと本橋恵美子氏による溝の断面形の分類案(文献36)を参照しつつ、代表的な資料について観察所見を記す。

1349・1351は砂岩製の砥石である。砂岩は均質であるが比較的粗粒の石質であり、弥生時代以降の砥石とは質が異なる。この石材は第164・165図に図示した大半の資料に用いられている。

1352～1354は片手で持てるサイズで、手持ちの砥石と推定される。1352・1353は器厚が薄く、使い込まれてかなり消耗した状態と判断される。1350には砥ぎ面がないが、砥石と同質の砂岩を用い、手持ち砥石の素材である可能性が考

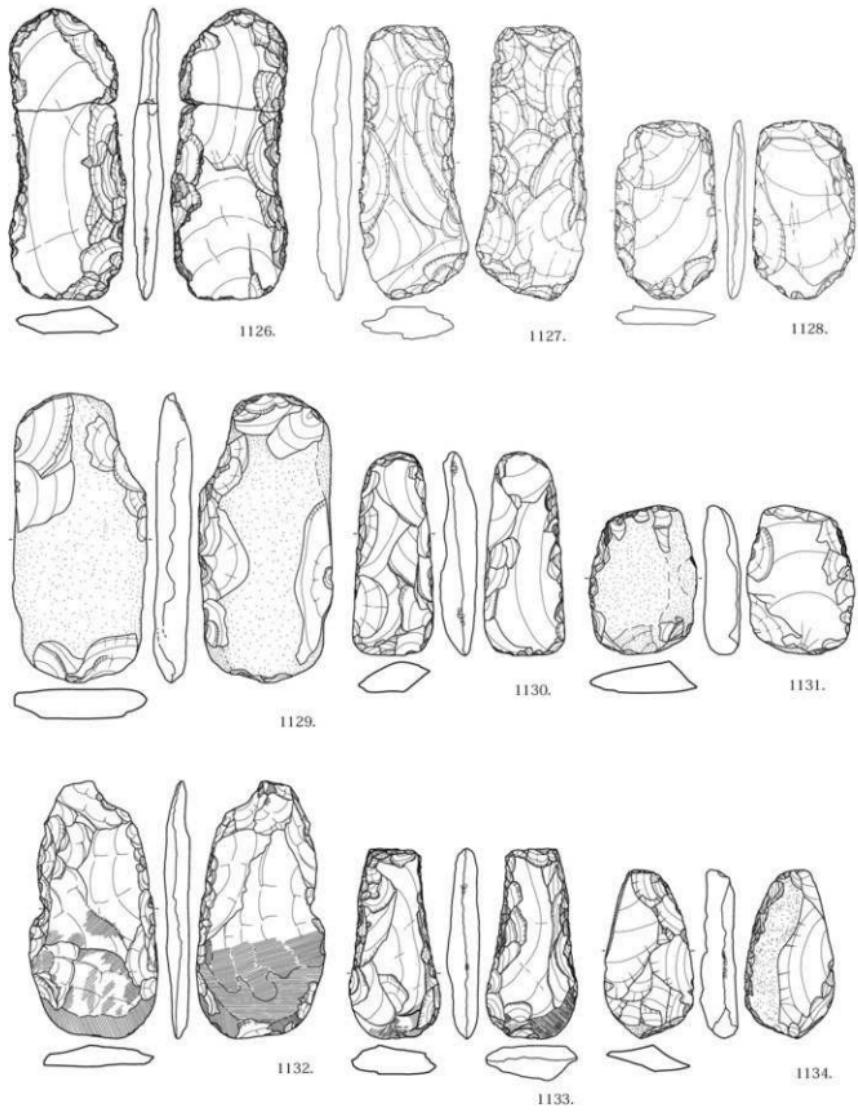
えられよう。周縁には剥離痕・敲打痕が認められ、整形を意図したものである可能性を指摘できる。

1354は表裏面に平滑な砥ぎ面が認められ、長軸端部の剥離痕がこれを切ることから、手持ち砥石から打欠石錘への転用と評価できよう。

1357～1366は中形・大形品である。1355も破損しているが、本来は中形以上のサイズであったと推測される。1359は特徴的な形態で、三つの面を砥ぎ面とし、うち2面に溝が残される。かなり使い込んだ状態である。

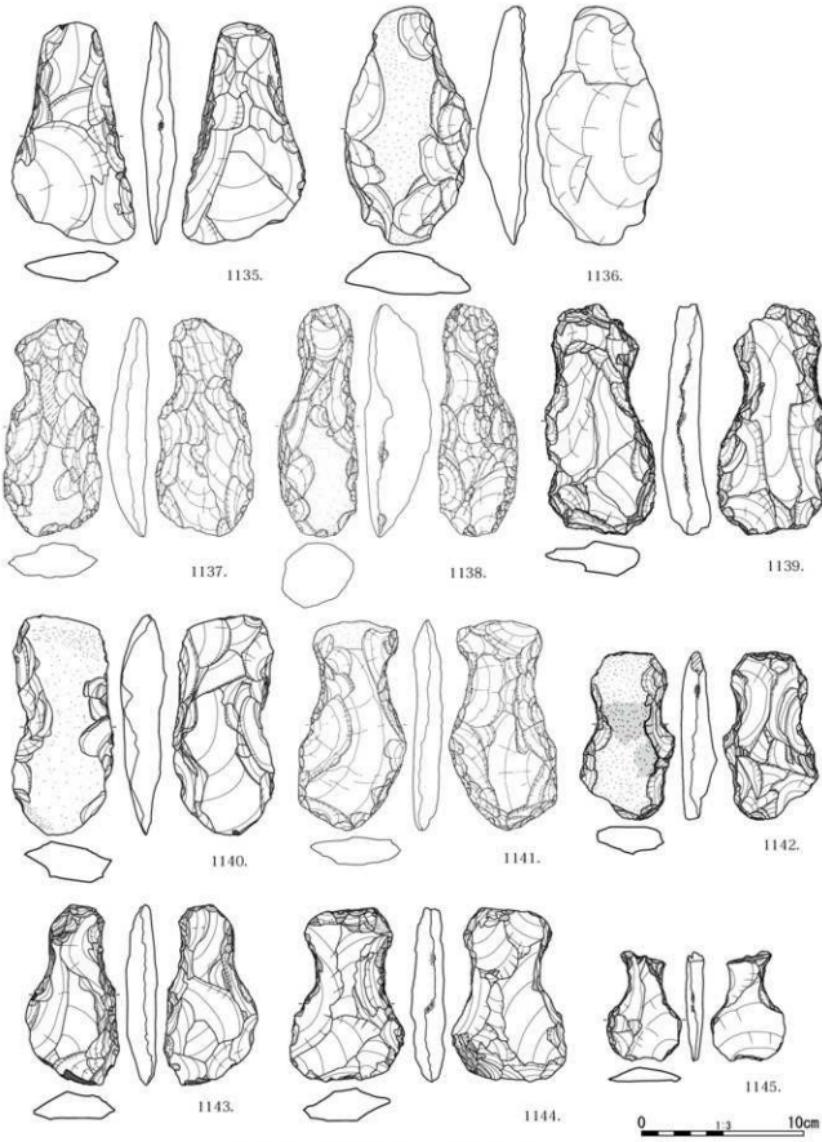
1358や1366において特筆すべき点がある。これらの大形品は、現在最も安定する状態で地面に置いた際、溝のある面が平らにはならず傾斜する。この時、V字形の溝の最深部は傾斜の低い方に偏るのである。これは使われた当時の状態を示唆する一つの材料となろう。

サイズを問わず、これらの筋砥石の溝には、断面形からみて大きく三つのグループがある。①V字形をなすグループ(本橋分類Ⅲ形: 1352・1353・1358・1360)、②浅い半円形をなすグループ(本橋分類Ⅰ形: 1357・1362・1363)、③溝の幅が広く浅いため輪郭が不明瞭なグループ(本橋分類Ⅳ・V形: 1354～1356・1364・1365)の三者である。おそらくは対象物が異なるのであろう。なお、本橋氏が骨角器の研磨に用いたと推定した断面がカマボコ形(Ⅱ形)の「条溝砥石」に該当する資料は確認されなかった。

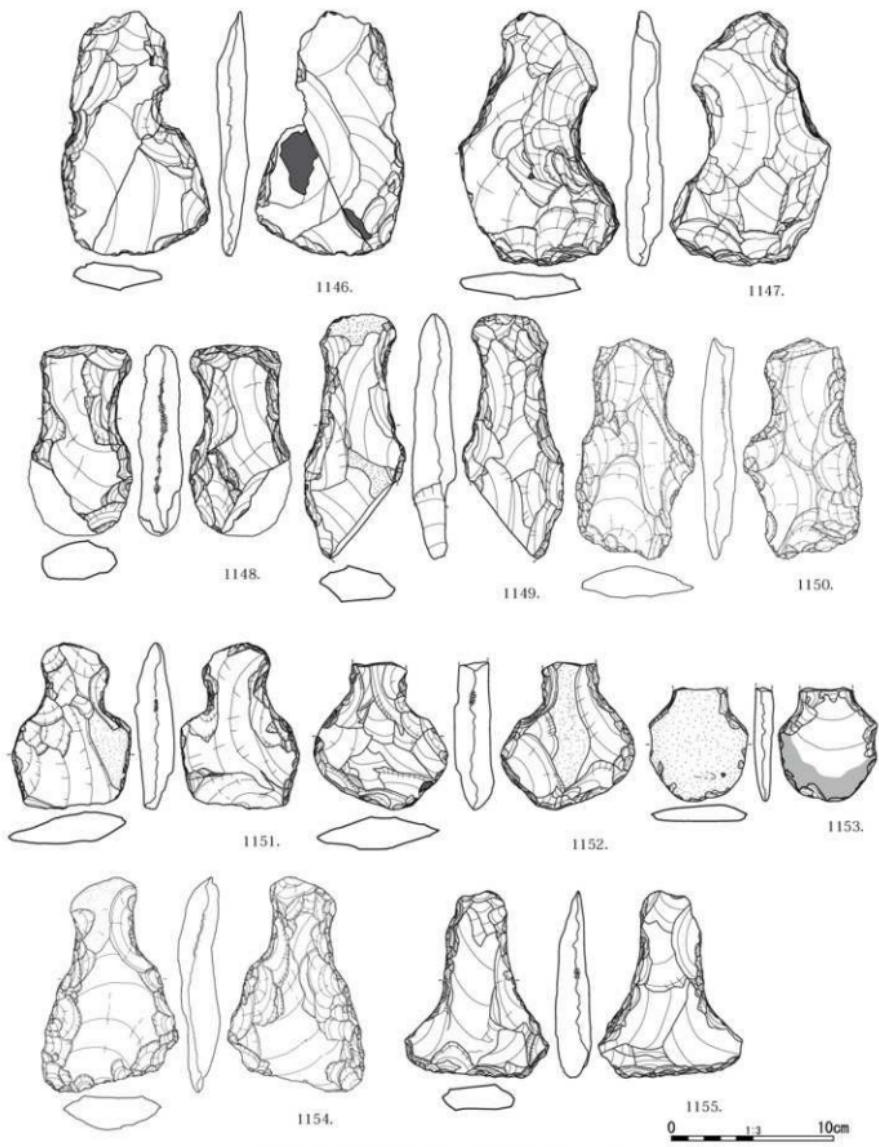


0 1:3 10cm

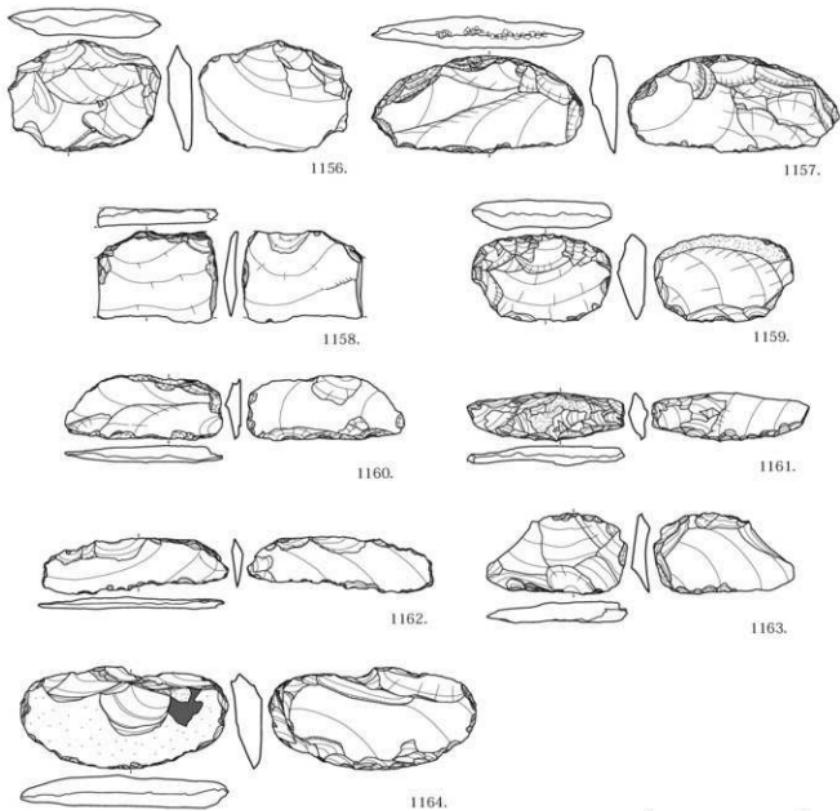
第143図 打製石斧(11) C区出土① S=1/3



第144図 打製石斧(12) C区出土② S=1/3

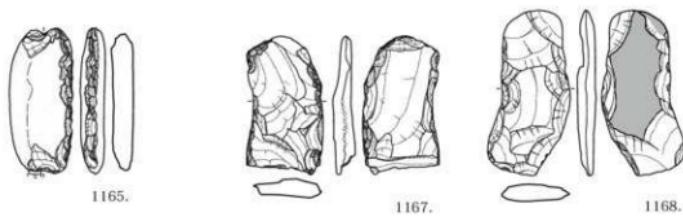


第145図 打製石斧(13) C区出土③ S=1/3



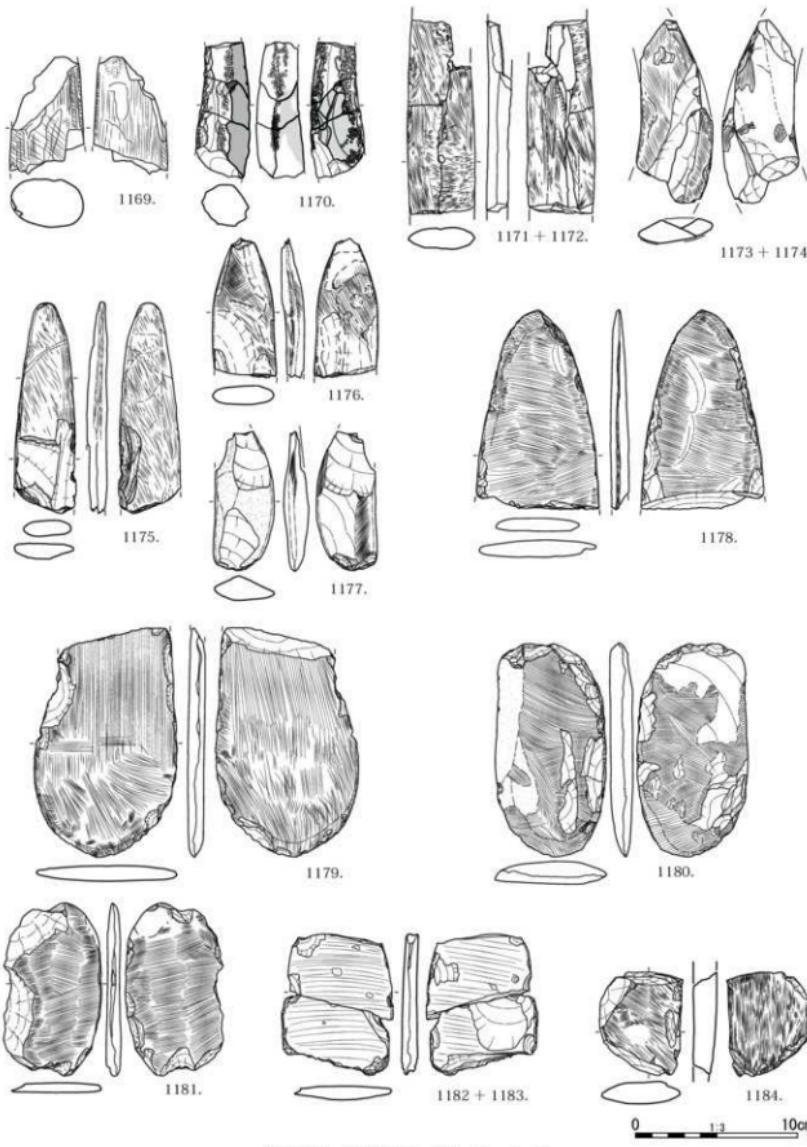
第146図 横刃形石器 S=1/3

0 1:3 10cm



第147図 削器・石鎌 S=1/3

0 1:3 10cm



第148図 磨製石製品(1) S=1/3